

船橋市源七山遺跡

— 坪井地区埋蔵文化財調査報告書 —

平成18年9月

独立行政法人 都市再生機構

財団法人 千葉県教育振興財団

ふな ぼし げん しち やま 船橋市源七山遺跡

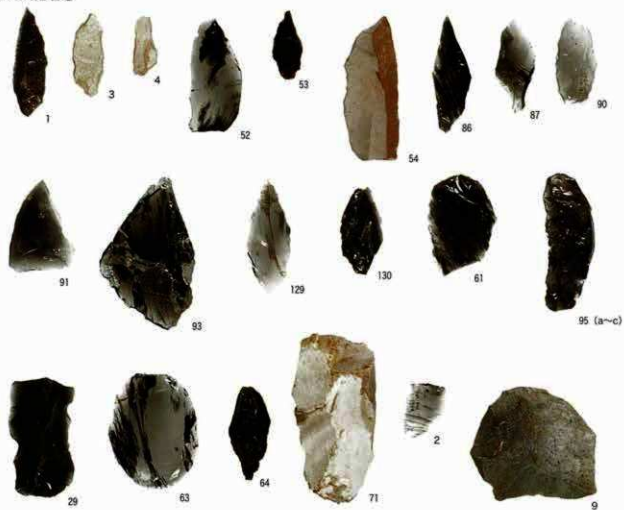
— 坪井地区埋蔵文化財調査報告書 —



第1文化層



第2文化層①



第 2 文化層②



0 5cm

第 3 文化層

第 4 文化層①



0 5cm

第4文化層②



140



143



166



151 (a-c)

第5文化層



1



13



3



12



5

第6文化層



19



29



30



31



32



46 (a+b)



33



20



48



49



51



57



6



21



10



11



12



1



2



3



28 (a+b)



47 (a-e)



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第556集として、独立行政法人都市再生機構の坪井地区特定区画整理事業に伴って実施した船橋市源七山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から中・近世に至るまでの遺構や遺物が、数多く検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年9月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による坪井地区特定区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県船橋市坪井町684番地ほかに所在する源七山遺跡（遺跡コード204-010）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は以下のとおりである。
第1章、第3章第1節・第2節1～3、第4章第1節、第5章第1～3・5節を榊原弘二、第2章を新田浩三・山岡磨由子、第3章第2節4、第3節、第4章第2節を古内 茂、第4章第3節、第5章第4節を香取正彦、第6章を新田が執筆した。編集は、新田が担当した。
- 6 縄文時代以降の礫・石器の石材は、有限会社考古石材研究所の柴山 徹氏の鑑定によった。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、船橋市教育委員会、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
第3図 住宅・都市整備公団 1/2,500「坪井地区現況図」平成6年12月
第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「習志野」(N1 54 19 14-4)
第5図 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000迅速測図「白井橋本村」・「習志野」明治20年製版
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成10年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量については、日本測地系に基づいている。
- 11 本書で使用した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。なお、縄文時代以降については表45の遺構一覧表に新旧の遺構番号を掲載した。また、図面記録類・遺物の注記については整理時に新遺構番号に変更した。
- 12 挿図に使用した記号は、遺構図中では●土器・▲礫、隣群図中では●破損礫・△石器・○土器、土器片断面中では●繊維を含む土器・黒塗りには灰釉陶器を示す。
- 13 石材名で使用したトトロ石は、表面が明灰色をした黒色緻密質安山岩のことを示す。
- 14 添付したCD-ROMには、旧石器属性表（全点）、母岩別組成表、本書掲載の表・写真図版の一部、及び、旧石器のカラー写真のデータが収録されている。CD-ROMのフォーマットは、Windows、Macに対応する。ファイル形式は、表については、XLS(Excel)、CSV、TXT(タブ区切り)、写真については、JPEGである。ファイル目次はCD-ROMに収納した。また、本編についても、PDF形式(中解像度、標準圧縮版)で収納した。

15 旧石器時代における石器属性凡例

出土遺物属性表の凡例は以下の通りである。

挿図番号 実測図として掲載した遺物の番号であり、写真図版の番号と一致する。文化層ごとに1から順につけた。

打面 Cは自然面、Pは点状打面、Lは線状打面、Jは平坦剥離、2以上は複剥離打面で、-は欠損等による打面無し・計測不可を示す。

打角・剥離角

打角は剥片の打面とポジティブバルブが作る角度、剥離角は石核の打面とネガティブバルブが作る角度。

背面構成 素材の情報が失われている石器に関しては記載しないが、背面構成のわかるものに関しては観察される範囲で記入した。Hは主要剥離面と同一方向、Tは主要剥離面と逆方向、Rは右方向、Lは左方向、Dは腹面方向、Vは背面方向、Cは自然面、Jは節理面。

末端形状 Fは直線上、Hは棘番状、Sは階段状、Oは石核の内側に力が向かったためにアーチ状またはL状になったもの。

調整角 削器の刃部、ナイフ形石器の刃潰しなどの調整剥離角。

使用痕 N (Nicked edge) は刃こぼれ、H (Heated marks) は被熱痕。

折れ 折れによって残存している部位を示す。以下、背面側からみた折れを表す。

H：頭部

T：尾部

L：背面側から見て左部

R：背面側から見て右部

中間部の表し方

V-M：垂直方向の中間部

H-M：水平方向の中間部

以下、アルファベットの組み合わせによって

遺存部位を示す。

LH：左頭部

LM：左中間部

LT：左尾部

RH：右頭部

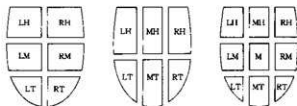
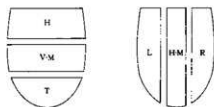
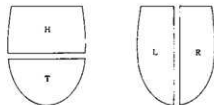
RM：右中間部

RT：右尾部

MH：中央頭部

MT：中央尾部

M：9分割された中間部



折れによる遺存部位の表示

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	4
第2節 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
第2章 旧石器時代	12
第1節 概要	12
1 層序区分	12
2 基本層序	13
第2節 第1文化層	16
1 第1ブロック	16
2 第2ブロック	19
3 第3ブロック	24
第3節 第2文化層	28
1 第4ブロック	30
2 第5ブロック	30
3 第6ブロック	39
4 第7ブロック	45
5 第8ブロック	53
6 第9ブロック	63
第4節 第3文化層	72
1 第10ブロック	72
第5節 第4文化層	77
1 第11ブロック	77
2 第12ブロック	94
3 第13ブロック	97
4 第14ブロック	102
5 第15ブロック	105
6 第16ブロック	113
7 第17ブロック	124
8 第18ブロック	125
9 第19ブロック	132

第6節 第5文化層	138
1 第20ブロック	138
2 第21ブロック	145
3 第22ブロック	147
第7節 第6文化層	149
1 第23ブロック	149
2 第24ブロック	151
3 第25ブロック	156
4 第26ブロック	160
5 第27ブロック	166
6 第28ブロック	168
7 第29ブロック	170
第8節 単独出土石器	171
第9節 その他の出土石器	175
第10節 まとめ	177
第3章 縄文時代	191
第1節 概要	191
第2節 遺構と遺物	191
1 竪穴状遺構	191
2 土坑	197
3 礫群	199
4 礫群・グリッド出土遺物	211
第3節 竪穴状遺構と礫群	234
第4章 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代	237
第1節 概要	237
第2節 弥生、古墳時代	237
1 遺構と遺物	237
2 グリッド出土の土器	237
第3節 奈良・平安時代	238
1 遺構と遺物	238
2 グリッド出土の土器	241
第5章 中・近世	242
第1節 概要	242
1 中世の遺構と遺物	242
2 中世の土坑の分類	242
3 近世の遺構	242
第2節 中世の遺構	243
1 第1地点	243

2	第2地点	256
3	第3地点	257
4	地点外	258
第3節	その他の中・近世の遺構	259
1	掘立柱建物跡	259
2	土手状遺構	262
3	溝	262
4	土坑	263
第4節	出土遺物	266
1	輸入磁器	266
2	陶器・カワラケ	266
3	金属製品	274
4	石製品	274
5	土製品	277
6	銭貨	277
7	まとめ	278
第5節	坪井・習志野台境野馬土手	280
1	現況と調査方法	280
2	調査結果	280
第6章	結語	285
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	発掘区及び大グリッド配置図	3	第19図	第3ブロック母岩別分布	26
第2図	グリッド呼称図	4	第20図	第3ブロック出土石器	27
第3図	遺跡周辺地形図	6	第21図	第2文化層ブロック配置図	28
第4図	周辺の遺跡	7	第22図	第4ブロック遺物分布	28
第5図	迅速測図中の源七山遺跡	8	第23図	第4ブロック出土石器	30
第6図	上層確認トレンチ配置図及び遺構配置図(1)	10	第24図	第5ブロック遺物分布	31
第7図	上層確認トレンチ配置図及び遺構配置図(2)	11	第25図	第5ブロック出土石器(1)	33
第8図	基本土層図	13	第26図	第5ブロック出土石器(2)	34
第9図	下層発掘区及び杆器集中地点位置図	14	第27図	第5ブロック出土石器(3)	36
第10図	ローム層堆積概念図	15	第28図	第5ブロック出土石器(4)	37
第11図	第1文化層ブロック配置図	16	第29図	第5ブロック出土石器(5)	38
第12図	第1ブロック遺物分布	17	第30図	第6ブロック器種別分布	40
第13図	第1ブロック出土石器	18	第31図	第6ブロック母岩別分布	41
第14図	第2ブロック検出状況	20	第32図	第6ブロック出土石器(1)	42
第15図	第2ブロック遺物分布(04E-E)	21	第33図	第6ブロック出土石器(2)	43
第16図	第2ブロック出土石器(1)	22	第34図	第6ブロック出土石器(3)	44
第17図	第2ブロック出土石器(2)	23	第35図	第7ブロック器種別分布	46
第18図	第3ブロック器種別分布	25	第36図	第7ブロック母岩別分布	47

第37回	第7ブロック出土石器(1)	48	第89回	第16ブロック遺物分布 (15G・A)	115
第38回	第7ブロック出土石器(2)	50	第90回	第16ブロック器種別分布 (16G・C・D)	116
第39回	第7ブロック出土石器(3)	51	第91回	第16ブロック母岩別分布 (16G・C・D)	117
第40回	第7ブロック出土石器(4)	52	第92回	第16ブロック出土石器(1)	119
第41回	第8ブロック検出状況	54	第93回	第16ブロック出土石器(2)	120
第42回	第8ブロック遺物分布 (16G・B)	55	第94回	第16ブロック出土石器(3)	122
第43回	第8ブロック器種別分布 (16G・E・F)	56	第95回	第16ブロック出土石器(4)	123
第44回	第8ブロック母岩別分布 (16G・E・F)	57	第96回	第17ブロック遺物分布	124
第45回	第8ブロック出土石器(1)	58	第97回	第17ブロック出土石器	125
第46回	第8ブロック出土石器(2)	59	第98回	第18ブロック器種別分布	126
第47回	第8ブロック出土石器(3)	61	第99回	第18ブロック母岩別分布	127
第48回	第8ブロック出土石器(4)	62	第100回	第18ブロック出土石器(1)	129
第49回	第9ブロック器種別分布	64	第101回	第18ブロック出土石器(2)	130
第50回	第9ブロック母岩別分布	65	第102回	第18ブロック出土石器(3)	131
第51回	第9ブロック出土石器(1)	67	第103回	第19ブロック器種別分布	133
第52回	第9ブロック出土石器(2)	69	第104回	第19ブロック母岩別分布	134
第53回	第9ブロック出土石器(3)	70	第105回	第19ブロック出土石器(1)	135
第54回	第9ブロック出土石器(4)	71	第106回	第19ブロック出土石器(2)	136
第55回	第3文化層ブロック配置図	72	第107回	第5文化層ブロック配置図	138
第56回	第10ブロック遺物分布	73	第108回	第20ブロック器種別分布	139
第57回	第10ブロック出土石器(1)	74	第109回	第20ブロック母岩別分布	140
第58回	第10ブロック出土石器(2)	75	第110回	第20ブロック出土石器(1)	141
第59回	第4文化層ブロック配置図	77	第111回	第20ブロック出土石器(2)	142
第60回	第11ブロック検出状況	80	第112回	第20ブロック出土石器(3)	143
第61回	第11ブロック遺物分布 (03E・A)	81	第113回	第20ブロック出土石器(4)	144
第62回	第11ブロック遺物分布 (04E・A)	82	第114回	第21ブロック器種別分布	145
第63回	第11ブロック遺物分布 (04E・B)	83	第115回	第21ブロック母岩別分布	146
第64回	第11ブロック器種別分布 (04E・C・D)	84	第116回	第21ブロック出土石器	146
第65回	第11ブロック母岩別分布 (04E・C・D)	85	第117回	第22ブロック遺物分布	147
第66回	第11ブロック出土石器(1)	86	第118回	第22ブロック出土石器	148
第67回	第11ブロック出土石器(2)	87	第119回	第6文化層ブロック配置図	149
第68回	第11ブロック出土石器(3)	89	第120回	第23ブロック遺物分布	149
第69回	第11ブロック出土石器(4)	90	第121回	第23ブロック出土石器	150
第70回	第11ブロック出土石器(5)	91	第122回	第24ブロック遺物分布	152
第71回	第11ブロック出土石器(6)	92	第123回	第24ブロック出土石器(1)	154
第72回	第11ブロック出土石器(7)	94	第124回	第24ブロック出土石器(2)	155
第73回	第12ブロック遺物分布	95	第125回	第25ブロック遺物分布	157
第74回	第12ブロック出土石器	96	第126回	第25ブロック出土石器(1)	158
第75回	第13ブロック器種別分布	98	第127回	第25ブロック出土石器(2)	159
第76回	第13ブロック母岩別分布及び検合状況	99	第128回	第26ブロック遺物分布	161
第77回	第13ブロック出土石器(1)	100	第129回	第26ブロック出土石器(1)	162
第78回	第13ブロック出土石器(2)	101	第130回	第26ブロック出土石器(2)	163
第79回	第14ブロック遺物分布	103	第131回	第26ブロック出土石器(3)	164
第80回	第14ブロック出土石器	104	第132回	第27ブロック遺物分布	166
第81回	第15ブロック器種別分布	106	第133回	第27ブロック出土石器	167
第82回	第15ブロック母岩別分布	107	第134回	第28ブロック遺物分布	169
第83回	第15ブロック出土石器(1)	108	第135回	第28ブロック出土石器	169
第84回	第15ブロック出土石器(2)	109	第136回	第29ブロック遺物分布	170
第85回	第15ブロック出土石器(3)	110	第137回	ブロック外及び単独出土石器分布状況	172
第86回	第16ブロック検出状況	113	第138回	ブロック外及び単独出土石器(1)	173
第87回	第16ブロック器種別分布 (16G・A)	114	第139回	ブロック外及び単独出土石器(2)	174
第88回	第16ブロック母岩別分布 (16G・A)	115	第140回	その他の出土石器分布状況	175

第141図	その他の出土石器	176	第185図	グリッド出土土器	241
第142図	文化層別主要石器(1)	179	第186図	中世第1地点遺構配置図	244
第143図	文化層別主要石器(2)	181	第187図	中世第1地点Ⅰ区	245
第144図	一本板南遺跡 第5文化層出土石器	182	第188図	中世第1地点Ⅰa区	246
第145図	獅子穴IX遺跡 第1ユニット出土石器	182	第189図	中世第1地点Ⅰb区	247
第146図	文化層別主要石器(3)	185	第190図	中世第1地点Ⅰc区	247
第147図	文化層別主要石器石材組成図(1)	188	第191図	中世第1地点Ⅱ区(1)	248
第148図	文化層別主要石器石材組成図(2)	189	第192図	中世第1地点Ⅱ区(2)	249
第149図	SI001	191	第193図	中世第1地点Ⅲ区(1)	250
第150図	SI001出土土器	192	第194図	中世第1地点Ⅲ区(2)	251
第151図	SI002・出土土器	194	第195図	中世第1地点Ⅲ区土層	252
第152図	SI004・出土土器	195	第196図	中世第1地点Ⅳ区土層	252
第153図	SI005・SI006	195	第197図	中世第1地点Ⅳ区(1)	253
第154図	SI006出土土器	196	第198図	中世第1地点Ⅳ区(2)	254
第155図	陥穴	197	第199図	中世第1地点Ⅳ区(SD027)	255
第156図	土坑	198	第200図	中世第2地点(1)	256
第157図	礫群1(SK003)	200	第201図	中世第2地点(2)	256
第158図	礫群2(SK004~006)	202	第202図	中世第3地点及びピット群(SH001)	257
第159図	礫群3(SK009)	203	第203図	中世第3地点	257
第160図	礫群4(SK091)	205	第204図	中世地点外(SD028)	258
第161図	礫群5(SK092~097)	206	第205図	中世地点外(土坑)	259
第162図	礫群6(SK099)	208	第206図	SB001	260
第163図	礫群7	209	第207図	SB003	260
第164図	礫群8(SK100)	210	第208図	SB002	261
第165図	グリッド出土縄文土器(1)	212	第209図	SA002	262
第166図	グリッド出土縄文土器(2)	214	第210図	SD001・002土層(確認トレンチ上層)	263
第167図	グリッド出土縄文土器(3)	216	第211図	SD001~005	264
第168図	グリッド出土縄文土器(4)	218	第212図	SD001~005土層	265
第169図	グリッド出土縄文土器(5)	220	第213図	その他 中・近世遺構	265
第170図	グリッド出土縄文土器(6)	221	第214図	中世陶磁器(1)	267
第171図	グリッド出土縄文土器(7)	222	第215図	中世陶磁器(2)	268
第172図	グリッド出土縄文土器(8)	223	第216図	中世陶磁器(3)	270
第173図	グリッド出土縄文土器(9)	224	第217図	中世陶磁器(4)	271
第174図	グリッド出土縄文土器00	225	第218図	金属製品	274
第175図	グリッド出土縄文土器01	226	第219図	中・近世石製品(1)	275
第176図	縄文時代土製品	227	第220図	中・近世石製品(2)	276
第177図	縄文時代石器(1)	229	第221図	土製品	277
第178図	縄文時代石器(2)	230	第222図	銭貨	277
第179図	縄文時代石器(3)	231	第223図	坪井・習志野台境野馬上手(SA001)	281
第180図	縄文時代石器(4)	232	第224図	坪井・習志野台境野馬上手(SA001)土層(1)	282
第181図	SK008・出土土器	237	第225図	坪井・習志野台境野馬上手(SA001)土層(2)	283
第182図	グリッド出土土器	238	第226図	小金牧周辺野絵図の一部(読み取り図)	284
第183図	SI003・出土土器	239	第227図	小金牧絵図の一部(読み取り図)	284
第184図	SS001・SK107	240			

表 目 次

第1表	第1ブロック組成表	19	第4表	第2文化層母岩別石材特徴	29
第2表	第2ブロック組成表	23	第5表	第4ブロック組成表	30
第3表	第3ブロック組成表	24	第6表	第5ブロック組成表	35

第7表	第6ブロック組成表	44	第30表	第27ブロック組成表	168
第8表	第7ブロック組成表	53	第31表	第28ブロック組成表	169
第9表	第8ブロック組成表	63	第32表	第29ブロック組成表	170
第10表	第9ブロック組成表	71	第33表	文化層別器種組成表	186
第11表	第10ブロック組成表	76	第34表	文化層別石材組成表	187
第12表	第4文化層母岩別石材特徴(1)	78	第35表	SI002礫構成表	194
第13表	第4文化層母岩別石材特徴(2)	79	第36表	礫群1 (SK003) 礫構成表	199
第14表	第11ブロック組成表	93	第37表	礫群2 (SK004~006) 礫構成表	201
第15表	第12ブロック組成表	96	第38表	礫群3 (SK009) 礫構成表	204
第16表	第13ブロック組成表	101	第39表	礫群4 (SK091) 礫構成表	204
第17表	第14ブロック組成表	105	第40表	礫群5 (SK096・097) 礫構成表	207
第18表	第15ブロック組成表	112	第41表	礫群6 (SK099) 礫構成表	208
第19表	第16ブロック組成表	121	第42表	礫群7 礫構成表	209
第20表	第17ブロック組成表	125	第43表	礫群8 (SK100) 礫構成表	210
第21表	第18ブロック組成表	132	第44表	縄文石器属性表	233
第22表	第19ブロック組成表	137	第45表	遺構一覧表	236
第23表	第20ブロック組成表	142	第46表	平安時代遺構・遺構外出土遺物観察表	241
第24表	第21ブロック組成表	146	第47表	中世陶磁器観察表(1)	272
第25表	第22ブロック組成表	148	第48表	中世陶磁器観察表(2)	273
第26表	第23ブロック組成表	151	第49表	中・近世石製品	274
第27表	第24ブロック組成表	155	第50表	銭貨計表	277
第28表	第25ブロック組成表	160	第51表	陶磁器分類表(遺構)	278
第29表	第26ブロック組成表	165	第52表	陶磁器分類表(グリッド)	279

図版目次

巻頭図版1	旧石器時代出土石器(1)	図版22	SA001 (T9~T14)
巻頭図版2	旧石器時代出土石器(2)	図版23	第1文化層第1~3ブロック、第2文化層第4~6①ブロック出土石器
巻頭図版3	旧石器時代出土石器(3)	図版24	第2文化層第6②~8①ブロック出土石器
巻頭図版4	旧石器時代出土石器(4)	図版25	第2文化層第8②・9ブロック、第3文化層第10ブロック出土石器
図版1	遺跡周辺航空写真	図版26	第2文化層第5・6ブロック出土石器展開写真
図版2	遺跡全景	図版27	第4文化層第11・12①ブロック出土石器
図版3	基本土層、水つきローム	図版28	第4文化層第12②~16①ブロック出土石器
図版4	第1~7・11ブロック	図版29	第4文化層第16②~19ブロック出土石器
図版5	第8・9・13~18ブロック	図版30	第4文化層出土礫・礫片
図版6	第19・20・22・24~26・28・29ブロック	図版31	第5文化層第20~22ブロック、第6文化層第23~25ブロック出土石器
図版7	SI001・002・004	図版32	第5文化層第20ブロック出土石器展開写真
図版8	SI005・006・SK002・007	図版33	第6文化層第26~28ブロック、単独、その他の出土石器
図版9	礫群1~3、SK001・098・102・103・104	図版34	第6文化層・単独出土石器展開写真
図版10	礫群4~8、SK008	図版35	遺構・グリッド出土石器
図版11	SI003、SK101、SS001、SK107、第1地点III区・IV区	図版36	グリッド出土土器(1)
図版12	第1地点III区、第2・3地点	図版37	グリッド出土土器(2)
図版13	SX001、SK039・041~043、SD017	図版38	グリッド出土土器(3)
図版14	第1地点Ic区、SK018・020・022・026~029・031・032、SD016・017	図版39	グリッド出土土器(4)
図版15	第1地点II区・IIIb区、SX003・004、SK044・062・068	図版40	グリッド出土土器(5)
図版16	第1地点IV区、SK051・053~061・063・064、SD026	図版41	縄文時代土製品、縄文時代石器(1)
図版17	第1地点IV区、SA003、SK069・070・074~076、SD027	図版42	縄文時代石器(2)、遺構・グリッド出土土器(1)
図版18	ピット群、SK010・012・078・079・081・084、SD028	図版43	遺構・グリッド出土土器(2)、中世陶磁器(1)
図版19	SA002、SB001・002、SK082・083・087~090、SD002~005・007	図版44	中世陶磁器(2)
図版20	SA001調査前	図版45	中世陶磁器(3)、中・近世石製品(1)
図版21	SA001 (T1~T8)	図版46	中・近世石製品(2)、金属製品、土製品、銭貨、貝

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

源七山遺跡の発掘調査は、坪井地区特定区画整理事業に伴うものである。坪井地区は、都心から約30km、船橋市の東部に位置する。本地区は、独立行政法人都市再生機構（調査開始時は住宅・都市整備公団、平成11年10月より都市基盤整備公団、平成16年7月より都市再生機構に改称）により、住宅・商業・業務機能等をそなえた新しい地域拠点を目指し、豊かな環境を活かした街づくりが進められている。本地区内には、東葉高速鉄道の「船橋日大前駅」も開設され交通の利便性にも恵まれている。本地区は、平成16年の街びらき後には「船橋美し学園 芽吹きの杜」という名称で街づくりが進められている。

事業実施に当たって当時の住宅・都市整備公団は、事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会を千葉県教育委員会に提出した。これに対して千葉県教育委員会から事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後、遺跡の取り扱いについて、千葉県教育委員会と住宅・都市整備公団との協議を重ねられ、その結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は、財団法人千葉県教育振興財団が実施することとなった。発掘調査対象範囲が113,600㎡で、調査が複数年度に及ぶため調査年度及び地点ごとに発掘区を設定し、A区～L区と呼称した（第1区）。発掘調査は、平成9年度、10年度、11年度、14年度、16年度に実施された。発掘調査開始から報告書刊行に至るまでの発掘調査・整理作業概要及び各年度の担当者は以下の通りである。

[発掘調査]

平成9年度 10月2日～3月27日

（上層）確認調査 51,480㎡のうち 5,548㎡（A区・B区・C区）

本調査 2,900㎡（SA001の馬土手及びA区の一部）

（下層）確認調査 49,996㎡のうち 2,260㎡（A区・B区の一部・C区）

本調査 400㎡（A区の一部）

調査部長 西山太郎、北部調査事務所長 折原 繁

担当者 研究員 榑原弘二、綿貫 貴、竹田良男

平成10年度 その1 4月1日～5月29日

（上層）本調査 539㎡（A区の一部・C区の一部）

（下層）本調査 1,082㎡（A区の一部・C区の一部）

調査部長 沼澤 豊、北部調査事務所長 折原 繁

担当者 研究員 榑原弘二、鈴木弘幸

平成10年度 その2 6月1日～3月26日

（上層）確認調査 30,500㎡のうち 3,050㎡（D区・E区・F区）

本調査 4,009㎡（B区・D区・E区）

（下層）確認調査 31,984㎡のうち 1,316㎡（B区の一部・D区・E区・F区）

本調査 2,995㎡ (C区の一部・D区・E区)

調査部長 沼澤 豊、北部調査事務所長 折原 繁

担当者 研究員 榎原弘二、綿賀 貴、主任技師 落合章雄

平成11年度 6月1日～10月29日

(上層) 確認調査 11,000㎡のうち 1,851㎡ (C区の一部・G区)

本調査 1,244㎡ (G区)

(下層) 確認調査 11,000㎡のうち 496㎡ (C区の一部・G区)

本調査 0㎡

調査部長 沼澤 豊、北部調査事務所長 折原 繁

担当者 研究員 小原邦夫、竹田良男、高橋 寛

平成14年度 その1 6月3日～8月30日

(上層) 確認調査 10,890㎡のうち 1,207㎡ (H区・I区・J区)

本調査 1,850㎡ (I区・J区)

(下層) 確認調査 10,890㎡のうち 466㎡ (H区・I区・J区)

本調査 1,052㎡ (I区・J区)

調査部長 齋木 勝、北部調査事務所長 古内 茂

担当者 上席研究員 遠藤治雄

平成14年度 その2 10月1日～12月27日

(上層) 確認調査 9,780㎡のうち 978㎡ (K区)

本調査 980㎡ (K区)

(下層) 確認調査 9,780㎡のうち 456㎡ (K区)

本調査 420㎡ (K区)

調査部長 齋木 勝、北部調査事務所長 古内 茂

担当者 研究員 小笠原永隆、沖松信隆

平成16年度 7月5日～7月21日

(上層) 確認調査 2,100㎡のうち 172㎡ (L区)

本調査 0㎡

(下層) 確認調査 2,100㎡のうち 44㎡ (L区)

本調査 0㎡

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内 茂

担当者 上席研究員 岸本雅人

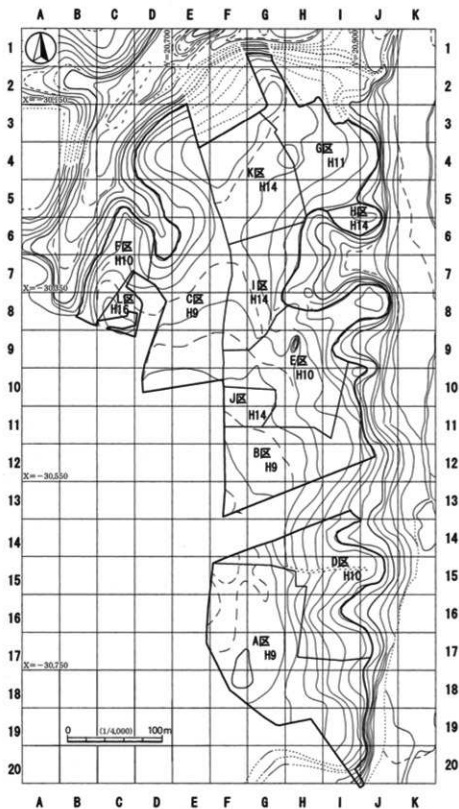
[整理作業]

平成11年度 4月・10月

(内容) 水洗・注記、記録整理、分類・選別、復元の一部まで

調査部長 沼澤 豊、北部調査事務所長 折原 繁

担当者 研究員 萩原恭一、井上哲朗



第1図 発掘区及び大グリッド配置図

平成15年度 4月・5月・8月～3月

(内容) 水洗・注記、記録整理、分類・選別、復元、実測の一部まで

調査部長 齋木 勝、北部調査事務所長 古内 茂

担当者 上席研究員 矢本篤朗、木下圭司、竹内久美子、谷鹿栄一、立和名明美、小笠原永隆

平成16年度 4月～6月・9月～3月

(内容) 実測の一部～原稿の一部まで

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内 茂

担当者 副所長 岡田誠造、室長 雨宮龍太郎、上席研究員 榑原弘二、糸川道行

平成17年度 4月～8月・10月～3月

(内容) 原稿の一部(旧石器時代を除く)～編集まで

調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内 茂

担当者 室長 香取正彦、上席研究員 榑原弘二

整理課長 加藤修司

担当者 上席研究員 新田浩二、整理技術員 山岡磨由子

平成18年度

(内容) 報告書刊行

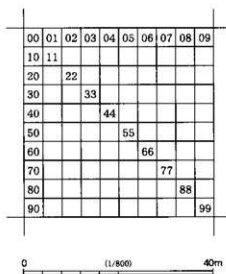
2 調査の方法

(1) 調査区の設定(第1・2図)

源七山遺跡全体を対象として、公共座標(国家標準直角度座標第IX系)に基づく40m×40mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした(第1図)。大グリッドの名称は、基点(X=-30,070、Y=20,540)から南に向かって1・2・3…とし、東に向かってA・B・C…とし、この数字とアルファベットを組み合わせると大グリッド名とした。さらに、大グリッド内を4m方眼の小グリッドに分割し、北西隅が00、南東隅が99となるように割り振った(第2図)。調査では、これらを組み合わせると8G-55というように表記し、図面等の記録類や遺物の取り上げなどの表記に使用した。

(2) 発掘調査

上層確認調査は、調査対象範囲の10%を基本として幅2mの確認トレンチを設定した。遺構や遺物の集積が認められる範囲については、適宜拡張したり追加の確認トレンチを設定して本調査を必要とする範囲を確定したうえで、調査を進めていった。確認調査及び本調査により検出した遺構(第6・7図参照)は、調査時点の発掘区ごとに遺構番号を付していった。遺物は小グリッドごとの通し番号とし、遺構内においては0001から始まる通し番号で処理した。その後、整理作業の段階では調査時に付した遺構番号は遺構の種類別に分類し、新たに遺構番号を付し直し報告することとした。また、図面や写真



第2図 グリッド呼称図

の記録類や注記についても新たな遺構番号に修正した。なお、遺物の注記変更ができなかった遺構については遺構一覧表（第45表参照）の備考欄に記入した。

この結果、上層遺構として確認できたものには、縄文時代に属するものとして竪穴状遺構、土坑、陥穴の他に、被熱した礫が集中的に検出された、いわゆる「礫群」が8か所にわたり確認されている。次いで古墳時代初頭の土坑、その後の奈良・平安時代では竪穴住居、円形周溝状遺構、土坑が各1基ずつ検出されている。さらに中・近世に至ると、多数の土坑とともに掘立柱建物、地下式坑、火葬施設、土壘状遺構、溝、櫓列、台地整形跡、馬土手など多彩な遺構が検出されている。

下層確認調査は、調査対象範囲に2m×2mの確認グリッドを調査対象面積の4%を基本として設定した（第9図）。石器が出土した地点については、周囲を拡張したり周辺に追加グリッドを設定したりして遺物集中の有否と広がりを確認したうえで、本調査を要する範囲を確定し、本調査を実施した。出土した遺物は、小グリッドごとの通し番号で石器集中地点として処理した。

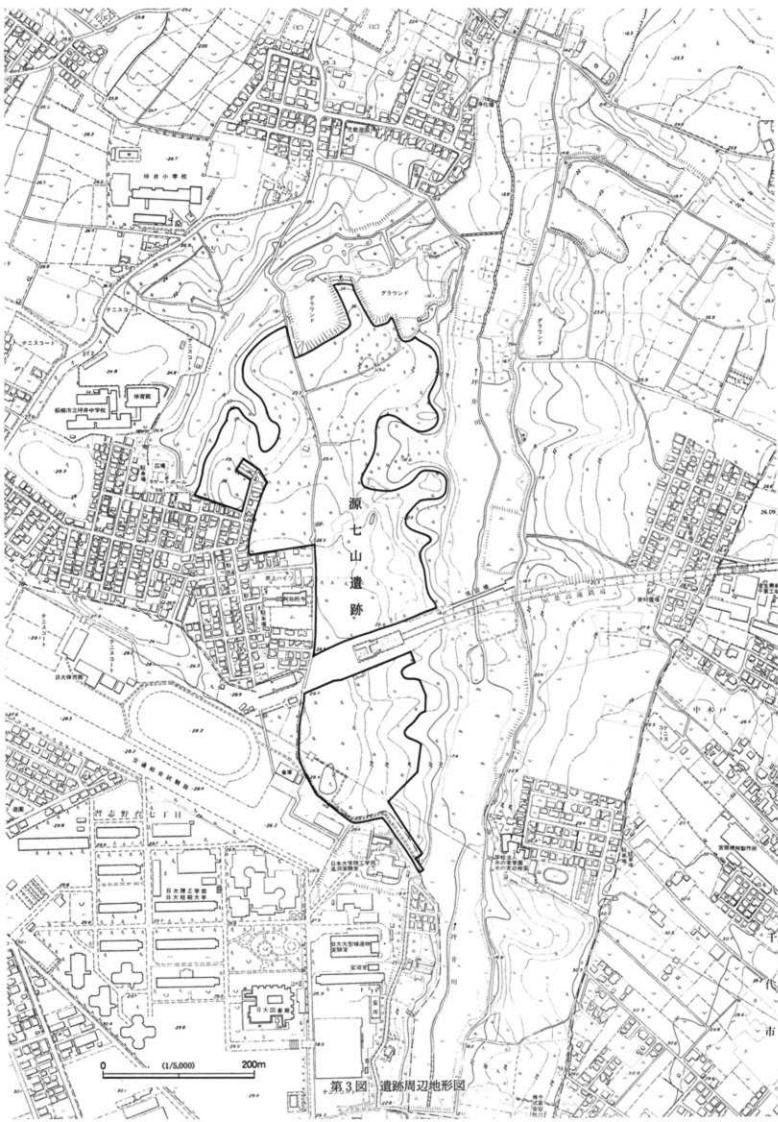
また、A区に所在するSA001（野馬土手）については、事前に基準点測量と同時に地形測量を実施した。その結果、調査地内の野馬土手は、総延長約330mにも及ぶことが判明した。この野馬土手には20m間隔を目安に、野馬土手に直交するトレンチを任意に14本設定し築造等についての調査を実施した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第3図）

源七山遺跡は、船橋市坪井町684番地ほかに所在する。船橋市の北東部、八千代市との市境に近いところに位置し、船橋市の市街地（JR船橋駅）から北東約7.5kmとなる。遺跡を南北に分断するように東葉高速鉄道が敷設され、最寄りの駅は「船橋日大前駅」となる。本遺跡の西側に隣接して日本大学理工学部がある。さらに近隣には日本大学薬学部・日本大学附属中・高校等があり、学園都市として、また、交通至便地となった地域でもある。

一方、地形についてみると、船橋市の北部から北東部、そして八千代市に至る平坦な台地は、印旛沼に流入する小河川（印旛沼水系）の浸食により樹枝状に開析されている。源七山遺跡も桑納川の支流、坪井川の左岸台地（坪井川の西側台地）の標高22m～30mに位置している。本遺跡の西側では、ほぼ平坦な台地が広がっており、西方約1.5kmほどに新京成鉄道がこの台地上を南北方向に蛇行しながら敷設されている。この新京成鉄道がほぼ分水嶺となり、鉄道の東側の台地上は印旛沼水系に、西側の台地上は東京湾に流入する海老川とその支流（海老川水系）により樹枝状に開析されている。このように東京湾に流入する小河川と印旛沼に流入する小河川に挟まれたこの平坦で広大な台地は、幅数kmにわたっており、東京湾に面して、南は千葉市から習志野市・八千代市にかけての花見川や菊田川水系、船橋市の海老川水系、北は市川市・鎌ヶ谷市の真間川水系、松戸市の江戸川水系まで、さらに内陸側は八千代市・船橋市・白井市の印旛沼水系、そして白井市・沼南町（現柏市）から手賀沼水系となり柏市まで広範囲に続いている。この平坦で広大な台地上は、江戸時代には小金牧（下野牧・一本門牧・中野牧）として土地利用され、明治期には陸軍の演習場や開墾地として開発され、戦後は野菜や梨の生産地として、近年は交通網の発達とともに宅地としての開発が著しい地域となっている。

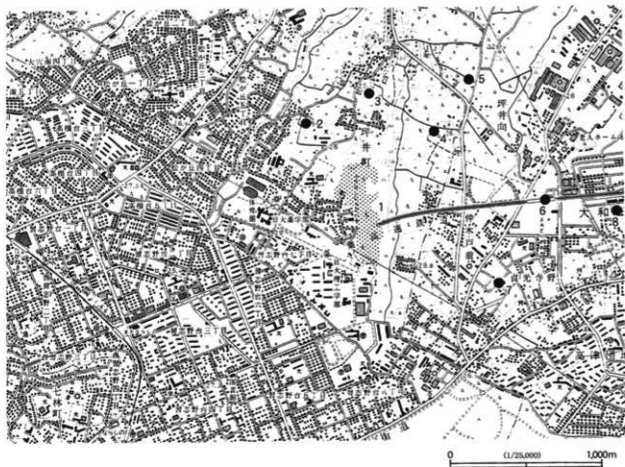


第3圖 遺跡周辺地形図

2 歴史的環境 (第4・5図)

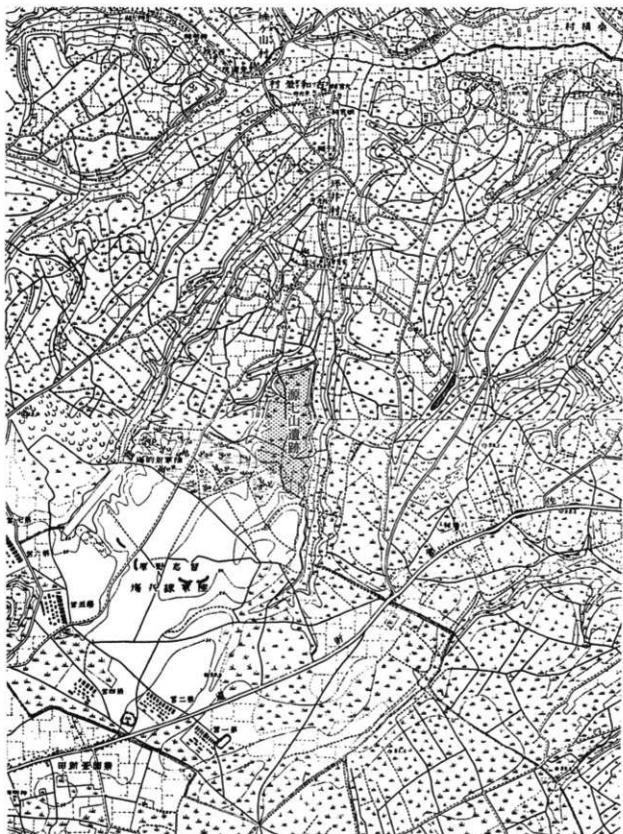
船橋市の東部の東京湾に流入する海老川水系の台地上、印旛沼水系の台地上には、数多くの遺跡が所在する。東京湾側の台地上は、昭和30年代から宅地化が進み、発掘調査が実施されてきた地域で、高根木戸貝塚・同北貝塚・飯山満東遺跡・古和田台遺跡といった著名な遺跡が多く所在する。それに対し、印旛沼水系では海老ヶ作貝塚や金堀台貝塚が知られている程度であったが、近年開発が進み発掘調査例も増加しつつある。水系を同じくする八千代市域では、東葉高速鉄道建設に伴う調査や萱田遺跡群の調査成果が報告されている。また、源七山遺跡と同じ水系の桑納川右岸台地上では西八千代北部地区の区画整理に伴う発掘調査が進行中であり、旧石器時代から中近世に至るまでの遺構・遺物が検出されている。

そこで源七山遺跡と同時期の遺構・遺物を検出した周辺城の遺跡¹⁾についてみると、以下のような遺跡をあげることができる。



第4図 周辺の遺跡

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1 源七山遺跡 | 5 坪井向遺跡 (縄文中・後期) |
| 2 上竹遺跡 (縄文中期) | 6 仲ノ台遺跡 (旧石器、縄文中・後期、奈良・平安) |
| 3 中井台遺跡 (縄文中期、奈良・平安) | 7 八幡藪遺跡 (縄文前期) |
| 4 城見山遺跡 (縄文中・後期) | 8 ライノ作南遺跡 (縄文前期) |



第5図 迅速測図中の源七山道跡

旧石器時代 海老川水系では、調査例が少なく上飯山湖遺跡、新山東遺跡、印旛沼水系では仲ノ台・芝山・ツイノ作遺跡（第4図）、萱田遺跡群、高津新山遺跡、西の台遺跡などが知られている。

縄文時代 縄文時代になると、海老川水系・印旛沼水系の台地上には数多くの遺跡が存在する。海老川水系では佐倉道南遺跡・西の台遺跡（早期）、古和川台遺跡・飯山湖東遺跡（前期）、高根木戸貝塚・高根木戸北貝塚・中野木遺跡群（中期）、葦園台貝塚・宮本台貝塚（後期）などがあり、印旛沼水系では海老ヶ作貝塚・海老ヶ作北貝塚（中期）、金堀台貝塚（後期）がある。

奈良・平安時代 海老川水系は、その下流域に当該時期の遺跡がみられ夏見台遺跡群に代表される。印旛沼水系では新川へ注ぐ支流に栗谷遺跡・上谷遺跡・萱田遺跡群など大規模遺跡が展開する。

中世 中世（鎌倉～室町時代）の船橋市域は、特徴として中央部、西部、北部、東部の4つの地域に分けることができる。

中央部は、海老川流域で、夏見（船橋）御厨・船橋湊を中心とした地域と伊勢神明社・船橋大神宮の影響下にあった地域で、文化財も数多く残されている。一方、本遺跡周辺の北部は時代により萱田神保御厨・新保郷・臼井郷などと呼ばれていたが、残された史料は少なく不明なところが多い。また、桑納川上流の古和釜・大穴・楠ヶ山・坪井の村々では、三山七年祭^{注1}に八王子神社の御輿を巡行するなど、東部地区の菊田川水系の菊田荘とのつながりもある。

戦国期になると桑納川流域にも城館が築かれるようになる。本流域には、金堀城跡・楠が山城跡・吉橋城跡・米本城跡があり、上流の坪井川流域に坪井城跡がある。坪井城跡は、本遺跡から北方500mにあり、かつては二重の土塁・空堀跡があったといわれている^{注2}が、明治期に整地され現在は残されていない。本城は、在地土豪層の居館とも吉橋城の山城ともいわれるが、人物等については不明である。これらの城跡は、当時広くは印旛沼水系の河川を利用して臼井城や本佐倉城と軍事的・経済的な結びつきをもっていたとされている^{注3}。

近世 発掘調査した馬土手（SA001）は、船橋市史研究に坪井・習志野台境馬土手として掲載されている^{注4}。本報告書では、坪井・習志野台境馬土手と本遺跡で付したSA001を併記して呼称する。本土手は、「小金下野牧」の一部にあたる。松下邦夫氏が作成した「享保期小金牧の復元図」^{注5}によれば、土手の西側が下野牧（御用地）、東側が坪井村（村方）にあたる。明治時代の陸軍測量局作成迅速測図（第5図）には、本土手の北西方向と谷津を隔てて東側台地上を南東方向に延びていくことが看取することができる。さらに東側台地上には、成田道（現国道296号線）が下野牧を横切るように東西方向に通っていて、牧の出入り口には木戸が置かれていた。現在でも「新木戸」という地名が付近には残されている。

注1 千葉県文化財センター 1996『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）』東葛飾・印旛地区（改訂版）

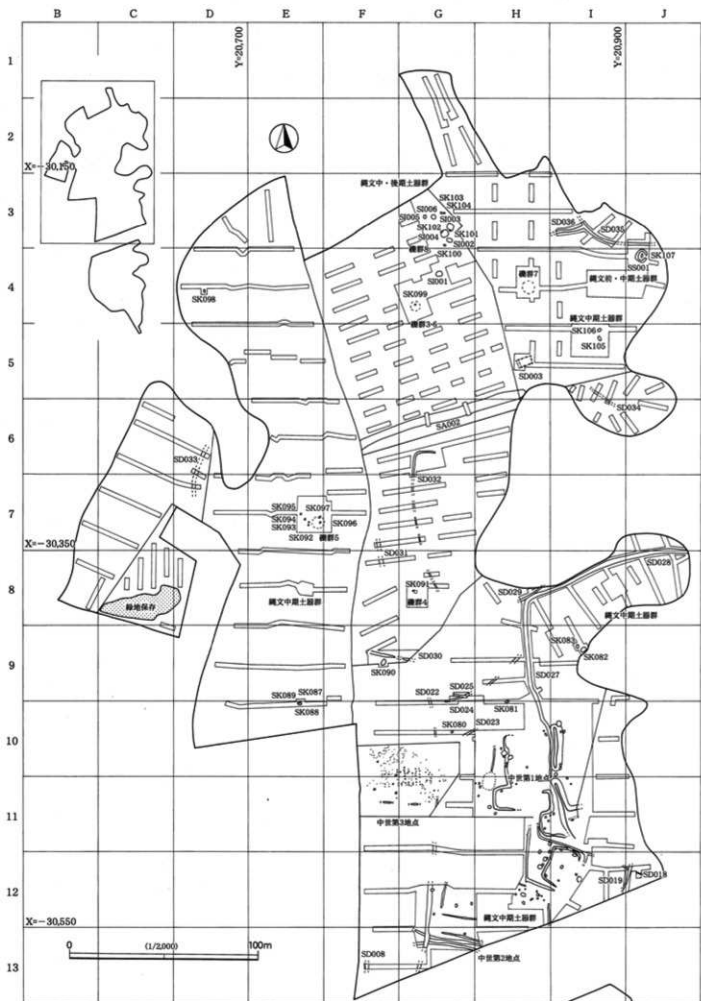
2 三山七年祭は、船橋市三山二宮神社で6年ごとに行われる大祭で、船橋市、習志野市、千葉市・八千代市の9つの神社の御輿が参加している。15世紀千葉氏一族の安産のお礼の大祭が起源といわれている。

3 高橋三千男 1991「中世城館址」『船橋市史』原始・古代・中世編 船橋市

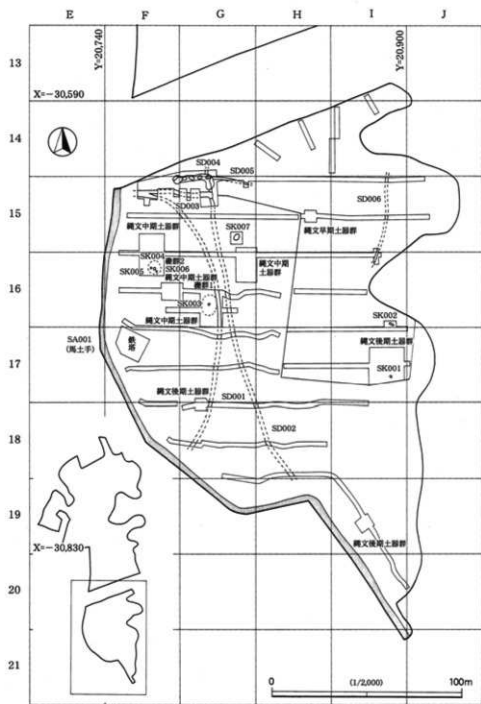
4 千野原端方 2004『東葛の中世城郭』斎書房山版

5 船橋市史編さん委員会事務局 1989「船橋市域の近世牧遺構について」船橋市史研究4 船橋市市史編さん委員会

6 松下邦夫 1982『松戸の歴史案内』郷土史出版



第6図 上層確認トレンチ配置図及び遺構配置図(1)



第7図 上層確認トレンチ配置図及び遺構配置図(2)

第2章 旧石器時代

第1節 概要

源七山遺跡は印旛沼に流入する小河川の侵食谷によって樹枝状に開析された台地上にある。標高は22m～30mを割り、桑納川支流である坪井川の左岸に位置する。坪井川は源七山遺跡南端部から300mほど南に源を発し、西側の小河川とともに桑納川へと流れ込む。

源七山遺跡における旧石器時代の調査は平成9～11・14・16年度に亘って行われ、調査対象面積115,750㎡のうち4%強に当たる5,038㎡について確認調査および拡張を行い、遺物の出土に伴って5,949㎡の本調査を行った。遺物は、立川ローム層下部であるIX層からソフトロームのIII層にかけて1,469点が出土し、6枚の文化層に帰属した。これらの分布状況をふまえて石器集中地点のまとまりを「ブロック」とし、29か所のブロックが確認された(第9・10図)。このほか、ブロック以外の単独出土および縄文時代遺構などから出土した石器は22点であり、石器出土総点数は1,491点を数える。

1 層序区分

本遺跡は、東葉高速鉄道をはさんで南部・北部地域に分けられる。

南部地域は、標高30mの平坦な台地上から緩斜面となる標高22mの台地上に位置しており、遺跡内の比高差は8mに及んでいる。平坦面の台地上では、通常立川ローム層の堆積、さらに武蔵野ローム層の上面も確認された。緩斜面の情報では、立川ローム層の上部しか堆積が認められず、以下の層は非常に粘質が強い暗褐色土になる。下方の台地縁辺部では、通常立川ローム層が残存せず、III層相当層として粘質がかかる黄褐色土が検出され、この層以下は粘土質の層になる。

北部地域では、坪井川の小支谷が西側にも入り込んできているため、台地が北側に向かった舌状の小台地を呈している。この台地部分は、さながらやせ尾根状を呈しており、同じ標高でも立川ローム層の堆積が通常に認められるところ、立川ローム層の上部しか堆積が認められないところ、立川ローム層がほとんど遺存していないところがある。特に遺跡中央部付近の広い範囲で通常立川ローム層が遺存せず、III層相当の暗褐色土は、直視的に土層観察したのみで、鉱物分析はしていないが、立川ロームとは明らかに異なる土質であり、武蔵野ロームの土壌が変成したいわゆる「水つきローム」である可能性がある。なお、この暗褐色土中からは、旧石器の遺物は出土していない。

第8図に基本層序として、武蔵野ローム層上面まで確認された17G-12グリッドの土層断面を記した。また、立川ローム層がX層まで確認できた範囲、立川ローム層のハードロームの一部まで確認できた範囲、立川ローム層のハードロームが確認できなかった範囲を遺跡内ローム堆積概念図として第10図に記した。

2 基本層序 (17G-12グリッド) (第8図、図版3)

I 層：黒色の表土である。山林である。

II a 層：黒褐色土である。

II c 層：暗褐色土であり、II b 層のいわゆる「新期テフラ層」とは分層されず、II c 層上部に含まれる。

III 層：黄褐色ローム土、いわゆるソフトローム層である。

IV 層：明褐色の硬質ローム土で、部分的に認められる。

V 層：褐色の硬質ローム土であり、第1黒色帯に相当する層である。IV層よりも若干黒みが増しているのが確認できた所はIV層とV層を分層した。

VI 層：明褐色の硬質ローム土であり、非常に堅緻である。始良丹沢火山灰(AT)が拡散して、混入している。

VII 層：褐色の硬質ローム土である。第2黒色帯上部に相当し、赤色と黒色のスコリアをやや多く含む。

IX a 層：暗褐色の硬質ローム土であり、第2黒色帯下部に相当する層である。赤色・黒色・暗緑色スコリアを含む。VII層と本層の間にスコリア質の明褐色ローム土がブロック状に認められる。

IX b 層：褐色の硬質ローム土である。IX a 層とIX c 層の境に厚さ5cmほどのブロック状に認められる。

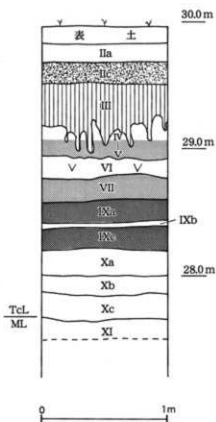
IX c 層：暗褐色の硬質ローム土である。IX a 層よりも黒みが強く、暗緑色のスコリアが目立つ。

X a 層：茶褐色のローム土である。

X b 層：暗茶褐色のローム土である。

X c 層：茶褐色のローム土であり、下部では下層の灰褐色ローム土が混じる。立川ローム層最下層である。

XI 層：灰褐色のローム土であり、武蔵野ローム最上部である。



第8図 基本土層図

本遺跡からは29か所の遺物集中地点が検出され、産出層準に基づき大きく6枚の文化層に区分した。

第1文化層 VII層～IX a 層 第1～3ブロック

第2文化層 VI層下部～VII層 第4～9ブロック

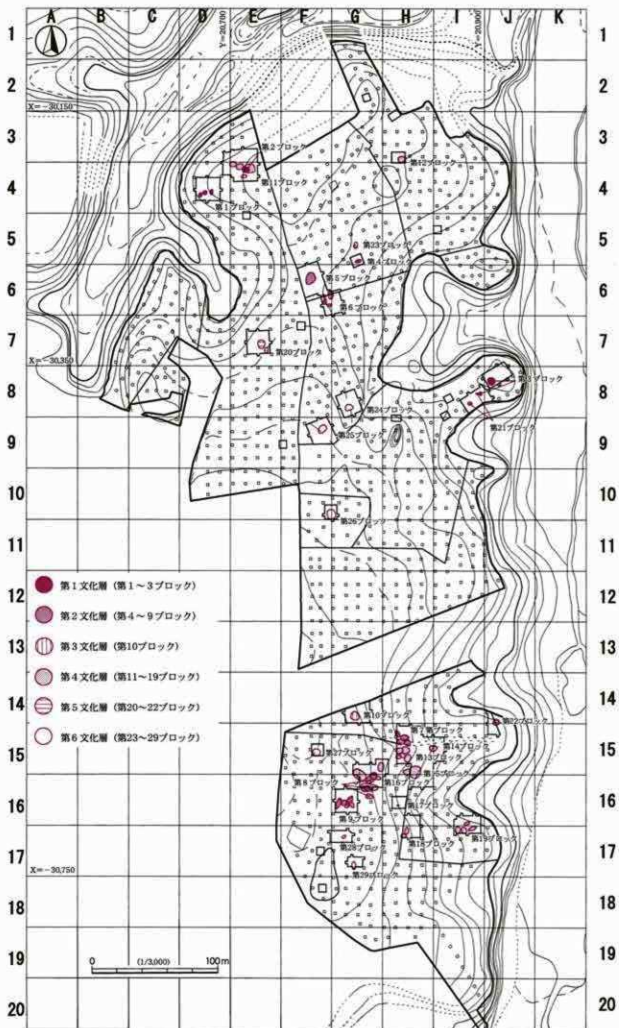
第3文化層 V層～VI層 第10ブロック

第4文化層 III層～V層 (IV層下部～V層) 第11～19ブロック

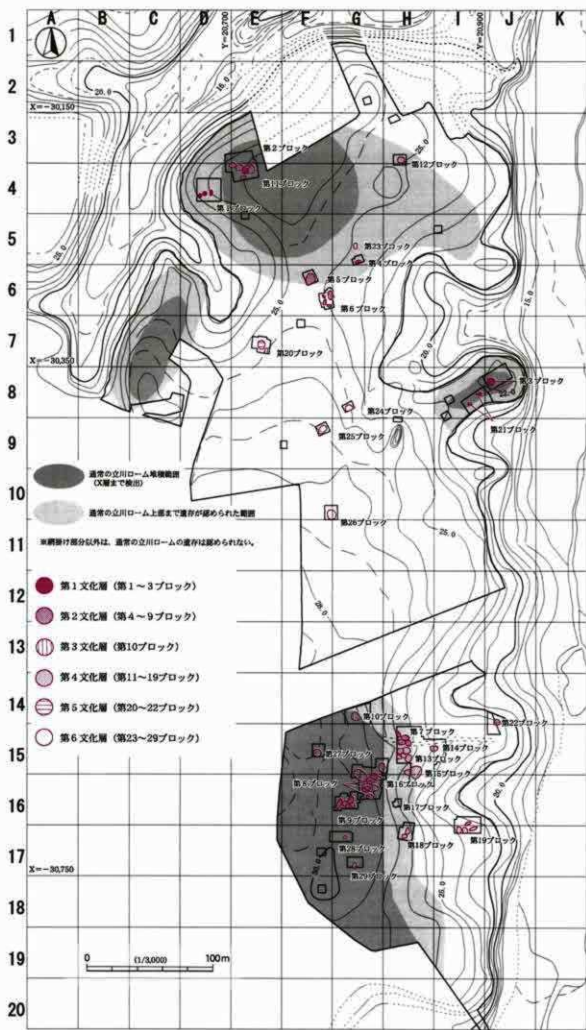
第5文化層 III層～IV層 第20～22ブロック

第6文化層 III層 第23～29ブロック

ただし、III層のソフトロームおよびIV層～V層の境界は不明瞭であり、第3文化層から第5文化層に細分はしたが同一時期の所産である可能性は否めない。ブロック番号は文化層内での時間的な前後関係にかかわらず、便宜的に文化層単位で北から順に付けたものである。



第9図 下層発掘区及び石器集中地点位置図



第10図 ローム層堆積概念図

第2節 第1文化層 (第11図、巻頭図版1)

Ⅶ層～Ⅸa層にかけて遺物が出土したブロックは3地点存在する。第1ブロックと第2ブロックは調査範囲の北西端に位置し、地点間の距離は38m、標高24m～26m、東高西低のなだらかな緩斜面に隣り合う。第2ブロックは第4文化層第11ブロックに覆われるように存在し、第1ブロックに共通母岩が検出されている。第3ブロックは第1・2ブロックから東南に260mほど離れた、調査範囲の最東端に位置する。

1 第1ブロック (第12・13図、第1表、図版4・23)

遺物分布状況

遺物は4 D-54～56・63・64・66に分布する。

南北に5m、東西に10mの範囲内に9母岩36点が出土した。厳密には北西～東南に2.5m、西南～北東に11mの帯状に分布する。土層は東西に水平に堆積し、遺物はⅦ層～Ⅸb層にかけて包含されるが、分布の中心はⅦ層～Ⅸa層である。

母岩別資料の分布

第1ブロックと第2ブロックは同一時期の所産と考えられる。

共通母岩は黒色頁岩1のみであるが、石材組成は第1ブロックではガラス質黒色安山岩・頁岩・珪質頁岩・黒色頁岩・ホルンフェルス・チャート、第2ブロックはガラス質黒色安山岩・頁岩・黒色頁岩であり、第1ブロックに収斂される。

分布の中心にはホルンフェルス1とガラス質黒色安山岩1が4 D-54の東南2㎡の内にまとまって出土し、その中心から西南に3.7m離れて黒色頁岩1の石核が出土している。黒色頁岩1の母岩礫は残された石器の自然面などから推察すると、角の取れた角礫状で小児の頭ほどの大きさがあったものと思われ、この分布域の西南に石核を含む4点がまとまり、他2点は4 D-54東南の集中域に分散する。第1ブロックの中心から東に38m離れた第2ブロックは第4文化層(Ⅲ層～Ⅴ層)の下部から検出され、30点の石器が4.5m四方にまとまって出土している中でも黒色頁岩1は2点出土する。

出土石器

第1ブロックの石器出土点数は36点だが、石核・剝片・碎片の3器種のみで構成される。

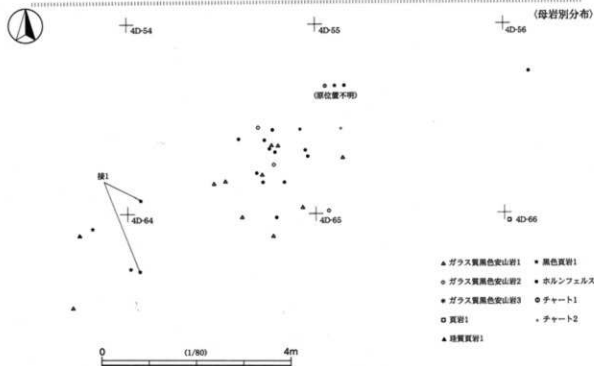
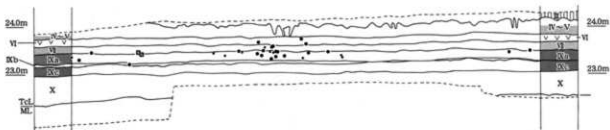
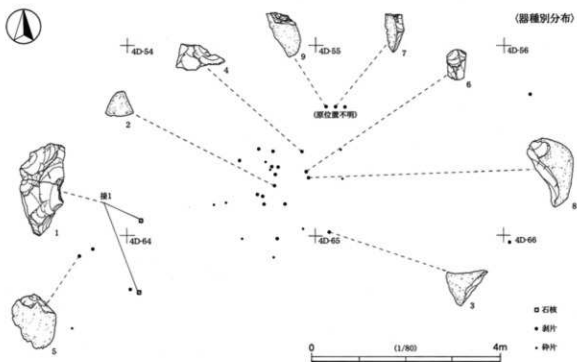
※以下、器種に付随する括弧は挿図番号を示す。

石核(1) 1は黒色頁岩1で、自然面は細かな引っかき傷状のひび割れ模様で覆われているが、黒色の色合いは剝離面と変わらない。自然面は艶のある黒、剝離面は鈍い黒である。自然面から内核へ向かう加撃によって厚みのある角柱状の素材片を作出したのちに基部を細く、上縁部を幅広く加工している。右側縁中央部は緩やかなノッチ状に扶られているようにみえるが、成形時の剝離作業に伴うものであり、この時の衝撃により分割されたと推察される。

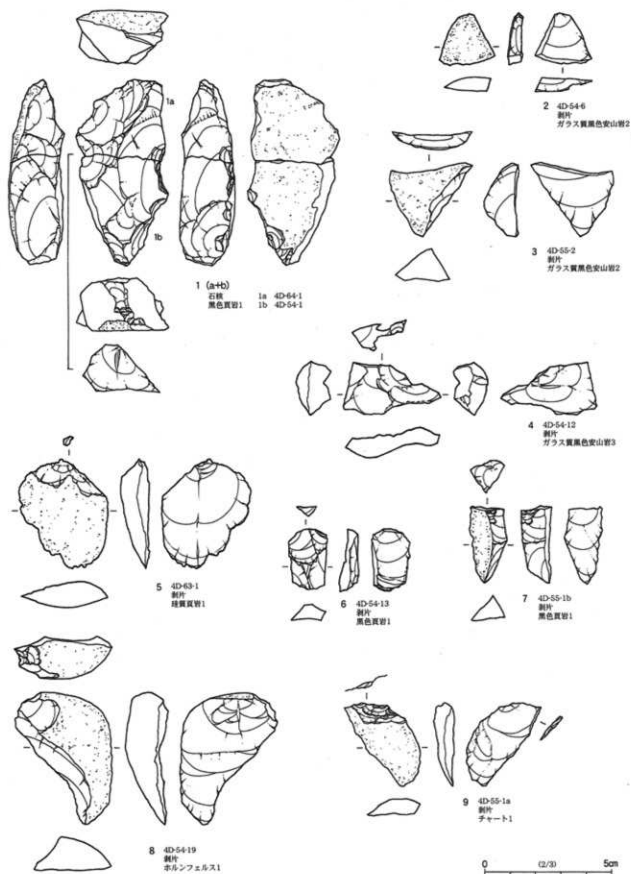
剝片(2～9) いずれも使用痕・二次加工痕は看取されない。2は自然面が敲打されてできた剝片である。下、右の順に折れている。3は尾部残存。4は不定形に崩折れた剝片で、下縁辺は新欠である。2～4はガラス質黒色安山岩である。5は、自然面は灰黄、剝離面は黒斑・白斑の入った灰白色の珪質頁岩1で



第11図 第1文化層ブロック配置図



第12図 第1ブロック遺物分布



第13図 第1ブロック出土石器

ある。自然面が加撃されて剥離した礫端片である。6は作出された打面から剥離された剥片である。末端は階段状に終結し、自然面はない。主要剥離面側の右側縁下部には連続した小剥離痕が並ぶが、上部の突出部分があるまま残存していることから、作動的な所産ではないと思われる。7は打面部分が折れている。8は背面に原礫面を多く残したホルンフェルス1の剥片である。同一母岩は12点あるが接合関係はない。9は剥片剥離時に垂直に力が加わったため、背面・腹面とも一撃のもと、同時割れを起こしている。打点直下には同心円状にふくらみを持つコーンが現れている。自然面と主要剥離面とが鋭い左縁辺を作出している。

第1表 第1ブロック組成表

母岩名 / 器種	石核	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比	
ガラス質黒色安山岩1	0	3	7	10	28.57%	4.23	2.49%	
ガラス質黒色安山岩2	0	3	0	3	8.57%	12.47	7.33%	
ガラス質黒色安山岩3	0	1	0	1	2.86%	7.12	4.19%	
頁岩	1	0	1	1	2.86%	1.14	0.67%	
珪質頁岩	1	0	1	1	2.86%	13.38	7.86%	
黒色頁岩	1	12(2)	4	0	5(6)	14.29%	70.83	41.65%
ホルンフェルス1	0	10	2	12	34.29%	55.48	32.61%	
チャート1	0	1	0	1	2.86%	4.90	2.88%	
チャート2	0	0	1	1	2.86%	0.58	0.34%	
合計	1(2)	24	10	35(36)	100.00%	170.13	100.00%	

※ ()は出土点数

2 第2ブロック (第14~17図、第2表、図版4・23)

遺物分布状況

遺物は4E-02・03・12・13に分布する。遺物を土層図に投影したところ、IV層~V層部分とVII層~IX a層に分かれ、石材組成や器種構成を鑑みて第4文化層第11ブロックから分層した。第2ブロックは遺跡の北西に位置し、同一母岩が検出された第1ブロックとは分布の中心を直線でつなぐと38mの距離がある。分布域は直径4mの円形の中に30点が出土した。土層図上ではVI層~IX a層にかけて約0.4mの間に分布するが、分布密度の高い中心層はVII層~IX a層である。

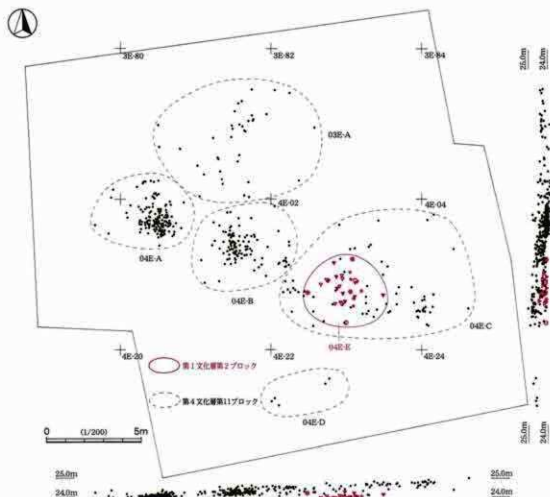
母岩別資料の分布

第1ブロックの中心から東に38m離れた第2ブロックは第4文化層(III層~V層)の下部から検出され、30点の石器は4m四方に収まる。3石材7母岩はまとめて出土するが、珪質頁岩は中央から北側に、黒色頁岩・ガラス質黒色安山岩はやや東側に分布する。

出土石器

削器(10) 10の素材剥片時の打面には、背面側からの急角度の加工が施されているが、主要剥離面を切っていない。剥片剥離後の調整かどうかは不明である。腹面側の右側面に2か所の挟入があり中央部分は72°~78°の小剥離で丁寧加工されている。

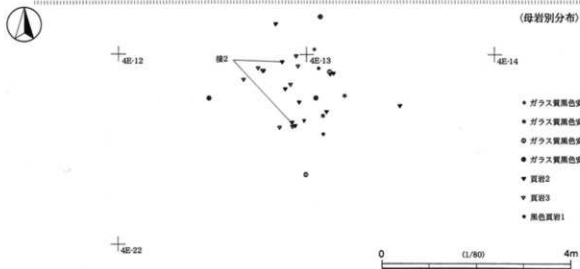
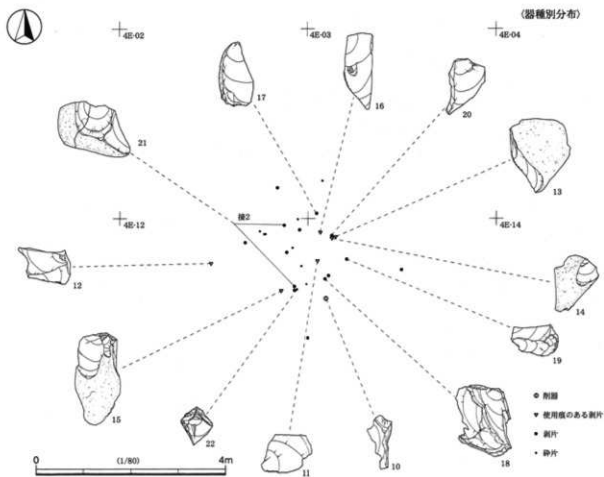
使用痕のある剥片(11~16) 11は薄い板状を呈し、12は上部欠損の剥片である。11・12とも、幅広の下縁辺に刃こぼれ状の使用痕が看取される。12は上部が欠損して下部のみとなった剥片である。13・14は頁



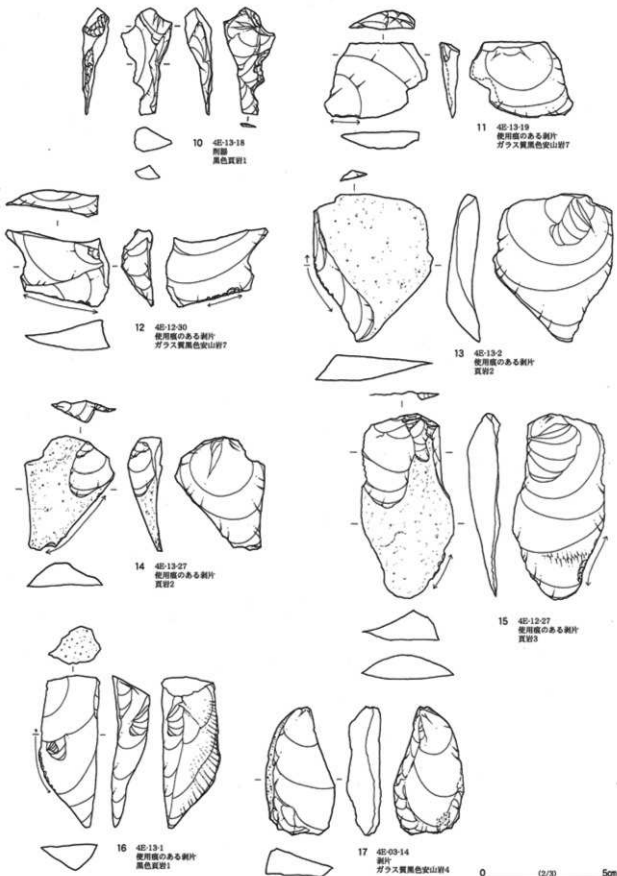
第14図 第2ブロック検出状況

岩2であるが、8のホルンフェルス1と同様の作出方法で、礫表から打面を作出し、背面に自然面を多く残した剥片を剥離している。縁辺には使用の際に欠けたと思われる微細剥離痕が並ぶ。15は頁岩3であるが、熱変成を受けて部分的にホルンフェルス化している。縦長の剥片の両側縁に使用痕がみられる。特に、主要剥離面の右下側縁に残る剥離痕は器形を緩く抉るように残され、意図的に加工された可能性もある。16は平坦な自然面打面である。主要剥離面の稜はほぼ直角に左右を分けるが、打点直下の折れによるものと思われる。背面左下半部に刃こぼれ痕有り。

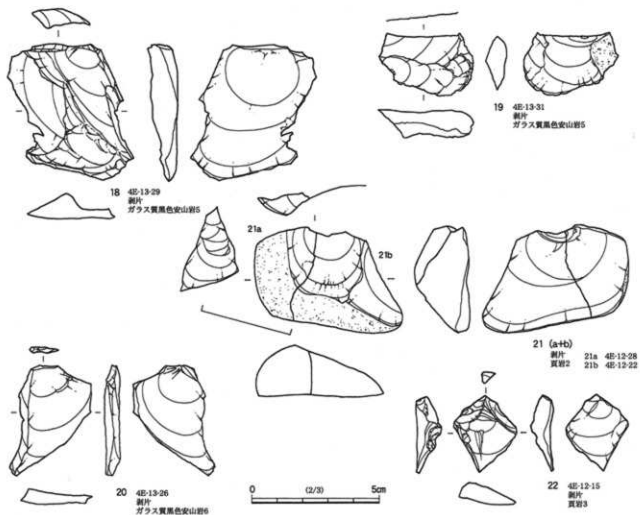
剥片 (17~22) 17は原礫の自然面を同一方向から連続して加撃することによって作出された、板状の剥片のうちの1片。打面・側面は帯状に自然面が残る。打点直下の折れにより主要剥離面側の左部には稜ができ、面を二分している。18は打面・作業面を換えながら剥離された剥片である。19は打点直下の折れを起こして不定形に割れている。20は板状剥片であり、右縁辺は折れている。21a・21bは同時割れで、2点で1点の剥片である。剥離面は灰〜灰褐色であり、鉄錆様の直径1mm〜2mmの斑が入る。22は左縁に主剥離方向と同一方向の剥離がある。これは打面調整によるものではない。



第15図 第2ブロック遺物分布 (04E-E)



第16図 第2ブロック出土石器(1)



第17図 第2ブロック出土石器(2)

第2表 第2ブロック組成表

母岩名 / 器種	副器	使用痕のある剥片	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩4	0	0	1	0	1	3.45%	15.98	7.17%
ガラス質黒色安山岩5	0	0	2	0	2	6.90%	30.50	13.68%
ガラス質黒色安山岩6	0	0	2	0	2	6.90%	7.87	3.53%
ガラス質黒色安山岩7	0	2	0	1	3	10.34%	7.36	3.30%
頁岩 2	0	2	5(6)	3	10(11)	34.48%	104.88	47.03%
頁岩 3	0	1	3	5	9	31.03%	36.94	16.57%
黒色頁岩 1	1	1	0	0	2	6.90%	19.47	8.73%
合計	1	6	13(14)	9	29(30)	100.00%	223.00	100.00%

※ ()は出土点数

3 第3ブロック (第18~20図、第3表、図版4・23)

遺物分布状況

遺物は8 I-49・59、8 J-20・21・31に分布する。第3ブロックは調査範囲の東端に位置する。標高はおよそ22mである。地形図は平坦なテラス状であるが、調査時の土層図を見ると、東高西低の緩斜面となっている。遺物の出土レベルに0.9mの高低差があるが、土層図の傾斜にしたがって34点が帯状に推移する。垂直分布の平均レベルは22.3mである。

母岩別資料の分布

検出母岩はガラス質黒色安山岩8~10・トロトロ石1・流紋岩1・砂岩1・珪質頁岩2・ホルンフェルス2・チャート3・玉髓(メノウ含む)1~3である。ガラス質黒色安山岩8は北東の集中域に19点が分布する。ガラス質黒色安山岩10の4点も同様である。玉髓(メノウ含む)1は北東の集中域と西南の分散域にまたがって出土し、12m離れて接合する。他はすべて1母岩1点のみの出土である。北東端からヘラ状の台形様石器が出土しており、これは濃褐色のガラス質黒色安山岩9の単品である。

出土石器

台形様石器 (23) 23は素材の下縁部を刃部とし、側縁をV字状に整えている。逆三角形の整美な形状である。刃部は65°~70°、側縁の調整は70°~80°である。

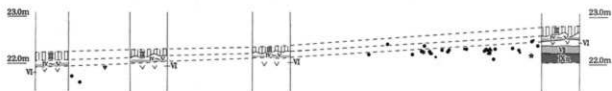
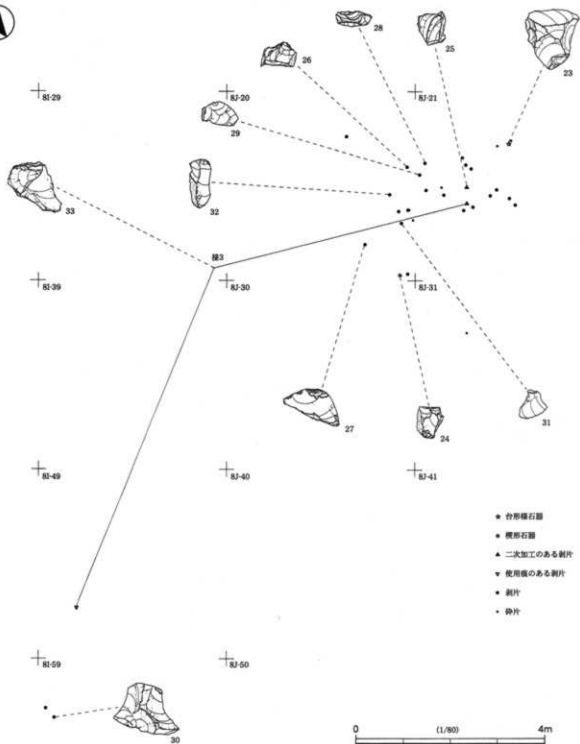
楔形石器 (24) 24は両極からの加撃によって作出されている。左側面は自然面である。

二次加工のある剥片 (25) 25は黄褐~灰~黒褐色の縞模様珪質頁岩である。上・下・左・右すべての面は背面を切る。主要剥離面の下部に小剥離面がみられるが、人為的なものではないと思われる。

剥片 (26~33) 26はガラス質黒色安山岩8で、19片のうち1片である。27は自然礫を同一方向から連続して加撃してできた板状の剥片である。末端形状は階段状に終結し、背面にまで及ぶ。28は27と打点の形状が一致する。同一の工具で剥離作業が行われたものと思われる。線状打面であるが、わずかに自然面がみられる。29は自然面から加撃、連続して剥離された横長剥片の1片である。8 J-21-6も同様の剥離工程において作出される。30は灰白色のトロトロ石で同様の石材は他にない。打面・剥離面を入れ換えながらの剥離作業が行われている。使用痕・二次加工痕は、風化により不明である。31は明灰白色で直径1.5mmほどの石英と、直径1mmの黒雲母の斑晶が入る流紋岩である。他に同様の石材はない。32の自然面は鮮

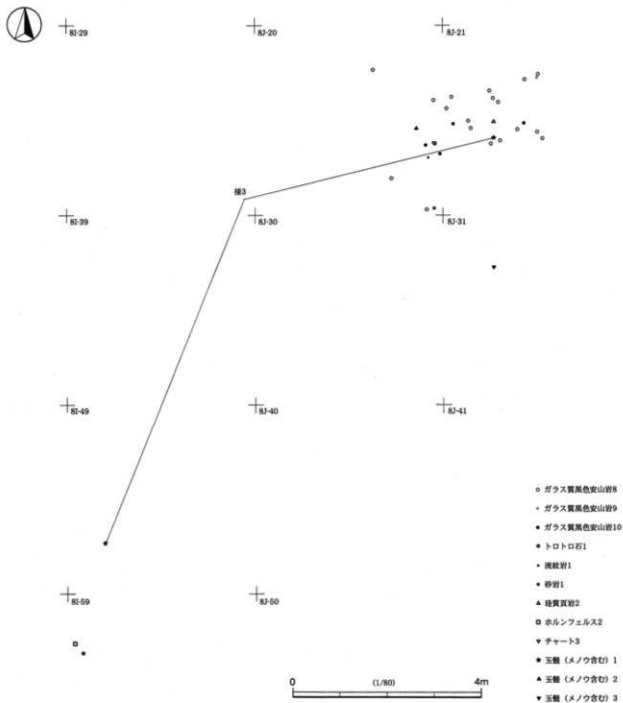
第3表 第3ブロック組成表

母岩名 / 器種	台形様石器	楔形石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砂片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩8	0	1	0	0	14	4	19	55.88%	36.93	22.91%
ガラス質黒色安山岩9	1	0	0	0	0	0	1	2.94%	22.74	14.10%
ガラス質黒色安山岩10	0	0	0	0	3	1	4	11.76%	4.31	2.67%
トロトロ石1	0	0	0	0	1	0	1	2.94%	18.77	11.64%
流紋岩1	0	0	0	0	1	0	1	2.94%	1.33	0.82%
砂岩1	0	0	0	0	1	0	1	2.94%	46.39	28.77%
珪質頁岩2	0	0	1	0	0	0	1	2.94%	5.65	3.50%
ホルンフェルス2	0	0	0	0	1	0	1	2.94%	1.22	0.76%
チャート3	0	0	0	0	1	0	1	2.94%	0.61	0.38%
玉髓(メノウ含む)1	0	0	1	1	0	0	2	5.88%	17.64	10.94%
玉髓(メノウ含む)2	0	0	0	0	1	0	1	2.94%	5.25	3.26%
玉髓(メノウ含む)3	0	0	0	0	0	1	1	2.94%	0.39	0.24%
合計	1	1	2	1	23	6	34	100.00%	161.23	100.00%

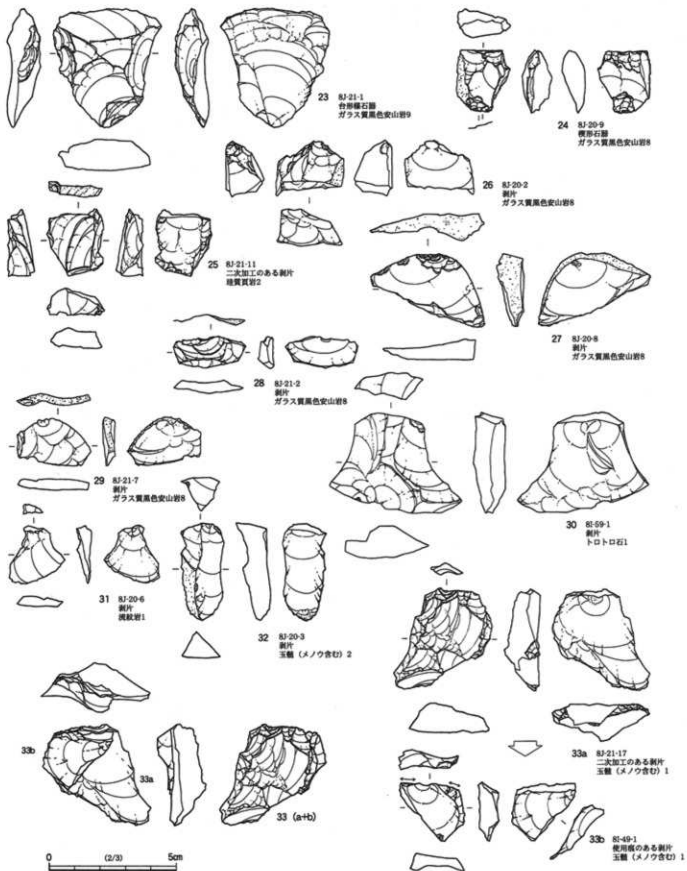


第18図 第3ブロック器種別分布

やかなオレンジ色、剥離面は淡橙色、ガジリ部分は明白色である。背稜は74°、打面はほぼ正三角形である。一次剥離と二次剥離によって作られた右側縁部は52°を測り、不自然に黒ずんではいるが、刃こぼれ痕などは看取されない。33は同じ玉髓（メノウ含む）でも32とはかなり異なる。33は不透明な明褐色部分と透明感のある橙褐色部分が二層に分かれている。自然面は残存していないが、中心（内核）へ向かうほどに硬度・透明度が増すものと思われる。平坦に整えられた打面からは頭部調整された33 a、続いて33 bが剥離される。33 aの末端部には腹面から背面へ向けて二次加工が施される。



第19図 第3ブロック母岩別分布



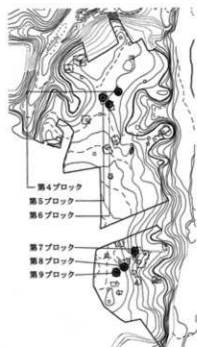
第20図 第3ブロック出土石器

第3節 第2文化層 (第21図、第4表、巻頭図版1・2)

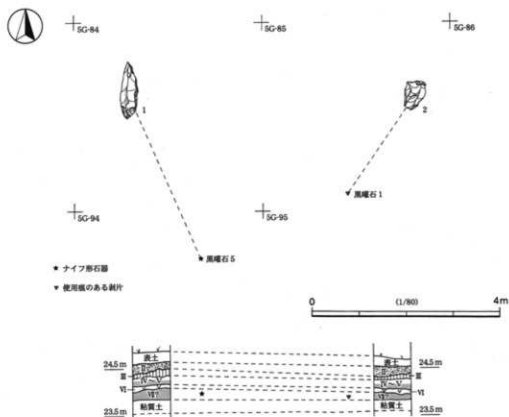
第2文化層は6か所の石器集中地点から出土した351点が、VI層～VII層に包含される文化層であり、第4ブロック～第9ブロックがこれに相当する。第5ブロックを除く5か所の集中地点では、夾雑物が少なく高透明度の、信州産と推定される黒曜石製品が数多く検出されており、規則的な剝離工程に基づいた黒曜石の消費形態が認められる。特に第7ブロック～第9ブロックの様相は萱田地区の権現後遺跡III期に共通するものであり、この時期における石材獲得・消費・行動のあり方などを垣間みることができる。

第4ブロック～第6ブロックは北半部の中央からやや北寄りに位置する。標高は24m～25m、一部平地であり、西から東に向かってわずかに傾斜している。3か所のブロックは5F・5G・6F・6Gグリッドにまたがり、北東に第4ブロック、北西に第5ブロック、南に第6ブロックが存在する。通常の立川ローム層の遺存状態が悪く、いわゆる「水つきローム」である可能性が高いため、出土土層の特定には困難を伴った。

以下、第2文化層を第4ブロックから順にみていく。なお、肉眼観察ではあるが、使用石材の特徴を表にして示した。



第21図 第2文化層ブロック配置図



第22図 第4ブロック遺物分布

第4表 第2文化層母岩別石材特徴

ブロック	母岩	採出番号	自然産	風化産(採集産)	産地産(ボツ)	風化(採集)色・大きさ(mm)・形状	特徴・その他
5	ダラス質黒色安山岩1	12		黒みを帯びた赤褐色	黒	黒褐色 100-110×20 縦長	
5	ダラス質黒色安山岩2	18	褐色	褐色		100-110×20 縦長	
7	ダラス質黒色安山岩3		黄褐色	黄褐色		100-110×20 縦長	
7	トトロ石1			灰白色～灰色			
8	トトロ石2	29		灰白色			
8	トトロ石3			黒みがかった灰色			
7	安山岩1		赤みがかった灰色	赤みがかった灰色			産地より産出
7	安山岩2			赤みがかった灰色			ターム産の産物あり
5	成鉄岩1		黄褐色	黄褐色			
7	成鉄岩2		黄褐色	黄褐色			
8	成鉄岩3		黄褐色				
8	成鉄岩4			明黄白色			
4.4	黒曜石1	2, 26, 29-38	半透明～無透明	高透明度、磨面あり?		黒少	黒曜石1産出、産地産
6	黒曜石2	29		半透明、赤みがかった赤褐色		黒少	産地産
6	黒曜石3	27	無透明	高透明度、磨面あり、赤色がかる		黒少	産地産
6	黒曜石4	28	無透明	半透明、灰色～黄褐色	灰色	黒少	産地産
4	黒曜石5	3	半透明～半無透明	半透明で黒褐色、赤系の産物あり		黒少	黒曜石5産出
7	黒曜石6	32, 36-37, 41, 43, 44, 45, 47, 48, 49, 51	半透明～半無透明	高透明度、磨面あり、赤みを帯びる		黒少	黒曜石11産出、産地産
7	黒曜石7	58, 61, 70-71, 81	半透明～半無透明	高透明度、磨面あり、今中赤色		黒少	黒曜石11産出、産地産
7	黒曜石8	68, 61, 68, 69, 78	無透明	高透明度、磨面あり		黒少	赤～黒褐色の塊(30g程度のもの)が産出、産地産
7	黒曜石9	82, 44, 76		半透明、黒色	黒	100-110×20 縦長	黒曜石12産出
7	黒曜石10	50, 82		半透明、赤系の産物あり		100-110×20 縦長	黒曜石12産出
7	黒曜石11	79	無透明	半透明、黄褐色		黒少	産地産
7	黒曜石12			半透明、黒褐色、褐色の産物あり	黒	黒少	産地産
8	黒曜石13	65, 66, 107, 108, 120		高透明度、磨面あり、赤みを帯びる		黒少	黒曜石13産出、産地産
8	黒曜石14	37-49, 109-110	無透明	高透明度、磨面あり、今中赤色		黒少	黒曜石13, 19と産出、産地産
8	黒曜石15	90	無透明	高透明度、赤みがかる		黒少	産地産
8	黒曜石16	98, 98, 109	<ターム産	透明～半透明		黒なし	くもりダラス状、産地産
8	黒曜石17	90, 87		高透明度、今中赤色		黒なし	黒曜石14, 19と産出、産地産
8	黒曜石18	91, 110-112, 122, 128	無透明	高透明度、今中赤色、白い巾		黒なし	黒曜石13, 19と産出、産地産
8	黒曜石19	82, 102, 104, 114-117		高透明度、磨面あり、今中赤色		黒なし	黒曜石13, 17と産出、産地産
8	黒曜石20	62, 84, 105, 106, 110-119	無透明	高透明度、磨面も今中		黒なし	産地産
8	黒曜石21	121		高透明度、今中赤色、白い巾		黒少	黒曜石13, 23と産出、産地産
8	黒曜石22	127		半透明、黒色		黒少	黒曜石23と産出、黒曜石12産出
8	黒曜石23	128, 127-122, 127, 128, 134-136, 139-140, 139, 134, 138, 139, 140, 141, 144, 154	無透明	高透明度、今中赤色、白い巾		黒少	黒曜石13, 21と産出、産地産
8	黒曜石24	138, 138, 138, 140, 141, 144, 154	<ターム産	高透明度、磨面あり		黒なし	産地産
8	黒曜石25	138, 138, 140, 141, 141, 144, 154-161	無透明	半透明、黒色	黒褐色 (100-110×20)	黒少	黒曜石13と産出、黒曜石12産出
5	燧石1			乳白色	白		産地産
8	砂岩1			黄褐色			産地産
5	燧質頁岩1	9-8, 12, 18, 20, 24	黄灰白色	黄灰白色	白～褐色		
5	燧質頁岩2	14, 21, 25	黄褐色	黄褐色～黄褐色白色	黄褐色		
5.4	燧質頁岩3	3, 22, 42, 44, 47	黄灰白色	黄褐色～黄灰白色	白		産地産(燧質頁岩を含む)
5	燧質頁岩4	4, 5, 15, 18, 28	黄灰白色～黄褐色、黄褐色あり?	黄灰白色～黄褐色土色、産地	灰白色		
5	燧質頁岩5	27		黄褐色白色			
8	燧質頁岩6	38, 48, 49	黄褐色(灰色、赤みを帯びる)	黄褐色白色			産地産(燧質頁岩、ノジュールの燧質頁岩と産出)
8	燧質頁岩7	28, 21, 22, 30		黄褐色～黄褐色白色	産地～黄褐色		
5.4	燧質頁岩8	3, 40, 41, 51		赤みがかった黄褐色、産地、黄光沢			
8	燧質頁岩9	42, 43, 48	黄褐色(灰色、赤みを帯びる)	黄褐色白色	白		自然産(ダラス産)あり、燧質頁岩と同一産地か?
5	燧質頁岩10	15, 17	黄褐色(灰色)	黄褐色～黄褐色白色	灰白色		
5	燧質頁岩11	31	赤い～灰色	灰白色、赤らで黄光沢			
5	燧質頁岩12	29	黄褐色(灰色～黄褐色、黄褐色あり?)	黄褐色～黄褐色白色			
7	燧質頁岩13	71		黄褐色～黄褐色白色、産地から黄光沢			
7	燧質頁岩14	34	黄褐色、光沢あり?	黄褐色白色、産地から黄光沢			
8	燧質頁岩15	126		黄褐色、黄褐色白色			中山産(1産物)から出土した燧質頁岩と同産地か?
8	燧質頁岩16	124	黄褐色、緑斑燧質岩、黄褐色燧質岩	黄褐色燧質岩、黄褐色燧質岩			燧質頁岩(燧質頁岩)産地産
8	燧質頁岩17	128	黄褐色～黄褐色、緑斑燧質岩、黄褐色燧質岩	黄褐色燧質岩、黄褐色燧質岩			燧質頁岩(燧質頁岩)産地産
8	燧質頁岩18	122	黄褐色、産地、黄褐色燧質岩	黄褐色燧質岩			燧質頁岩(燧質頁岩)産地産
7	チャート1		黄褐色	赤みがかった灰褐色、黄光沢			自然産(燧質頁岩)より産出か?
8	玉髓(メノウ含む)1	188		赤褐色、黄褐色、黄褐色が混在、黄光沢			
8	玉髓(メノウ含む)2	189		赤～赤を帯びた黄褐色、黄褐色燧質岩			

1 第4ブロック (第22~23図、第5表、図版4・23)

遺物分布状況

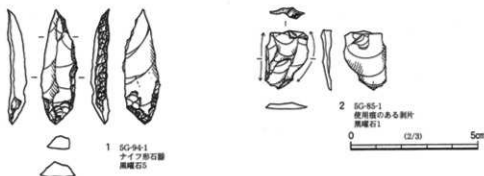
遺物は5 G-85・94に分布する。北半部の中央よりやや北東寄りに位置し、出土石器は黒曜石1、黒曜石5が1点ずつのわずかに2点が3.7m離れて出土している。黒曜石1は第6ブロックからも出土し、その距離は33mである。

垂直分布であるが、立川ローム層の推積状態が悪く、VI層以下は粘質の強い暗褐色土となるため、通常のVII層が確認されない。しかし、第6ブロックから同一母岩である黒曜石1が出土していることから、同一文化層とみなした。出土レベルは23.896m~24.003mであり、2点の高低差は約10cmほどである。

出土石器

ナイフ形石器 (1) 1は石刃素材のナイフ形石器である。主要剥離軸方向に据え、末端部分に基部を作出する。左側縁が刃部となる。右側縁全体に主要剥離面側から背面へ向けて成形したのち、丁寧なプランティングが施される(84°~97°)。基部は背・腹両面に調整が施され、60°~63°を測る。

使用痕のある剥片 (2) 2の母岩は黒曜石1である。黒曜石1は第4・6ブロックに分布する。薄墨を流したような濃灰色の筋が入る透明度の高い石材であり、夾雑物はほとんど含まない。調整打面から剥片剥離された剥片である。両側縁は微細な刃こぼれが看取される。右下端部には光沢のない古い面が残る。



第23図 第4ブロック出土石器

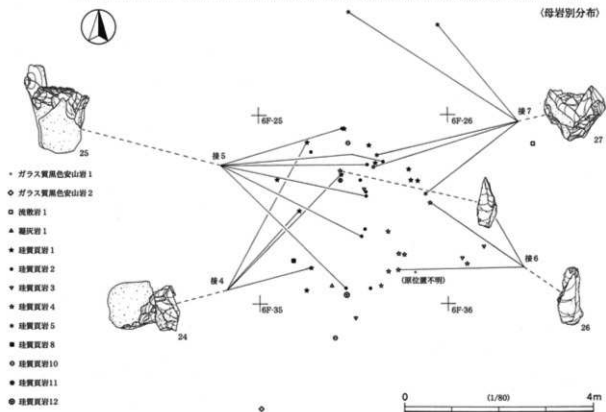
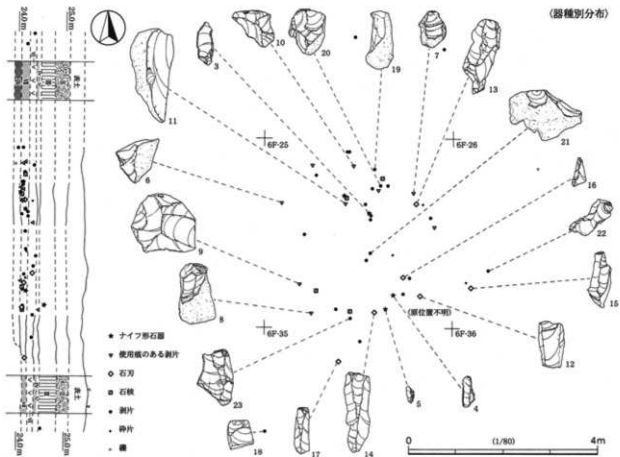
第5表 第4ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	使用痕のある剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石 1	0	1	1	50.00%	0.94	22.54%
黒曜石 5	1	0	1	50.00%	3.23	77.46%
合計	1	1	2	100.00%	4.17	100.00%

2 第5ブロック (第24~29図、第6表、図版4・23・26)

遺物分布状況

遺物は6 F-15・25・26・35に分布する。北半部中央のやや北寄り、標高25mの平坦面に位置し、4.7m×9.0mの楕円形の中に50点の遺物が出土する。出土石器の高低差は0.6mであり、平均出土レベルは24.2mである。III層~IX a層にかけて投影されるが、分布の中心はVI層~VII層である。また第5ブロックの北側はIX a層まで土層が確認できたが、南側のVII層以下は水つきロームのため、不明瞭であった。



第24図 第5ブロック遺物分布

母岩別資料の分布

白っぽい珪質頁岩が目立つ。珪質頁岩は50点中46点を数え、そのうち18点が接合資料である。珪質頁岩1・2は中央部にまとまっているが、珪質頁岩5は北東に5点散在し、一塊の接合資料を成す。珪質頁岩4は東南に多く分布し接合もするが、作出されたナイフ形石器は珪質頁岩1・2が多く集まった中央部から出土している。

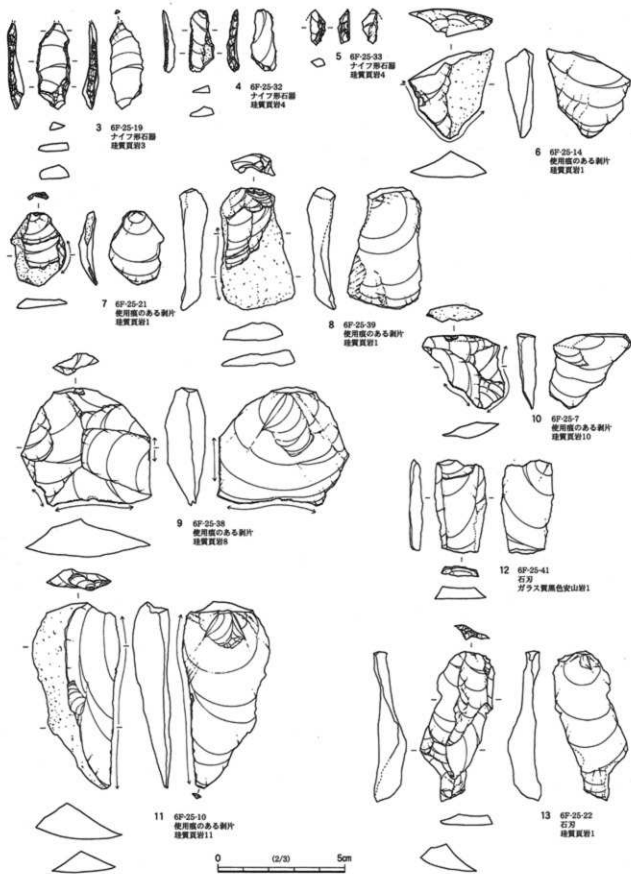
出土石器

ナイフ形石器 (3～5) 3は板状の剥片の両側縁に刃直し加工が施されている。主要剥離側面には加工は及ばない。先端部に欠損あり。艶のない黄灰白色で、最大長は3.5cmに満たない。4は光沢のある良質な珪質頁岩で褐灰白色である。横長剥片を縦位に用いて両側縁を加工したナイフ形石器である。右側縁は78°～93°、左側縁は63°～64°を測る。最大長は2.49cmである。右下部に自然面を残す。5はナイフ形石器の先端部である。

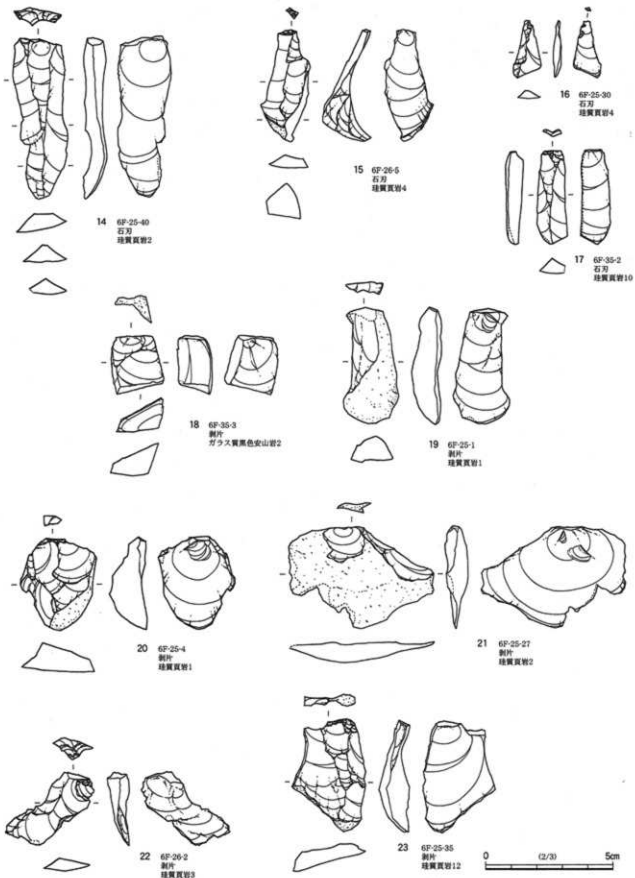
使用痕のある剥片 (6～11) 6の上部は不明である。両側縁に使用痕とみられる微細な剥離痕がめぐる。7は小さく整えられた打面から剥離されている。背面には自然面が残る。右側縁には微細剥離痕が看取される。8は原稜面を剥ぎ打面を作出してから剥離された剥片である。力は内側へ向かい、右核底面を切るウートラパッセである。左側縁に使用の際の刃こぼれと思われる微細剥離痕が看取される。9は残された背面の剥離痕から、定期的に剥片剥離作業が行われたあとで石核作業面を整えるために剥離された剥片であることがわかる。剥片9の縁辺は左右側縁・下縁とも直線的に使用痕が並ぶ。10は灰白色で、鋭い側縁に微細剥離痕が看取される。打面は自然面であり、打点部分はガジリにより失われている。11の自然面は灰色だが、剥離面は青～黄みがかかった明るい灰白色の珪質頁岩11(火砕泥岩)である。背面側の剥離は平板で凹凸がない。作出された打面には背面の剥離面から穿たれた調整痕がみられる。自然面からの加撃はなく、作業のしやすい剥離面が打面となっている。右縁辺は使用によると思われる微細な刃こぼれが直線上に並ぶ。末端わずかに欠損(ガジリの可能性あり)。他に同一母岩なし。

石刃 (12～17) 12は赤褐色のガラス質黒色安山岩である。背稜が2本通り、両側縁ともほぼ平行に走る。下部は欠損のため上部のみ残る。13は打面調整の行われた石刃である。14はざらつき感のある淡褐灰色の珪質頁岩である。15は艶のある褐黄白色の珪質頁岩である。火砕泥岩か。打面調整あり。末端は底面を切っているウートラパッセであり、下部ほど厚い。底面にはわずかに自然面が残る。16は石刃を作出する際の頭部調整後に作出された剥片か。打面なし。17は頭部調整あり。縦：横 = 3 : 1。側縁はほぼ平行で、整った石刃である。右側面は新欠である。

剥片 (18～23) 18は下部の折れたガラス質黒色安山岩である。19は白色の珪質頁岩である。背面上部にガジリがあり、頭部調整の有無は不明である。背面は自然面および二重パティナ(風化した剥離面)である。20は小打面から剥離された厚みのある剥片である。背面に自然面を有し、縁辺に丸みを持つが、石材の脆さに起因する甘やかな摩擦と思われる。21は自然面打面の幅広で折れのある剥片である。背面はほとんどが自然面であることから原稜の形は角張った柱状をしていたものと思われる。新欠部分の色は濃灰色である。22は黄灰白色の脆い珪質頁岩で、一部褐色である。頭部および打面調整がみられる。23は打面と末端に自然面を残す剥片である。背面には主要剥離方向からの加撃により5面の剥離痕あり。打面を整えながら定期的に縦長剥片を剥離していく過程が認められる。末端は内湾しながら緩やかに底面を切る。



第25図 第5ブロック出土石器(1)



第26図 第5ブロック出土石器(2)

接合資料 (24~27)

24は灰白色のなめらかな珪質頁岩でチョークのような粉質の手触りである。石核2点・剥片2点の接合資料である。原石を二分割し、サイコロ状の石核から剥片が作出される。分割された面は摂理面であり、この分割が意図されたものかどうかは不明である。24aと24b+24c+24dに分かれ、24aは分割により現れた節理面を打面にして、頭部調整を加えながら剥片剥離作業が行われている。作出された剥片は検出されなかった。一方、24b+24c+24dを含む塊であるが24bの接合状況および接合面正面からみられるように上下からの剥離作業が行われたのち、横方向から24b、24cが連続して剥離される。24c剥離後に現れた面を打面にして縦方向の剥離作業に移っている。24bの末端部に使用によると思われる微細剥離痕あり。4点は3m以内にまとまって出土している。

25は作業1～作業3に分かれる。

作業1 平坦な面が緩やかな角柱状をなす原礫を横位置に据え、自然面を斜ぐように礫端片25aが剥がされる。同一の打面からは25b+25cが剥離されるが、25b+25cの背面には25a剥離後、少なくとも2面の剥離痕が遺され、25aから25b+25cを剥離する行為の間に、打面を調えながら連続して4片以上の剥片が作出されたものと推測される。

作業2 25dは素材礫の長軸方向から加撃され剥離された礫端片である。作業1、2の時間差は不明。

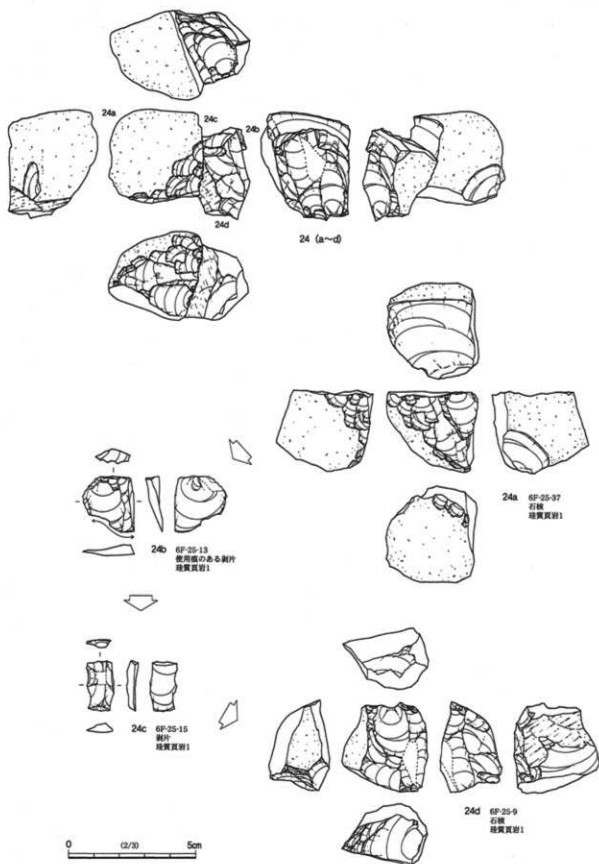
作業3 こののち素材礫は分割され、現れた打面から25eを含む剥片が打面に調整を加えながら9片以上剥離されている。作出された剥片からは二次加工・使用痕は看取されない。

26は剥片・使用痕のある剥片・ナイフ形石器の接合資料であり、同一打面から順に剥離された石刃状剥片が素材となっている。26a、26bを剥離後、26cに至るまでに1片以上が剥離されている。26a・26bの打面付近をみると、1点剥離するごとに打面が調整されている様子が看取される。26cは右側面下部に自然面を残すナイフ形石器であり、右側縁上半部は75°~89°のプランティング加工が施される。

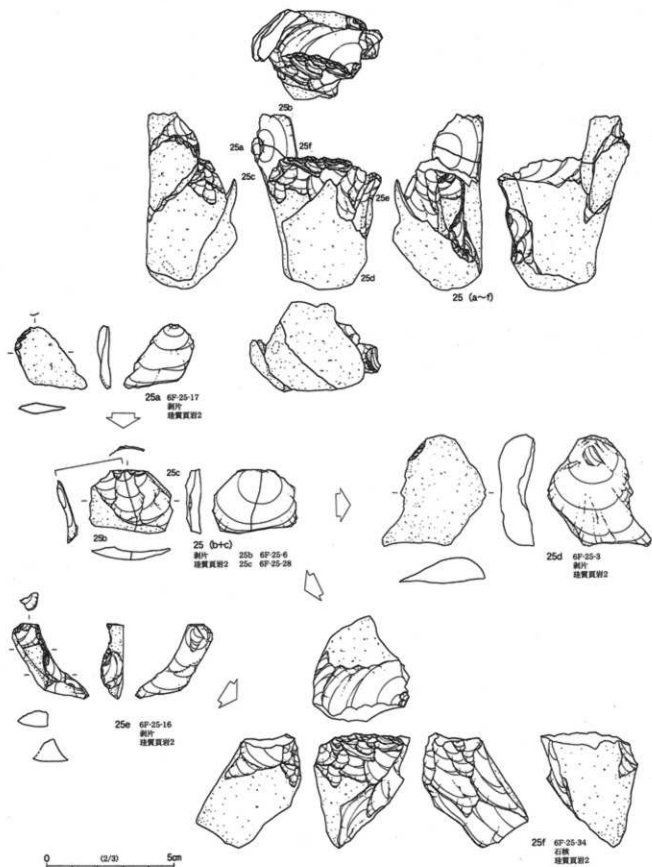
27は剥片4点・石核1点の接合資料である。27bの右縁辺と左中縁部に使用痕が残されている。27a剥離後に現れた面を打面にして27bが剥離され、27b剥離後に現れた面を打面にして27c、27dが剥離される、打面・作業面置換型の剥片剥離工程である。27a・27bの背面には頭部調整痕が、また27eの縁辺には潰れたような小剥離痕がみられることから、頻りに打面調整を行いながら剥離作業が行われた様子がうかがえる。この5点の出土範囲は6F-15・16グリッドの4mに納まる。

第6表 第5ブロック組成表

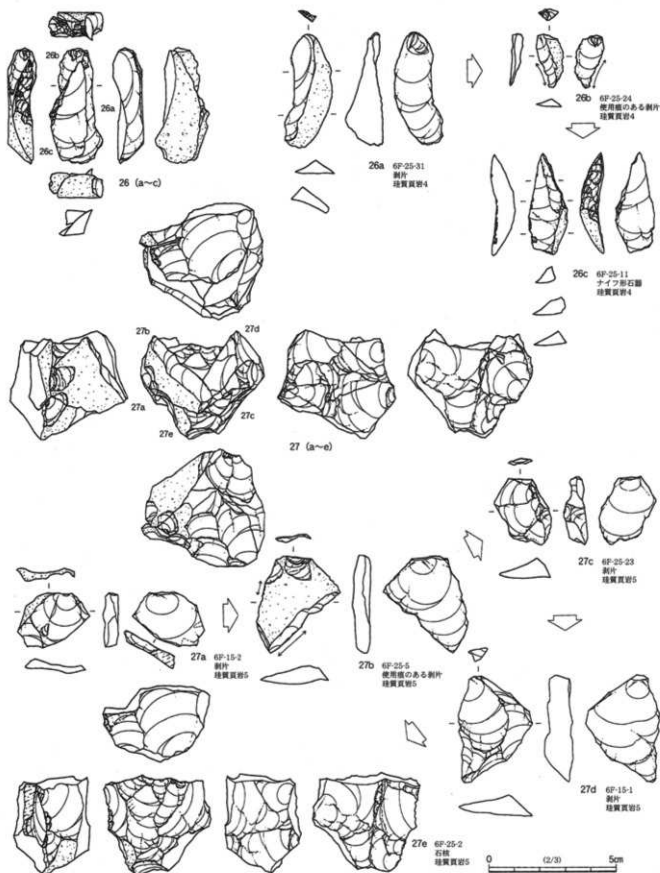
母岩名 / 器種	ナイフ形石器	使用痕のある剥片	石刃	石核	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	1	0	0	0	0	1	2.00%	3.65	0.90%
ガラス質黒色安山岩2	0	0	0	0	1	0	0	1	2.00%	5.80	1.51%
流紋岩1	0	0	0	0	0	0	1	1	2.00%	2.76	0.72%
凝灰岩1	0	0	0	0	1	0	0	1	2.00%	3.26	0.85%
珪質頁岩1	0	4	1	2	4	1	0	12	24.00%	113.67	29.50%
珪質頁岩2	0	0	1	1	9	0	0	11	22.00%	98.61	25.59%
珪質頁岩3	1	0	0	0	2	1	0	4	8.00%	5.48	1.42%
珪質頁岩4	3	1	2	0	2	1	0	9	18.00%	15.39	3.99%
珪質頁岩5	0	1	0	1	3	0	0	5	10.00%	63.50	16.48%
珪質頁岩8	0	1	0	0	0	0	0	1	2.00%	32.79	8.51%
珪質頁岩10	0	1	1	0	0	0	0	2	4.00%	6.65	1.72%
珪質頁岩11	0	1	0	0	0	0	0	1	2.00%	26.46	6.87%
珪質頁岩12	0	0	0	0	1	0	0	1	2.00%	7.26	1.88%
合計	4	9	6	4	23	3	1	50	100.00%	385.28	100.00%



第27図 第5ブロック出土石器(3)



第28図 第5ブロック出土石器(4)



第29図 第5ブロック出土石器(5)

3 第6ブロック (第30~34図、第7表、図版4・23・24・26)

遺物分布状況

遺物は6 F-49・58・59・68・69・78・79、6 G 50に分布する。遺跡の北半部、中央やや北寄りの標高24m~25mのところであり、遺物は6 F-59-68を中心とした8m×12.3mの中に31点の石器が出土している。遺物出土レベルの高低差は0.5m、平均レベルは24.3mである。

母岩別資料の分布

砂岩の1点を除き、黒曜石と珪質頁岩で占められる。黒曜石は北と南に離れて点在し、珪質頁岩3は北側からまとまって出土する。第5ブロックとは違い、接合するものは1個体のみであった。南北の土層断面はほぼ水平に推移し、遺物はIII層~VII層にかけて出土しているが、中心となる層はVI層~VII層である。

出土石器

出土石器31点の器種内訳はナイフ形石器・搔器が1点ずつ、二次加工のある剥片3点・使用痕のある剥片9点・石刃2点・石核3点・剥片および砕片12点である。このうち25点を実測した。

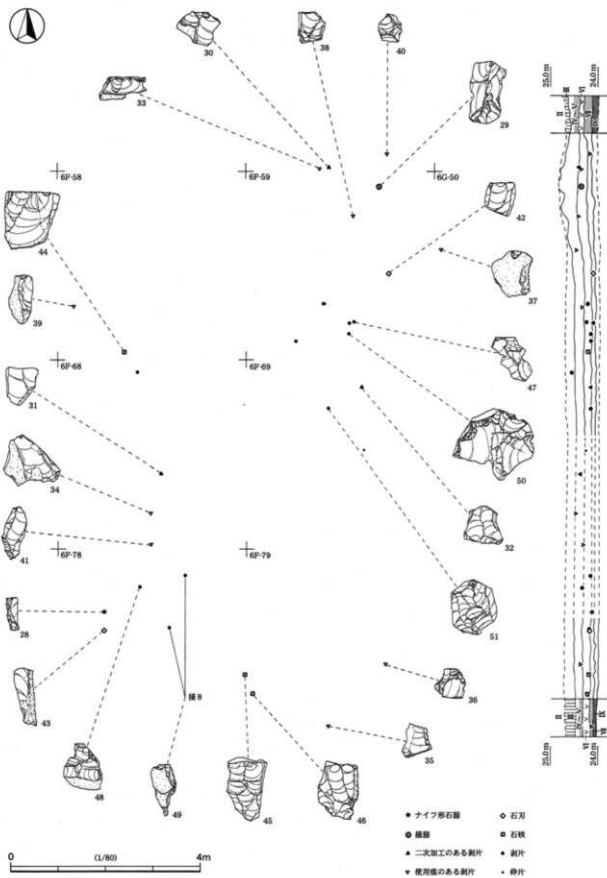
ナイフ形石器 (28) 28は両側縁がほぼ平行に走り、細長い棒状の石刃を素材としている。上(刃)部は折れにより欠損している。

搔器 (29) 29の断面はほぼ正三角形で、厚みのある剥片を素材に用いている。背面には石核時の交互剝離痕が残し、打面を調整しながら石刃状の剥片が剝離されていったものと推察される。搔器としての調整は、素材剥片の打面付近で行われており、77°~95°の刃部加工が背腹両面に及ぶ。両側縁は使用による微細剝離痕が走る。

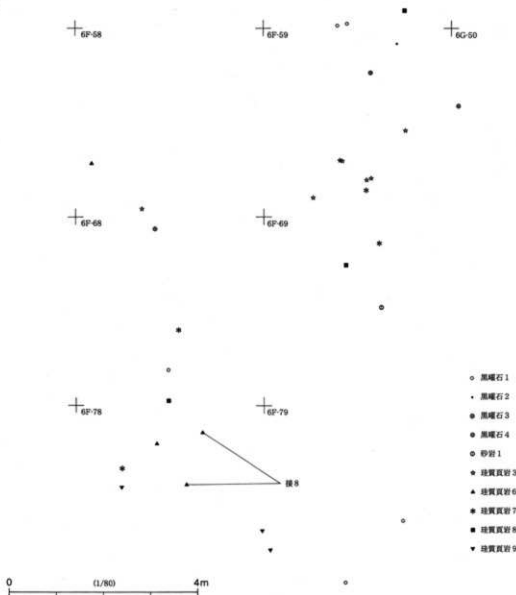
二次加工のある剥片 (30~32) 30の母岩は黒曜石1で、薄墨を流したような部分もあるが半透明で夾雑物が少なく良質である。だが、この末端はその少ない夾雑物のため折れている。剥刀の刃のように薄い右側縁の一部に、使用の際の刃こぼれと思われる微細剝離痕が看取される。31は淡褐色の珪質頁岩で、上部は折れている。腹面の末端部分には背面から穿たれた剝離痕がある。32は31と同一材である。背面右下端部に2面の剝離痕があり、下面は折れた後に背面側から加工されている。

使用痕のある剥片 (33~41) 33~36の母岩は透明で夾雑物のほとんど混じらない黒曜石1である。33は一部調整された平坦な打面から加撃、広い末端縁をもった剥片が作出される。使用痕はこの広縁に万遍なく看取される。34も末端の縁辺が長い形状であるが、直径1cmほどの夾雑物によって力の流れが変わり、角をもった波状の末端縁となっている。右側縁には使用による刃こぼれ痕が並ぶ。35の上部は新欠、下部は折れて中央部分のみ残存する。右側縁の2か所の抉入は、使用の際の欠けと思われる。36も末端縁の広い剥片である。右・下縁辺に微細剝離痕が看取される。37は背面に自然面を多く残した黒曜石3の剥片である。使用痕は右側縁に残る。38は自然面打面、右側縁に使用痕がみられるが下部の折れにより寸断される。39の剝離面は卵の殻のような白、自然面は淡黄灰白。調整された打面から加撃され、縦長で両側縁がほぼ平行に走る剥片が作出される。使用痕は下端部にU字状に走る。40・41は珪質頁岩8を母岩とし、打面を小さく設けた使用痕のある剥片である。40の背面には多方向からの剝離痕で構成されており、大きさは違うが、9と同様に石核の器面を調整するための剥片である。40は末端縁辺に、41は右側縁上部に微細剝離痕が走る。

石刃 (42・43) 42の背面はすべて主要剝離と同一方向の剝離痕であり、打面を調整加工しながら規則的に剥片剝離作業が行われている。下部は折れて失われている。43は打面・断面ともほぼ正三角形である。



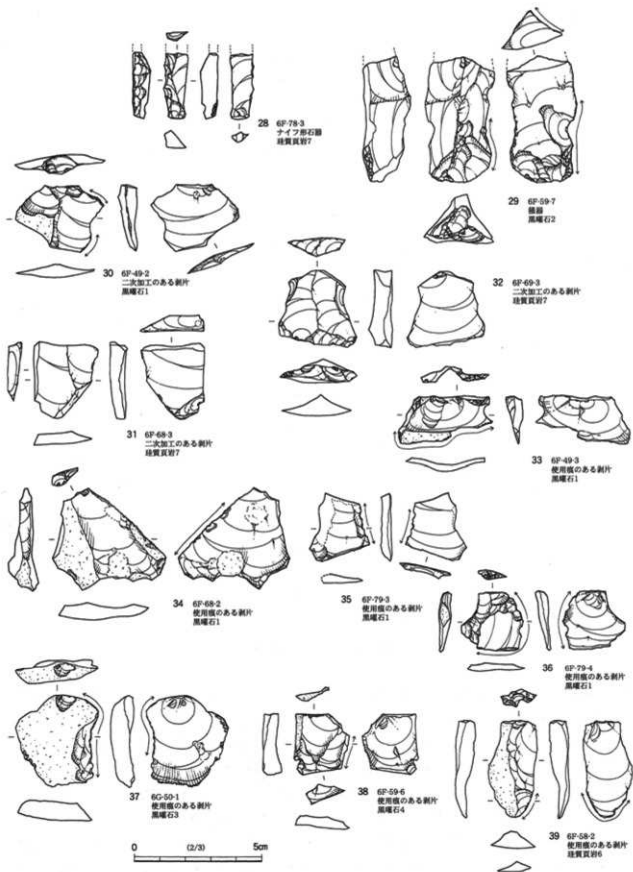
第30図 第6ブロック器種別分布



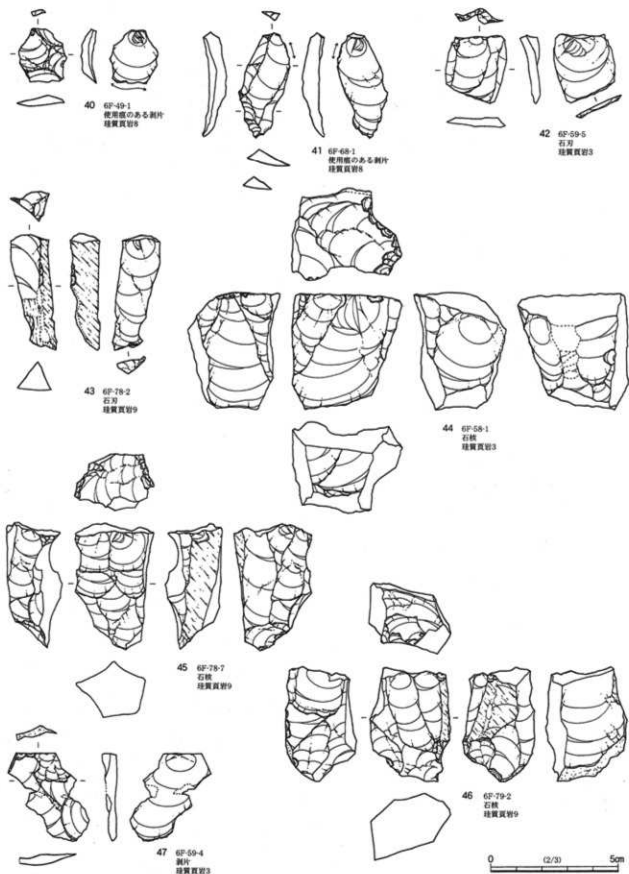
第31図 第6ブロック母岩別分布

石核 (44~46) 44・45は設定した打面を回転させながら、石刃状の剥片を作出した痕の残る石核である。打面である上面の縁辺には、連続した小剥離痕が看取され、打面調整を行いながら剥離作業が進められた様子がうかがえる。自然面が全く残っていないことから、原礫はかなりの大きさを有していたものと考えられる。46も同様の剥離工程であるが、下部には帯状に自然面が残る。

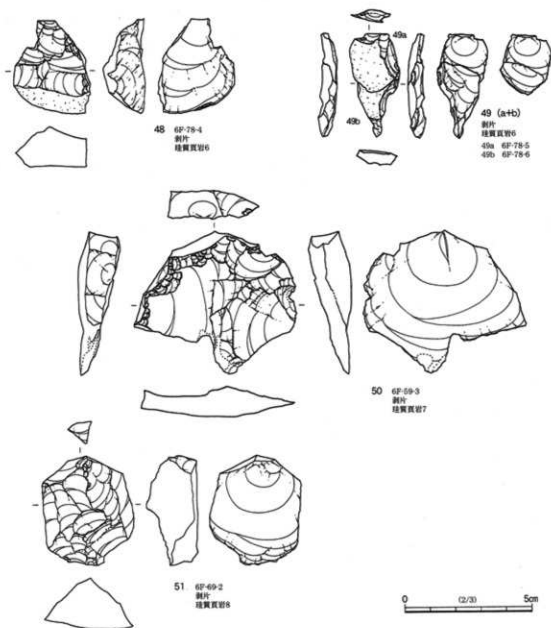
剥片 (47~51) 47は平坦な自然面打面を持ち、薄い板状である。白い雲母片が散る、淡黄白色の脆い石質であり、中央部が調査時に欠損している。48は下部ほどに厚みを増す剥片である。末端は石核底面を切る。49の打面は、平坦な面を残しながら背面に回りこむ剥離によって構成されている。回り込んだ打面には微細な剥離痕が残っているが、これは剥片剥離時の瑕疵である。背面右上部に打面から主要剥離面と同方向の剥離痕がみられ、頭部調整痕の可能性はある。50は打面再生剥片である。上・左側面には、背面か



第32図 第6ブロック出土石器(1)



第33図 第6ブロック出土石器(2)



第34図 第6ブロック出土石器(3)

第7表 第6ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石核	接器	二次加工のある 剥片	使用痕のある 剥片	石刀	石核	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石 1	0	0	1	4	0	0	0	0	5	16.67%	22.52	6.88%
黒曜石 2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3.33%	18.86	5.76%
黒曜石 3	0	0	0	1	0	0	1	0	2	6.67%	14.17	4.33%
黒曜石 4	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3.33%	3.02	0.92%
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3.33%	1.09	0.33%
瑠璃頁岩 3	0	0	0	0	1	1	4	1	7	23.33%	85.81	26.22%
瑠璃頁岩 6	0	0	0	1	0	0	2(3)	0	3(4)	10.00%	23.77	7.26%
瑠璃頁岩 7	1	0	2	0	0	0	1	0	4	13.33%	51.66	15.79%
瑠璃頁岩 8	0	0	0	2	0	0	1	0	3	10.00%	33.12	10.12%
瑠璃頁岩 9	0	0	0	0	1	2	0	0	3	10.00%	73.19	22.37%
合計	1	1	3	9	2	3	9(10)	2	30(31)	100.00%	327.21	100.00%

※ () は出土点数

ら腹面側に抜ける剥離面が4面ある。素材礫の側面を長軸方向から連続して石刃状の剥片を4面以上剥離した後、打面であった面を作業面とし、正面図に図示したように縁辺を調整しながら剥片剥離作業が行われている。51も石核の器面を調整するための剥片である(9・40も同様か)。荒れた器面を整えるように厚みを持たせて剥離している。末端は大きなヒンジフラクチャーを呈する。

石材により剥片の形状が違い、黒曜石では末端縁辺を広く、珪質頁岩では縦に長い石刃状の剥片を作り出そうとした意図がうかがえる。

4 第7ブロック(第35~40図、第8表、図版4・24)

遺物分布状況

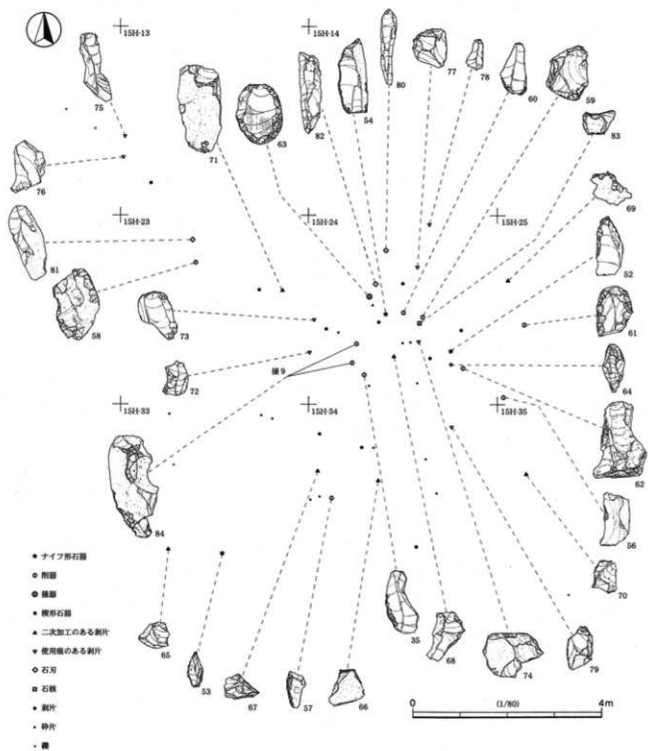
遺物は15H・12・13・23~25・33~35・45に分布する。調査範囲の南半部の北東寄りに位置し、等高線は24m~26mのラインを示す。西高東低の斜面であり、III層(ソフトローム)上面は西から東に10m進むと0.8m低くなる。土層がはっきりと識別できるのはIV層までで、V層以下はいわゆる「水つきローム」となり、粘り気のある褐色土が現れる。遺物はIV層と粘質土の区分線から10cm~20cmほど下部より出土し、区分線とはほぼ水平に推移する。出土した器種は多様であり、ナイフ形石器3点・削器10点(削器2片の接合資料1点を含む)・搔器および稜形石器は1点ずつ、二次加工のある剥片7点・使用痕のある剥片8点・石刃3点・石核1点・剥片および碎片24点・礫5点であり、出土石器63点のうち、34点を実測している。

母岩別資料の分布

第7ブロックの出土石材はほとんどが黒曜石であり、63点中55点を数える。黒曜石6は薄墨を流したような部分もあるが、無色透明であり、夾雑物をほとんど含まない良質な石材である。第7ブロック最多の17点が15H・24を中心にまとまって出土する。黒曜石7は第7ブロックの北西から東南に帯状に7点が分布し、碎片1点を除く6点の剥片素材が加工・使用されている。夾雑物が少なく、薄茶がかった良質な黒曜石である。黒曜石8は透明度が高く、夾雑物の少ない石材で、15点を数える。15H・24付近に集中し、削器2点・二次加工のある剥片2点・使用痕のある剥片1点が作出され、剥片および碎片10点がまとまって出土している。黒曜石12は黒褐色で不透明であり、定型的な石器は作出されていない。黒曜石以外の石材はすべて1点のみの出土で、ガラス質黒色安山岩3・珪質頁岩13・珪質頁岩14を除くトトロ石1・安山岩1・安山岩2・流紋岩2・チャート1は礫である。

出土石器

ナイフ形石器(52~54) 52は薄墨を流したような部分はあるが、無色透明で、夾雑物を全く含まない、幅広・板状の黒曜石である。基部の整形については折れて欠損しているため定かでないが、調整されていたようには見受けられない。左側縁部は成形後に刃潰し加工によって直線的に仕上げられている。刃部である右側縁は52°の角度を測り、刃こぼれが顕著にみられる。左右側縁が交わる先端部は尖らずに、左側縁から120°の角度で右側縁に傾斜する。細かな刃潰し様の調整によって丁寧に仕上げられている。これは欠けた先端を再生するための加工かと思われる。53は不透明で、赤茶色の筋があり、夾雑物の少ない黒曜石10を母岩としている。左側縁と右下縁部にプランティングを施した二側縁加工のナイフ形石器である。右側縁上部の刃部には使用痕と思われる微細剥離痕がみられる。先端部はわずかに欠損する。素材剥片の打面は基部加工されているが遺存する。最大長が3cmに満たない石刃素材である。54は石刃を素材にした側縁加工のナイフ形石器である。剥離面は褐色灰色、剥離面は淡褐色灰色。先端の断面は、ほぼ正三角形に成形



第35図 第7ブロック器種別分布



15H-13

15H-14

15H-15

15H-23

15H-24

15H-25

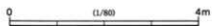
15H-33

15H-34

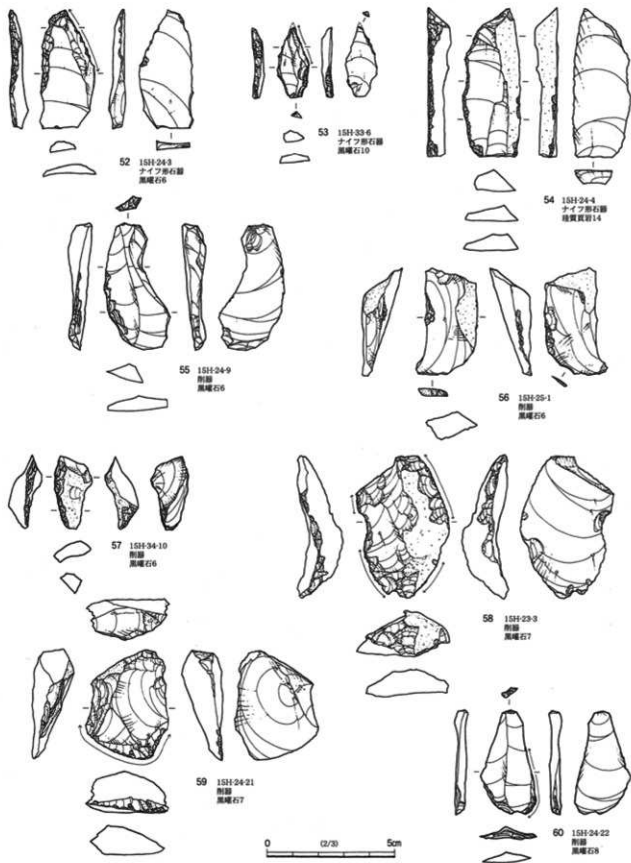
15H-35

15H-45

- ガラス質黒色安山岩 3
- トロトロ石 1
- 安山岩 1
- 安山岩 2
- ▲ 黒曜石 6
- ▼ 黒曜石 7
- 黒曜石 8
- 黒曜石 9
- ▼ 黒曜石 10
- 黒曜石 11
- 黒曜石 12
- 珩質頁岩 13
- 珩質頁岩 14
- チャート 1



第36図 第7ブロック母岩別分布



第37図 第7ブロック出土石器(1)

される。

削器 (55~62) 55は調整打面から剥離された石刃が素材である。左側縁下半部に連続した剥離痕が並ぶ。またその中には、使用によるものと思われる微細剥離痕も看取される。剥離作業時、台座からはね返りにより下方からの剥離が入る。56は不定形な剥片の緩やかにカーブした縁辺を加工している。57の左側縁は素材剥片の剥離面から自然面側に83~103°で自然面を削ぐような調整が施される。右側縁下部の調整も左側縁と同じく、素材剥片の主要剥離面を打面にした急角度の剥離であるが、裏面左方からの打撃によって切られている。石器の器面・形状を整えるための調整剥片の可能性もある。58は背面に原礫面を残した厚みのある剥片を素材に用いる。右上縁部は43°~53°、左下半部は53°~56°と加工の仕方に差異がみられるが、素材の厚みによるものと思われる。また、加工後には使用痕が看取される。59の素材剥片は打角が132°と鈍角であり、正面左部にみられる剥離痕は剥片剥離時の頭部調整痕である。下縁辺のエッジは、一部54°~63°に加工され直線状の刃部を作っている。60は薄く剥離された剥片の末端部に47°~66°の調整が施される。右側縁下半部は使用による刃こぼれ痕がみられる。61の素材剥片の打角は133°で、59同様に鈍角である。左側縁は器面を削ぐような44°~62°の平坦剥離、右側縁はそれよりも急角度の66°~70°で調整されている。下部は折れて欠損する。なお、60・61は淡褐色のもや状の斑が擦ったように散る、透明で良質な黒曜石8を母岩とする。62は漆黒の石基に茶褐色の斑晶が多数入った黒曜石9を用いた長方形の剥片が素材であり、左側縁に73°~76°の加工痕が並ぶ。

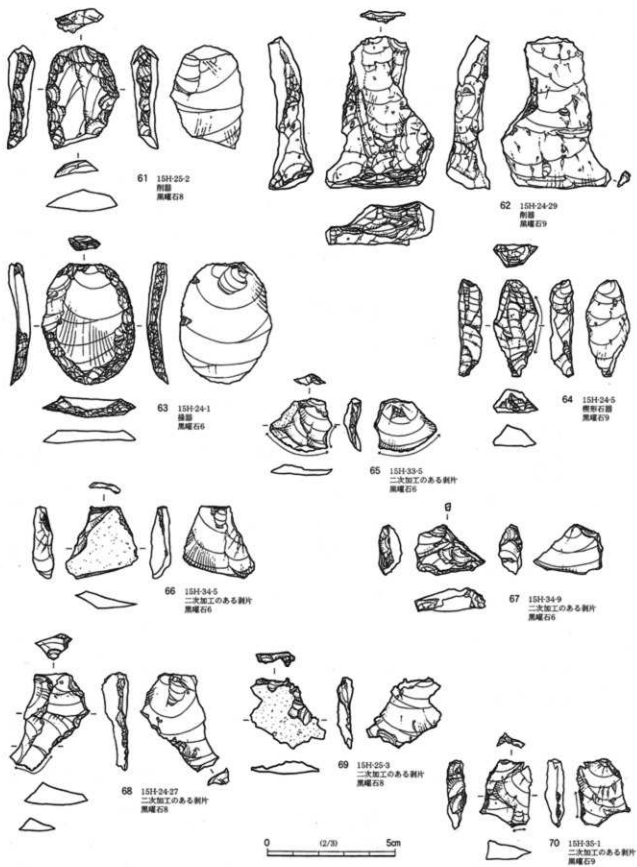
搔器 (63) 63は板状の素材剥片の外周を加工した整美な楕円形の搔器である。ほぼ全周に調整痕が廻る。素材時の打面調整痕が打面に残されている。

楔形石器 (64) 両極からの加撃により、背面に2方向の剥離痕を持つ楔形石器である。左側面下部からの剥離は石器設置面からのね返りによるものか。

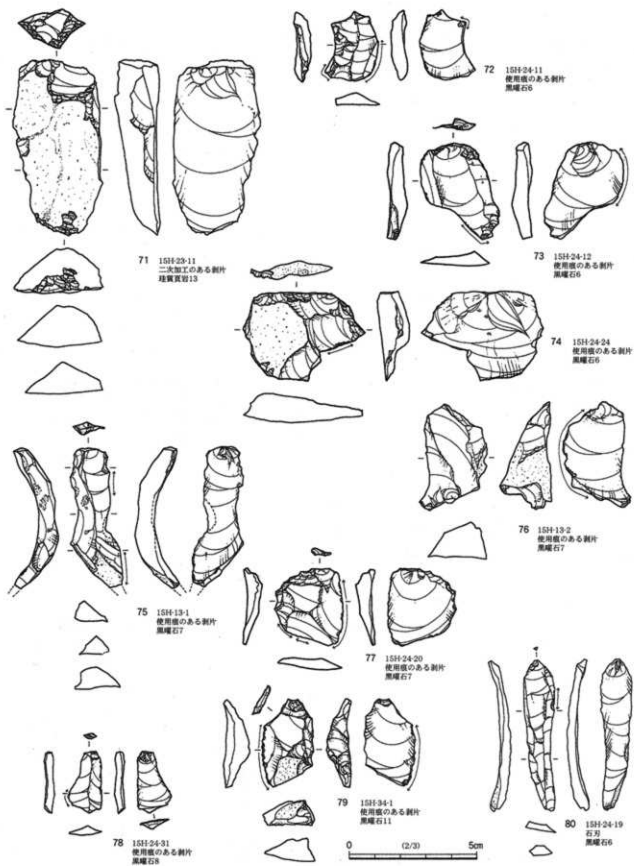
二次加工のある剥片 (65~71) 65~67は、夾雑物を含まない透明度の高い黒曜石6を母岩とし、貝殻状剥片の側縁に二次加工が施されている。65の幅広い末端部および右側縁下半部には微細剥離痕が看取される。68・69は、鉄錆色のもやと薄巣を流したような斑が入る半透明な黒曜石8が母岩である。不定形剥片に加工が施され、68の下端部には欠損後に使用痕が廻る。70は左側縁に86°~89°の二次加工が施された、漆黒の黒曜石9である。右側縁部に微細剥離痕がある。71は珩質頁岩を用いた二次加工のある剥片である。厚みのある下端部には敲打による潰れがみられ、剥片剥離時、硬い台石などに設置して加撃したことで生じた痕と思われる。打面調整痕あり。

使用痕のある剥片 (72~79) 72~74は黒曜石6を母岩とする。72・73は折れた後も使用される。75~77は透明度の高い黒曜石7の茶色がかかった部分が使われている。各々の背面には多方向の剥離痕を持つ。77の使用痕は右側縁に顕著だが、下縁辺にも散在する。角部には微細剥離痕の連続により、器形に丸みが加えられている。78は頭部・打面調整のある剥片の左側縁に使用痕が看取される。使用痕は下端の折れにより寸断される。79は半透明の黒曜石11である。左側縁には刃こぼれ状の使用痕が間断なく廻っているが上端・下端とも折れによって寸断される。

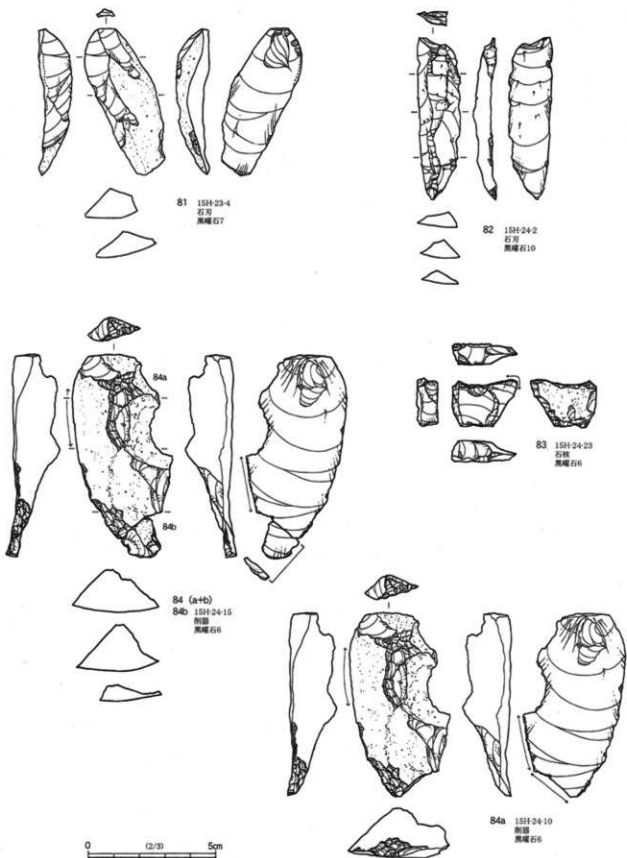
石刃 (80~82) 80はごく小さな打面を持つ、縦：横が5：1の細長い石刃である。主要剥離面下部に自然面が残る、右側縁上部には刃こぼれ状の微細剥離痕が看取される。81も小打面を有する石刃である。背面の過半は自然面である。左上縁辺のふくらみはガジリによって欠けているが、80と同様に張り出した部分に使用痕のあった可能性もある。82の打面は折れて遺存しない。背面上部と右側縁の下半部にわずかに



第38図 第7ブロック出土石器(2)



第39図 第7ブロック出土石器(3)



第40図 第7ブロック出土石器(4)

自然面が残る。下部先端は背面から腹面へ向かう小剥離により、尖端として整形される。

石核 (83) 上面を打面にして小剥片を作出したもののか。左側面に剥離痕が残る。右上部先端には肉眼でかろうじて観察できるほどの使用痕が残る。

接合資料 (84) 調整された打面から、自然面の角を面取りするかのようには剥離された厚みのある剥片が素材である。背面上部には数度の敲打による砕け痕が残されているが、剥片剥離にまでは至っていない。左下縁辺の剥離痕は84bが折れた後も施され、再加工される。

第8表 第7ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ痕有無	削面	縁部	複数石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石片	石核	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.59%	1.32	0.30%
トトロ石 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.59%	9.64	2.18%
安山岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.59%	20.21	4.57%
安山岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.59%	1.15	0.26%
炭酸鈣 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.59%	82.76	18.72%
黒曜石 6	1	5	1	0	3	3	1	1	1	1	0	17	26.98%	112.09	25.35%
黒曜石 7	0	2	0	0	0	3	1	0	0	1	0	7	11.11%	74.15	16.77%
黒曜石 8	0	2	0	0	2	1	0	0	5	5	0	15	23.81%	25.19	5.70%
黒曜石 9	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	4	6.30%	29.19	6.66%
黒曜石 10	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	3	4.76%	8.32	1.88%
黒曜石 11	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.59%	5.04	1.14%
黒曜石 12	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	8	12.70%	5.04	1.14%
珪質頁岩 13	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.59%	39.42	8.92%
珪質頁岩 14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.59%	10.65	2.41%
チャート 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.59%	7.92	1.79%
合 計	3	10	1	1	7	8	3	1	10	14	5	63	100.00%	442.09	100.00%

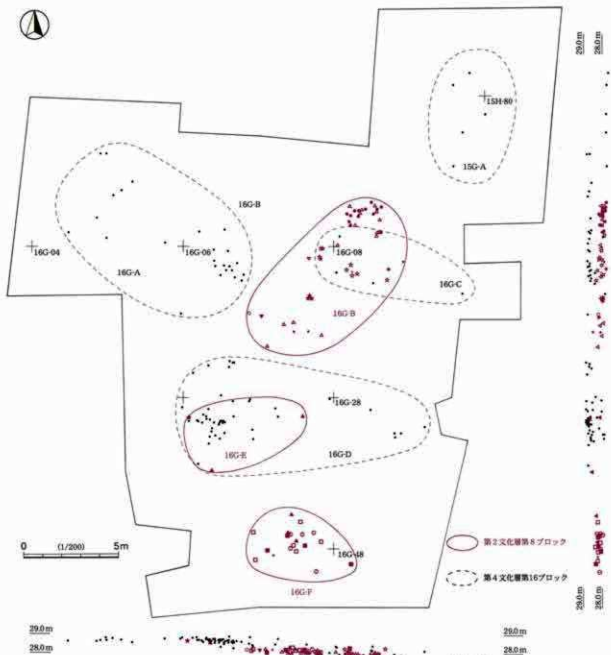
5 第8ブロック (第41~48図、第9表、図版5・24・25)

遺物分布状況

遺物は15G-98、16G-06~08・17・26・27・36・37・46~48に分布する。南半部の北西寄りに位置し、標高29m前後、北西から東に向かい傾斜する。遺物は71点が南北に20m、東西に10mの範囲内にくの字状に分布する。第2文化層第8ブロックは第4文化層第16ブロックの下層より出土する。平面図上では重なり合っているが、出土レベルに明らかな差異がみられ、また出土器種・石材も明確に区分されたため、第41図に色分けして図示した。また掲載の都合上、第8ブロックは空白地帯で3地点に分け、それぞれ北側から便宜的に16G-B、16G-E、16G-Fと区分した。遺物を垂直分布図に当てはめてみたところ、III層~IX a層に包含されるが、VI層下部~VII層に濃い分布をみる事ができる。

母岩別資料の分布

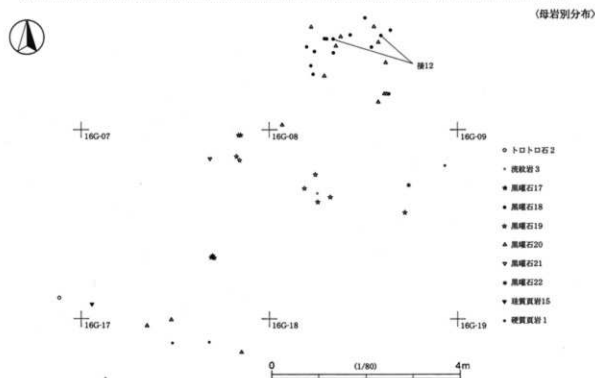
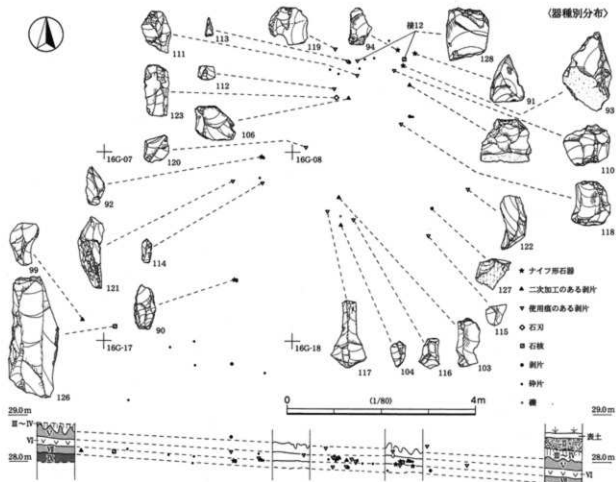
第8ブロックは71点中64点が黒曜石である。出土した黒曜石は第7ブロックと同様に夾雑物が少なく、透明度の高い良質な素材が多く、10母岩に分けてあるが、黒曜石17~21の5母岩は同材である可能性が高い。第8ブロックの北側の16G-Bをみていくと、黒曜石18の14点は2mの中に取まり、黒曜石19は中心部に9点がまとまって出土する。同一母岩はおおむねまとまって出土しているが、黒曜石17の4点は3点が重なり、もう1点は9m離れて16G-Eより出土する。また黒曜石20は北と南の両極に分布する。



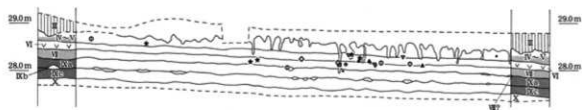
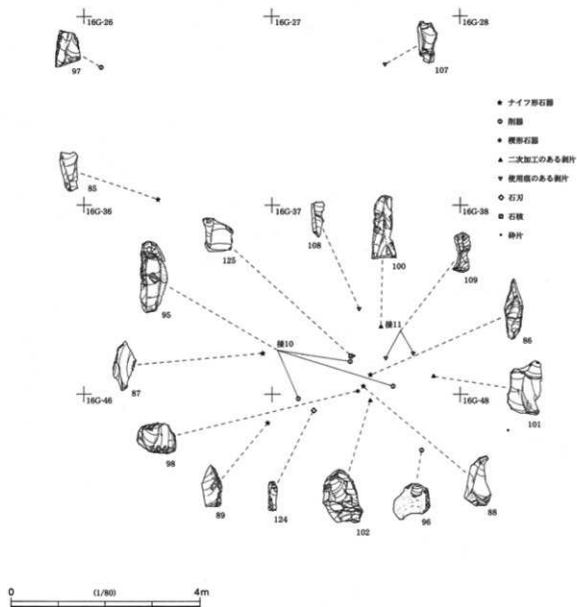
第41図 第8ブロック検出状況

出土石器

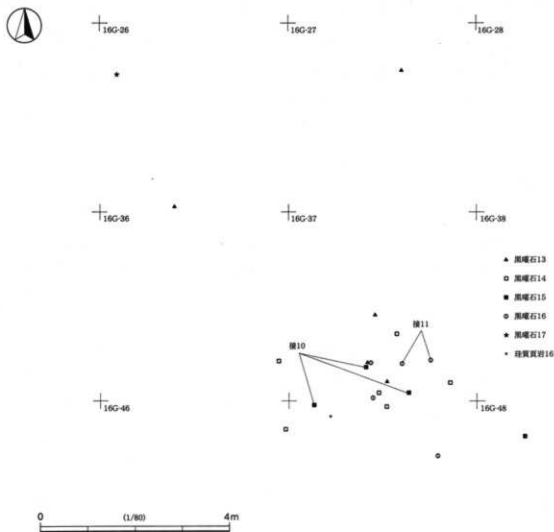
16G-E、16G-Fにおいて、北半部は礫に3点、南半部の16G-Fは19点が比較的密に分布する。珪質頁岩16を除くと、石材はすべて黒曜石で占められる。接合資料が2個体あるが、いずれも折れによる分割個体であり、剝離工程・技術に触れるものではない。このように16G-Bと16G-E、16G-Eと16G-Fには同一母岩が分布するが、16G-Bと16G-Fの間には共通する母岩は検出されない。良質な黒曜石の石刃を素材にした石材の出土例が多い。以下器種ごとにみていく。



第42図 第8ブロック遺物分布 (16G-B)

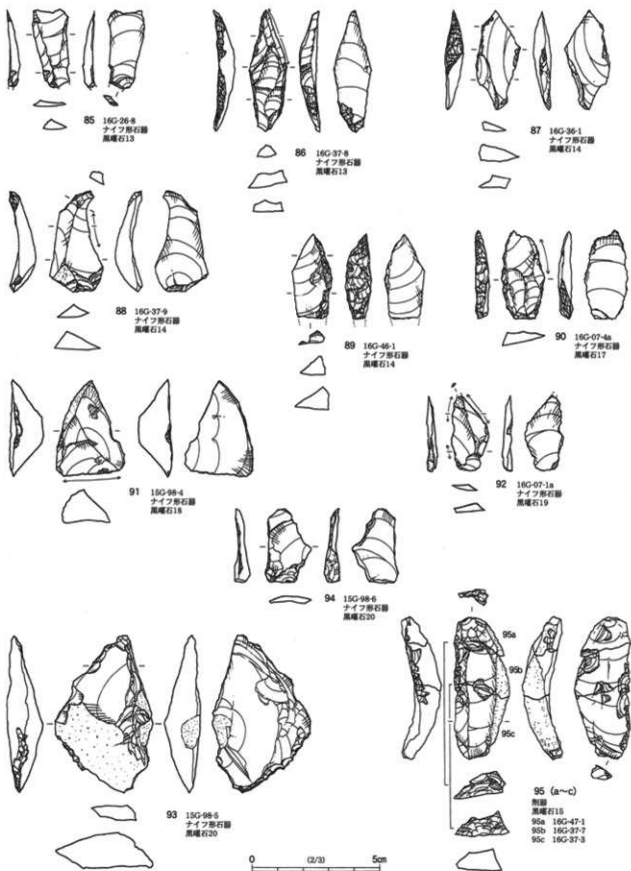


第43図 第8ブロック器種別分布 (16G-E・F)

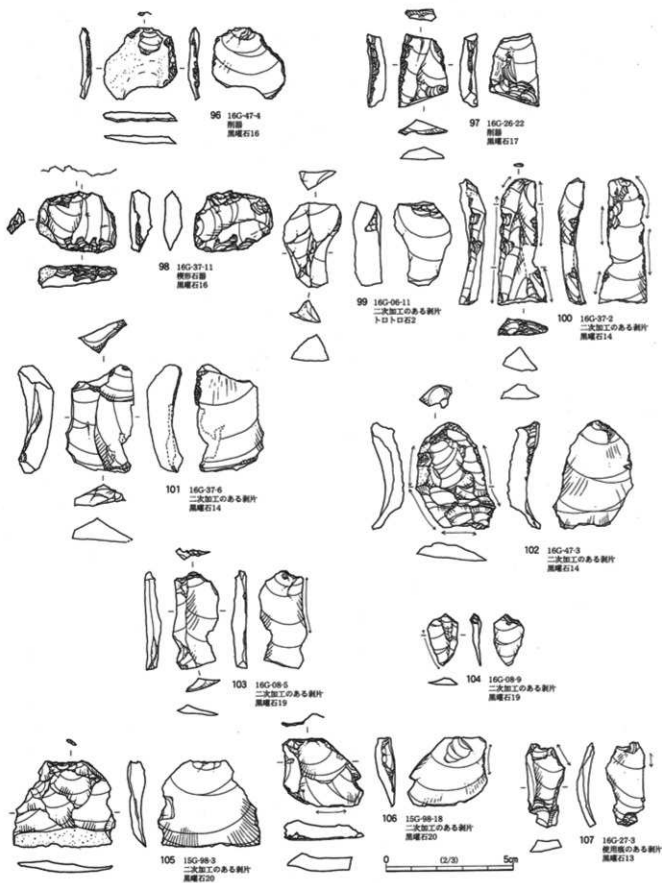


第44図 第8ブロック母岩別分布 (16G-E・F)

ナイフ形石器 (85~94) 85・86は良質な黒曜石13の石刃を素材に用い、打面部分を基部に、側縁部を刃部としている。86の左側縁には上半部および下半部に連続した刃潰し加工が施されているが、張り出した中央部は無加工のままである。右側縁下部のブランティングはほぼ90°に加工される。右上縁部の刃部は86°と直角に近い角度であるが、使用による刃こぼれとおぼしき微細剝離痕が観察される。87は良質な黒曜石の横長剝片を素材にしている。左上部は丁寧なブランティング加工により90°の面的な調整がなされており、刃部は50°の直線状である。基部は素材の器形を生かし無加工のままである。88は打面部を基部とし、縁辺に使用痕を持つ。素材剝片の末端は背面側に回り込み、正面左上部には腹面から加工が施される。89の加工は右側縁のみに限られる。基部は背腹両面から急角度に加工される。上部は主要剝離面側から背面へ抜ける加工によって右側面が形成されている。刃部角は56°、側縁部の調整角は89°~103°である。90は左側縁および右下側縁にブランティングを施す。右上縁辺には刃こぼれ状の使用痕が看取される。91は厚みのある横長剝片を素材に用いる。右側縁中央部分には74°~76°の加工痕があり、小さく緩やかに抉れる。下



第45図 第8ブロック出土石器(1)



第46図 第8ブロック出土石器(2)

縁辺には全体に刃こぼれ状の使用痕がみられる。92は良質な黒曜石の剥片素材である。打面を基部に据え、両側縁のほぼ全周に使用痕が廻る。93は黒曜石の横長剥片を素材とし、幅の広い末端縁辺を刃部と基部に据え分けている。連続した基部加工の施された縁辺下部は、敲打による加工の後、擦って丸みを持たせたような柔らかなラインとなっている。その上方は両面から交互に調整される。打面部分には直径1.3cmの小礫が混在し、背面下半部は自然面である。94は素材剥片の打面部分を基部としたナイフ形石器である。基部加工は特にされていない。左下縁辺には細かな刃潰し状の二次加工痕が並ぶが中ほどのガジリによって寸断される。

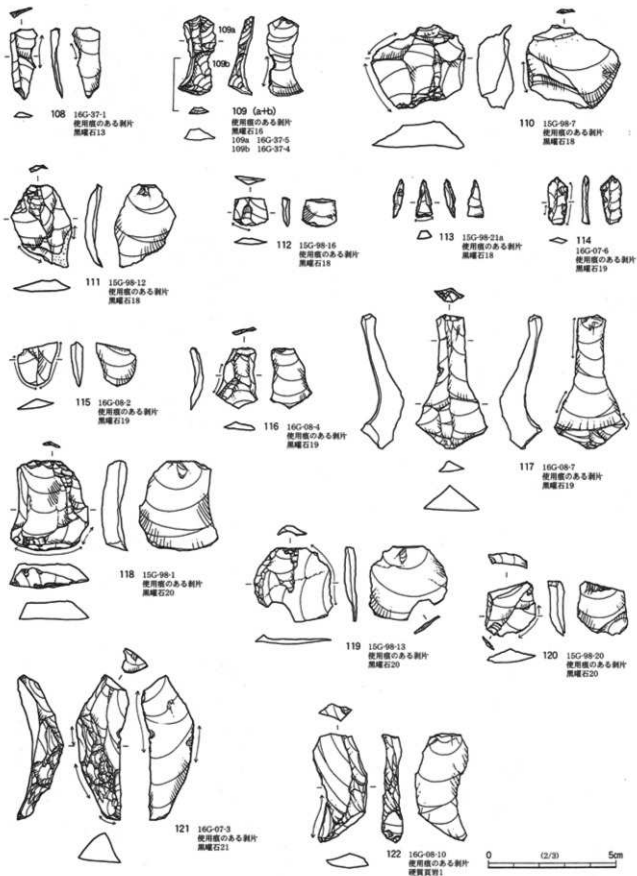
削器 (95～97) 95は製作途中で3片に折れたものと思われる。右側面は自然面であるが背面に残る剝離痕は主要剝離と同一方向であり、調整された打面から剝離された石刃を素材に用いている。左側縁全体が加工され、上部は腹から背面へ、下部は背から腹面へ向けての連続した二次加工痕が42°～52°で直線的に並ぶ。折れた後の加工痕は看取されない。96は小打面で幅広薄手の黒曜石の剥片素材である。55°～60°の調整痕がほぼ全周を廻るが、下縁辺のガジリにより寸断される。97は石刃の両側縁に56°～62°のスクレーピングエッジが作出されている。上・下面とも折れて、中央部のみ残存する。

楔形石器 (98) 素材剥片を横位に据え、左右縁辺を上下から加工している。加工は両側縁に留まらず、素材剥片の末端部である右側縁にも及ぶ。右側縁上部の微細剝離痕は使用時の刃こぼれか。

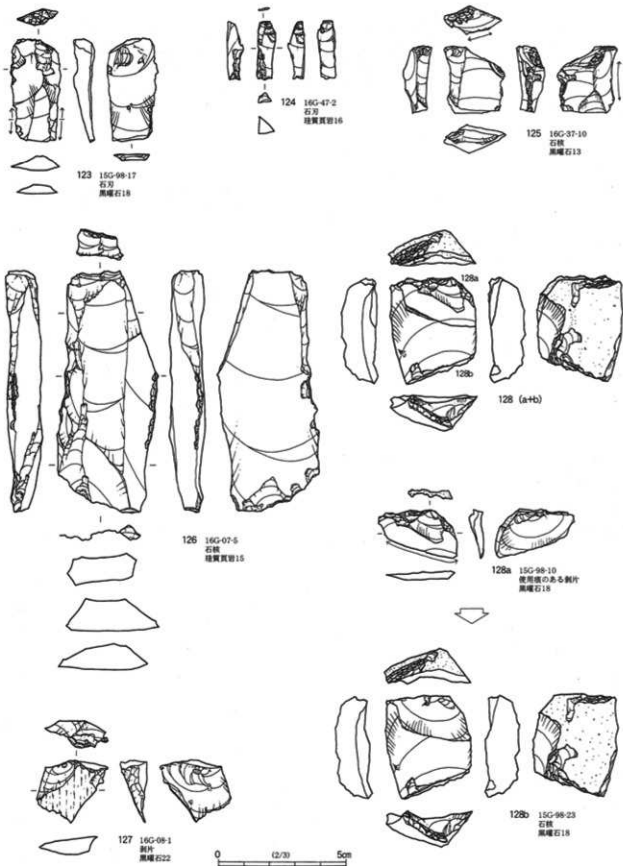
二次加工のある剥片 (99～106) 99は風化の進んだトロロ石であるが、右側縁上部に80°～82°の小剝離痕が看取される。100は小打面を持ち、両側縁がほぼ平行に走る、整美な形状の石刃である。下部は折れた後、二次加工される。両側縁辺は刃部をすり潰すような微細剝離が廻っている。101は上下が折れて中央部のみ遺存する。二次加工痕は腹面側の左上縁に直線的に並ぶ。102は右側縁に60°～63°の二次加工痕が並び、その後縁辺の大部分には使用による微細剝離痕が廻る。103は良質な黒曜石の石刃を加工したものである。左側縁下部に二次加工痕があるが、下部の折れにより切られる。104の打面は二次加工により除去されている。左側縁には使用痕が看取される。105は幅広の厚みのない剥片である。打面付近は加工されて線状に整えられてはいるが、打面がわずかに残る。幅広の裾部には自然面が帯状に残る。106も105同様、末端縁の広い剥片である。左下から末端縁辺にかけて角をつぶすような二次加工が施される。使用痕がある。

使用痕のある剥片 (107～122) 107～110・114・116・120は打面がないか、点状打面である。それぞれの側縁には使用痕が看取される。111は頭部調整された打面から加撃され、剝離された厚みのない剥片である。末端部に自然面が残り、左右縁辺に微細剝離痕が看取される。112・115は小剥片の下半部である。末端部分に使用痕が残る。113の末端縁辺には微細剝離痕が並んでいるが左右の切断面に切られる。117は打面調整により小さく整えられた点状打面から剝離されている。末端に向かうほどに厚み・幅とも大きくなるウートラパッセである。両側縁には断続的に微細剝離痕が看取される。118・119は頭部調整あり。小さく設置された打面からは幅広の剥片が作出されている。118の末端は緩やかに内湾するが、70°の角度で底面を切る。下縁辺から右下縁辺にかけて使用痕が廻る。119は剃刀の刃のように薄い縁辺を持つ。右縁辺に連続した微細剝離あり。下縁辺のノッチ状の折れは意図的な所産ではないと思われる。121の打面は折れて欠損する。背縁には右方向からの小剝離による急角度の調整痕が入っているが主要剝離面によって切られていることから、石核の器面を整える目的で剝離された剥片である可能性が高い。末端部は微細な調整痕が端部を整形する。122は良質な濃灰褐色の硬質頁岩である。左側縁下半部に使用痕がある。

石刃 (123・124) 123・124ともに調整打面から規則的に剝離され、下部は折れている。123の側縁には使



第47図 第8ブロック出土石器(3)



第48図 第8ブロック出土石器(4)

用痕がみられる。

石核 (125・126) 125は厚みのある石刃の折れ面を打面とし、丁寧に打面縁辺を調整した後に加撃される。正面左部の剥離後、左側縁辺は使用され、連続した刃こぼれ痕が看取される。126もまた石刃が素材であり、黒褐色の部分と灰白色の部分がくっきりと色を分ける珪質頁岩15はこの1点のみの出土である。上面は、素材時の主要剥離面を打面にした2面の剥離痕があり、その作業面を打面に置き換えて左・右側面を末端に向かって加撃している。これにより素材石刃時の所産である二次加工痕は寸断される。

剥片 (127) 127は調整された打面から加撃されている。

接合資料 (128) 128は石核と剥片の接合資料である。素材剥片の末端形状は内向して石核底面を切り取り、厚みのある端部を作出する。それを180°回転し、底面を打面に置き換えて、自然面から主要剥離面側へ向かう調整を行ったのち、128aが剥離される。128aの幅広い末端縁には使用による刃こぼれが看取された。

第9表 第8ブロック組成表

発掘名 / 層	ナリ物数	剥離	塊形石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	石核	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
トロトロ石 2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.47%	5.34	1.44%
炭灰岩 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.47%	99.55	26.80%
黒曜石 13	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0	5	7.35%	12.03	3.24%
黒曜石 14	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	6	8.82%	35.05	9.43%
黒曜石 15	0	1(3)	0	0	0	0	0	0	1	0	2(4)	2.94%	13.02	3.50%
黒曜石 16	0	1	1	0	1(2)	0	0	0	1	0	4(3)	5.88%	9.77	2.63%
黒曜石 17	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	4	5.88%	6.11	1.64%
黒曜石 18	1	0	0	0	5	1	1	1	5	0	14	20.59%	45.88	12.35%
黒曜石 19	1	0	0	2	4	0	0	0	2	0	9	13.24%	14.77	3.98%
黒曜石 20	2	0	0	2	3	0	0	1	7	0	15	22.06%	52.23	14.06%
黒曜石 21	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.47%	9.32	2.51%
黒曜石 22	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.47%	3.89	1.05%
珪質頁岩 15	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.47%	55.25	14.87%
珪質頁岩 16	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.47%	0.75	0.20%
珪質頁岩 1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	3	4.41%	8.53	2.30%
合 計	19	3(3)	1	9	17(18)	2	3	4	19	1	68(71)	100.00%	371.50	100.00%

※ ()は出土点数

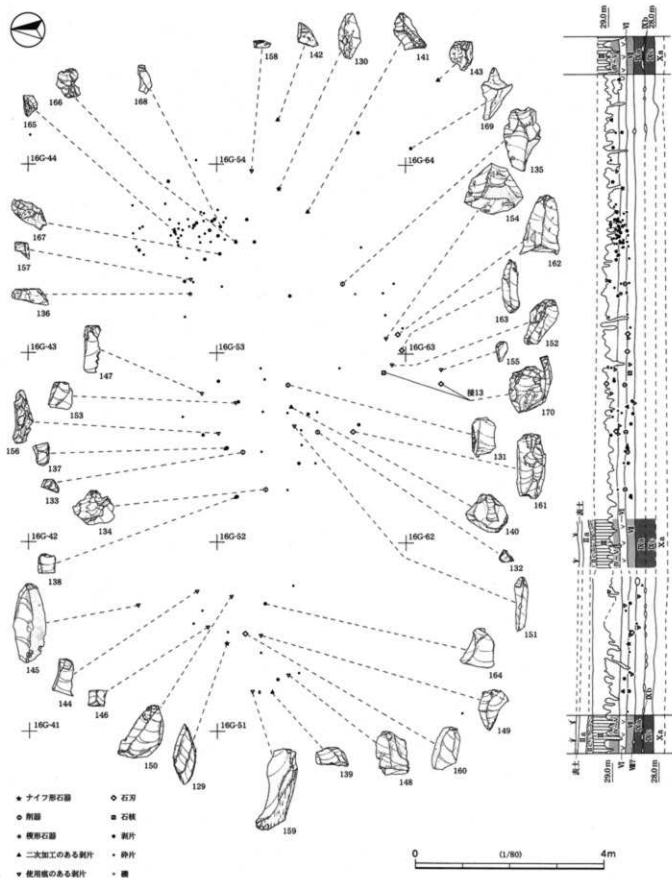
6 第9ブロック (第49～54図、第10表、図版5・25)

遺物分布状況

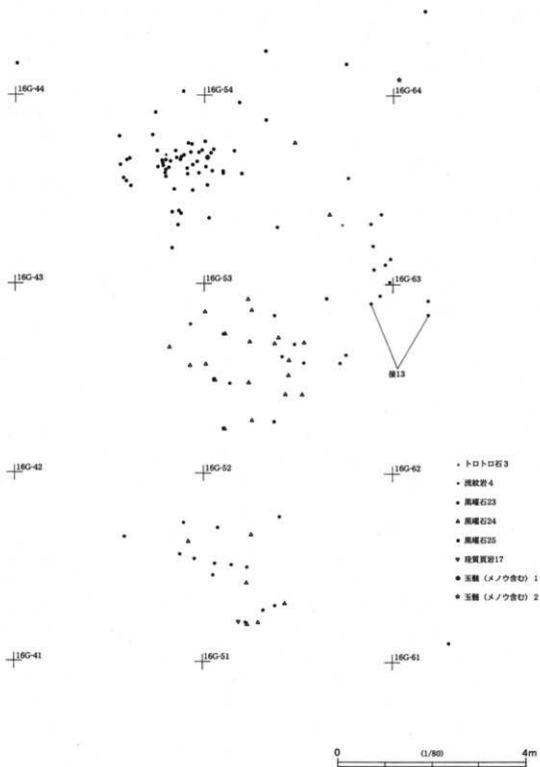
遺物は16G-41～44・51～54・61・62・64に分布する。調査範囲南半部の西側、16G-51・52・53を中心とした南北に9m、東西に4mの平地の上に134点が分布する。標高は29m～30mを測る。遺物を東西の土層断面に投影したところ、IV層～IX層に分布するが、出土レベルの中心はVI層～VII層にあるものと思われる。

母岩別資料の分布

遺物のほとんどは黒曜石であり、134点中129点を数える。黒曜石23は37点が中心から西側に分布する。南寄りの中心部からは石核と石刃の接合資料が出土し、規則的に石刃を削いで素材に使用した様子がうかがえる。黒曜石24は16G-52を中心に南北に4m、東西に10mの範囲内に29点が分布する。黒曜石23同様、石刃が主体である。黒曜石25は63点が出土する。16G-43の東南に半径2mの円形に集中しているが、中心



第49図 第9ブロック器種別分布



第50図 第9ブロック母岩別分布

地点から離れるほど分布が疎になる。最も遠方に位置するものとしては、分布の中心から西南方向に12m離れたところに破片が出土している。透明感のない漆黒の石基と、淡褐色で直径1mm～2mmの珪晶を3～4/㎡含み、ナイフ形石器1点・楔形石器1点・二次加工のある剥片2点・使用痕のある剥片2点・剥片3点の他は小剥片と破片が54点と圧倒的に小片が多い。土層断面図への投影はIV層～V層であり、また黒曜石の色・夾雑物の量など、他の2母岩に比べて粗悪なことから、搬入経路・生活面が異なる可能性もある。トトロ石3・流紋岩4・珪質頁岩17・玉髓(メノウ含む)1および2については、各々1点のみの出土である。珪質頁岩17は西端部から、他4点は東側から出土する。

出土石器

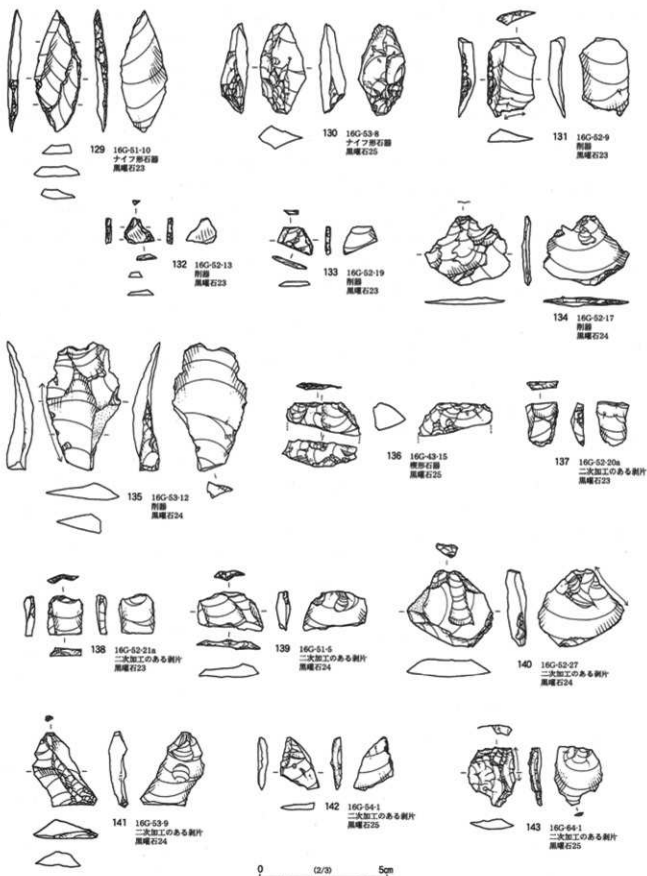
ナイフ形石器 (129・130) 129の背面の剥離痕は、主要剥離面と同一方向から連続して剥離作業が行われたことを示す。夾雑物を全く含まない薄茶がかかった透明な黒曜石23の縦長剥片を素材として、二側縁に急角度の調整加工を施している。刃部は48°を測り、器長の1/2以上を占める。また使用によるものと思われる微細剥離痕が看取される。最大長は4.8cmである。130は横長剥片を縦位に用い、右下部分は素材を無加工のまま生かし、左下部分は抉るように基部を作出している。素材剥片の推定形状から基部は再生加工されているものと思われる。右縁の刃部は器長の3/5にあたる。

削器 (131～135) 131は同一方向から連続して剥離された石刃が素材である。左側面には59°～67°の小剥離痕が直線上に並ぶ。132は左右縁辺に65°～70°の調整痕が並ぶが、上端・下部は折れによって寸断される。132は素材としての剥片は背腹同一方向からの加撃による石刃状であると推定される。調整痕は右側縁にあり、下部の折れにより寸断される。134は頭部調整され、調えられた打面から剥離された幅広の剥片が素材である。緩やかに弧を描いた末端部の腹面右半部は二次加工され、左半部分は折れている。135は134と同一母岩だが、こちらは黒い筋部分が目立つ。素材剥片の打点付近から左側縁の中段にかけて急角度の調整が加えられる。左側縁に微細剥離痕あり。

楔形石器 (136) 136は両極からの力を受けて剥離された楔形石器である。打面に調整痕のような連続した小剥離痕が並ぶが、腹面に残る打点直下の不規則なリングの流れなどから推察すればこれは意図されたものではなく、剥片剥離の際の敲打の衝撃によるものと思われる。腹面下部の小剥離は夾雑物によって寸断される。

二次加工のある剥片 (137～143) 137は石刃状剥片の下半部である。右側縁に二次加工痕あり。折れの後の加工はない。138は打面調整の後剥離された剥片である。左側面上部に二次加工痕あり。139の背面には主要剥離面と同一方向の剥離が4面あり、石刃の上部が折れて残存しているものである。腹面の上部に加工痕あり。140は剥片剥離時の衝撃により打面が飛んだものと思われる。正面左部に淡褐色の自然面を残す。右側縁下部に背腹両面から二次調整が加えられる。自然面と主要剥離面とが折りなす側縁には直線状に使用痕が巡る。141は下端部が折れた(折り取った)あと、尖端を意識した二次加工によって右下端部が調整されている。142は打面から右側縁にかけては折れて側面を作出する。裏面の右側縁にはグラインディングされたような二次加工痕が看取される。143は頭部調整された打面から得られた剥片である。右側縁には微細剥離痕が並び、末端部には腹面側から背面に向けて二次加工痕が看取される。

使用痕のある剥片 (144～159) 144は透明な黒曜石である。薄灰色がかかった綿状の筋が所々に入るが、夾雑物は混じらない。頭部・打面の調整がみられる。石刃状の剥片の尾部は欠損している。右側縁には微細剥離痕が看取される。145は打面・頭部調整あり。打面調整痕は正面図に表現される(属性表には3と記入)。



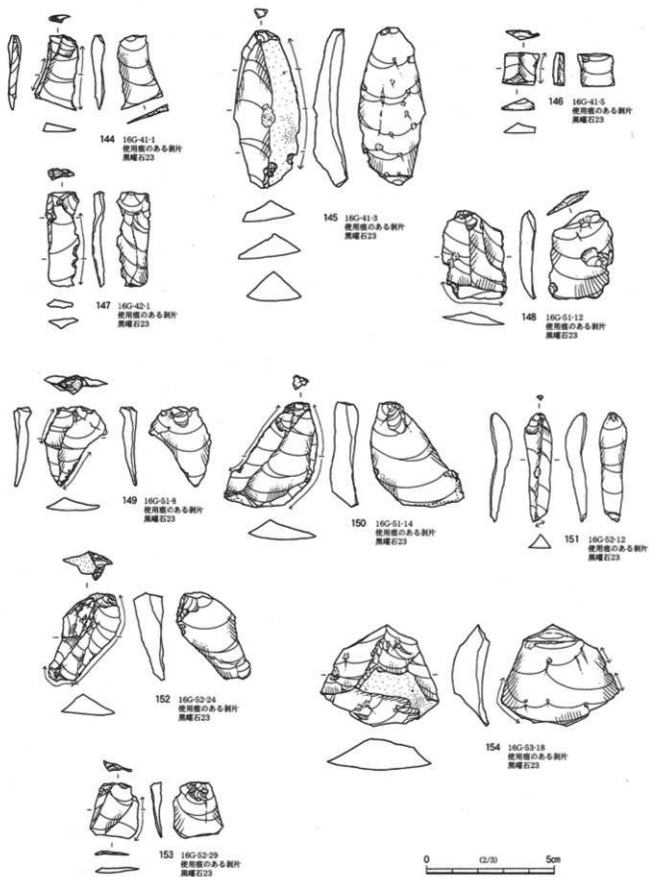
第51図 第9ブロック出土石器(1)

底面を打面に置き換え、加撃された剥片である。下部（打撃部対部）は台（台石か）に接触、あるいは固定されていたためか、打撃方向と反対の剝離痕が看取される。使用痕のある側縁部分は44°~57°。自然面と主要剝離面とが作出した右縁辺に、使用によると思われる微細剝離痕あり。146は右縁辺が折れたあと使用され、のち上・下縁が折れている。折り取られた後に上縁部には微細剝離痕が看取される。147は打面・頭部調整され、二側縁がほぼ平行に並ぶ石刃である。右側縁には3か所のノッチ状の欠けがあるが、意図されたものではない。148の打面は腹面上部にある直径4mmほどの夾雑物によって欠落している。また、腹面右中央部分には直径約3mmの球形の夾雑物のため、打点のない剝離痕ができていない。下縁に使用痕がある。149は調整打面から剝離されている。右上縁部および下縁に刃潰し状の微細剝離痕が看取される。150は頭部調整された剥片である。末端に向かうにしたがい幅広となる。左右側縁には刃こぼれ状の微細剝離痕が間断なく巡る。151は小打面を有する断面正三角形形状の整美な石刃である。末端の尖った部分に使用痕あり。152には上方から左側縁部にかけて、自然面がわずかに残る。右側縁・下縁辺に刃こぼれ痕が看取されるが、特に右肩部の使用痕は顕著であり、稜は擦られて、潰れたような丸みを持つ。153の側縁の使用痕は下部の折れによって切られる。154の打面は剥片剝離の際に加撃によって欠落する。使用痕のある左右縁辺は52°~60°を測り、厚みのある直線的な刃部を作出する。155は小打面から剝離された小型の剥片である。最大長は1.5cmと小さいが、主要剝離面左縁部には潰れたような使用痕が直線的に並ぶ。156は打面・頭部調整あり。左右縁辺には使用痕が巡る。下面は主要剝離面よりも古い面である。157の上部は折れである。右側縁は刃こぼれ痕がみられる。158は横長の剥片であるが、石器の器形を整えるための調整剥片である可能性が高い。剝離後に腹面左縁部は使用され、微細剝離痕が看取される。159は良質でなめらかな光沢を持つチョコレート色の珪質頁岩である。節理面は赤茶、同一の素材はこの1点のみで他にはなし。調整された平坦な打面から加撃された石刃である。左側縁には微細剝離痕あり。末端には背腹両方に小剝離痕が入るが、器厚が薄く、剝離面の色が新鮮であることからガジリかと思われる。

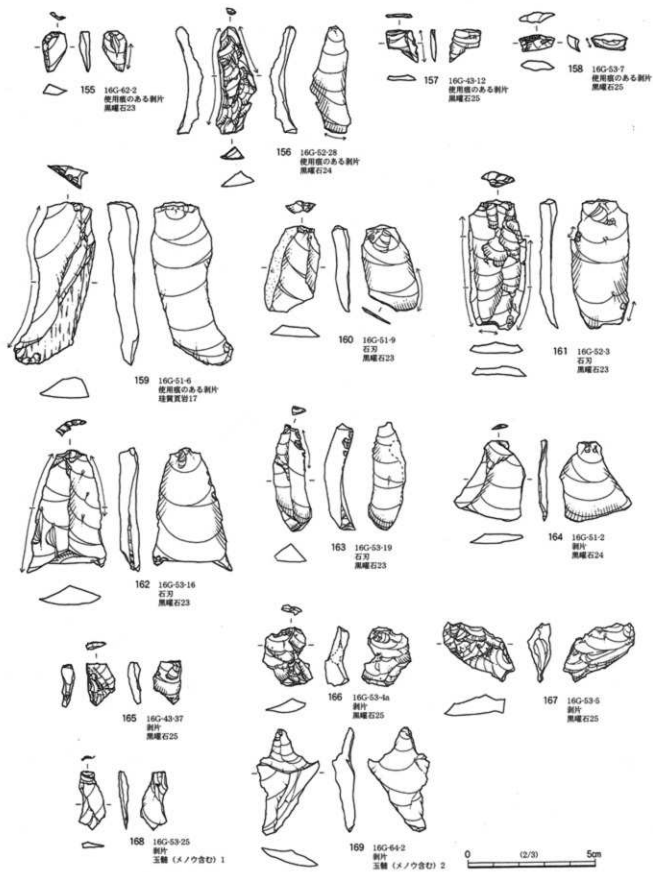
石刃 (160~163) 160は打面・頭部調整あり。背面左縁に縦方向に自然面を残す。主要剝離面と同一方向から剝離された痕がみられる。腹面・側縁下部に使用痕が残る。161の背面には主要剝離面と同一方向からの剝離痕が10面以上みられ、規則的に剥片剝離が行われたことを示す。平行に走る両側縁には微細な刃こぼれがあり、特に左下端部は緻密な刃潰し加工によって直角に整えられている。162は161と同様の過程で剝離された末広がりの石刃である。末端の一部は背面に回り込んでいる。左右に微細剝離痕あり。左縁辺の使用痕は下部からの剝離によって寸断される。163は剥片剝離の際に打面がとばされたものと推察する。末端は内湾していて底面を切るウートラッパセである。右縁辺には使用によって剝落したと思われる剝離痕が不規則に並ぶ。左側縁部は調査時の欠損で失われている。

剥片 (164~169) 164は小打面を持ち、末端の縁辺が直線的に広がった四角形状の剥片である。背面には主要剝離面と同一方向の剝離痕が3面みられる。165は背面左半部には、右側面を打面にした調整剝離が並ぶことから、石器の器形を調整するための剥片であったと思われる。166は調整された打面から剝離された剥片である。167は背面右部には165と同様に右側面を打面とした調整痕が並ぶ。打面は加撃の際に砕けたものと思われる。168は赤褐色・黄灰色・黒褐色が混在する玉髓（メノウ含む）である。部分的に鮮やかな赤褐色を呈する。打面はわずかに残るが、ほとんど線状である。169は168と似るが、錆色のざらついた剝離面である。点状打面から不定型に剝離されている。

接合資料 (170) 170は石核と石刃の接合資料である。厚みが1cmほどの板状剥片の側縁を削ぐように石



第52図 第9ブロック出土石器(2)

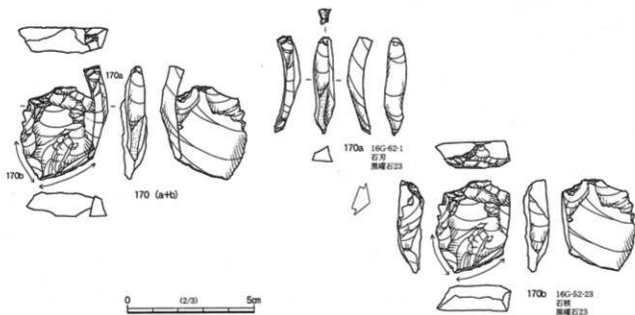


第53図 第9ブロック出土石器(3)

刃170aが剥離されている。170aの背面には同様に剥離された剥片の痕跡が残り、2片の石刃が同一打面から剥離されたことがわかる。この後はさらに打面を整えて剥片剥離作業が行われてはいるが、整美な形状の剥片は作出されない。下縁部に使用痕が残る。剥片としての末端が何らかの形で使用された後、石核として利用され数片の剥片が作られている。

なお、この170の母岩である黒曜石23からはナイフ形石器1点・削器3点・二次加工のある剥片2点・使用痕のある剥片12点・石刃5点・石核1点・剥片4点・砕片9点が作出され、剥片・石刃を素材にした利器製作が行われた痕跡がうかがえる。

このように、同じ「黒曜石」であっても母岩によっては小型の剥片・砕片の割合が高い黒曜石25がある一方、規格的な形状の剥片・石刃が多く作出される黒曜石23・24も存在し、石材搬入経路や活用石材の選別という観点からも興味深いブロックである。



第54図 第9ブロック出土石器(4)

第10表 第9ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	削器	規格式石器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	石核	剥片	砕片	燼	点数	点数比	重量(g)	重量比
トトロ石 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.75%	0.11	0.06%
流紋岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.75%	0.13	0.07%
黒曜石 23	1	3	0	2	12	5	1	4	9	0	37	27.61%	108.05	56.68%
黒曜石 24	0	2	0	3	1	0	0	8	15	0	29	21.64%	29.32	15.38%
黒曜石 25	1	0	1	2	2	0	0	16	41	0	63	47.01%	36.13	18.95%
流紋岩 17	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.75%	14.12	7.41%
玉髓(メノウ含む) 1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.75%	0.57	0.30%
玉髓(メノウ含む) 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.75%	2.21	1.16%
合計	2	5	1	7	16	5	1	30	66	1	134	100.00%	190.64	100.00%

第4節 第3文化層(第55図、巻頭図版3)

源七山遺跡における第3文化層は立川ロームのV層に相当し、第10ブロックのみがこれにあたる。礫片と石器とが混在し、多様な石材によって構成されているが、器種組成は偏りを見せ、剥片石器におけるナイフ形石器の割合は約30% (5点) と高い。そのうちの1点は大型の硬質頁岩製であり、石器としての機能および剥片作出のための素材両面から可能性を探ってみた。

1 第10ブロック(第56~58図、第11表、図版25)

遺物分布状況

遺物は14G-74・75・84・85に分布する。標高29m、南半部の北側に位置し、南西から北東へ緩く傾斜する。遺物は南北5.7m、東西4.5mの範囲に35点が出土する。

次に垂直分布状況を見ていく。土層図は局所的な柱状図であるため、約10mの隔たりを推定線で結んだ。遺物はIV層~VII層に投影されるが、おおむねIV層下部~VI層上部に石器分布の中心を持つものである。

母岩別資料の分布

器種はナイフ形石器5点・使用痕のある剥片1点・石核1点・剥片10点・礫18点と半数以上を礫が占め、平面・垂直両分布図状況から礫と石器は同一時期の所産であることがわかる。礫18点はすべて被熱した安山岩で、第10ブロックにおける石器分布の中心に存在し、南北2.8m、東西2mの範囲から出土している。安山岩は7母岩18点を数えるが、それらを取り巻くように5点のナイフ形石器が出土する。またこのブロックにおいて特筆すべきことは、油脂状光沢のある細粒良質なチョコレート色の硬質頁岩1のナイフ形石器である。大型の横長剥片を素材にして打面を腹面側から面的な急角度剥離によって調整加工している。加工された状態で搬入されたものと推察される。第10ブロック西南端から出土し、V層に投影される。

検出された石材は、安山岩礫18点と黒曜石1の4点を除くと他はすべて1母岩1点のみの出土であり、ガラス質黒色安山岩2種・トトロ石1種・黒曜石3種・砂岩3種・珪質頁岩2種・硬質頁岩1種・ホルンフェルス1種・玉髓(メノウ含む)1種が用いられている。

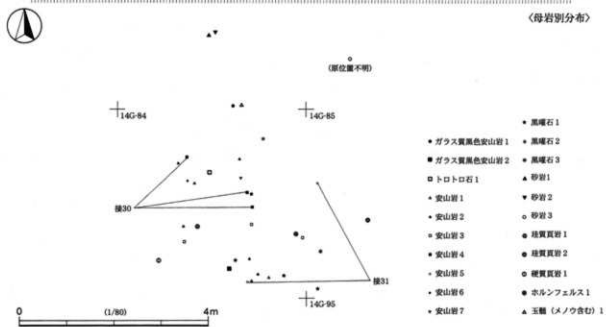
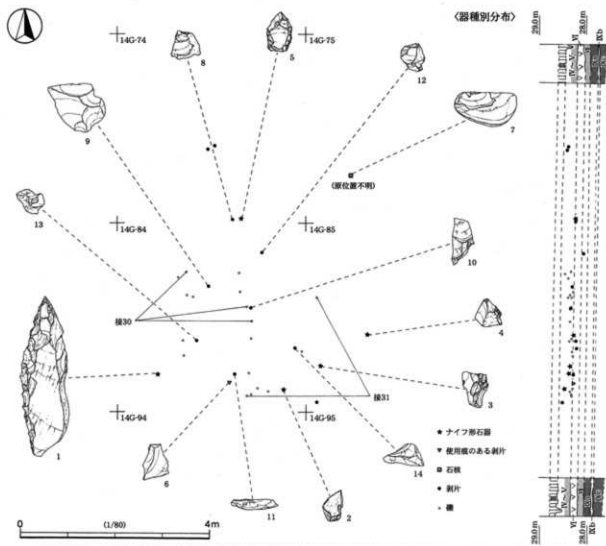
出土石器

ナイフ形石器(1~5) ナイフ形石器の母岩は黒曜石1・黒曜石3・珪質頁岩2・硬質頁岩1・玉髓(メノウ含む)1と石材・形状とも様々である。1は濃褐~茶褐色の良質な硬質頁岩1であり、このほかに同一母岩の検出はない。最大長12.63cm、最大幅3.95cm、最大厚2.00cm、重量81.24gと、大型で重量もあり、当遺跡においてはもちろん、近隣の遺跡からも同様の形態を示すナイフ形石器の類例はない。

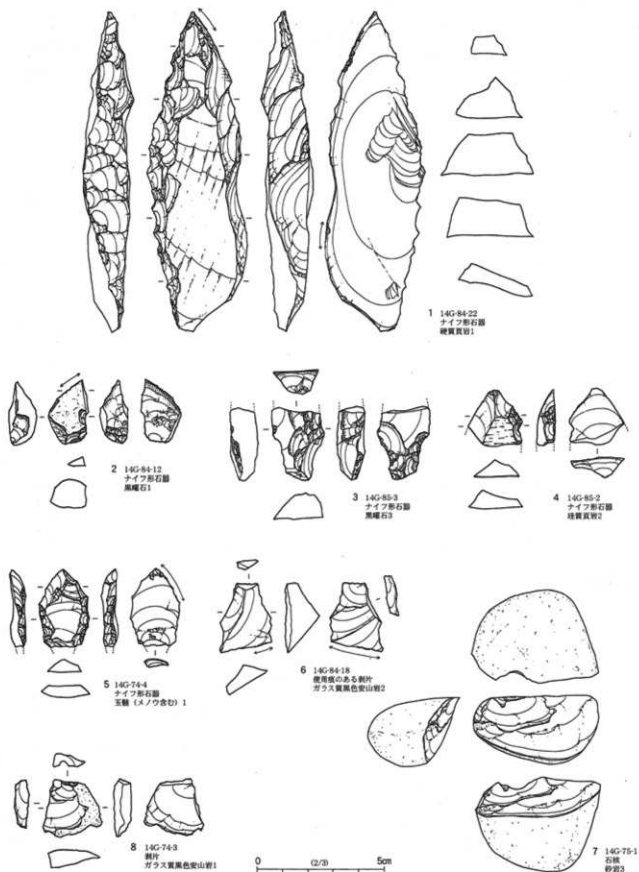
まず、その大きさを確保するための原礫であるが、石器に自然面が残っていないことから、素材礫は少なくとも一辺15cm以上はあったものと推定される。その原礫から剥離した盤状剥片を素材石核として用い、輪切りにするような感覚で作出された剥片の内の1片であると思われる。背面に残る古い剥離痕は広がりを感じさせ、打点は遠い。主要剥離面とは打撃方向がおよそ90°違う。背面に石核底面を持ち、横長剥片の



第55図 第3文化層ブロック配置図



第56図 第10ブロック遺物分布



第57図 第10ブロック出土石器(1)

打面を除去するように面的な加工が施されている。

次に、作出された横長剥片の調整加工であるが、幅広の打面および打面側の全側縁には主要剥離面側から背面側に向け急角度のプランティングが施され、打面はすべて除去される。基部については、左側縁は成形のちに小剥離によって端部を整形し、右基部は剥片末端部を折ることにより鋭角縁辺を抹消する。刃部は、左側縁の先端に残された古い面と主要剥離面とが90°の稜を作出する一方、剥片末端縁辺が長大な刃部を形成し、先端には稜上から腹面に向けて調整剥離が施され、尖る。

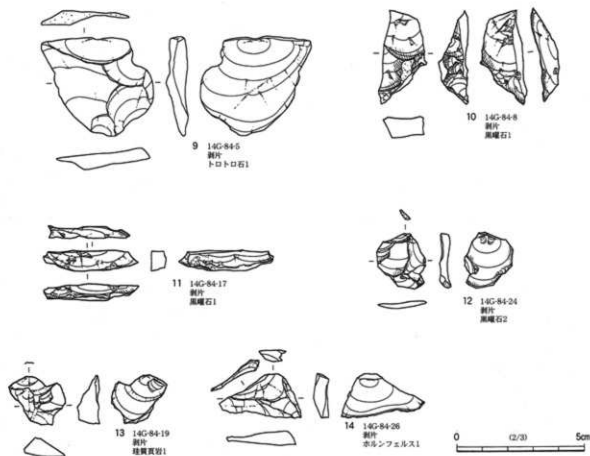
使用痕は、右上刃部と下部のふくらみの一部に微細剥離痕が看取される。

このように形態上『ナイフ形石器』として分類したが、

- ① 東北産と思われる大型で良質な硬質頁岩であること
- ② 多数の剥離痕が残っているにもかかわらず同一母岩の検出はなく、1点のみの出土であること
- ③ 横長幅広の肉厚剥片を素材とし、打面部に腹面側から整形剥離して木葉形に仕上げられていることから、このナイフ形石器自体が素材（ブランク）として搬入された可能性が高い。

なお、まとめの項にも県内の石器群との関連について記載した。

2は剥片の下縁辺を刃部に、打面を基部に据えて調整を加えたナイフ形石器である。両側面と正・裏面とはほぼ直角を成し、プランティングの代用としたものか。3は濃灰色で艶消しされたような鈍い光沢を持つ。基部は緩やかに抉るような相似形を描く。刃部を有していたであろう上半部は、折れて遺存しない。



第58図 第10ブロック出土石器(2)

4は艶のない黒褐色の珪質頁岩2である。右縁辺に腹面側から加撃された62°~76°の鋸歯状の調整痕があり、左縁辺の刃部は36°~42°を測る。上部に据えた先端部にはグラインディングによる微細な剥離痕がみられる。5はもや状白斑が黄白色半透明の中に浮遊しているような玉髓(メノウ含む)1を縦長のベース形に整形したナイフ形石器である。左右側縁下半部には腹面側からの加撃による調整痕が54°~70°の角度を持って並ぶ。左上縁部の刃部は50°で、使用痕が看取される。

使用痕のある剥片(6) 6は黒色のガラス質黒色安山岩2であり、不定型な剥片である。末端部に使用痕がみられる。

石核(7) 7は緑がかった淡黄白色の砂岩3である。礫平坦面が加撃され分割したものである。

剥片(8~14) 8は自然面・剥離面とも黄みがかった褐色のガラス質黒色安山岩である。頭部調整あり。同一母岩は他になし。9は黄粉を塗したようなトトロ石である。棒状の礫を順序よく輪切りにしたような、自然面が帯状に残る剥片である。石材の特徴と風化により、二次加工・使用痕は看取されない。10は下端を台石のようなものに設置して剥離作業が行われた剥片である。打面直下の折れにより左部は遺存しない。直径1mmほどの茶色い夾雑物がまばらにみられる。背面にわずかに自然面を残す。11は剥片の下縁部のみが遺存している。上部は夾雑物によって折れたものと思われる。12は打面・末端にわずかに自然面が残る。13は淡褐色の珪質頁岩である。小型・矩形であり、線状の打面を持つ。14は針でつついたような細かな点状孔のある灰白色のホルンフェルスである。同一母岩はこの1点のみである。末端は直線的で幅広になっている。

第11表 第10ブロック組成表

母岩名/器種	ナイフ形石器	使用痕のある剥片	石核	剥片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	0	1	0	1	3.13%	3.86	0.50%
ガラス質黒色安山岩2	0	1	0	0	0	1	3.13%	3.83	0.50%
トトロ石1	0	0	0	1	0	1	3.13%	9.75	1.27%
安山岩1	0	0	0	0	4	4	12.50%	138.71	18.11%
安山岩2	0	0	0	0	4	4	12.50%	58.76	7.67%
安山岩3	0	0	0	0	3	3	9.38%	68.22	8.90%
安山岩4	0	0	0	0	1(3)	1(3)	3.13%	72.27	9.43%
安山岩5	0	0	0	0	1(2)	1(2)	3.13%	140.90	18.39%
安山岩6	0	0	0	0	1	1	3.13%	92.10	12.02%
安山岩7	0	0	0	0	1	1	3.13%	10.27	1.34%
黒曜石1	1	0	0	3	0	4	12.50%	11.51	1.50%
黒曜石2	0	0	0	1	0	1	3.13%	1.10	0.14%
黒曜石3	1	0	0	0	0	1	3.13%	5.50	0.72%
砂岩1	0	0	0	1	0	1	3.13%	2.02	0.26%
砂岩2	0	0	0	1	0	1	3.13%	3.36	0.44%
砂岩3	0	0	1	0	0	1	3.13%	51.66	6.74%
珪質頁岩1	0	0	0	1	0	1	3.13%	1.96	0.26%
珪質頁岩2	1	0	0	0	0	1	3.13%	2.61	0.34%
硬質頁岩1	1	0	0	0	0	1	3.13%	81.24	10.60%
ホルンフェルス1	0	0	0	1	0	1	3.13%	2.66	0.35%
玉髓(メノウ含む)1	1	0	0	0	0	1	3.13%	3.81	0.50%
合計	5	1	1	10	15(18)	32(35)	100.00%	766.10	100.00%

※ () は出土点数

第5節 第4文化層 (第59図、第12・13表、巻頭図版3・4)

第4文化層はIV層～V層に生活面を持つものである。第11ブロック～第19ブロックの9か所に石器の集中域が存在する。他文化層と比較してブロック数は多く、各々の範囲も広い。北半部北側に2地点、南半部の中央から東寄りに7地点が検出された。南半部の第14・15・19ブロックのIII層以下は水分を多く含む粘性を帯びた褐色土であり、層区分は不明瞭である。

なお、第4文化層は母岩数が多いため、各々の母岩特徴を表象化した。

1 第11ブロック (第60～72図、第14表、図版4・27)

遺物分布状況

遺物は3 D-99、3 E-81・82・90～92、4 D-09、4 E-00～04・11～14・22に分布する。北半部の北端、標高25m～26m、III層上面のレベルであるが、本調査の範囲の東南端は25.3m、北西端は24.1m、北東・西南はそれぞれ24.6m、24.7mであった。最低部である北西端と最南部である東南端の距離は約32mを測り、その比高差は1.2mである。遺物は南北15m、東西20mの範囲内に370点が分布する。11石材39母岩が検出され、ナイフ形石器4点・角錐状石器3点・削器2点・掘器2点・楔形石器1点・磨石2点・二次加工のある剥片9点・使用痕のある剥片17点・石核6点・剥片105点・碎片209点・礫10点が出土している。

次に垂直分布状況を見ていく。

遺物は地形に沿って東上りに分布し、IV層を取り込んだIII層ソフトローム層下部からVI層にかけて投影される。なお、垂直分布の投影に際し、二分された下部の層に関しては第2ブロックとして第1文化層の項に示した。

母岩別資料の分布

370点中75%強にあたる280点が夾雑物を多く含む漆黒の黒曜石であり、成分分析などの科学的な根拠はないが、肉眼観察においてそのほとんどは高原山産であると思われる。第11ブロックは15m×20mの楕円域の中に遺物の密集する地点2か所を含む5地点に細分し、検討を試みた。4 E-00グリッドを中心とした04 E-A (52点)、4 E-01グリッドを中心とした04 E-B (107点)は黒曜石主体の集中域であり、狭い範囲に高密度に分布する。03 E-Aはブロックの中では北に位置し、珪質頁岩1は北側にまつまり、黒曜石2は広く分布、その中心は04 E-Aにある。04 E-C・Dは黒曜石を主体に74点が東南部の12m×12mの範囲内に分布する。石材ごと形成された集中域であるといえる。

出土石器

ナイフ形石器 (1～4) 1はナイフ形石器の一部分で、左上縁部であったものと推察される。器形調整のための剥片の可能性もある。2は剥片の打面に基部に据え、左右側縁に調整加工を施したナイフ形石器である。右側縁下部は85°、左側縁は65°、刃部は折れて遺存しない。3は褐色で艶のない珪質頁岩である。横長剥片の右半部を刃部に、打面部にブランティングを施したナイフ形石器である。基部は折ったのちに



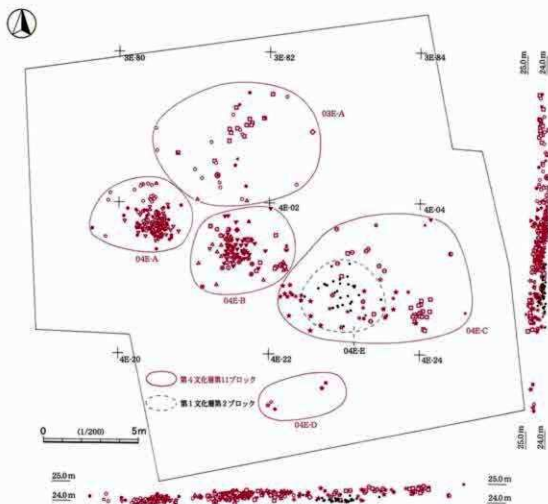
第59図 第4文化層ブロック配置図

第12表 第4文化層母岩別石材特徴(1)

ブロック	番号	碑誌番号	自然産	風化面(剥離面)	剥離面(ゴツリ)	風化(剥離面)の色・ゴツリ・割れ・欠け	特徴・その他
11	ガラム質黒色安山岩1	48, 47, 46	黒褐色	黄褐色～褐色	黒	黒～黒褐色 割れ・欠け 3mm・1.7mm	ガラム質黒色安山岩1, 4と近似
12	ガラム質黒色安山岩2			黄褐色～褐色	黒	黒少	
13	ガラム質黒色安山岩3	40-46	黒褐色	褐色～黄褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	ガラム質黒色安山岩1, 4と近似
15	ガラム質黒色安山岩5	98, 100		褐色～黒褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	
16	ガラム質黒色安山岩6	105		淡黄褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	
18	ガラム質黒色安山岩8	128, 140, 141, 140		褐色～黒褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	ガラム質黒色安山岩1, 3と近似
19	ガラム質黒色安山岩7	142	黒褐色	褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	
19	ガラム質黒色安山岩9	105, 100	黒褐色	黒褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	
19	ガラム質黒色安山岩9			黒褐色	黒	黄褐色 3mm・1.7mm	
13	トコロ石1			黄褐色～黒褐色			
13	トコロ石2	87		明黄褐色			表面は割れをまぶしたよう、風化により丸みを帯びる
14	トコロ石3	95		明黄褐色			トコロ石2より黄褐色が強い
19	トコロ石4	127	褐色	淡黄褐色	褐色		
11	安山岩1	12	黄褐色～黒褐色	赤褐色			全体的に割れ、割れ・欠け
11, 12-16, 19	安山岩2-12, 15-17, 19-20			黒褐色、風化により分別不鮮			20mm以下の割れ・割れ、安山岩2-12, 15-17, 19-20は風化及び割れにより、分別不鮮
15	安山岩14	114		灰白色			フォーター一枚の小穴あり
15	安山岩18	125		黄褐色、灰褐色			塊状白色の中に灰褐色の結晶が散在
11	凝灰岩1	49		黄褐色			
11	凝灰岩2	14		黄褐色			割れにより赤化する
11, 12-16, 19	凝灰岩3-30			黒褐色、風化により分別不鮮			凝灰岩3-30は風化及び割れにより、分別不鮮
11	凝灰岩1	8, 15, 26-27, 41, 50-52	茶色がかった黒	茶色がかった黄褐色～黒	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	2-3mm以下の割れ・割れ、凝灰岩1, 5, 7に近似、黄褐色が強い
11	凝灰岩2	10, 14, 25, 24		黒、光沢あり、半透明	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	凝灰岩4に近似、黒輝山産か
11	凝灰岩3	31, 10		茶色がかった黒い割、半透明、光沢	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	黒輝山産か
11	凝灰岩4	8, 19, 25, 29	茶色がかった黒	黒、光沢あり、半透明	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	凝灰岩2と近似、黒輝山産か
11	凝灰岩5	30, 16	黄褐色、半透明	茶色がかった黒い割、半透明、光沢	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	凝灰岩1, 6, 7に近似、黒輝山産か
11	凝灰岩6	5, 4, 12, 21, 31, 50-60		茶色がかった黒い割、半透明、光沢	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	凝灰岩1, 6, 7に近似、黒輝山産か
11	凝灰岩7	2, 22, 23		茶色がかった黒い割、半透明、光沢	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	凝灰岩1, 6, 7に近似、黒輝山産か
11	凝灰岩8	7, 34, 61		茶色がかった黒い割、半透明、光沢	黄	黄褐色 3mm・1.7mm	茶色の部分が入る、黒輝山産か
12	凝灰岩9	21, 42, 80	黄褐色	透明、部分的に黄褐色	黄少		黄
12	凝灰岩10	30		光沢のある黒、半透明	黄少	灰白色～黄褐色 3mm・1.7mm	茶色の部分が入る、黒輝山産か
12	凝灰岩11			茶色がかった黄褐色、半透明	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	黒輝山産か
14	凝灰岩12	91		光沢のある黒、半透明	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	茶色の部分が入る、黒輝山産か
14	凝灰岩13			透明程度は高く、全体に黄褐色の斑が入る	黄少		黒輝山産か
15	凝灰岩14	101, 102, 106, 110	黄褐色	黄褐色程度、黄褐色斑	黄少		凝灰岩19と近似、黒輝山産
15	凝灰岩15	103, 101, 117		茶色がかった黄褐色、半透明	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	黒輝山産か
15	凝灰岩16	105		黒～赤褐色、半透明、光沢	黄少		赤みがかさ、黒輝山産
15	凝灰岩17	109		黄褐色、半透明	黄少	灰白色 3mm・1.7mm	黒輝山産か
16	凝灰岩18	122		光沢のある黒	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	黒輝山産か
16	凝灰岩19	135	黄褐色	透明～黄褐色	黄少		凝灰岩14と近似、黒輝山産
17	凝灰岩20	153, 154	黄褐色の割れが強い	黄褐色、光沢	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	黄褐色の割れが強い・黄褐色に割れて黄くさる、黒輝山産か
17	凝灰岩21	152		わずかに黄がかった黒、光沢	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	
19	凝灰岩22	162-164, 166-168, 163	茶色の粒が黒	わずかに黄がかった黒、光沢	黄少	黄褐色 3mm・1.7mm	黒輝山産か
11	砂岩1			灰色			
15	砂岩2			灰色			
11	斑岩質岩1	22, 25, 28, 42, 42-47	黄褐色	黄褐色			一様な割れ、黄褐色の光沢あり
11	斑岩質岩2	27	黄褐色	黄褐色と黄褐色部分あり			黄褐色
11	斑岩質岩3	3		割れなし、赤みの混じった褐色			黄褐色
11	斑岩質岩4	4		薄らかな褐色、黄褐色光沢あり			黄褐色フォーター石、黄褐色斑に近似
11	斑岩質岩5	5		黄～黒みを帯びた灰褐色、黄光沢			
11	斑岩質岩6	16		少し黄褐色がかった灰褐色～灰褐色			
11	斑岩質岩7	20		黄褐色褐色と黄褐色の部分あり			
12	斑岩質岩8	26, 49	淡黄褐色	淡黄褐色			
12	斑岩質岩9	36		褐色、薄らかな黄褐色光沢			黄褐色の斑岩質岩か
14	斑岩質岩10	96	淡黄褐色	灰白色と淡黄褐色の部分あり			
14	斑岩質岩11	92		黄～灰白色、赤みの混じり、黄光沢			
14	斑岩質岩12	93		淡黄褐色、黄光沢			
14	斑岩質岩13	94, 97, 98		黄褐色灰白色、黄光沢なし			黄褐色部分あり、斑岩質岩14, 15に近似

第13表 第4文化層母岩別石材特徴(2)

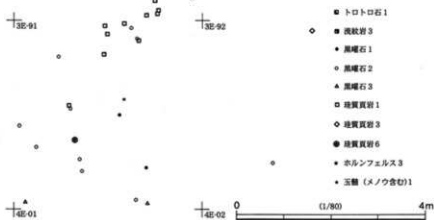
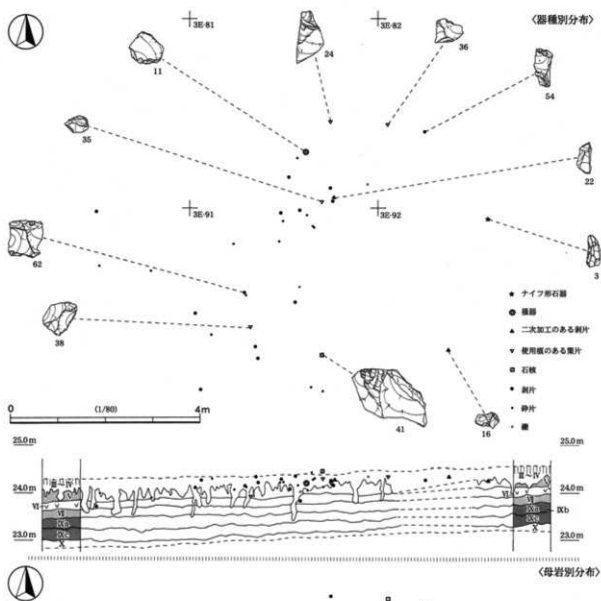
ブロック	母岩	採出番号	自然面	風化面(剥離面)	新断面(ダシ)	風化(剥離)色(大まかな)変色(%)	特徴・その他
15	雑質頁岩14	108, 110~112, 119~121		わずかに黄土がかった灰白色、光沢なし			赤褐色の線痕あり、雑質頁岩13, 18と近縁しているが、より灰色が濃い
16	雑質頁岩15	113, 122~124		淡黄灰白色、光沢なし			赤褐色の線痕あり、雑質頁岩13, 14と近縁
16	雑質頁岩16	143, 144	赤褐色、光沢あり	赤褐色、光沢あり			部分的に互層化した礫間凝結質頁岩か
16	雑質頁岩17	126, 128, 127, 146, 147	赤褐色	薄らかな赤褐色、光沢			雑質頁岩1より少し黄味が強い
16	雑質頁岩18	131, 138		暗褐色、線粒状光沢			雑質頁岩か
16	雑質頁岩19	133, 139	小石中に凝結した黄土色の	凝結がかった灰白色、微光沢			
16	雑質頁岩20	127		赤褐色、線粒状光沢			礫間凝結質頁岩か?
16	雑質頁岩21			褐色、線粒			
16	雑質頁岩22	124	淡黄褐色、チロロ状のシキあり	淡黄褐色～褐色、光沢			
16	雑質頁岩23			薄らかな赤褐色、線粒状光沢			
16	雑質頁岩24	100, 101, 109~170	淡黄灰白色	わずかに凝結がかった淡黄灰白色、光沢			
16	雑質頁岩25	142		暗褐色に黒い痕			
16	雑質頁岩26	135, 136		凝結がかった褐色、光沢あり			
16	雑質頁岩27	127		暗褐色と赤褐色がマーズム状、微光沢			
16	雑質頁岩28	143		凝結がかった赤褐色、微光沢			
16	雑質頁岩29	121	淡黄褐色	淡黄灰白色			母岩褐色の線痕あり
16	雑質頁岩30	164		赤黄灰白色、薄らかなが艶はない			
16	雑質頁岩31	165	淡黄白色	淡黄白色、微光沢あり			
16	雑質頁岩32	161		少し黄土がかった灰白色			母岩色の線痕あり
16	雑質頁岩33	161	淡黄白色	凝結がかった灰白色、微光沢			
11	ホルンフェルス1	88		黄灰色、灰白色の凝結が入る			灰白が顕著な部分があるのか
11	ホルンフェルス2	89	黄灰色	黄灰色			灰白の線粒が顕著、褐色部分あり
11	ホルンフェルス3	71	暗黄灰色	暗黄灰色、針穴状痕			針でつつかたような細かな点状痕、ホルンフェルス8と近縁
11	ホルンフェルス4		暗黄灰色	暗黄灰色			線粒痕が顕著
16	ホルンフェルス5	128		淡黄灰白色、黄砂状			
16	ホルンフェルス6	148	暗黄灰色	暗黄灰色			ホルンフェルス2と近縁
16	ホルンフェルス7			灰白色			
16	ホルンフェルス8	102		凝結がかった灰褐色、黒い痕あり			暗褐色の線痕部分あり
11	チャート1	46, 43, 39	黄灰色	黄灰色、黒い痕、微光沢			
11	チャート2	44		半透明、黄灰色			
11	チャート3	40	赤褐色	暗黄灰色			
11	チャート4	75	暗黄灰色	暗黄灰色			
12	チャート5		赤褐色	赤みがかった暗黄灰色			顕著
16	チャート6		赤褐色	やや赤みがかった褐色			顕著
16	チャート7	172		暗黄灰色			顕著部は淡黄褐色
11	五層(メノウ含む)1		淡褐色、褐色の斑				
12	五層(メノウ含む)2	70~77		半透明～淡黄白色			乳白色に褐色部分が混入あり、光沢をもつ 五層(メノウ含む)1と近縁
16	五層(メノウ含む)3	104		乳白色と赤褐色が混在			
16	五層(メノウ含む)4		灰～灰白色				
16	五層(メノウ含む)5	109~101	黄～乳白色、光沢あり	乳白色～半透明、自然面に近い部分ほど褐色			線粒痕を有す
16	五層(メノウ含む)6	129	褐色、光沢あり	褐色と淡黄灰白色が二分			
16	五層(メノウ含む)7	106, 172, 174, 180	黄褐色、赤褐色	黄褐色、微光沢			
16	五層(メノウ含む)8	108, 175		半透明、淡黄白色、光沢あり			五層(メノウ含む)2と近縁
16	五層(メノウ含む)9	176		灰白色			
16	五層(メノウ含む)10	167		黄白色、半透明、微光沢			
16	五層(メノウ含む)11	177	淡黄白色	乳白色、微光沢			
16	五層(メノウ含む)12	159	赤褐色、赤黄、黄灰/赤黄斑	黄褐色、赤黄、線粒の線粒痕			線粒の本線痕
16	五層(メノウ含む)13	178		赤褐色、黒い痕、線粒状光沢			
16	五層(メノウ含む)14	179		凝結がかった赤、一部黄土色の部分あり			
11	赤晶1	23		黄色透明			



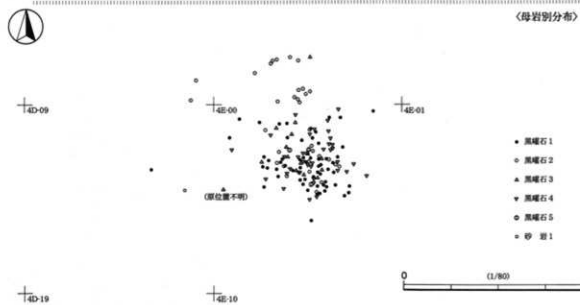
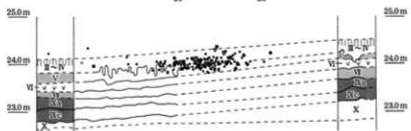
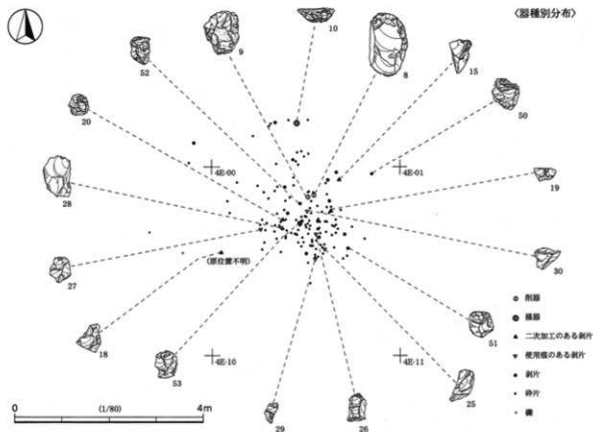
第60図 第11ブロック検出状況

調整加工を施している。4は滑らかな褐色の珪質頁岩である(硬質頁岩か)。同一母岩はこの1点のみである。横長剥片を縦位に用いる。末端辺を急角状剥離で面的に加工し、打面側は厚みを削ぐように成形したあと、平坦な剥離で形を整えている。加工はすべて腹面側から行われる。刃部は折れにより欠損している。

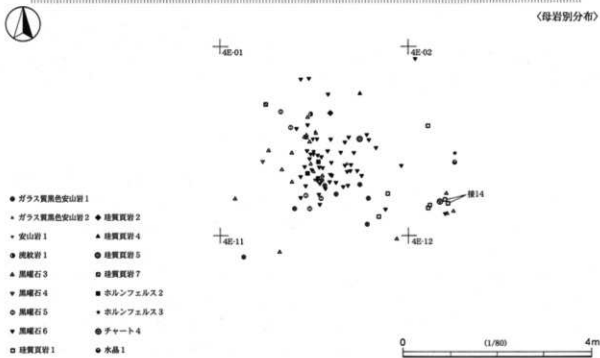
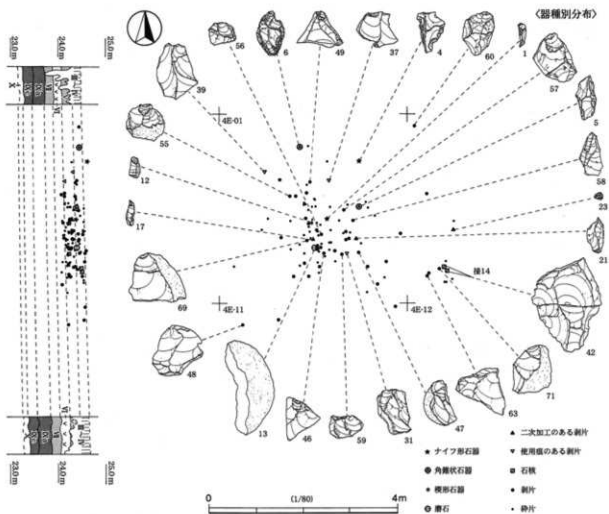
角錐状石器(5~7) 5は青灰色の珪質頁岩である。嶺岡産かと思われるが、1点しか検出されていないので、断定できない。横長剥片を縦位に用い、打面部と幅広の末端縁辺の過半部分に急角状剥離を施した角錐状石器である。断面形は上半部が三角形、下半部は台形を呈する。6は同一母岩が55点ある黒曜石6である。全体の形状は菱形を面取りしたような楕円形である。横長の幅広剥片を素材にして腹面側から側縁に53°~78°の調整加工が施される。右肩部は新欠により欠損している。素材時の打面は残されている。断面図はⅢ層に投影されるが、多出する黒曜石6は主にⅣ層~Ⅴ層が主体であることから、生活面はⅣ層下部にあったものと思われる。7は横長剥片を縦位に用い、一側縁を主要剥離面側から加工した角錐状石器である。主要剥離面側は未加工のままである。先端部に近い背稜には、背稜から加撃し刃部を作出したのち、稜上調整剥離が施される。



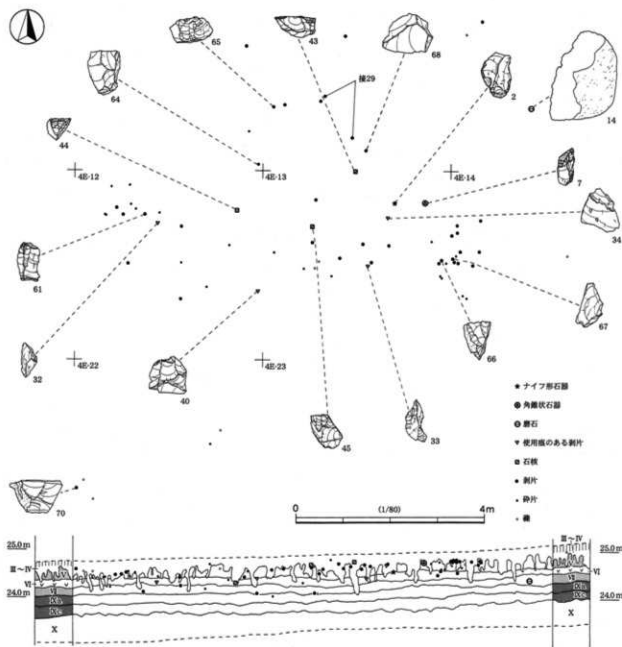
第61図 第11ブロック遺物分布 (03E-A)



第62図 第11ブロック遺物分布 (04E-A)



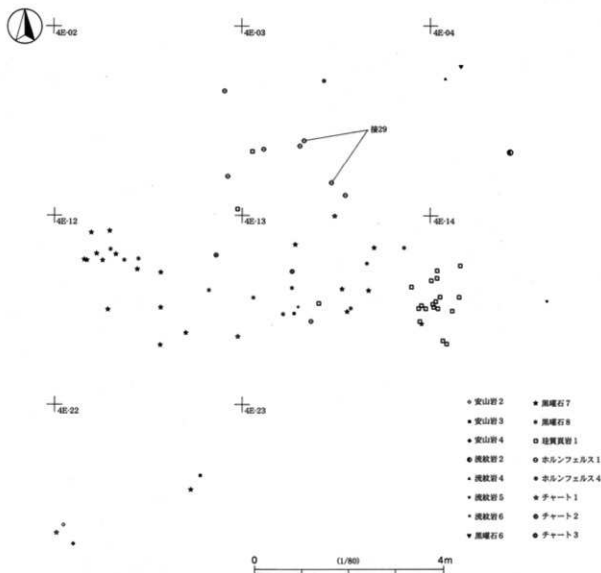
第63図 第11ブロック遺物分布 (04E-B)



第64図 第11ブロック器種別分布 (04E-C・D)

削器 (8・9) 8は厚みのある石核を素材とし、右側縁を70°~72°の連続した調整痕によってスクレーピングエッジが作出されている。剥離加工後の縁辺には擦って潰したような丸みがあり、半楕円形の緩やかな弧を描く。9は右側縁部を二次加工後、擦り、あるいはたたいて後に丸みを持たせている。二次加工はすべて腹面側から行われている。

掻器 (10・11) 10は上部が折れており、下部のみ遺存している。円の2/5ほどの弧か。敲打による剥離によって粗く成形された後、擦って縁辺に丸みを持たせている。11は暗青灰色で、針でつついたような細かな点状孔のあるホルンフェルス3である。貝殻状の小剥片を素材に用いた掻器である。打面・打瘤を除去するように剥離し、68°~83°で下縁辺が加工される。両側縁に微細な刃こぼれ痕があるが、人為的なものではなく石材の特徴による欠けと思われる。

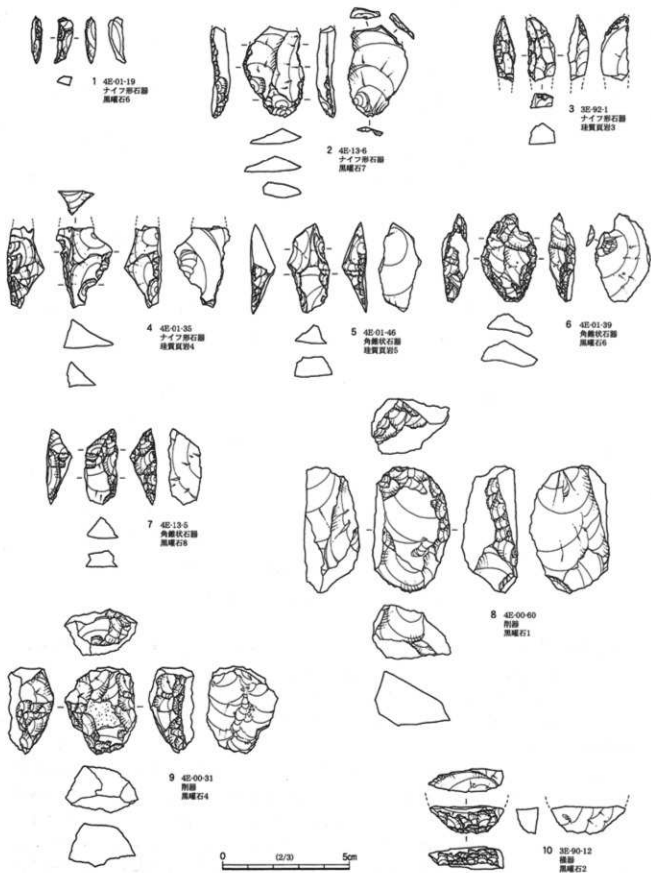


第65図 第11ブロック母岩別分布 (04E-C・D)

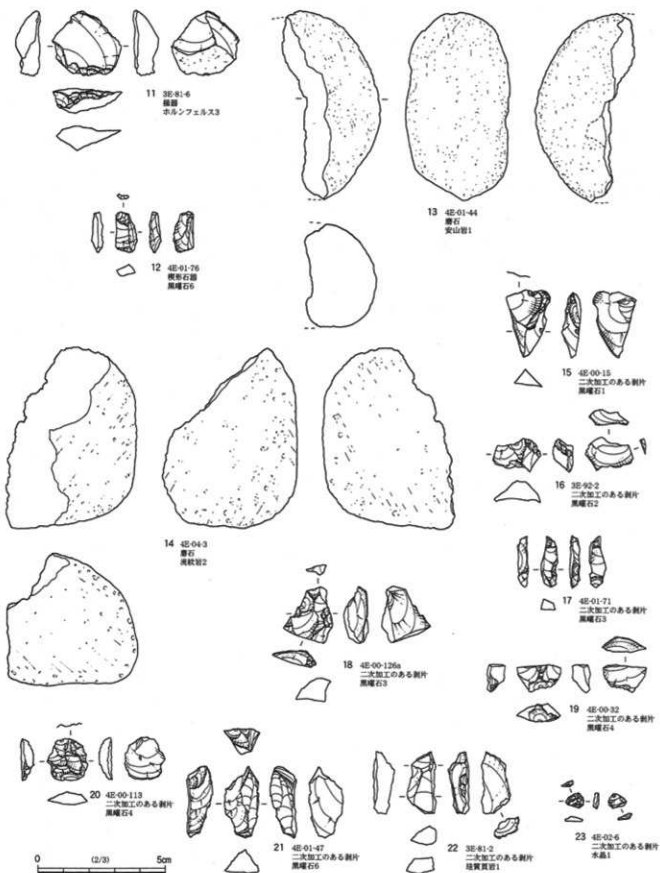
楔形石器(12) 12は下端を据えた加撃により、上・下からの剝離痕がみられる。最大長は2cmに満たない。

磨石(13・14) 13は灰黒色の石基に黒雲母や角閃石の斑晶が入る安山岩1である。全体に被熱により赤化し、脆い。原型は扁平な球形の磨石と思われるが、磨痕は不明瞭である。14は全体的に被熱のため破砕し赤化しているが、石基は薄灰色である。斑晶は直径2mmほどのくすんだ褐色である。

二次加工のある剥片(15~23) 15は打点直下で分割された剥片の右半部である。右上肩部は剝離を施すことによって弧状に端部が作出される。16は剥片上部が折れたのち、背面に二次加工を施している。17は両極から加えられた打撃により作出された剥片である。右側面に腹面から加工された痕が残る。18は剥片剝離時の打撃により打点直下に折れが生じた。二次加工はその折れ面の縁辺から背面に向けて施される。下半部に折れが生じた後も端部に微細剝離が施される。19は末端部から背面へ抜ける剝離痕があり、二次加工としてとらえたが、石核設置面からのはね返りである可能性もある。20は頭部調整された打面から剝離された小型の剥片である。右肩部に小剝離が施され、ほぼ円形を描いている。21は横長剥片を素材に使



第66図 第11ブロック出土石器(1)



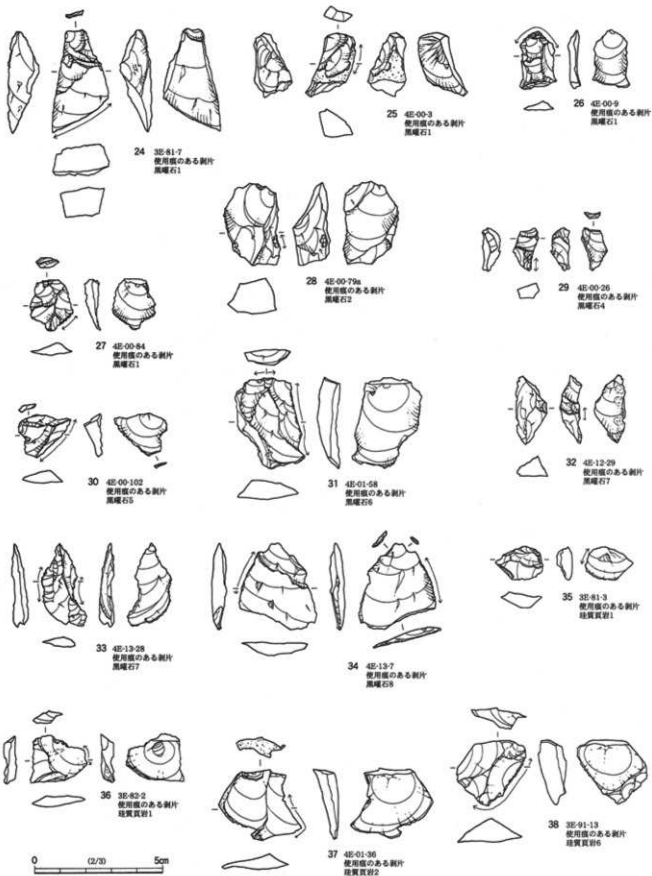
第67図 第11ブロック出土石器(2)

用している。上面には腹面側から加撃されて剝離した痕が残る。22は珪質頁岩1である。3のナイフ形石器と素材の用い方が似る。23は透明な水晶の二次加工のある剝片である。

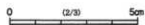
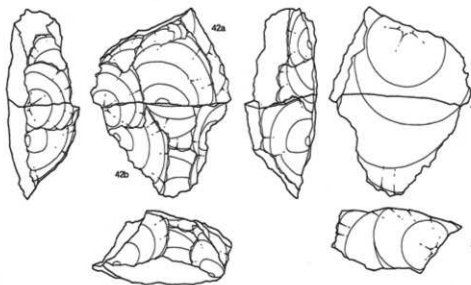
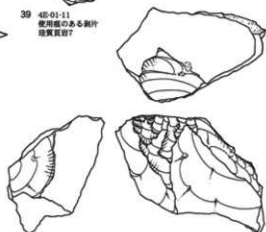
使用痕のある剝片 (24~40) 24は幅広で末端には使用痕が並ぶ。25は剝片剝離時の衝撃により、主要剝離面に稜を持つ。右側縁の自然面と主要剝離面が折りなす稜には使用による微細剝離痕が観察される。26は点状打面である。27は右下縁部に使用痕が残る。28は厚みがあり、直径1mm前後の夾雑物を含む。右下縁部に刃こぼれ状の微細剝離痕が並ぶ。29は不定形で加撃の際に砕けたと思われる。最大長は約1.7cmと小型であるが、右下縁辺による微細剝離痕が並ぶ。30は小型で、打面は小さく末端に向かうにしたがって幅広になる。その末端縁辺には刃こぼれ痕が直線的に並び、右端の尖端部にまで到達する。31は折れた面を打面している。右側縁に使用痕あり。打面部の鋭角にはねあがった末端部分には刃潰し状の微細剝離痕が並ぶ。32は直径5mmほどの夾雑物を多く含む。破碎した石片の張り出した縁辺に微細剝離痕がみられる。33は点状打面であり、不定形な剝片の張り出した縁辺および抉入部に使用痕がみられる。34の打面は加撃時の折れで欠落している。左側縁部に使用痕、下部には折れが看取される。35は剝離時に打面がとんでいる。打瘤の膨らみは半円を描く。主要剝離面左上縁辺に刃こぼれあり。36は打角120°である。内湾剝離が底面を切り、右縁辺に刃こぼれ状の使用痕がみられる。37の背面の剝離方向は主要剝離面とすべて同一である。右から下縁辺にかけて使用痕がみられる。背面上部の小剝離痕は頭部調整を行った痕と思われる。38は平坦打面から剝離されている。縁辺には使用痕が観察される。39は青灰~灰褐色の良質な珪質頁岩である。左縁辺中央部には0.7cmにわたって使用した際についてと思われる微細剝離痕が看取される。40は頭部調整のある自然面打面である。左上側縁に使用痕がみられる。

石核 (41~45) 41の母岩である黒曜石1は61点で、11ブロック出土石器に占める割合は16.58%である。また黒曜石1の全重量は122.29gであり、41は61.24gとその半量を占める。稜の調整を行いながら、打面・作業面を頻りに換えつつ剝片を剝離した痕跡がうかがえる。正面図上方からの調整痕は頭部調整としての意図を持つものと思われる。42の母岩は珪質頁岩1である。珪質頁岩1は40点が検出されたが、石核はこの42(a+b)のみである。裏面にボジ面を有する大型の剝片素材であり、この主要剝離面を打面にして剝離作業が行われているが、他38片の剝片類とは接合しない。これは主に、分割されたネガ面のある方の石核が、剝片生産に利用されたものであると考えられる。43は厚みのある素材剝片の主要剝離面を打面にして加工・調整が行われている。左上端部は尖端を意識した微細調整であると思われる。①甲板面から両側縁部に向かう急角度の整形、②先端を尖らせた加工、③三角形の断面、など、むしろ角錐状石器の範疇に含めてもよいと思われる。44は透明感のある青灰色のチャートだが、節理面は黄土色である。厚みのある剝片を素材に用い、主要剝離面を打面に据えて加撃される。正面から少なくとも3片以上の小剝片が作出されたものと思われるが、同石材の剝片は4E-12グリッドからは検出されていない。45は自然面が明茶色、剝離面は暗青灰色の板状の素材である。求心的な打撃で剝離作業が行われている。

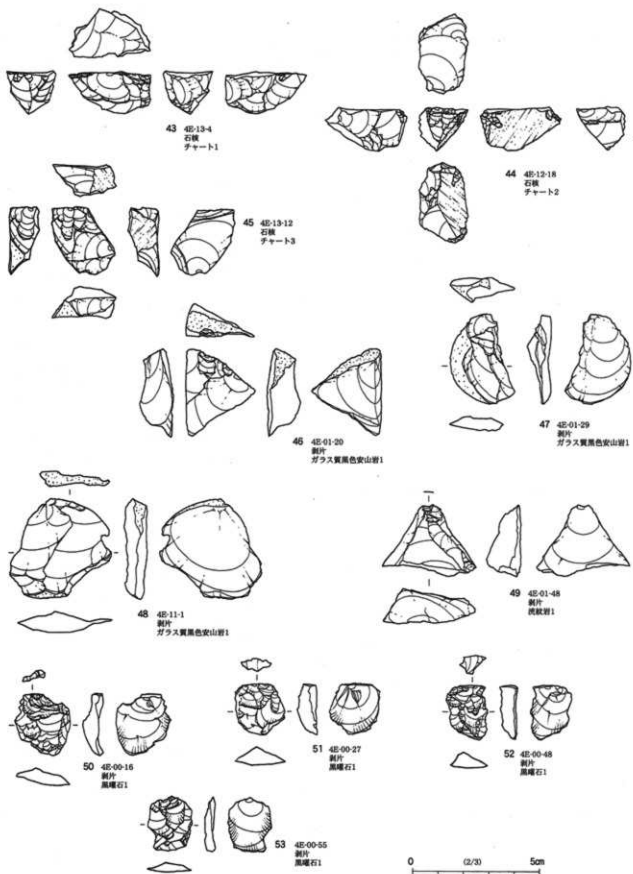
剝片 (46~71) 46~48は同一母岩であり、同様の剝離工程の所産である。同一方向からの連続した加撃により、打面と側縁部に帯状に自然面が残る。49の石基は黄灰~灰色で、直径1mmほどの石英粒、黒・淡黄褐色の斑點が入る。他に同一母岩は存在しない。50~53は同一母岩である。頭部調整があり、最大長はそれぞれ2.5cm未満である。54は小打面で頭部調整がみられる。末端はウトラパッセである。55は線状打面で、器厚は中高の円形である。56は線状打面で下縁に折れがみられる。57は末端縁が幅広の末広りの形をなしている。58の背面の連続した剝離痕は石刃を作出したものか。59は56と同一の剝離工程によって作



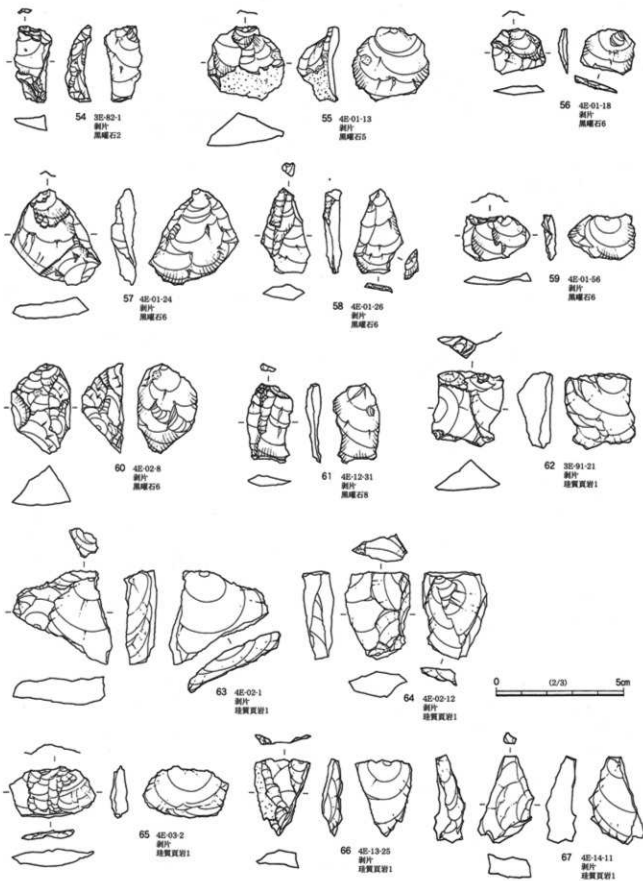
第68図 第11ブロック出土石器(3)



第69図 第11ブロック出土石器(4)



第70図 第11ブロック出土石器(5)



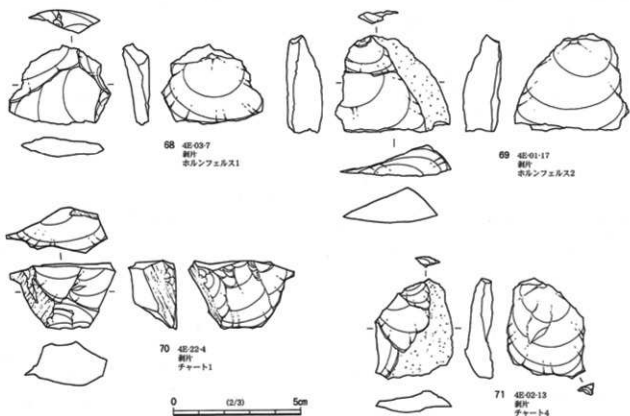
第71図 第11ブロック出土石器(6)

出されている。60は点状打面であり、器厚は中高の石刃である。61は頭部調整された単打面である。62～67は同一母岩であるが、前述の42とは接合しない。68は灰白の斑が入る灰色のホルンフェルスである。頁岩が熱変成を受けたものである。多方向から剥離痕がみられる。原礫は拳大の大きさ。69は自然面を削いで作出した打面から連続した剥離作業が行われたうちの1片である。下部は折れにより残存しない。70は厚みのある剥片の下部である。上部は主要剥離面と同時に割れる。71は原礫面を削いで打面を作出した後同一方向からの連続した剥離作業により得られた剥片のうちの1片である。背面の1/2は自然面が占める。

第14表 第11ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナツメ岩	赤銅石	黒銅石	緑銅石	緑石	磨石	二次加工のある器具	使用痕のある器具	石核	剥片	砕片	礫	片数	重量(g)	重量比	
ガラス質黒色火山岩1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	8	2.17%	30.95	2.19%
ガラス質黒色火山岩2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0.54%	2.30	0.16%
トトロ石	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.27%	0.20	0.01%
火山岩 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.27%	87.27	6.19%
火山岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	169.06	11.99%
火山岩 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.54%	56.69	4.02%
火山岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	17.25	1.22%
炭状岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.27%	8.58	0.61%
炭状岩 2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.27%	209.28	14.84%
炭状岩 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	45.59	3.22%
炭状岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	13.24	0.94%
炭状岩 5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	1.03	0.07%
炭状岩 6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	106.69	7.58%
黒礫石 1	0	0	1	0	0	0	1	4	1	11	43	0	61	16.88%	122.29	8.67%
黒礫石 2	0	0	0	1	0	0	1	1	0	9	35	0	47	12.77%	34.23	2.43%
黒礫石 3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	4	24	0	40	10.87%	11.71	0.82%
黒礫石 4	0	0	1	0	0	0	2	1	0	3	32	0	39	10.40%	25.47	1.81%
黒礫石 5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	0	0	8	2.17%	13.29	0.94%
黒礫石 6	1	1	0	0	1	0	1	1	0	16	24	0	38	10.00%	55.64	3.93%
黒礫石 7	1	0	0	0	0	0	0	2	0	8	9	0	20	5.43%	19.74	1.40%
黒礫石 8	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3	5	0	10	2.72%	12.73	0.90%
砂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	53.85	3.80%
緑質頁岩 1	0	0	0	0	0	0	1	2	102	25	19	0	39(40)	10.40%	188.51	13.27%
緑質頁岩 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.27%	4.12	0.29%
緑質頁岩 3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.27%	2.23	0.16%
緑質頁岩 4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.27%	8.80	0.61%
緑質頁岩 5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.27%	3.62	0.26%
緑質頁岩 6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.27%	5.08	0.36%
緑質頁岩 7	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.27%	11.36	0.81%
ホルンフェルス 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	360	2	0	700	1.90%	18.12	1.07%
ホルンフェルス 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0.54%	21.67	1.54%
ホルンフェルス 3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0.54%	5.72	0.41%
ホルンフェルス 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.27%	1.00	0.07%
チャート 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3	0.82%	36.87	2.61%
チャート 2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.27%	9.38	0.67%
チャート 3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.27%	7.22	0.51%
チャート 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.27%	10.93	0.78%
互層(メノウ含む)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.27%	4.58	0.32%
水晶	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.27%	0.87	0.06%
合 計	4	3	2	2	1	2	9	17	560	104(105)	209	19	368(370)	100.00%	1410.26	100.00%

注 ()は出土数



第72図 第11ブロック出土石器(7)

2 第12ブロック (第73・74図、第15表、図版27・28)

遺物分布状況

遺物は3 H-82・83・93・94に分布する。北半部の北東に位置し、標高25m、南北3.7m、東西約5mの平地に11点が分布する。すべて同一母岩で玉髓(メノウ含む)2である。搔器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片が1点ずつと剥片8点が出土している。3 H-82の2点はグリッド東南端から出土し、ブロック寄りに分布するが、出土地点は明確ではない。遺物は24.579m～24.336mの間に分布し、約24cmの高低差を測り、Ⅲ層下部から粘質土上面に投影されるが、中心層はⅣ層～Ⅴ層であるものと思われる。

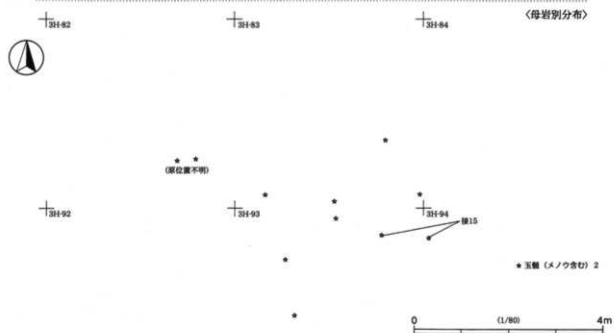
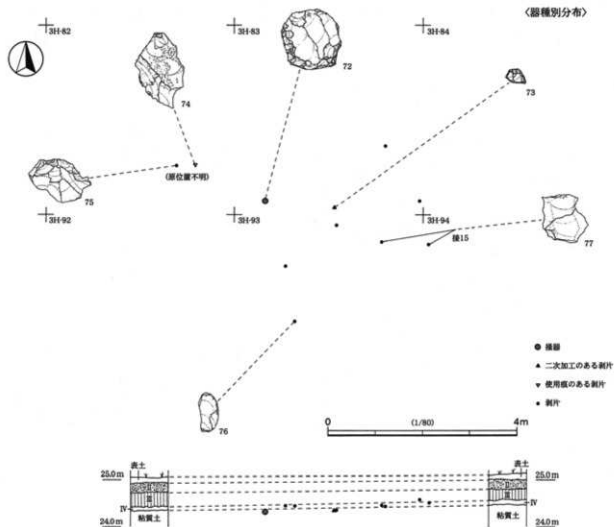
出土石器

搔器 (72) 72は角張った感はあるがほぼ円形に加工されている。厚みのある剥片を素材とし、側縁は下縁よりも鋭角に調整される。下縁は縁辺というより主要剥離面からの90°に近い加撃によって面的な調整が施されている。また、素材時の打面部分は除去されずに残されている。

二次加工のある剥片 (73) 73は頭部調整があり、上部のみ残存している。

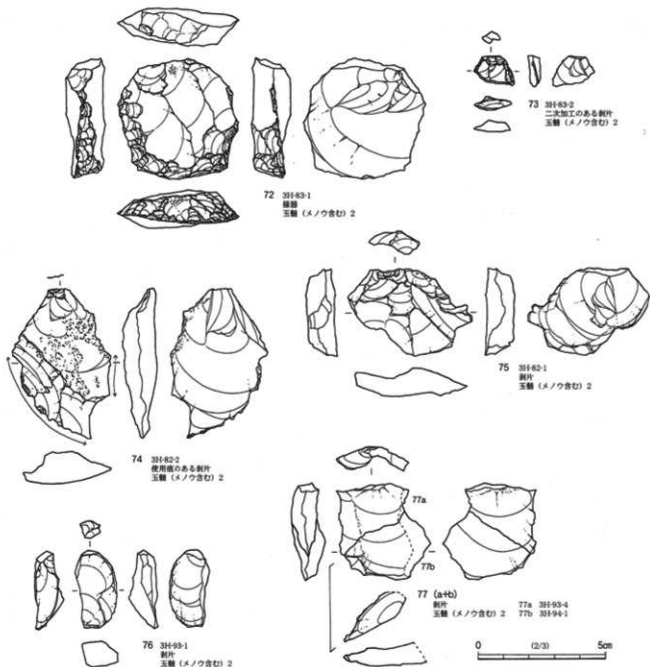
使用痕のある剥片 (74) 74の背面に残る自然面は薄茶色で剥離面との境が明確でないほど凹凸が激しい。頭部調整された打面から作出されている。左右下半の縁辺には使用痕が看取される。

剥片 (75～77) 75の背面は多方向からの剥離痕がみられ、打面部を調整しながら剥離作業が行われたことがわかる。76は打面・作業面を上下に180°回転させて剥離作業を行っている。下端には以前の打面であっ



第73図 第12ブロック遺物分布

た自然面がわずかに残存している。77は中程から上下に分割されており、2片で1片の剥片である。右縁はガジリにより欠ける。



第74図 第12ブロック出土石器

第15表 第12ブロック組成表

母岩名 / 器種	播磨	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
玉髄(メノウ含む)2	1	1	1	1	7(8)	10(11)	118.21	100.00%
合計	1	1	1	1	7(8)	10(11)	118.21	100.00%

3 第13ブロック (第75～78図、第16表、図版5・28・30)

遺物分布状況

遺物は1511・43～45・52～55・62～65・75に分布する。南半部の北東寄りに位置し、標高27m～28mを測る。地形は西から東に向かい緩やかに傾斜している。遺物は167点出土し、その内の131点は礫・礫片で占められるが、垂直分布に投影したところ、石器・礫ともIII層とIV層の境からその下20cmの褐色粘質土層に包含された。中心層はIV層下部～V層と思われる。北側の15H・44に分布の中心を持つ集中域と、南側15H・64グリッド付近を中心とした分布域を持つまとまりがある。

母岩別資料の分布

安山岩5～11・流紋岩7～18・チャート5はすべて礫であり、接合してほぼ原礫に復原できたものもあり球形・小判形・角形と様々であるが、大人の拳ほどの大きさのものが多く、ほとんどが被熱により破砕しているとみられるが、赤化は部分的であり、すべてに被熱痕が認められたわけではない。流紋岩7・8のように1m内にまとまった7点が接合する母岩、流紋岩13・チャート5のように10m以上離れて接合した資料など様々であるが、礫以外の石器の分布ともほぼ重なる。このブロックからは珪質頁岩8・9の角錐状石器が出土し、うち珪質頁岩8の資料は30mほど離れた2点が接合する。角錐状石器が折れた後再加工して小型の角錐状石器が作出されるが、調整された碎片・剥片類は出土していない。

出土石器

ナイフ形石器 (78) 78は横長剥片の打面部を腹面側からの急角度剥離によって側縁調整される。上部は折れて残存していない。

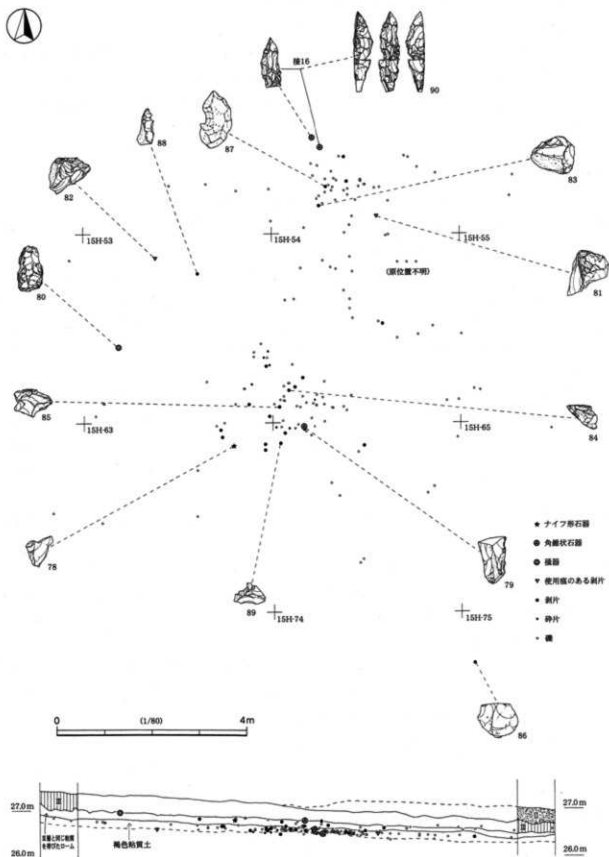
角錐状石器 (79) 79の自然面は淡い黄白色、剥離面は淡い黄褐色の珪質頁岩8で艶はない。横長剥片を縦位に用いる。右側縁は腹面からの加撃によって成形・調整されているが、左側縁は背縁上からの加撃によって成形される。折れ面は正三角形となっている。

撻器 (80) 80は両側縁に丁寧な二次加工痕が並ぶ。左側縁は55°～72°、右側縁は70°～83°である。末端は主要剥離面からの折れが背面にまで到達する。

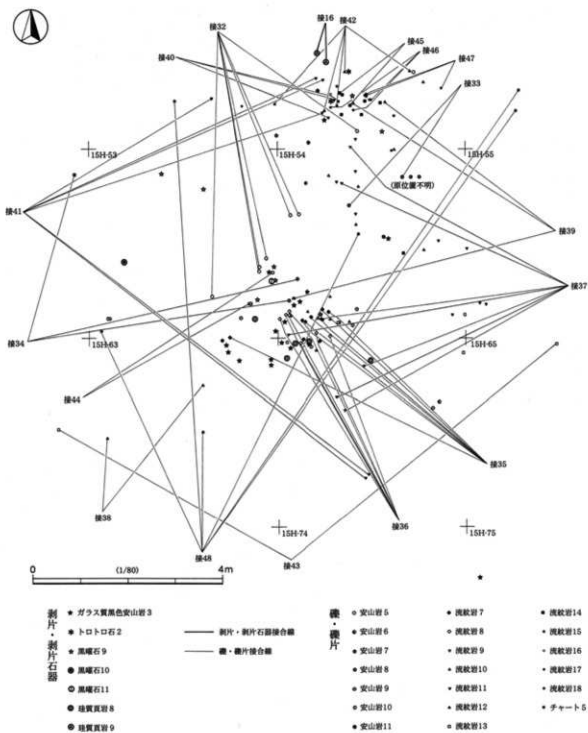
使用痕のある剥片 (81・82) 81は剥片剥離時に、打面に対し垂直に力が加わったため、打面付近にコーンが内在、中央部分の夾雑物により、背面へ抜けようとする力と末端へ向かう力が二分する。稜上の調整痕は頭部調整に切られる。石核の打面付近を整えるための調整剥片を利用したものか。82は下縁辺に刃こぼれ痕があり、右側縁には古い面が残る。

剥片 (83～89) 83～86はガラス質黒色安山岩3を母岩とし、調整された打面から同じような大きさの貝殻状剥片が作出される。87はトロトロ石の剥片である。右側縁には外周から内側へ向かう剥離痕があるようにも見えるが、この石材の特徴でもある著しい風化によって定かではない。88は透明で黒い筋のある黒曜石9で夾雑物はみられない。頭部調整の行われた打面から剥離されている。背面下半部分への剥離は打点直下の折れが回り込んだもの。89は79と同一母岩の珪質頁岩8であり、89の腹面の丸みや厚さ・器形は79の調整痕の幅・深さ・形状とはほぼ重なることから、89は79の調整剥片である可能性が高い。

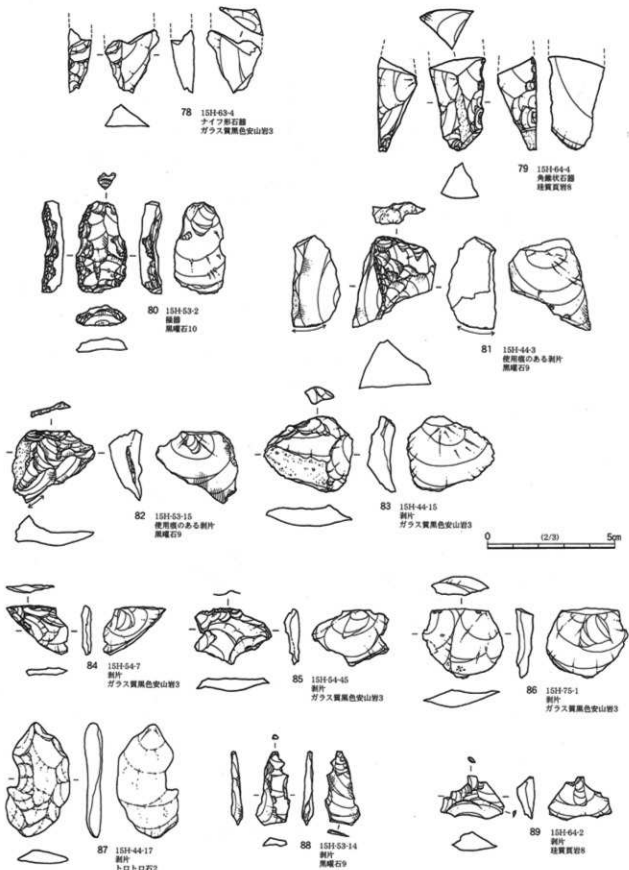
接合資料 (90) 90は油豚状光沢のある良質な珪質頁岩製角錐状石器である。甲板面から両側縁部に急斜な角度の剥離を施して、先端を尖らせている。3:2ほどの長さで折れた後、上部を再加工している。折れた部分からは加工されておらず、甲板面および稜上から加撃されている。リダクションが行われた部分はスクリーントーンによって明示した。



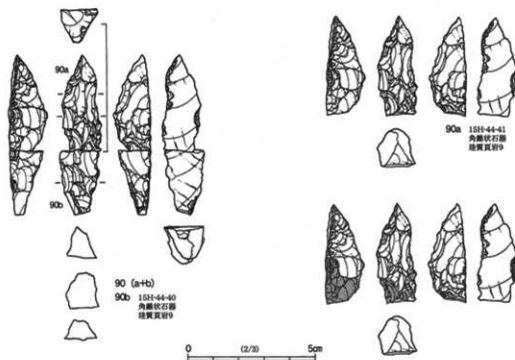
第75図 第13ブロック器種別分布



第76図 第13ブロック母岩別分布及び接合状況



第77図 第13ブロック出土石器(1)



第78図 第13ブロック出土石器(2)

第16表 第13ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	角鋸状石器	擲器	使用痕のある 刮片	刮片	砕片	種	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩3	1	0	0	0	14	2	0	17	14.91%	34.23	0.85%
トトロ石 2	0	0	0	0	2	0	0	2	1.75%	7.08	0.17%
安山岩 5	0	0	0	0	0	0	2(8)	2(8)	1.75%	391.66	9.68%
安山岩 6	0	0	0	0	0	0	1	1	0.88%	7.27	0.18%
安山岩 7	0	0	0	0	0	0	5(6)	5(6)	4.39%	136.95	3.38%
安山岩 8	0	0	0	0	0	0	1(3)	1(3)	0.88%	273.83	6.77%
安山岩 9	0	0	0	0	0	0	4	4	3.51%	175.65	4.34%
安山岩 10	0	0	0	0	0	0	3	3	2.63%	44.82	1.11%
安山岩 11	0	0	0	0	0	0	3	3	2.63%	98.04	2.42%
流紋岩 7	0	0	0	0	0	0	4(10)	4(10)	3.51%	374.84	9.26%
流紋岩 8	0	0	0	0	0	0	1(7)	1(7)	0.88%	275.48	6.81%
流紋岩 9	0	0	0	0	0	0	3(9)	3(9)	2.63%	301.39	7.45%
流紋岩 10	0	0	0	0	0	0	15(18)	15(18)	13.16%	302.97	7.49%
流紋岩 11	0	0	0	0	0	0	9(16)	9(16)	7.89%	560.41	13.85%
流紋岩 12	0	0	0	0	0	0	2(6)	2(6)	1.75%	226.56	5.60%
流紋岩 13	0	0	0	0	0	0	8(10)	8(10)	7.02%	136.51	3.37%
流紋岩 14	0	0	0	0	0	0	7(8)	7(8)	6.14%	112.58	2.78%
流紋岩 15	0	0	0	0	0	0	6(10)	6(10)	5.26%	177.15	4.38%
流紋岩 16	0	0	0	0	0	0	1	1	0.88%	84.15	2.08%
流紋岩 17	0	0	0	0	0	0	1	1	0.88%	29.51	0.73%
流紋岩 18	0	0	0	0	0	0	1	1	0.88%	61.53	1.52%
黒曜石 9	0	0	0	2	2	4	0	8	7.02%	26.92	0.67%
黒曜石 10	0	0	1	0	0	0	0	1	0.88%	5.42	0.13%
黒曜石 11	0	0	0	0	1	0	0	1	0.88%	0.32	0.01%
珪質頁岩 8	0	1	0	0	3	1	0	5	4.39%	11.94	0.30%
珪質頁岩 9	0	2	0	0	0	0	0	2	1.75%	11.90	0.29%
チャート 5	0	0	0	0	0	0	1(6)	1(6)	0.88%	178.00	4.40%
合計	1	3	1	2	22	7	78(131)	114(167)	100.00%	4047.11	100.00%

※ () は出土点数

4 第14ブロック (第79・80図、第17表、図版5・28)

遺物分布状況

遺物は15H-49、15I-40・50に分布する。南半部の北東寄りに位置し、標高は約26m、北西から南東に向かい緩やかに傾斜する。南北3.8m、東西5.3mの中に17点の遺物を包含する。

土層断面図をみると、いわゆる水つきロームのため、IV層以下ははっきりしたローム層区分はない。ソフトロームの下10cm～20cmほどの褐色粘質土層に直線上に並ぶ。珪質頁岩13の剥片1点のみがIII層に含まれているが、何らかの自然現象により持ち上げられたものと判断し、同一母岩の5点と同様の時期の所産とした。

母岩別資料の分布

石材は、トトロ石・安山岩・流紋岩・黒曜石・珪質頁岩の5種類であり、安山岩と流紋岩は礫である。安山岩12の礫2片の接合資料・珪質頁岩13の剥片類6点・黒曜石12の2点を除き、トトロ石3・安山岩13・流紋岩19・黒曜石13・珪質頁岩10～12はすべて1点ずつ出土する。

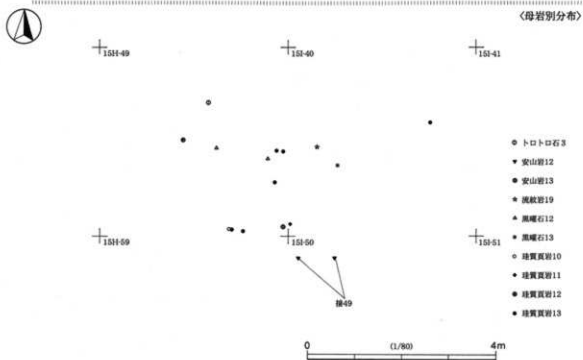
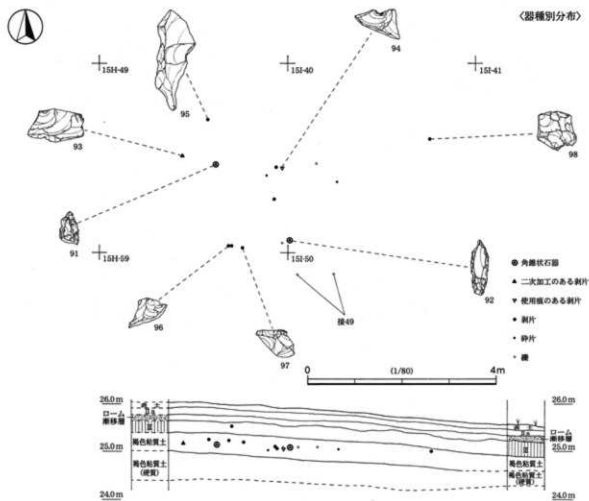
出土石器

角錐状石器 (91・92) 91は不透明で夾雑物を多く含む黒曜石12であり、横長剥片素材を使用している。腹面から加撃されており、右縁辺は67°～69°、左縁辺は70°～90°で調整されている。先端部は稜上から調整剥離が入っており、下部は折れにより遺存していない。92は灰白色の滑らかな珪質頁岩11であり、他に同一母岩は存在しない。横長剥片を縦用に用いている。主要剥離面を打面に据えて急角度の調整がほぼ全面に施されている。打面側と末端部の二側縁を面状に成形後、小剥離を施して木葉形に整形している。左側縁上部には尖端を意識してか、抉るような加工が施されている。同様の工程を示す石器は、白井町(現白井市)一本松南遺跡第5文化層第11ブロックからも出土している。

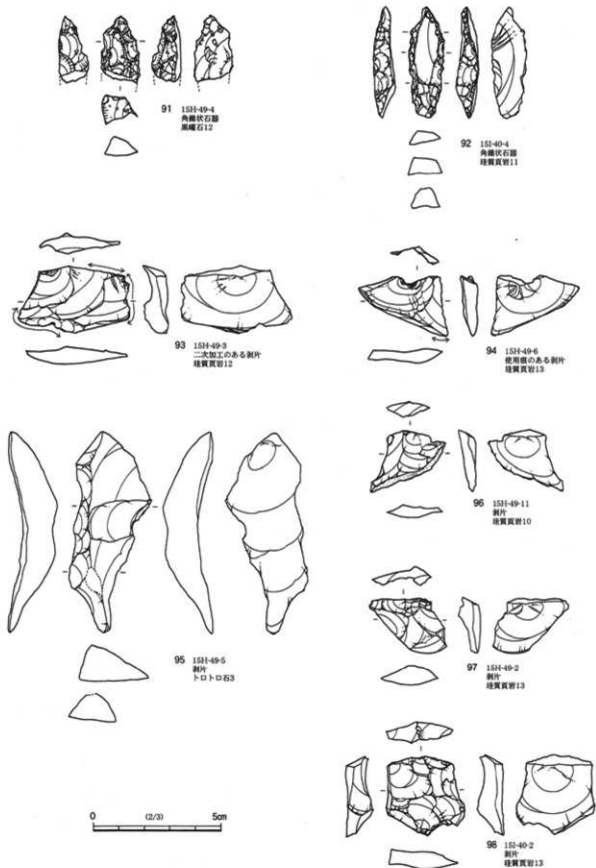
二次加工のある剥片 (93) 93は同一方向からの連続した剥離によって作出された剥片の1片であるが、他に同一母岩は検出されず、珪質頁岩12はこの1点のみである。腹面から加撃された剥離痕が背面下部に残ることから二次加工のある剥片ととらえた。縁辺に使用痕がみられる。

使用痕のある剥片 (94) 94は淡黄灰白色で光沢のない珪質頁岩13であり、第15ブロックに出土している珪質頁岩14・15に似る。最大長が2.36cmと短矩である。左側縁と下縁とが尖端をなし、そこに刃こぼれ状の使用痕が看取される。

剥片 (95～98) 95は点状打面である。左側縁部には、腹面側からの連続した剥片剥離作業が行われた痕跡がうかがえる。石器器面の調整を行うためのものか。第13ブロックの剥片87と近い形状である。96の幅広い末端は、石核底面である自然面を帯状に残し背面を構成している。背面の剥離は同一打面から同一方向に加撃されている。97・98は94と同一母岩であり、同様の工程によって作出されたものと推定される。背面には多方向からの剥離痕があり、また打面付近には頭部調整痕があることから、石核を調整しながら幅広い縁辺を持つ剥片を作出していったものと推察される。



第79図 第14ブロック遺物分布



第80図 第14ブロック出土石器

第17表 第14ブロック組成表

母岩名 / 器種	角隕状石礫	二次加工のある 剥片	使用痕のある 剥片	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
トロトロ石 3	0	0	0	1	0	0	1	6.25%	23.79	13.14%
安山岩 12	0	0	0	0	0	1(2)	1(2)	6.25%	47.56	26.26%
安山岩 13	0	0	0	0	0	1	1	6.25%	69.80	38.54%
流紋岩 19	0	0	0	0	0	1	1	6.25%	3.50	1.93%
黒曜石 12	1	0	0	0	1	0	2	12.50%	3.76	2.08%
黒曜石 13	0	0	0	0	1	0	1	6.25%	0.39	0.22%
珪質頁岩 10	0	0	0	1	0	0	1	6.25%	2.25	1.24%
珪質頁岩 11	1	0	0	0	0	0	1	6.25%	4.52	2.50%
珪質頁岩 12	0	1	0	0	0	0	1	6.25%	8.66	4.78%
珪質頁岩 13	0	0	1	5	0	0	6	37.50%	16.87	9.32%
合計	2	1	1	7	2	3(4)	16(17)	100.00%	181.10	100.00%

※ () は出土点数

5 第15ブロック (第81~85図、第18表、図版5・28・30)

遺物分布状況

遺物は15H-84~87・94~97、16H-06に分布する。南半部の中央から北東寄りに位置し、標高は26m~27mを測る。15H-94~96グリッドを中心に南北8.4m、東西12.3mの範囲内に剥片石器と礫・礫片93点が混在しながら分布している。

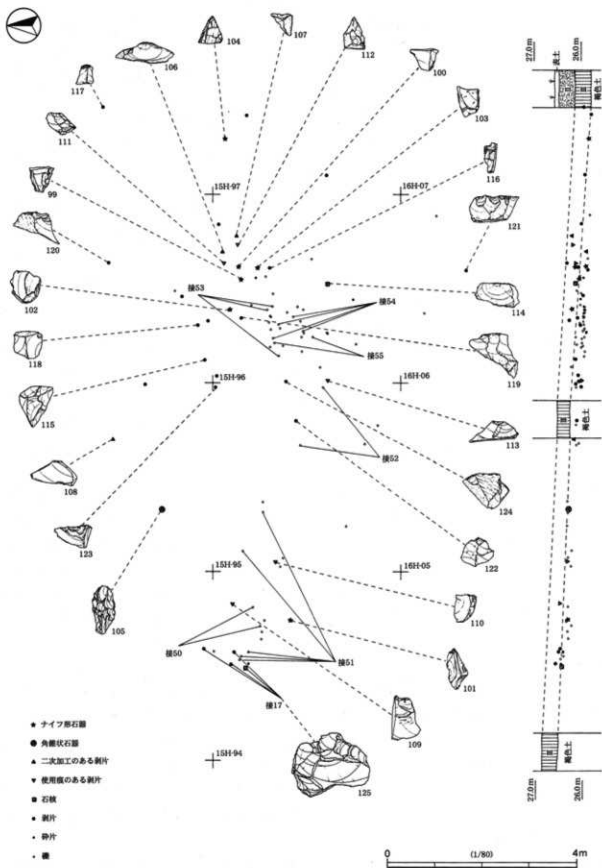
地形における石器の垂直分布状況であるが、東西に検出された土層柱状図を層の推移にしたがって線で結んだところ、東に向かう傾斜が確認できた。第15ブロックは約15mにつき0.7mの高低差を持つ西高東低の地形であり、出土石器のレベル差は0.8m、分布の平均レベルは26.1mで地形に沿うように遺物出土し、推移している。III層以下は褐色土となり、土色や構成鉱物による層区分は不可能である。遺物はIII層と褐色土の境以下10cmほどのラインに推移するため、IV層相当であると認識した。礫は剥片・石器類よりやや下方から出土しているが、これは礫の重量によるところが大きい。第15ブロックでの出土石器総重量2,062.14gのうち、礫は53点、1,873.39gであり、剥片・石器類は40点、187.75gである。これを1点あたりの重量に換算すると、礫は35.37g、剥片・石器類は4.7gとなる。重い礫は沈み、軽量の剥片・石器類は出土位置に留まったため、いわゆる水つきロームと呼ばれる出土層と遺物の重量の多寡が異なっていて、垂直分布に浮沈がみられたものである。

母岩別資料の分布

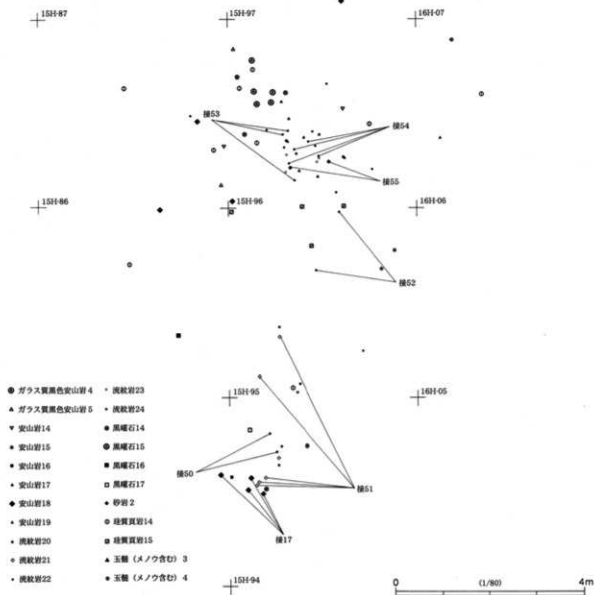
安山岩15~19(安山岩18を除く)・流紋岩20~24の礫は母岩ごとにまとまって出土し、東側の集中域からは流紋岩22・砂岩2、西側からは流紋岩20・21の接合資料を確認した。安山岩18は石核の外周を回しながら内核へ向かって加撃された剥片3点・石核1点の接合資料を含む合計9点が出土している。

接合資料は西端1m四方にまとまっているが、他5片は6m~12mほど離れ、東側の集中域に散在する。5片の剥片は明確な打点を持たず、不定形の破砕片である。このことから安山岩18は、西側で作出した剥片が東側へ持ち込まれたものではなく、当初東側で剥離作業を行ったが、小さくなった石核を携えて西側へ移動し、作業を続行したものと推測される。

この他に接合資料はなく、すべて単体で出土するガラス質黒色安山岩4・5は東側の狭い範囲内にまとまって分布する。色合いの差から別母岩としたが、同一母岩の可能性も否めない。黒曜石14は東側に3点、

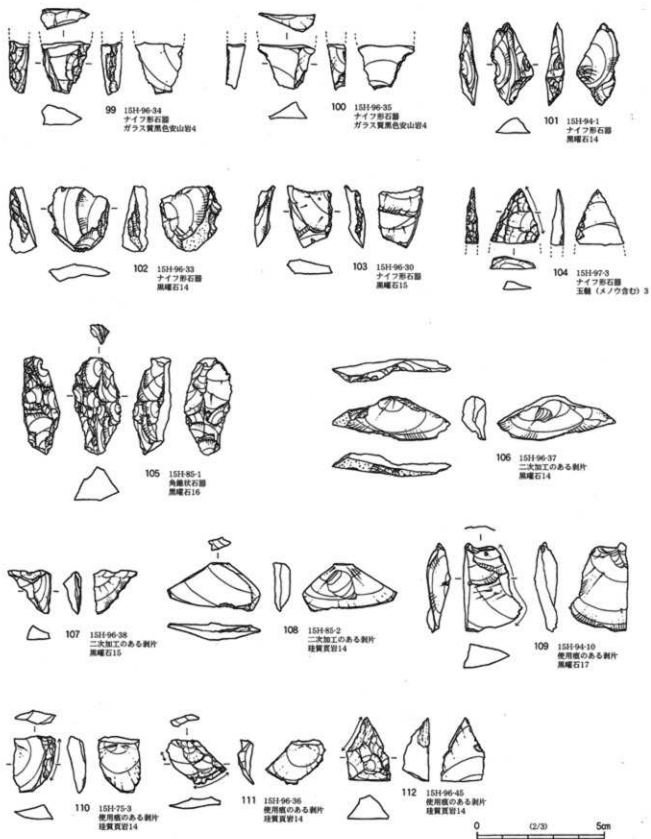


第81図 第15ブロック器種別分布

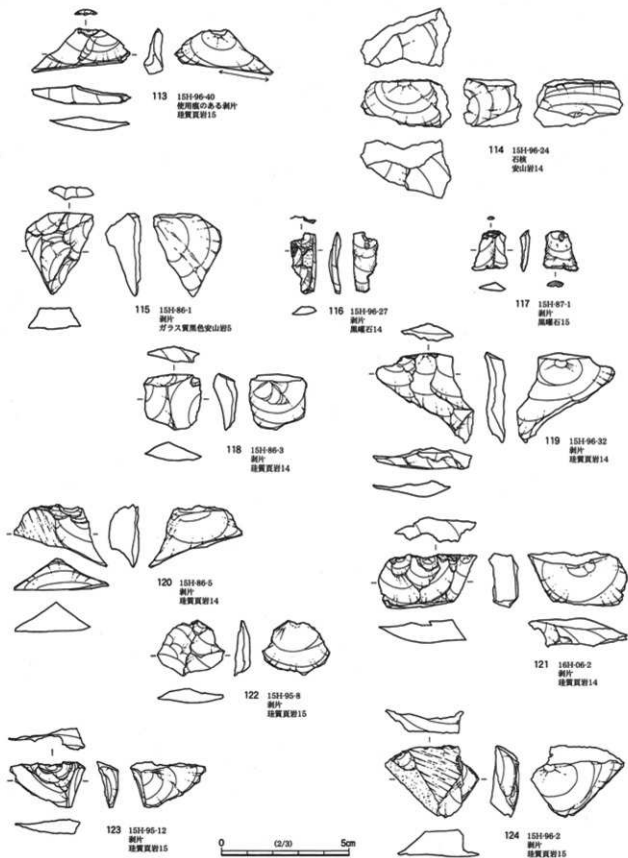


第82図 第15ブロック母岩別分布

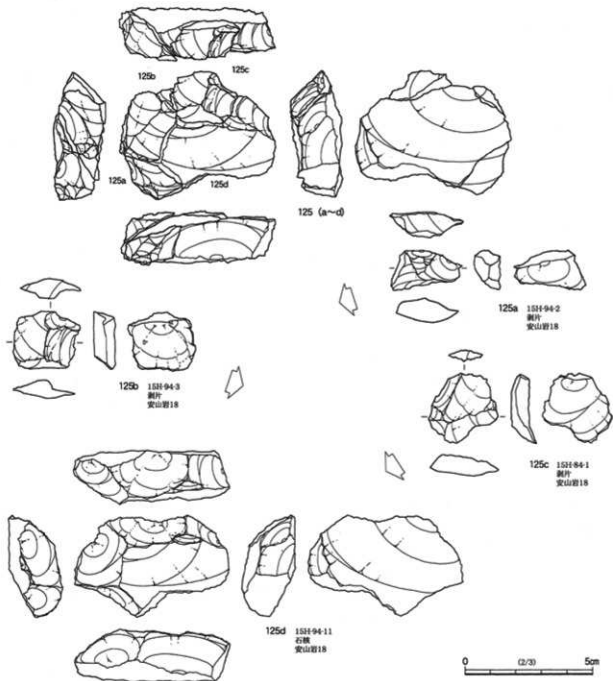
8 m離れて西側に2点分布し、透明で良質である。黒曜石15は東側に4点が分布する。夾雑物は少ないが、石基に雑味があり、脆い。黒曜石16は黒と赤茶色の混じったマーブル模様であり、夾雑物は含まない。高原山産と思われる。角錐状石器1点が西側集中域の東端から出土する。黒曜石17は西側集中域から出土する。くもりガラスのように半透明だが、夾雑物は少なく良質である。珧質頁岩14は東側の15H-96を中心にした直径7mの範囲内に散在し、その中の1点は西側集中域に入る。赤茶色がかかった面もあるが、全体的に灰白色で光沢のある石材である。珧質頁岩15の4点は、この第15ブロックの中央付近にまとまって分布



第83図 第15ブロック出土石器(1)



第84図 第15ブロック出土石器(2)



第85図 第15ブロック出土石器(3)

する。色・質感とも前述の珪質頁岩14と近似しているが、珪質頁岩14ほどの光沢はない。玉髓（メノウ含む）3・4は東側集中域の外側から出土する。淡褐白色で不透明である。

出土石器

ナイフ形石器 (99~104) 99・100はガラス質黒色安山岩4のナイフ形石器基部である。99の右側縁は平坦剥離であり、左側縁はほぼ90°の急角度剥離が施されている。100の右基部は74°~80°に調整される。上部は折れて遺存していない。101・102は透明度の高い黒曜石14を母岩とする。101は横長剥片を素材にした基

部加工のナイフ形石器である。102は底面付きの素材剥片の形状を生かし、厚みのある側縁を基部に、もう一方の薄い側縁を刃部に据えて成形・調整している。103は素材剥片の左右側縁を折り取った後に刃直し加工が施される。104は剥片の末端を刃部にしたナイフ形石器である。上部のみ遺存する。左側縁は58°～68°に調整加工される。

角錐状石器 (105) 105は漆黒の地色に赤茶色の混ざる夾雑物の少ない黒曜石16を母岩とする。同一母岩はこの1点のみである。裏面右上部は素材の甲板面であったと思われるが、全面加工が施されたことにより、わずかに平坦面をとどめている。リダクションによって小型に再生されている。

二次加工のある剥片 (106～108) 106は夾雑物が少なく透明度の高い黒曜石である。自然面を底面に据えて連続した剥離作業が行われ、作出された横長剥片の打面部・底面部に二次加工が施されている。107の打面は遺存しない。正面上部が二次加工か。108は同一母岩が9点存在する。赤みがかった部分もあるが全体的に灰白色の珪質頁岩である。艶・光沢はなく細粒でざらつく感がある。小打面から翼状の剥片が取られてはいるが、剥離軸からの打点の位置をみるかぎり、連続的な所作によるものではないと思われる。右下縁辺に二次加工痕が看取される。左端部は新欠がある。

使用痕のある剥片 (109～113) 109はくもりガラスのような半透明の黒曜石17である。夾雑物は直径1mmほどで僅少である。打面直下の折れにより、右半部のみ遺存している。右縁辺から下縁部にかけて微細な刃こぼれ痕が看取される。110・111・112は同一母岩であり、わずかに黄土色がかかった灰白色の珪質頁岩14である。110・111は平坦な打面から剥離された剥片である。110は頭部調整されており、右側縁に使用痕が看取される。111は直線状の下縁辺および左側縁の一部に刃こぼれ状の使用痕がみられる。112は使用痕のある剥片として分類したが、器形・断面形状から先端部を上部に配置してみると、ナイフ形石器あるいは角錐状石器のような利器である可能性も否めない。下半部は欠損しているが、折れ面としては抜き出さず、正面図に情報を図示した。右側縁下部には腹面側から加工されたと思われる剥離痕が看取されるが、意図されたものかどうかは不明である。左上縁辺の使用痕は刃部として使用されたものと思われる。113は110・111・112の母岩と近似した灰白色で光沢のない珪質頁岩である。小打面から加撃された翼状の剥片である。同一方向からの連続した剥離作業により作出された剥片のうちの1片であり、石核底面を有するウートラパッセである。主要剥離面と底面の折りなす角度は64°を測り、使用による微細剥離痕が看取される。

石核 (114) 114は剥離面が青みがかった灰白色の安山岩14である。凹凸があり、割れ面は歪曲する。打面は頻繁に転移され、一打一面の様相を呈する。

剥片 (115～124) 115はガラス質黒色安山岩5であり、背面に多方向からの剥離痕がみられる。末端は、右側縁と左側縁にあたる剥片末端縁辺が先端を作り出している。116の打面は剥片剥離時に粉碎している。右側面の帯状に残る古い剥離痕は自然面化し、ほとんど艶・光沢を放たない。黒曜石の原産地付近で粗割りされた素材塊が持ち込まれ、当遺跡において剥片剥離されたために時間差を感じさせる自然面が作り出されたものと思われる。117は厚みのない小型の剥片である。頭部調整はあるが、打面は点状的に小さい。118は110と同一打面から剥離された剥片であるが、頭部調整はされていない。119は主要剥離面と同一方向同一打面から連続して加撃されてきた剥片のうちの1片であり、108・110・111・120・121も同様の所産であると思われる。113・122・123・124は同一母岩であり、明～暗茶褐色の節理面を有する珪質頁岩15である。ともに最大長3cm未満の剥片であり、素材石核は柱状障を横位に据えて輪切りにするように加撃されている。作出された剥片の形状は、おおむね横長を呈する。122は貝殻状であり、打面は敲打時の弾けに

より欠落している。123は背面七部が頭部調整されている。打点直下で折れており、翼状剥片の左部のみ残存する。124は打点直下で節理折れをおこしている。主要剥離面側の末端縁辺には、連続した微細剥離度が約1.2cmにわたって看取されるが、それは意図されたものではなく、石核から剥離するにあたり偶発的についたものと推察される。

接合資料(125) 125は厚みのある剥片の腹面を打面として、125 a、125 b、125 cの順に求心的に剥離している。作出された剥片には使用痕はみられないが、125 a～125 cの形態は長幅3cmほどのやや幅広いの形状と、鋭利な側縁辺を持つなどの規格性のある剥片となっている。石核の調整をする意味あいよりも、剥片を作出することを目的としたものではないかと推察される。

第15ブロックは特定の石材を用いて横長剥片を作出している。明らかに横長剥片を素材としているものは珪質頁岩14の4点、珪質頁岩15の3点、黒曜石14の2点の計9点であり、剥片素材の石器27点のうち1/3を占める。また横長剥片を作出した石核は検出されていないことから、素材を加工するための場であったものと思われる。

第18表 第15ブロック組成表

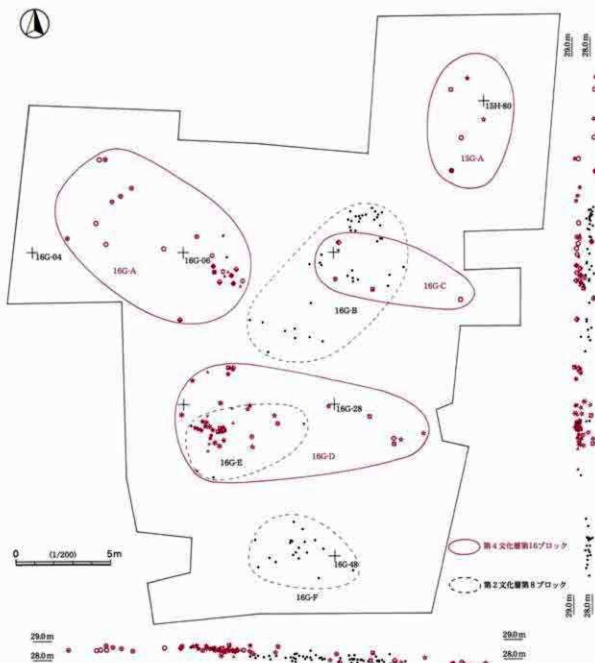
母岩名 / 器種	タイプ別石核	角縁状石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石核	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩4	2	0	0	0	0	0	0	0	2	2.47%	4.76	0.23%
ガラス質黒色安山岩5	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2.47%	13.18	0.64%
安山岩 14	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2.47%	18.95	0.77%
安山岩 15	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.47%	106.77	5.18%
安山岩 16	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.23%	30.43	1.48%
安山岩 17	0	0	0	0	0	0	0	10	10	12.30%	106.41	5.16%
安山岩 18	0	0	0	0	1	8	0	0	9	11.11%	80.93	3.92%
安山岩 19	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.23%	9.44	0.46%
流紋岩 20	0	0	0	0	0	0	0	6(7)	6(7)	7.41%	395.49	19.18%
流紋岩 21	0	0	0	0	0	0	0	2(6)	2(6)	2.47%	325.71	15.79%
流紋岩 22	0	0	0	0	0	0	0	12(18)	12(18)	14.81%	541.19	26.24%
流紋岩 23	0	0	0	0	0	0	0	4	4	4.94%	83.37	4.04%
流紋岩 24	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.23%	13.55	0.66%
黒曜石 14	2	0	1	0	0	1	1	0	5	6.17%	10.64	0.52%
黒曜石 15	1	0	1	0	0	1	1	0	4	4.94%	3.84	0.19%
黒曜石 16	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1.23%	7.97	0.39%
黒曜石 17	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.23%	4.57	0.22%
砂	2	0	0	0	0	0	0	1(2)	1(2)	1.23%	261.78	12.69%
珪質頁岩 14	0	0	1	3	0	4	1	0	9	11.11%	30.52	1.48%
珪質頁岩 15	0	0	0	1	0	3	0	0	4	4.94%	13.96	0.68%
玉髄(メノウ含む)3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1.23%	1.43	0.07%
玉髄(メノウ含む)4	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.23%	0.23	0.01%
合 計	6	1	3	5	2	20	3	41(53)	81(93)	100.00%	2062.14	100.00%

※ ()は出土点数

6 第16ブロック (第86～95図、第19表、図版5・28～30)

遺物分布状況

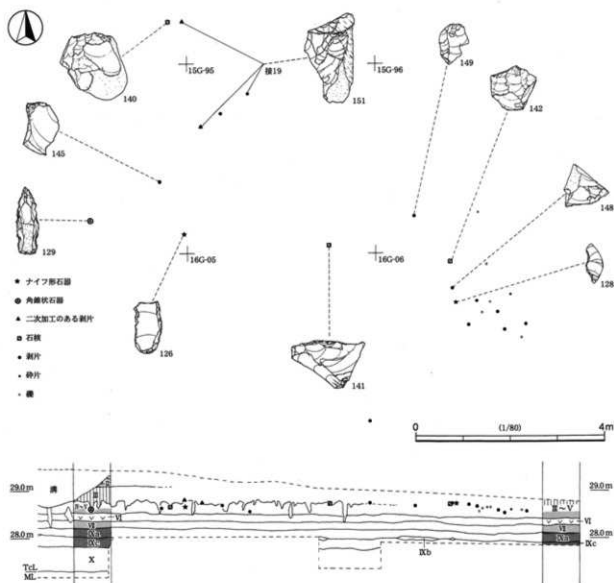
第8ブロックと同じく、南半部の北西寄りに位置し、標高29m前後、北西から東に向かい傾斜する。81点が15G-79・84・89・94～96・98、15H-80、16G-05・06・08・09・16・25～29グリッドにかけて南北21m、東西23mの範囲内に4か所の集中域を持って分布する。第2文化層第8ブロックの項でも述べているが、出土層・石材・器種などに明確な違いがみられた。ここでもまた掲載の都合上、分布の状況に従って



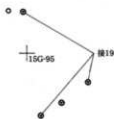
第86図 第16ブロック検出状況

4地点に分け、それぞれ北側から15G-A、16G-A、16G-C、16G-Dとした。なお、16G-C、16G-Dは2地点でまとめた上で北を左に据えて作図した。出土した遺物を器種別で分類すると、ナイフ形石器4点・角錐状石器1点・削器2点・二次加工のある剥片5点・使用痕のある剥片5点・石核5点・剥片32点・砕片7点・礫および礫片20点となる。ナイフ形石器4点は第16ブロック全体の中で散漫に分布し、角錐状石器1点は北西端から出土する。削器2点は16G-26グリッドから1.5m離れて出土した。石核は16G-Aから2点、16G-Dから2点がそれぞれのまとまりの中心から出土している。礫は16G-Aの東南3㎡と16G-Dの西南5㎡のうちにまとまって分布する。

第16ブロックの地形は、北西から南東に向かい緩やかに低くなるが、その高低差は20mにつき1mほどである。遺物の出土レベルは27.685m～28.850mであり、東西23mの中に1.165mの高低差で推移しているため、地形とほぼ同様の傾きを示す。15G-A・16G-AではⅢ層～V層、16G-C・DではⅢ層～Ⅶ層に含まれるが、分布の中心層はⅣ層～V層であると思われる。



第87図 第16ブロック器種別分布 (16G-A)



15G-96

- ガラス質黒色安山岩 6
- ガラス質黒色安山岩 7
- 安山岩 23
- 流紋岩 27
- 流紋岩 28
- ◆ 珪質頁岩 23
- ホルンフェルス 5
- ホルンフェルス 6
- 玉髄 (メノウ含む) 5
- 玉髄 (メノウ含む) 6

15G-95

16G-06

0 (1/80) 4m

第88図 第16ブロック母岩別分布 (16G-A)



〈器種別分布〉



〈母岩別分布〉

15G-89

15H-80

15G-89

15H-80



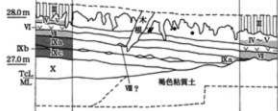
- ▲ 二次加工のある剥片
- ▼ 使用痕のある剥片
- 剥片
- 砕片

15G-99

15G-99

15H-90

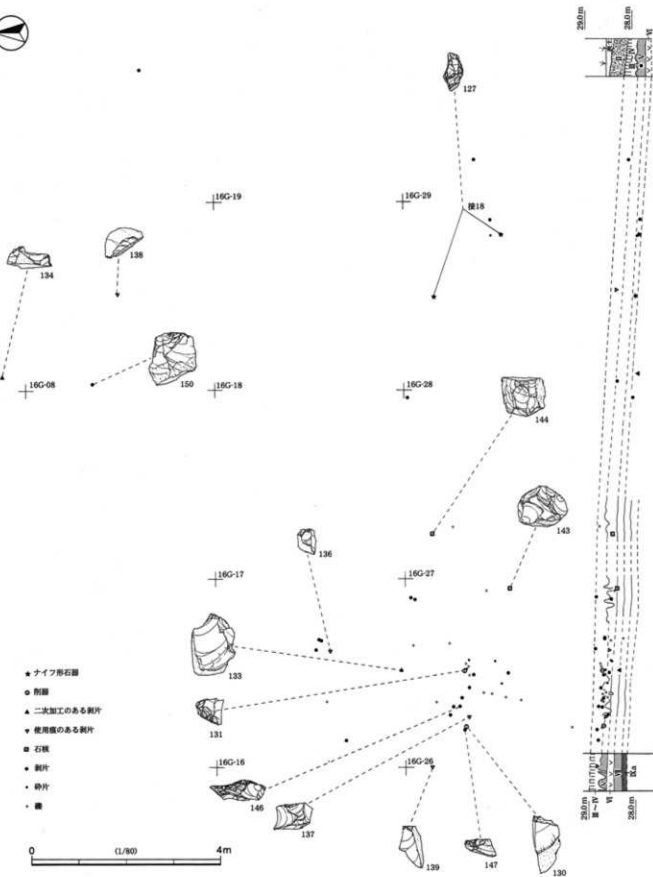
0 (1/80) 2m



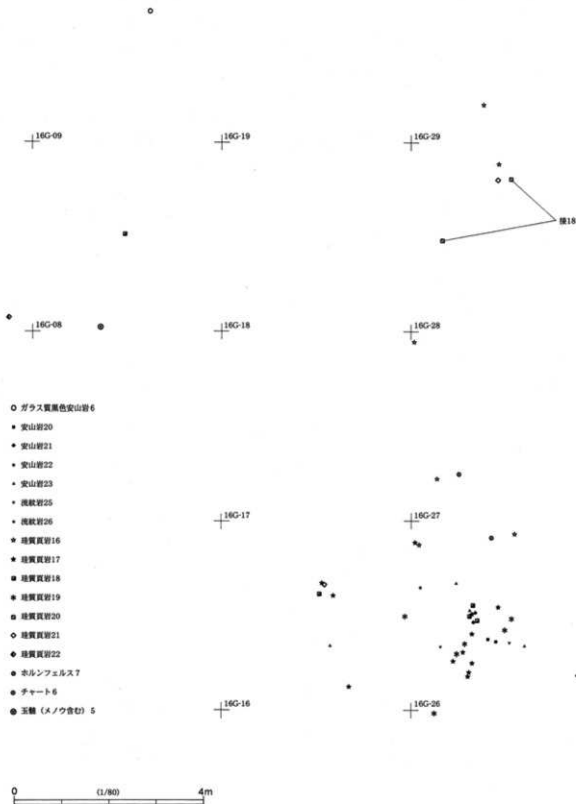
- ガラス質黒色安山岩 6
- 黒曜石 18
- 黒曜石 19
- 珪質頁岩 16
- 珪質頁岩 17

0 (1/80) 2m

第89図 第16ブロック遺物分布 (15G-A)



第90図 第16ブロック器種別分布 (16G-C・D)



第91図 第16ブロック母岩別分布 (16G-C・D)

母岩別資料の分布

ガラス質黒色安山岩6~7・安山岩20~23・流紋岩25~28・黒曜石18~19・珪質頁岩16~23・ホルンフェルス5~7・チャート6・玉髄(メノウ含む)5~6などが出土する。同一母岩はまとまって出土する傾向があり、おおむね同一集中域に収まるが、ガラス質黒色安山岩6は北半部の15G-A・16G-A・16G-Cに6点が散在する。また、当ブロック最多出土母岩である珪質頁岩17は13点を数えるが、その内の12点は南側集中域16G-Dの4mに集中し、他1点は最北端から出土する。その距離は約23mである。同じ地点に時代を分けて分布する主要石材にはきっぱりとした線引きがあり、第2文化層では信州産の黒曜石が主体であったが、第4文化層では珪質頁岩の石器類が圧倒的に多く、少量の玉髄(メノウ含む)・ガラス質黒色安山岩を伴う。また、斑晶の多い安山岩・流紋岩の焼跡もまとまって出土する。

出土石器

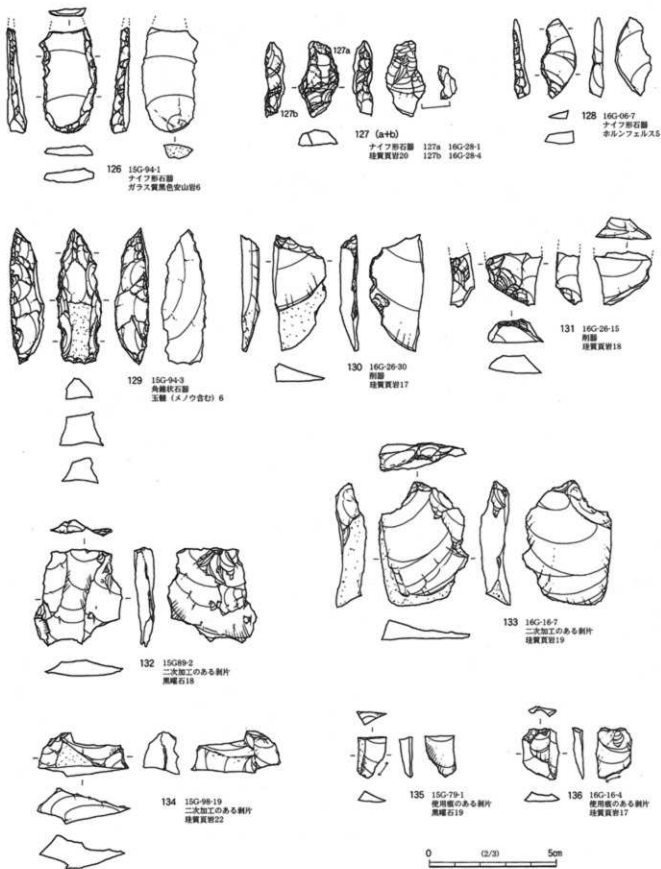
ナイフ形石器(126~128) 126は自然面を打面にした剥片を素材とし、両側縁が腹面側からの加撃によりほぼ全周にわたって加工されている。剥片の下部である刃部は折れて欠損する。141cから剝離されたものか。127は嶺岡産珪質頁岩の中でも油脂状光沢を持ち堅韌に変成した部分を素材にしている。左側縁上半部に刃部が存在したと思われるが、上部からの剝離により残存しない。下部は90°に加工され基部となる。右側縁は円弧を描くように丸みを持った整形が行われた後、小剝離によって整形されグラインディングにより縁辺が刃漬状に整えられている。128は左縁辺にのみ加工があり、すべて腹面側から加撃され、上・下部2か所は緩やかに扶れる。右側面は素材剥片の形状を生かし、無加工のままである。

角錐状石器(129) 129は玉髄(メノウ含む)6の大型の横長剥片が素材に用いられる。両側縁下縁を急角度で面的に加工し先端は鋭く尖る。断面は厚みのある三角~台形状となる。背面下部に自然面が残るが、裏面下縁にリングが終結することから少なくとも下半部にはリダクションは行われていないものと思われる。

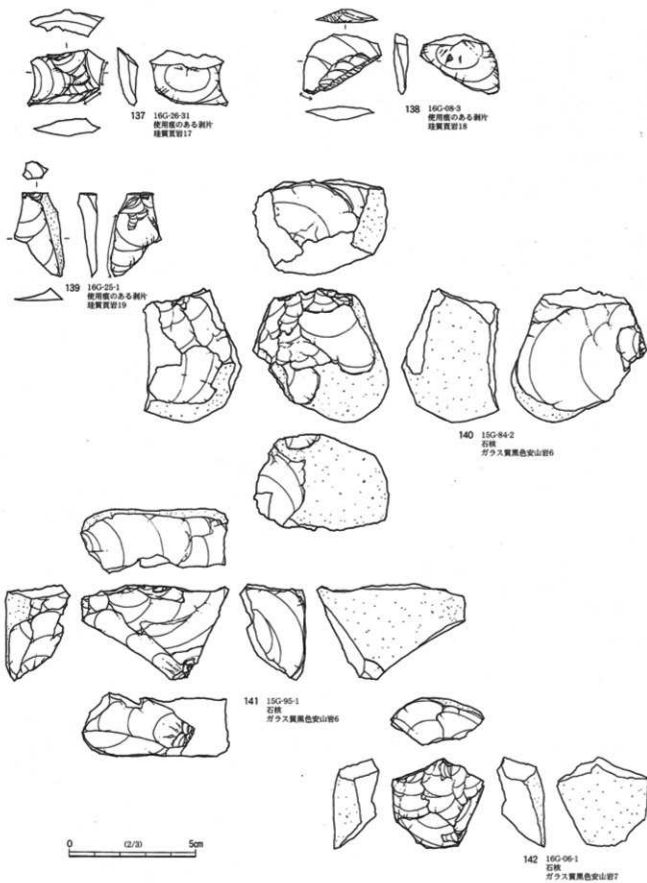
削器(130-131) 130は板状の剥片右半部を用い、右側縁をすりつぶすように微細加工を施している。左右に分けるように剝離軸に沿って一直線に折れているが、意図的なものかどうかは不明である。131は上部に折れがあり、下部は下面から、左部は裏面から二次加工が施されている。下部の加工痕は削器としての刃部出しというよりむしろ、頭部調整痕であり、加撃の際に上下逆にして剝離したため無為に残ったものではないだろうか。

二次加工のある剥片(132~134) 132は素材石核の打面から同一方向に4打以上の剥片剝離作業を行って作出された剥片のうちの1片である。打面・頭部調整はみられず、末端は階段状に収束する。右縁辺は68°~72°に加工される。133は自然面が淡黄土色、剝離面は淡緑白色の珪質頁岩19である。栃木県鹿沼に産する珪質泥岩と酷似する。背面を打面に据えて、左上部から腹面に向かって加撃したのちに素材石核を起こして、この133が剝離される。左・下面は自然面である。134の珪質頁岩22はこの1点のみである。発達した節理と内在する折れのために剥片上部は複雑な形状となっている。右側縁の加工痕は折れに切られる。背面に残る自然面と左面には黒色タール状のものが付着している。

使用痕のある剥片(135~139) 135は上部が折れている。右下縁に刃こぼれ痕あり。母岩は黒曜石19であり、同一母岩は他に存在しない。136の最大長は2cmほどではあるが、末端縁辺には使用によると思われる明確な微細剝離痕が看取される。137の打角は137°と鈍角である。幅広打面から長方形の剥片が作出されている。右縁辺および右下縁辺には刃こぼれ状の使用痕が看取される。138は節理面を打面としている。左右



第92図 第16ブロック出土石器(1)



第93図 第16ブロック出土石器(2)

第19表 第16ブロック組成表

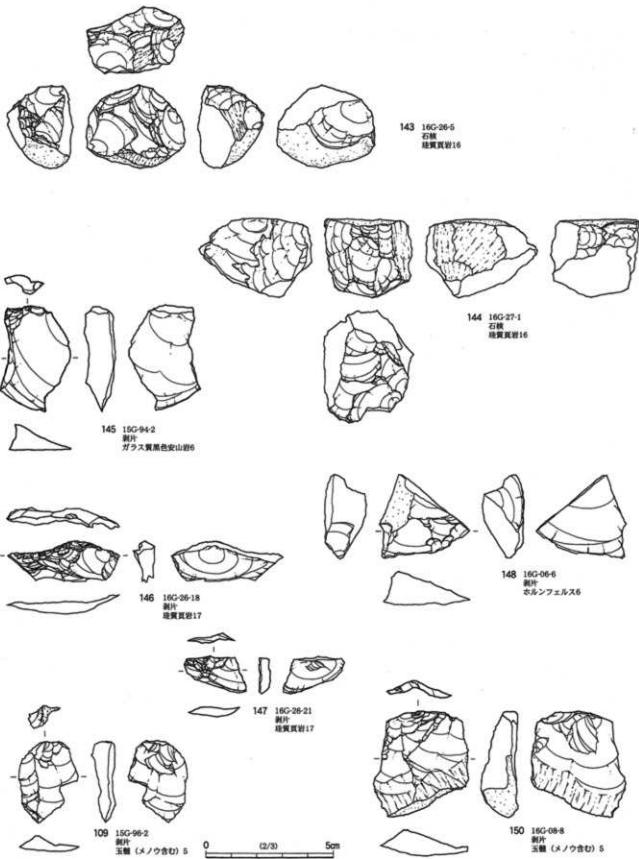
母岩名 / 母種	ナイフ形石群	角縁状石群	削面	二次加工のある 剥片	使用痕のある 剥片	石核	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(%)	重量比
ガラス質黒色安山岩6	1	0	0	0	0	2	3	0	0	6	7.50%	200.03	16.19%
ガラス質黒色安山岩7	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3	3.75%	24.53	1.99%
安山岩 20	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.50%	25.18	2.04%
安山岩 21	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.50%	106.99	8.58%
安山岩 22	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.25%	282.32	22.88%
安山岩 23	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	8.75%	138.92	11.24%
流紋岩 25	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.50%	73.19	5.92%
流紋岩 26	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.25%	30.00	2.43%
流紋岩 27	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2.50%	44.24	3.58%
流紋岩 28	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.25%	0.78	0.06%
黒曜石 18	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.25%	8.94	0.72%
黒曜石 19	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.25%	0.62	0.05%
珧質頁岩 16	0	0	0	0	0	2	4	1	0	7	8.75%	93.26	7.55%
珧質頁岩 17	0	0	1	0	2	0	8	2	0	13	16.25%	19.47	1.58%
珧質頁岩 18	0	0	1	0	1	0	2	1	0	6	7.50%	11.55	0.93%
珧質頁岩 19	0	0	0	1	1	0	3	1	0	6	7.50%	19.09	1.54%
珧質頁岩 20	1(2)	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	1.25%	3.44	0.28%	
珧質頁岩 21	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	2.50%	0.30	0.02%
珧質頁岩 22	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1.25%	5.00	0.40%
珧質頁岩 23	0	0	0	0	0	0	2	1	0	3	3.75%	3.09	0.25%
ホルンフェルス5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.25%	1.95	0.16%
ホルンフェルス6	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	3.75%	18.76	1.52%
ホルンフェルス7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.25%	3.28	0.27%
チャート6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.25%	27.70	2.24%
玉髓(メノウ含む)5	0	0	0	2	0	0	4	0	0	6	7.50%	81.06	6.56%
玉髓(メノウ含む)6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1.25%	12.91	1.04%
合 計	3(4)	1	2	5	5	5	32	7	20	80(81)	100.00%	1235.60	100.00%

※()は出土点数

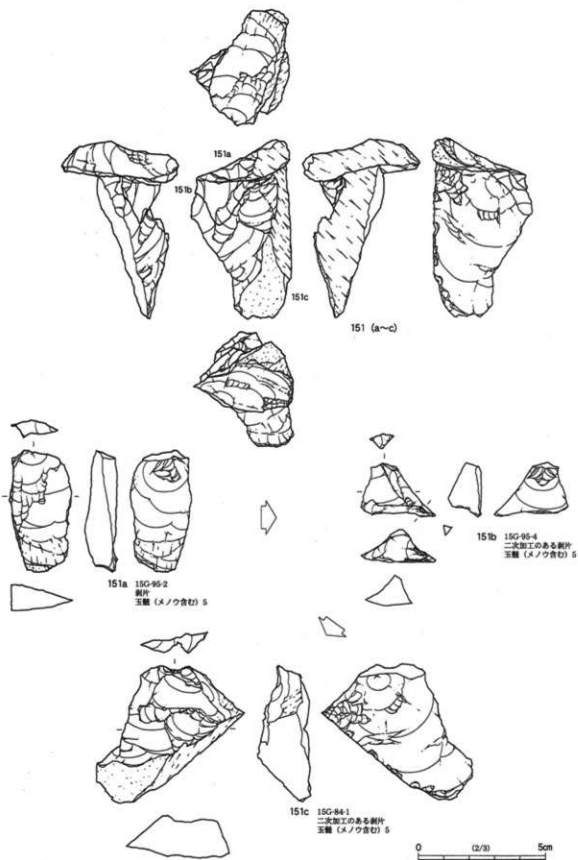
縁辺が交わる左下端部には使用痕とおぼしき微細剝離痕が並ぶ。139は背面右部に平坦な自然面を残している。自然面と主要剝離面によって作り出される縁辺は53°を測り、使用痕が看取される。

石核 (140~144) 140は鶏卵より一回りほど大きい楕円礫を素材にしている。原礫面を削いで作業面を作出したあと、頻繁に打面と作業面を入れ換えながら剝離作業が行われている。最初の礫端片が取られた後は自然面が加撃されることはない。141の裏面は平坦である。原礫の大きさは10cm×10cm×5cmほどか。石核を頻繁に回転させて剝離作業が行われているが、140と同様、自然面を打面にする剝離痕はない。142の自然面は黄褐色、剝離面は暗褐色のガラス質黒色安山岩7である。打面・作業面置換型の石核である。143は嶺岡産珧質頁岩であり、自然面は明茶褐色、剝離面は艶のある青〜緑褐色で、部分的に玉髓化している。周縁から内核へ向かう加撃によって剥片剝離作業が行われている。稜上には打面・頭部調整が行われた痕跡が残る。144は143と同一母岩だが、剝離面の光沢は鈍い。143はすべて剝離面を打面にしているが、144は自然面も打面にして作業される。これは平坦で安定した面であるなら自然面・剝離面の区別なく打面として扱うという合理性のあらわれか。

剥片 (145~150) 145~147は頭部調整のある剥片である。146は油脂状の光沢があり、堅緻で滑らかな褐色の珧質頁岩17である。珧質頁岩17は13点あり、背面上部に精緻な調整痕が並ぶが主要剝離面を切らず、頭部調整痕ととらえた。148は明青灰色で層状のうねりが特徴的なホルンフェルス6を母岩とする。上部は折れて下部のみ残る。149は自然面を打面にしている。背面には主要剝離面と同一方向から加撃された剝離



第94図 第16ブロック出土石器(3)



第95図 第16ブロック出土石器(4)

面があり、149・150はこの一連の作業によって作出されている。同一母岩は6点あり、二次加工のある剥片が2点、剥片が4点となっている。

接合資料 (151) 151の自然面は橙～灰白色。剥離面は、自然面に近い部分では橙色をなす。白色から澄んだ黄橙色が流れるような縞模様となり、一部結晶化している。打面・作業面を置き換えながら剥離作業が行われ、剥離された151 b 下端部および151 c 縁辺には二次加工が施される。

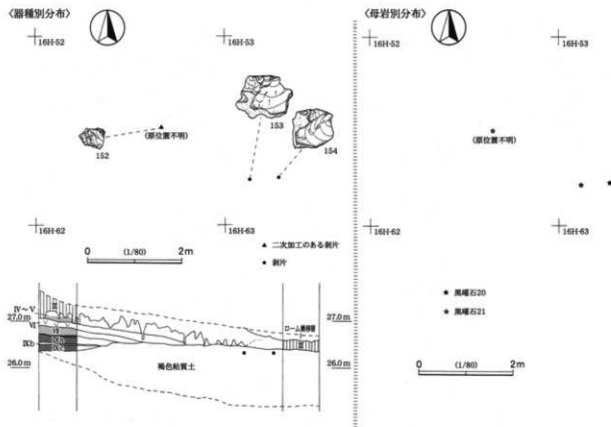
7 第17ブロック (第96・97図、第20表、図版5・29)

遺物分布状況

南半部中央の16H-52・53グリッド中4 m²～6 m²の範囲から黒曜石3点が出土した。標高は27m前後であり、西から東へ傾斜している。出土した3点のうち、16H-52グリッド出土の剥片は検出地点が不明確であるが、16H-53出土の2点間は0.6mで出土レベルは26.3m前後、0.03mほどの高低差である。16H-52グリッド付近はIXc層まで確認できたが、わずか6 mほど東ではIII層のソフトローム層以下、層序区分は不明瞭であり、粘性を帯びた褐色粘質土となる。遺物はその褐色粘質土の上方から出土している。

母岩別資料の分布

黒曜石20・黒曜石21の2母岩、全3点のみで構成されるブロックである。黒曜石20の石基は鈍い灰黒色で、灰白色の凝灰岩のような斑によって脆い印象を受ける。黒曜石21は漆黒の石基である。夾雑物は茶色、直径1 mm～2 mm、高原山産かと思われる。

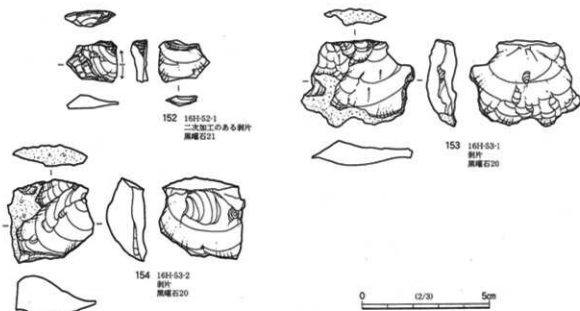


第96図 第17ブロック遺物分布

出土石器

二次加工のある剥片 (152) 152の右側縁部には使用痕がみられる。上・下部は折れにより欠損している。上部は折れのあと、小へ微細剝離痕によって二次加工される。上下は意図を持った折り取りか。黒曜石21はこの1点のみである。

剥片 (153・154) 153・154は黄～薄茶色の夾雑物が雲状に石基と混じりあい、淡い黄土色の斑晶が入る黒曜石20である。調整された石核の平坦な自然面を打面にして剝離されている。



第97図 第17ブロック出土石器

第20表 第17ブロック組成表

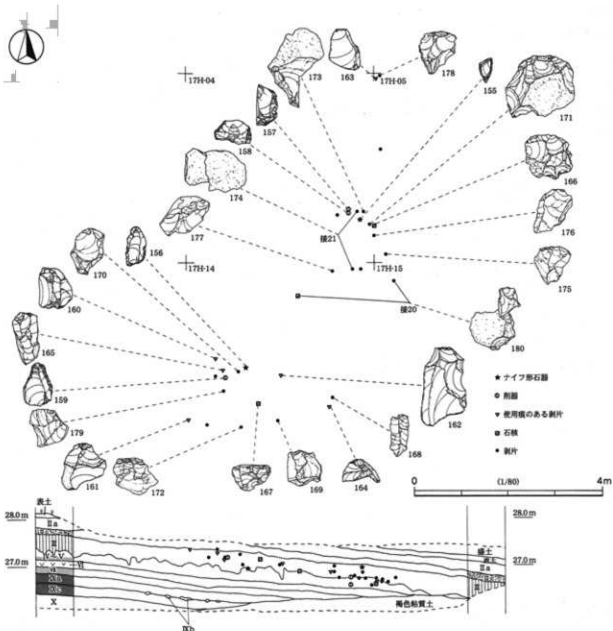
母岩名 / 器種	二次加工のある剥片	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石 20	0	2	2	66.67%	26.45	94.30%
黒曜石 21	1	0	1	33.33%	1.60	5.70%
合計	1	2	3	100.00%	28.05	100.00%

8 第18ブロック (第98～102図、第21表、図版5・29)

遺物分布状況

遺物は17H-04・05・14・15に分布する。南半部の中央から南東寄りに位置する。標高27m～28m、標高差は0.8mを測る。17H-04グリッドの東南部を中心とする北側分布域と17H-14グリッドの西側付近を中心とする西南側分布域があり、北側は玉髄（メノウ含む）、西南側は珪質頁岩がまとまって出土している。

垂直分布状況であるが第17ブロック同様、西から東へ傾斜する地形であり、遺物も等高線に応じて分布する。遺物は26.608m～27.378mの0.77mの間に分布し、西南側はⅢ層に、北側はⅢ層～Ⅴ層に包含されるが、調査時の所見では「Ⅳ層～Ⅴ層に分布の中心がある」との記載があり、ブロック全体にわたって



第98図 第18ブロック器種別分布

チャート7・珪質頁岩27など、同一母岩の分布がみられることから、中心層はIV層～V層であると判断した。

母岩別資料の分布

チャートを除けば珪質頁岩と玉髓（メノウ含む）の2種類の石材のみで構成されるブロックである。珪質頁岩24～31、玉髓（メノウ含む）7～14と、使用される母岩の数は16を数え、33点出土したうちの28点に意図的な意味合いがみられたため、実測した。

北側の集中域では玉髓（メノウ含む）7が7点出土するが、このうち4点に接合関係がみられ、2個体が接合する。自然面を残す石片が多く、剥離面から自然面を剥ぐように求心的に加工された石核も出土しているが、原礫を加工する初期の段階であると思われる。



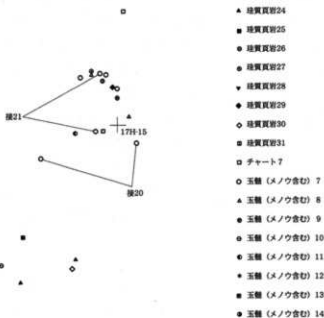
17H-04

17H-05

17H-14

17H-15

17H-24



- ▲ 珪質頁岩24
- 珪質頁岩25
- 珪質頁岩26
- 珪質頁岩27
- ▼ 珪質頁岩28
- ◆ 珪質頁岩29
- ◇ 珪質頁岩30
- 珪質頁岩31
- ロ チャート7
- 玉髓 (メノウ含む) 7
- ▲ 玉髓 (メノウ含む) 8
- 玉髓 (メノウ含む) 9
- 玉髓 (メノウ含む) 10
- 玉髓 (メノウ含む) 11
- ◆ 玉髓 (メノウ含む) 12
- 玉髓 (メノウ含む) 13
- 玉髓 (メノウ含む) 14

0 (1/80) 4m

第99図 第18ブロック母岩別分布

この西南側にも15点がまとまって出土しており、珪質頁岩24の6点が構成の中心をなす。北側はおおまかに玉髓（メノウ含む）、西南側は珪質頁岩がまとまりを作っている。

出土石器

ナイフ形石器 (155~156) 155は最大長1.89cmと小型である。剥片の末端縁辺を刃部とし、両側縁に刃潰し加工が施されている。調整部分は76°~82°、刃部は52°である。156は素材剥片時の自然面打面がわずかに残る。その打面付近を基部に、末端縁辺を刃部に据えている。左縁辺は刃こぼれが顕著である。右下縁辺は交互剝離による加工で右側縁のラインは波状を描く。

削器 (157~159) 157の左半部は成形後に折れて欠損している。右縁辺は36°~52°の平坦剝離によって器厚を削ぐように成形されている。右下縁辺は70°~76°に加工される。158は半透明から白色の玉髓（メノウ含む）である。左縁辺および右縁辺に30°~48°の加工痕がある。右肩部は使用による刃こぼれが直線状についており、上部の折れに切られる。この折れは下部と同様、調整加工時あるいは使用時に折れたものと思われる。159は赤紫、茶褐色、薄茶色が光沢のある縞模様を織りなす碧玉である。おおまかに玉髓として分類した。素材剥片の右肩部および末端部に自然面が残る。主要剝離面と同一方向から連続して剝離された数枚の剥片のうち1片であるが、他に同一母岩の検出はない。

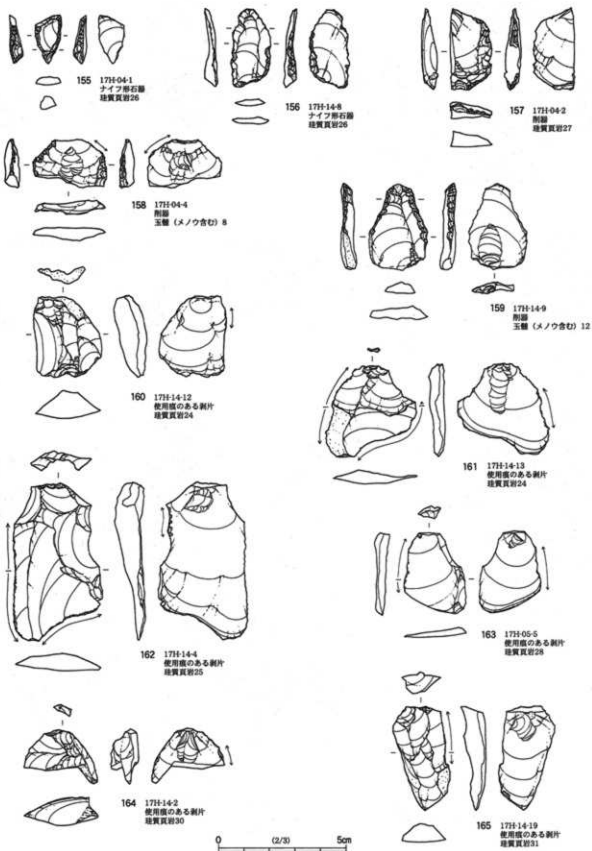
使用痕のある剥片 (160~165) 160は主要剝離面と逆方向から3面以上剝離した後、90°打点を変えて左方向から剝離している。その後90°回転して自然面から160を剝離している。同一母岩は全6点出土している

が、接合関係はない。左縁辺に刃こぼれ状の使用痕がみられる。161は頭部調整痕が看取される。小打面から加撃された末広がりの末端を持つ。左下部に自然面が残る厚みのない剥片である。左および下縁辺には使用痕が看取される。162の背面には多方向からの剥離痕がみられるが、打点は遠い。頭部調整が行われ、打面を整えてから剥離されている。直線的な左縁・右上縁および緩やかに内湾する末端の下縁辺には使用によるものと思われる微細剥離痕が並ぶ。163の打面には調整痕はみられない。打角はほぼ直角の92°である。小打面を持ち末広がりの剥片となっている。左側縁に微細剥離痕がみられる。末端は背面に回り込んでいる。164は上部のみ遺存している。背面には右側面を打面として2面以上の剥片が剥離され、頭部調整が行われた痕跡が残るが、剥離作業には至らず、打面から164が作出される。主要剥離面の右縁辺には使用による微細剥離痕が残る。165は背面右下部に自然面が残るが主要剥離面と同一方向からの加撃によって規則的に剥離されたうちの1片である。右側縁は56°の角度を測り、使用による微細剥離痕が観察される。

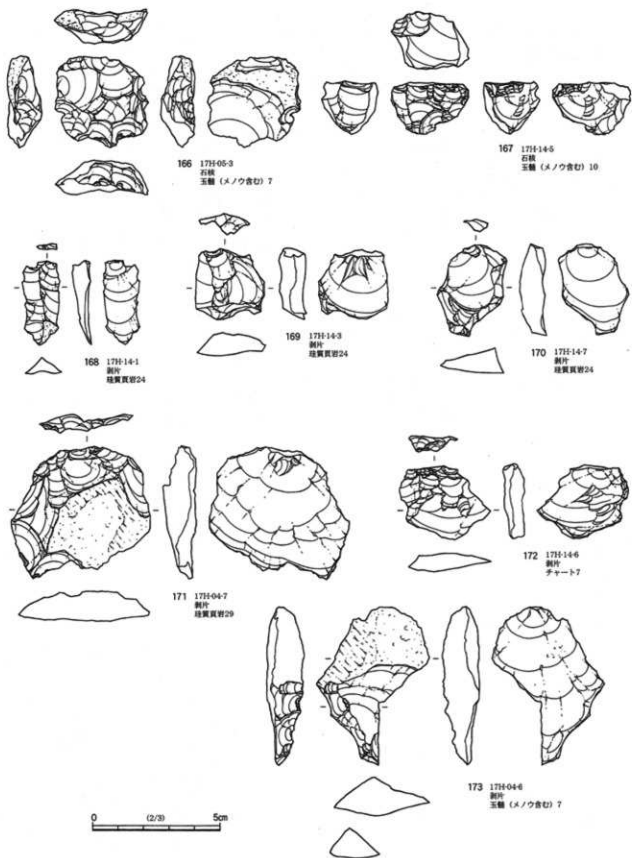
石核 (166・167) 166は明赤色部分と黄褐色部分の混在する碧玉である。全7点のうちの1点ではあるが、接合関係はない。裏面を打面にして打点を周回させ、求心的な剥離を行っている。剥離角は54°~70°である。内側に敲打痕を持たせることによって、外周は突出した部分と挟れた部分とからヒトデ状の形状となる。特に下縁辺における2か所の挟入部によって突出する尖端には二次加工が施され、念入りな調整が行われる。167は青白、玻璃質の玉髓(メノウ含む)10である。上面を打面にして正面・左面を剥片剥離したのち、裏面を打面に換えて正面へ向けて加撃されるが、稜上を調整するための小剥離であり、稜は調整によって角が丸められる。打面・作業面を入れ換えながらの剥離作業が繰り返された石核である。

剥片 (168~179) 168~170は珪質頁岩24から剥離された剥片である。168は主要剥離面と同一方向から連続して加撃して作出された剥片の1片である。背稜はほぼ中央を通り、両側縁は平行している。169・170は背面に多方向の剥離痕があり、打面転移を頻繁に行っている。160・161・168~170は珪質頁岩24を母岩としており、設定打面から同一方向に剥離された剥片、打面転移を繰り返した剥片があり、石核の使い方に相違が認められる。ただし接合関係はないので、別母岩の可能性も否めない。171の節理面は暗茶色、剥離面は淡黄灰~灰色、外から内へ向けて色調は淡くなる。丁寧な打面・頭部調整がみられる。右下端部は折れではなく、既存の面が主要剥離面に切られている。背面には打点を周回しながら求心的な剥離を行った痕跡が残る。172は青灰色で光沢のあるチャートである。敲打による頭部調整が行われた後、擦り潰しによって縁辺に丸みを持たせている。173~179は玉髓(メノウ含む)の剥片である。173は下部稜上から左側縁に向かう加工痕がある。小剥片を順序よく剥離した痕跡が残る。174は剥片剥離時の加撃により、打面は弾け打点直下では折れが生じている。175は頭部調整のある幅広の線状打面から両側縁が末端にかけて閉じてゆく逆三角形である。176・177は自然面を打面にして剥離されている。縁辺は直線的である。178は部分的に赤茶色の2mm~3mmの細長い斑が入る。170・175・176・178の末端は広がらずに左右縁辺が収束する。179は自然面・剥離面とも橙がかかった赤色だが、右側面は一部明るい黄土色である。右側面上部の剥離面を打面として、背面にみられるような同一方向からの剥片剥離が行われる。打点付近には調整痕が並ぶ。のち、打面を90°ほど変えて179が剥離されている。

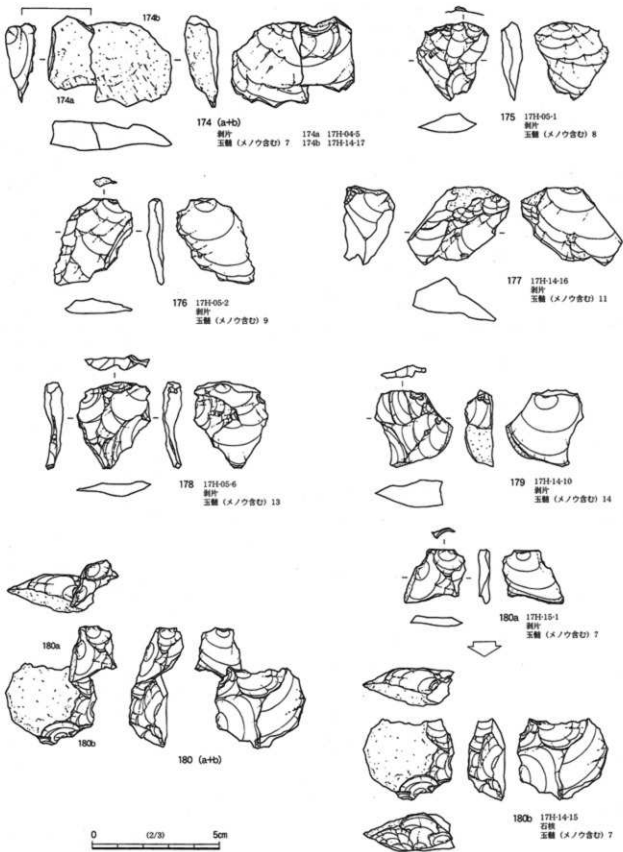
接合資料 (180) 180は剥片・石核からなる接合資料である。素材塊からかなり早い段階で180aが剥離されている。180bは打点を周回させながら、求心的な剥離作業を行った石核である。



第100図 第18ブロック出土石器(1)



第101図 第18ブロック出土石器(2)



第102図 第18ブロック出土石器(3)

第21表 第18ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	削器	使用痕のある 剥片	石核	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
珪質頁岩 24	0	0	2	0	4	6	18.75%	34.41	12.76%
珪質頁岩 25	0	0	1	0	1	2	6.25%	25.21	9.35%
珪質頁岩 26	2	0	0	0	0	2	6.25%	2.43	0.90%
珪質頁岩 27	0	1	0	0	0	1	3.13%	3.19	1.18%
珪質頁岩 28	0	0	1	0	0	1	3.13%	2.97	1.10%
珪質頁岩 29	0	0	0	0	1	1	3.13%	31.47	11.67%
珪質頁岩 30	0	0	1	0	0	1	3.13%	3.88	1.44%
珪質頁岩 31	0	0	1	0	0	1	3.13%	5.94	2.20%
チャート 7	0	0	0	0	3	3	9.38%	22.40	8.31%
玉髄(メノウ含む) 7	0	0	0	2	4(5)	6(7)	18.75%	75.95	28.16%
玉髄(メノウ含む) 8	0	1	0	0	1	2	6.25%	8.20	3.04%
玉髄(メノウ含む) 9	0	0	0	0	1	1	3.13%	5.59	2.07%
玉髄(メノウ含む) 10	0	0	0	1	0	1	3.13%	12.00	4.45%
玉髄(メノウ含む) 11	0	0	0	0	1	1	3.13%	16.03	5.94%
玉髄(メノウ含む) 12	0	1	0	0	0	1	3.13%	4.38	1.62%
玉髄(メノウ含む) 13	0	0	0	0	1	1	3.13%	5.38	2.00%
玉髄(メノウ含む) 14	0	0	0	0	1	1	3.13%	10.24	3.80%
合計	2	3	6	3	18(19)	32(33)	100.00%	269.67	100.00%

※ () は出土点数

9 第19ブロック (第103~106図、第22表、図版6・29)

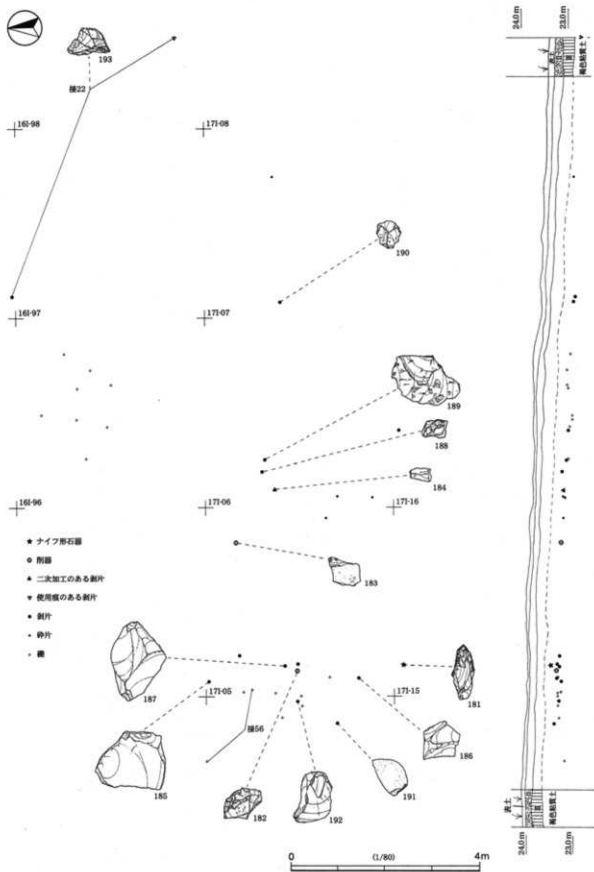
遺物分布状況

南半部の南東、16 I・17 I グリッドに位置し、標高は23m~24mを測る。遺物は16 I-87・96・98、17 I-04~07・15・16から出土し、南北(短径) 8.6m、東西(長径) 15.3mの西から東に向かって緩やかに傾斜する範囲に37点が分布する。平面での分布状態であるが、北・西・中央・東部とおおまかに4つの集中域に分けることができた。まず北部の集中域であるが、16 I-87グリッドから出土した黒曜石製剥片1点を除けば、16 I-96グリッド出土の8点はすべて礫で構成される。西側は4地点の中でもっとも多様な器種・母岩で構成され、南北4m、東西2.4mの範囲内に12母岩17点を数え、ナイフ形石器・削器・剥片・礫8点が集中する。中央部は削器・二次加工のある剥片・剥片・砕片が出土する。すべて同一母岩である黒曜石22の8点である。東側の3点もすべて黒曜石22から成り、使用痕のある剥片・剥片・砕片が作出されている。そのうち使用痕のある剥片は16 I-87出土の剥片と、6.4mの距離をはさんで接合する。

第19ブロックの西と東では0.7mの比高差を持つが、16mの距離間での0.7mであり、緩やかな西高東低の傾斜を示す。遺物も同じように22.736m~23.450mのレベルから出土し、約0.7mの範囲内に地形の傾きに合わせて推移する。III層以下は武蔵野ロームの土壌が変成したいわゆる「水つきローム」の可能性のある褐色粘質土であり、遺物を投影するとIII層との境界線に沿うようにして10cm~20cm下方にほぼ一直線に並ぶ。

母岩別資料の分布

多様な石材が出土した西側の集中域では12母岩17点を数え、ガラス質黒色安山岩8~9・トロトロ石4・安山岩24~27・流紋岩29・黒曜石22・珪質頁岩32~33・ホルンフェルス8が各々1~2点ずつ分布する。南側中央部から北東にかけては黒曜石22のみが広く分布する。北部では安山岩28・流紋岩30各々4点がま



第103図 第19ブロック器種別分布



164-98

171-08

171-18

標22

164-97

171-07

171-17

164-96

171-06

171-16

171-05

171-15

標56

○ ガラス質黒色安山岩 8

▲ ガラス質黒色安山岩 9

■ トロトロ石 4

▲ 安山岩 24

● 安山岩 25

○ 安山岩 26

● 安山岩 27

● 安山岩 28

○ 流紋岩 29

● 流紋岩 30

▲ 黒曜石 22

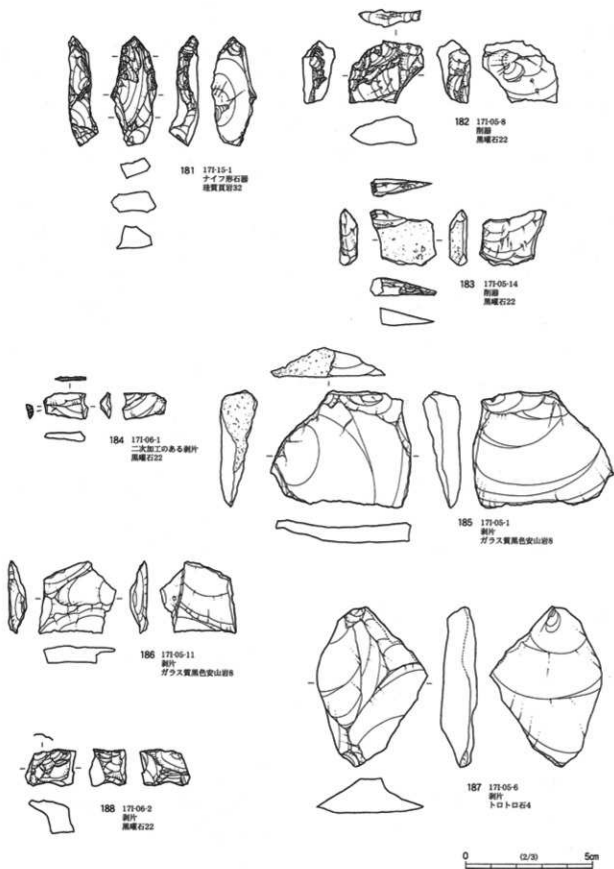
● 珸質頁岩 32

▼ 珸質頁岩 33

○ ホルンフェルス 8

0 (1/80) 4m

第104図 第19ブロック母岩別分布

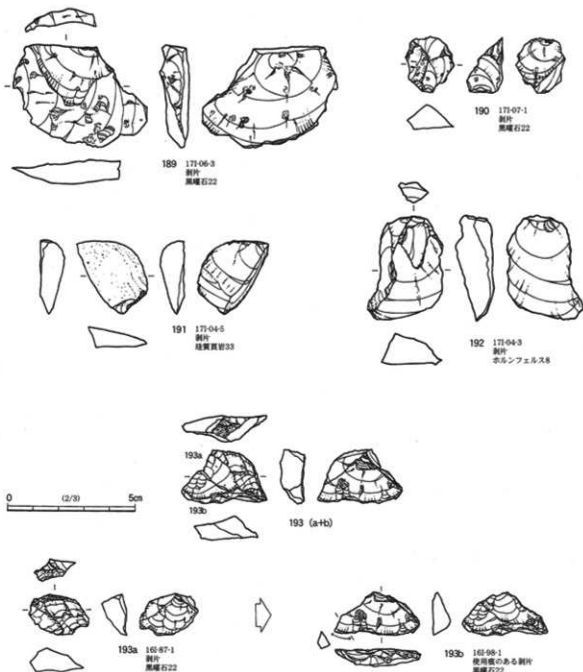


第105図 第19ブロック出土石器(1)

とまって剥片のみの集中区を作っている。母岩の特徴は別表（第12・13表）にて記した。

出土石器

ナイフ形石器(181) 181は連続した同一方向からの剥離ではなく、底面を打面に180°置き換えてから剥離された横長剥片が素材である。素材である横長剥片の成形の流れをみていくと、まず縁部の端部を削いで尖端を作出した後、下縁辺を面とするような長方形の打面形状に整えられる。打面・打点を除去するように65°~73°で右上縁辺が調整加工され、左下縁辺は主要剥離面側から80°~90°の急角度で整えられている。先端部は正面図のみをみると両側縁が頂部で集結する尖頭状を呈してはいるが、側面からみれば両側面が



第106図 第19ブロック出土石器(2)

面として残る4面体となっており、この部分を刃部として使うには鈍いかと思われる。以上の特徴から、角錐状石器として分類した方が良いかもしれない。

削器 (182・183) 182は下面、のち右面が折れている。左側縁は75°~88°で調整加工される。加工は折れに切られる。183は剥片の上・左部は折れて遺存しない。下縁部は背面側から78°~80°で調整される。上部折れ(折り取りか)によって現れた面には微細剥離痕がみられる。

二次加工のある剥片(184) 184は黒曜石22の14片のうちの1片である。上縁は折れており、左面に60°~65°の加工痕がみられる。

剥片 (185~192) 185の自然面は板状であり、背面は平坦で広いことから、素材礫はかなりの大きさ(径10cm以上)を持つものと推察される。打面は自然面と剥離面の2面であるが、打点は自然面にみられ、バルバースカーの流れが背面を切っている。末端縁辺は25°~28°と鋭いが、使用痕は看取されない。186は185と同一母岩で2点出土のうちの1点である。薄い板状剥片の上左右部分は折れにより欠損し、中央下部のみ遺存する。187は背面に多方向からの剥離痕を残している。点状打面および両側縁が末端で取束することにより、菱形の剥片が作出されている。背面末端部に、剥離作業の行われる際に受けたと思われる剥離軸とは逆方向の剥離痕がみられ、硬質の設置面からのね上がりと推察できる。左側縁は風化作用により緩やかな丸みを持つが、使用による擦り痕の可能性も考えられる。188の黒曜石22は同一母岩が14点検出されており、189・193を除けば全長3cmに満たない小型の石片で占められる。188は大きく腹面を挟るように内湾した主要剥離面を持つ。正面および右側面には同一方向からの連続した加撃によって小剥片が多数作出された痕が残る。189は黒曜石22で最大のものである。平坦打面から下縁が円弧を描く。190は点状打面である。潜在する内部の砕けによって複雑に割れる。191は自然面が淡黄白色、節理面が明茶色、剥離面が緑灰白色の珪質頁岩33である。打点直下で分割した礫端片である。192は平坦打面を持ち、厚みのある剥片である。

接合資料 (193) 193は接合資料である。剥片剥離時、3片以上に分割された。この接合した状態は推定される剥片の右部分と考えられる。側縁と末端縁によって取束した尖端部には微細剥離痕が看取される。

第22表 第19ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	削器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩8	0	0	0	0	2	0	0	2	5.56%	33.97	4.00%
ガラス質黒色安山岩9	0	0	0	0	1	0	0	1	2.78%	1.13	0.13%
トトロ石4	0	0	0	0	1	0	0	1	2.78%	31.31	3.69%
安山岩24	0	0	0	0	0	0	1(2)	1(2)	2.78%	143.63	16.92%
安山岩25	0	0	0	0	0	0	2	2	5.56%	122.58	14.44%
安山岩26	0	0	0	0	0	0	2	2	5.56%	69.97	8.24%
安山岩27	0	0	0	0	0	0	1	1	2.78%	163.21	19.23%
安山岩28	0	0	0	0	0	0	4	4	11.11%	30.74	3.62%
流紋岩29	0	0	0	0	0	0	1	1	2.78%	139.94	16.49%
流紋岩30	0	0	0	0	0	0	4	4	11.11%	39.38	4.64%
黒曜石22	0	2	1	1	6	4	0	14	38.89%	46.63	5.49%
珪質頁岩32	1	0	0	0	0	0	0	1	2.78%	6.46	0.76%
珪質頁岩33	0	0	0	0	1	0	0	1	2.78%	5.68	0.67%
ホルンフェルス8	0	0	0	0	1	0	0	1	2.78%	14.17	1.67%
合計	1	2	1	1	12	4	15(16)	36(37)	100.00%	848.80	100.00%

※ ()は出土点数

第6節 第5文化層(第107図、巻頭図版4)

第5文化層はⅢ層～Ⅳ層に出土レベルが推定されるものである。Ⅲ層以下の土壌は区分不明瞭であるが、現場所見や垂直分布図、出土石器を鑑みて文化層分けを行った結果、第20ブロックから第22ブロックまでの3地点において、遺物の集中区が検出された。

1 第20ブロック(第108～113図、第23表、図版6・31・32)

遺物分布状況

遺物は7E-45・46・55・56・66・67・76に分布する。北半部の中央部から西寄りの7Eグリッドに位置し、標高は25m～25.5m、標高差は0.5mである。遺物は北西にあたる7E-55グリッドを中心に分布するが、東南に向かって疎になる。北東から西南に6m、北西から東南に9mの範囲に40点が分布する。同一母岩はおおむね集中して出土する。分布図の7E-55グリッド北西部にグラムシェルを使っている作業中に出土した5点の石器を並べた。詳細な位置および出土レベルは不明瞭であるが、母岩の出土状況・平面分布などから、第20ブロックに含まれると思われる。ただし、珪質頁岩2の細石刃石核については、確認調査時の一括取り上げによる遺物であること、単一母岩であることなどから、第20ブロック石器群との共伴関係を断じ難い部分がある。

次に垂直分布の状況であるが、遺物は標高24.235m～24.799mの約55cm間に分布し、セクション図に重ねたところⅡc層から褐色粘質土中に投影された。調査時の所見には遺物出土層に関して「Ⅲ層からこげ茶色に入って10cmくらいのところに多い」との記載があり、東南部分はⅡc層に投影される剥片もあるが、中心層はⅢ層～Ⅳ層と思われる。

母岩別資料の分布

7E-55グリッドを中心とした直径6mほどの集中区と7E-66グリッドの東側を中心とした2m×4mの集中区があり、北西区と南東区に分かれる。北西区はガラス質黒色安山岩1(12点)・珪質頁岩1(11点、そのうち10点は接合)・珪質頁岩2(1点)・チャート1(8点)と、遺物点数32点はわずかに4母岩で占められる。南東区の8片の内訳は、ガラス質黒色安山岩2(2点)・ガラス質黒色安山岩3(3点)・流紋岩1(2点)・黒曜石1(1点)であり、北西区と共通する母岩はない。

出土石器

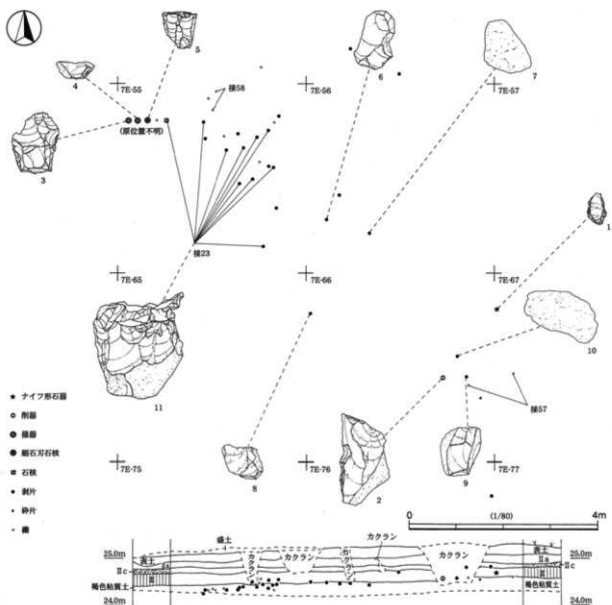
ナイフ形石器(1) 1はナイフ形石器である。背面に素材のボジ面が残る。両側縁は裏面から素材剥片の主要剥離面側へ向かって急角度の刃潰し加工が施される。尖端は素材剥片の末端であるため、わずかに折れて欠損しているが、推定される製品の大きさは2.6cmほどの小型のナイフ形石器である。

削器(2) 2は削器である。平坦な打面から加撃された厚みのある剥片を素材とする。左側縁には58°～71°の加工痕が残る。

掘器(3・4) 3・4ともガジリ部分は漆黒、風化面・自然面は赤～黄褐色で珪晶は白～透明の直径



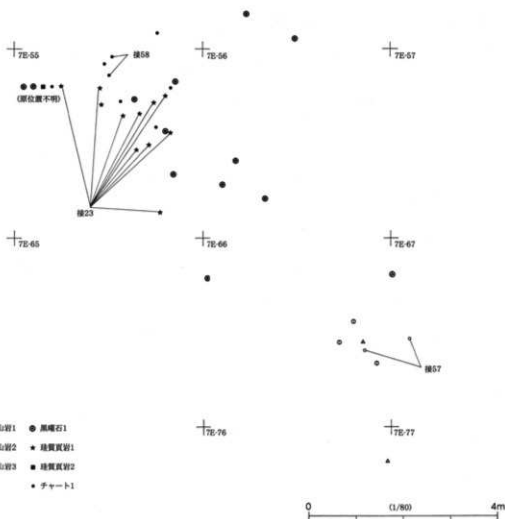
第107図 第5文化層ブロック配置図



第108図 第20ブロック器種別分布

0.3mmのガラス質黒色安山岩1である。3は背面に多方向からの剝離痕が残る断面三角形、中高の剥片素材を用いている。左下縁辺は $62^{\circ}\sim 72^{\circ}$ 、下縁および右側縁は $85^{\circ}\sim 94^{\circ}$ の急角度の調整で面的に整形されている。4の上方はガジリによって欠けている。下縁には腹面側からの急角度の剝離により、面的な加工が施されている。

細石刃石核 (5) 5は裏面左下部に古い面が残る。打面を再生しながら剥片剝離作業が行われている。残された剝離面から読み取れることは、まず、左側面を下方から加撃し器面を整えた後、下方から細石刃が2枚以上剝離される。次に作業面を下面に移し剝離作業を行った後、右側面にも同様の細石刃剝離作業が行われる。この後、新たに打面が作出され、正面・右側面が作業面となり、少なくとも6面上剝離された後、遺棄されたものと思われる。残核は縦・横・幅とも2.9cm以下まで加工されており、素材礫の情報



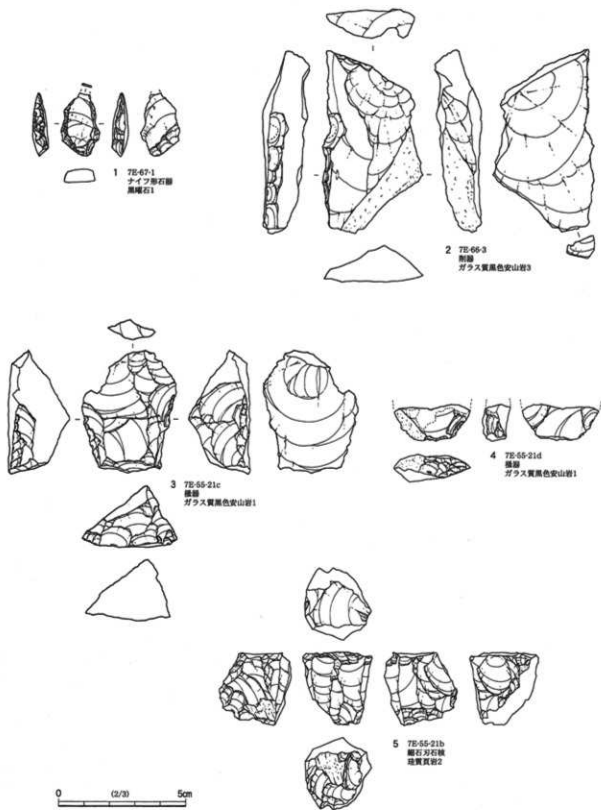
第109図 第20ブロック母岩別分布

は残っていない。下面には錆色をした節理部分があり、珪質で油脂状光沢のある滑らかな石材の瑕疵となっている。

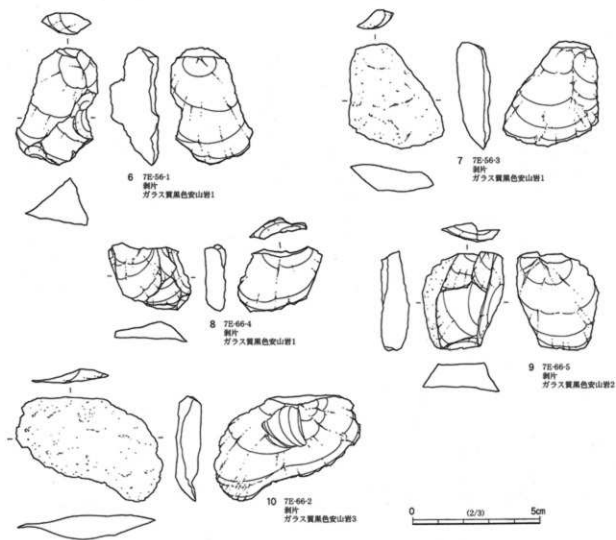
なお、この細石刃石核に関しては確認調査時のクラムシェルにより一括出土した5点のうちの1点である。他の4点はこの第20ブロック内に共通の母岩が存在するため同一ブロックとみて間違いはないが、この細石刃石核は単一母岩であり、当ブロック石器群との共伴関係においては不明確である。

剥片 (6~10) 6は器厚中高であり、平坦打面から形成された。断面は正三角形で背面には多方向からの剥離痕が残る。7・10は自然面を削いで作出された打面から剥離されている。背面はすべて自然面である。6・8・9は打面・作業面を頻繁に入れ換えながら剥離作業が行われた痕跡が看取される。

接合資料 (11) 11は珪質頁岩の接合資料である。同一母岩11片のうち10片が接合した。自然面は淡黄褐色、剥離面は薄墨〜黄灰白が層状に色を成す。中心部分には直径0.1mmほどのガラス質の結晶が混じる(流紋岩か?) 残存する原礫面から想定すると大人の拳大の素材礫が用いられ、剥離作業が行われていることがわかる。礫表面を加撃して自然面を削ぐように数枚の剥片を剥離した後、剥離面を打面にして11b+11



第110図 第20ブロック出土石器(1)

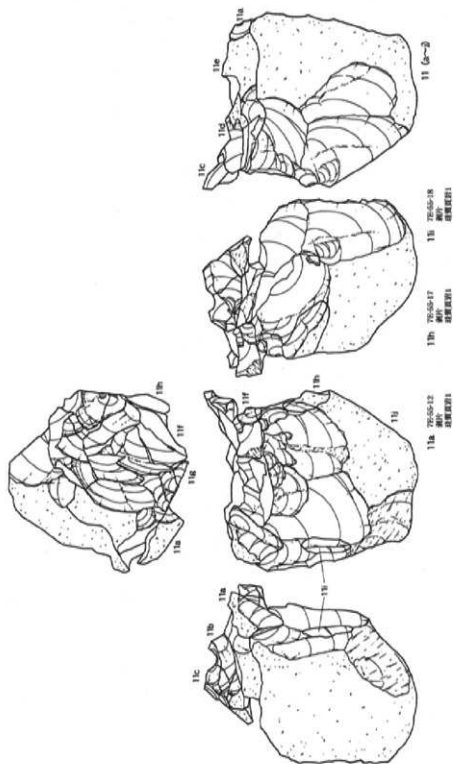


第111図 第20ブロック出土石器(2)

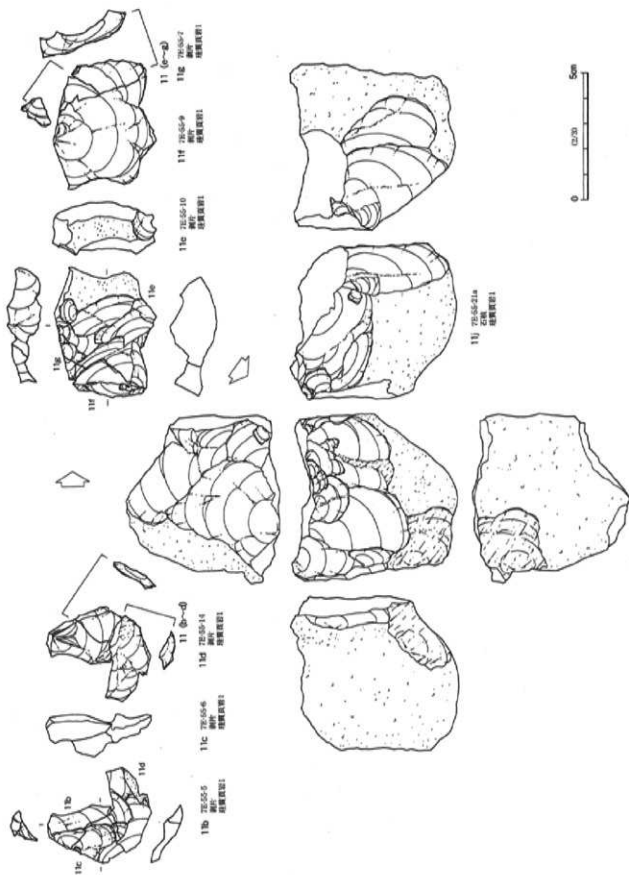
第23表 第20ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	削器	掻器	砕石万石核	石核	割片	砕片	核	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	2	0	0	10	0	0	12	31.58%	97.58	9.24%
ガラス質黒色安山岩2	0	0	0	0	0	2	0	0	2	5.26%	20.70	1.96%
ガラス質黒色安山岩3	0	1	0	0	0	1	1	0	3	7.89%	66.03	6.25%
泥紋岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1(2)	1(2)	2.63%	354.79	33.58%
黒曜石 1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2.63%	2.20	0.21%
珪質頁岩 1	0	0	0	0	1	10	0	0	11	28.95%	349.13	33.05%
珪質頁岩 2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.63%	23.75	2.25%
チャート 1	0	0	0	0	0	0	0	7(8)	7(8)	18.42%	142.29	13.47%
合計	1	1	2	1	1	23	1	8(10)	38(40)	100.00%	1056.47	100.00%

※ ()は出土点数



第112図 第20ブロック出土石器(3)



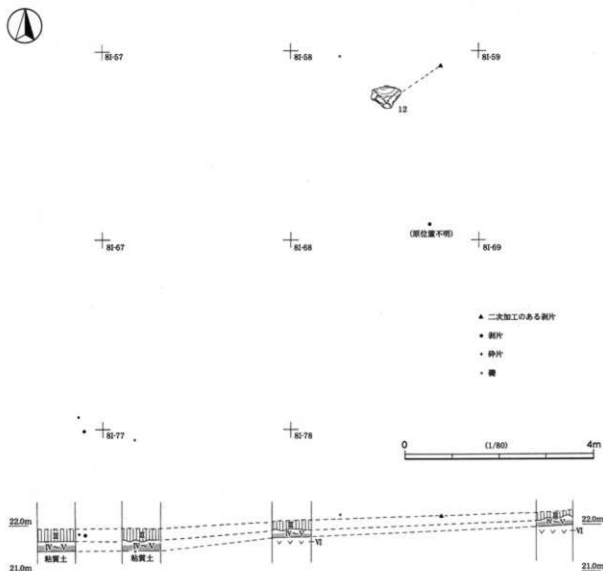
第113図 第20ブロック出土石器(4)

c+11d、11e+11f+11gが剥がされる。11b+11c+11dが剥離された後に11e+11f+11gが剥がされているように見えるが、剥離に至らぬ複数回の加撃により折れが内包され、一撃で弾けたものと思われる。のち、現れた面を打面に変え、石核正面に図示されているように打面を調整しながら少なくとも2面以上の剥片が剥離されている。

第20ブロックは礫（流紋岩・チャート）を除くと、石材はガラス質黒色安山岩と珪質頁岩が大勢を占め、わずかに1点、黒曜石が検出された。器種はナイフ形石器・削器・搔器・細石刃石核・石核・剥片とバリエーションに富む。ナイフ形石器・削器・搔器は欠損しており、接合資料においては良品が残されていない。細石刃石核は大きさからこれ以上の剥離は無理と思われる。以上のことから、第20ブロックは剥片の製作が行われた後、良品は持ち出され、欠損品・不良品が遺棄された場ではないだろうか。

2 第21ブロック（第114～116図、第24表、図版31）

遺物分布状況

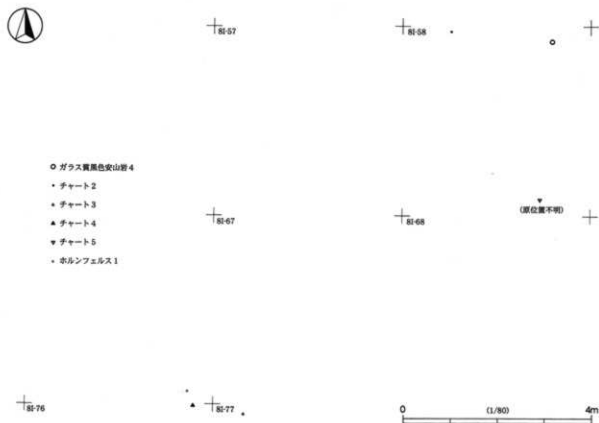


第114図 第21ブロック器種別分布

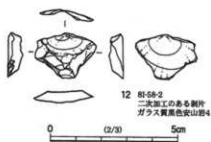
遺物は8 I-58・66・76・77に6点が分布する。北半部の東端、標高22mに位置する。遺物は8 Iグリッドに分布し、8 I-58に3点、8 I-66・76・77からそれぞれ1点ずつ出土した。北東3点と西南の3点とは最大で11m、最小でも1.3mの距離があり、また1母岩1点で構成されることから、ブロックとしてのまとまりや特徴を述べることに意味あいは薄い。調査範囲の随所で確認された土層柱状図を推定ラインでつなげたところ、遺物はIII層上方からV層に投影され、中心層はIII層にあると認識される。西南はV層以下が粘質土となるが、東側に向かうにしたがいVI層の存在が確かめられた。

出土石器

二次加工のある剥片 (12) 12はガラス質黒色安山岩4の幅広い打面から連続して剥離された剥片のうち1片である。左下縁辺に裏面側から81°の角度で二次加工される。



第115図 第21ブロック母岩別分布



第116図 第21ブロック出土石器

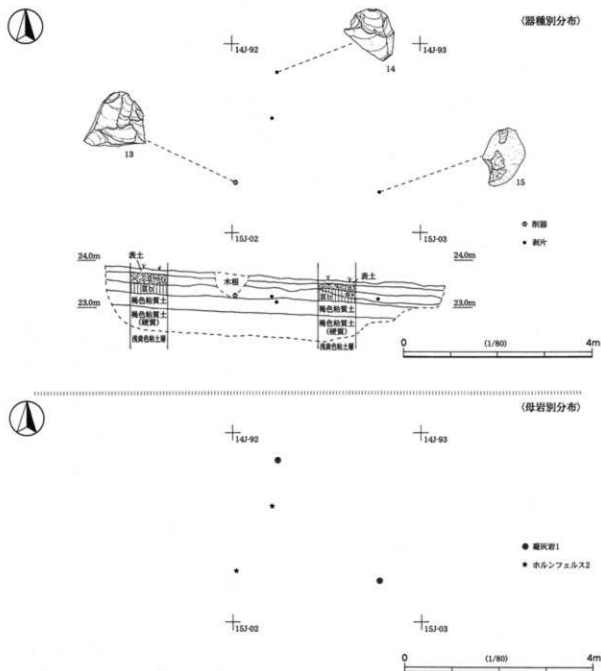
第24表 第21ブロック組成表

母岩名 / 器種	二次加工のある剥片	剥片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩4	1	0	0	0	1	16.67%	2.02	4.50%
ホルンフェルス1	0	0	1	0	1	16.67%	0.15	0.33%
チャート2	0	0	0	1	1	16.67%	9.16	20.41%
チャート3	0	0	0	1	1	16.67%	24.31	54.12%
チャート4	0	1	0	0	1	16.67%	2.93	6.52%
チャート5	0	1	0	0	1	16.67%	6.32	14.08%
合計	1	2	1	2	6	100.00%	44.89	100.00%

3 第22ブロック (第117・118図、第25表、図版6・31)

遺物分布状況

南半部北東端、標高23m~24mに位置し、14J-92を中心にしたブロックである。現況では立川ローム層の堆積は西から東に向かい4mの間に50cmほど傾斜する。遺物総数4点の小規模なブロックであり、14J-92グリッド中の3㎡の範囲に収まる。垂直分布では11cmほどの高低差があり、土層断面図への投影ではIII層の上部から褐色粘質土の上面にかけて分布する。出土層位はIII層下部にレベルを求めることができる。4点の遺物の器種は削器1点・剥片3点であり、母岩内訳は凝灰岩1・ホルンフェルス2がそれぞれ2点



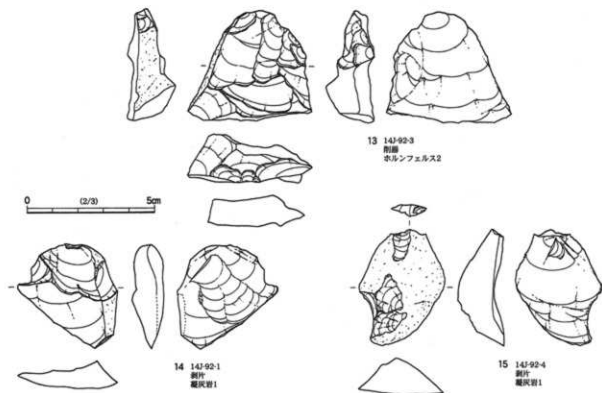
第117図 第22ブロック遺物分布

ずつである。

出土石器

削器 (13) 13は灰色と褐色が層状をなす剥離面を有するホルンフェルス2を母岩とする。下縁辺は主要剥離面側から76°~84°の急角度で二次加工される。左側面は平坦な自然面が残る。右上縁は76°~77°に調整される。

剥片 (14・15) 14は腹面の3/5はバルバースカーが占める。背面はすべて主要剥離面と同一の方向から剥離されており、背面の頭部に調整痕が看取される。右側面は自然面が残存している。15は礫表を薄く削いで打面を作出した後、剥離された剥片である。背面上部は頭部調整されている。14・15とも灰白色の凝灰岩1を母岩とする。



第118図 第22ブロック出土石器

第25表 第22ブロック組成表

母岩名 / 器種	削器	剥片	点数	点数比	重量(g)	重量比
凝灰岩 1	0	2	2	50.00%	32.24	47.89%
ホルンフェルス 2	1	1	2	50.00%	35.08	52.11%
合計	1	3	4	100.00%	67.32	100.00%

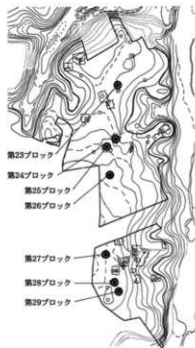
第7節 第6文化層 (第119図、巻頭図版4)

第6文化層はIII層に出土レベルが認められたものである。第23ブロックから第29ブロックまでの7地点において、遺物の集中区が検出され、各々独立した形態を示す。ブロック間での接合関係および共通母岩の存在は確認できなかった。このため、7地点が同時に存在した可能性は少ないが、石器・石材組成から大きく捉えて「第6文化層」とした。

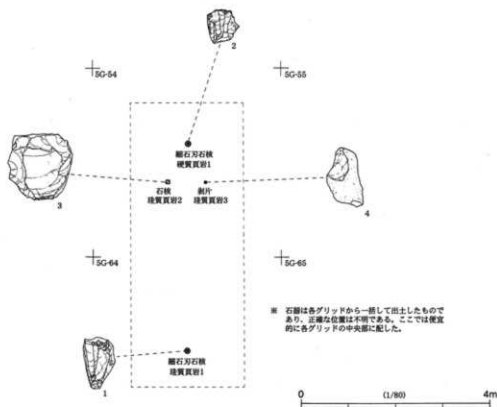
1 第23ブロック (第120・121図、第26表、図版31・34)

遺物分布状況

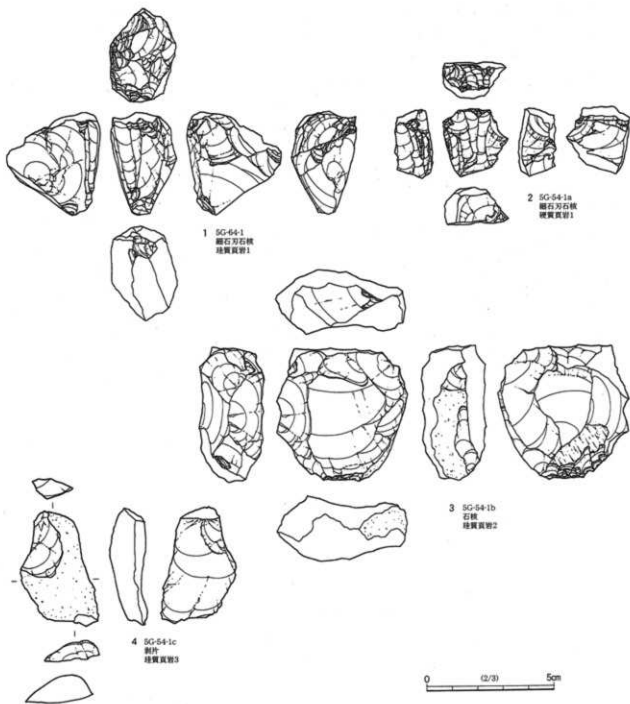
北半部の中央から北東寄りで標高24m～25m、北西から南東に緩く傾斜する。現場作業において5G・54・64グリッドから一括して出土した遺物の中の4点である。そのため、正確な出土地点および出土層位は不明である。ここでは石器石材・器種・石器のまとまりを鑑みて、ブロックとして扱った。作図は模式的なものであり、出土した石器は便宜的に出土グリッドの中心に配置した。このため4点の距離は最長で9m、最短では一塊となって存在している可能性もある。



第119図 第6文化層ブロック配置図



第120図 第23ブロック遺物分布



第121図 第23ブロック出土石器

出土石器

細石刃石核 (1・2) 1の珪質頁岩1は明灰黄色で艶や光沢はないが、細粒・均質である。素材を数回分割して用いている。右側面の平坦な剥離面がもっとも古く、その後、背面の剥離面を打面として剥離された剥片が最終的に素材として用いられている。素材剥片の主要剥離面は左側面に残されている。次に左側面側から打面調整を行い、素材剥片の末端部を細石刃剥離作業面として用いている。打面・作業面は転移せずそのまま後退しながら作業を進行させている。2の母岩は硬質頁岩1で黒褐色、油脂状の光沢があ

極めて良質な素材であり、東北地方で産出された石材と思われる。下面がもっとも古い剝離面で、背面・右側面にも素材面が残されている。作業面は左側面・正面の2面にわたり、左側面は打面に切られている。作業面の切り合いから作業は2面を交互に用いながら行っていることがわかる。

石核(3) 3は自然面が褐色、剝離面は褐灰緑色の珩質頁岩2である。裏面に素材としての剝片の主要剝離面が残る。左側面の剝離からは打面と作業面を置換しながらの交互剝離作業が行われたことがわかる。下端部の潰れは剝片剝離時の設置部分であったためと推察される。

剝片(4) 4は淡黄灰色を基調に、濃灰色のもや状部分を持つ、滑らかな珩質頁岩3である。背面上方の剝離痕は腹面からの回り込みで、主要剝離面と同一面である。

第26表 第23ブロック組成表

母岩名 / 器種	細石刃石核	石核	剝片	点数	点数比	重量(g)	重量比
珩質頁岩 1	1	0	0	1	25.00%	25.64	18.53%
珩質頁岩 2	0	1	0	1	25.00%	84.25	60.88%
珩質頁岩 3	0	0	1	1	25.00%	16.99	12.28%
硬質頁岩 1	1	0	0	1	25.00%	11.50	8.31%
合計	2	1	1	4	100.00%	138.38	100.00%

2 第24ブロック (第122～124図、第27表、図版6・31・34)

遺物分布状況

調査区北半部中央から南寄りに位置し、南西から北東にかけて傾斜している。遺物は8 G 72～74・82・83に分布し、南北4 m、東西5 mのほぼ円形の内に19点が収まる。また、19点のうち石核は剝片との接合資料に含まれる1点のみであり、残1点を除くと17点は剝片・剝片素材石器である。

第24ブロックの標高は25.5m前後であり、標高差は0.3mを測る。東西に採られたセクション図のII層とIII層の境目は6 mにつき0.3m東に下降し、遺物はそのラインに沿うように標高25.068m～25.301mの23cm間に推移する。

母岩別資料の分布

第24ブロックを構成する石材は、流紋岩・砂岩・珩質頁岩・玉髓(メノウ含む)の4種類9母岩である。以下、母岩の特徴を記す。

流紋岩1 (6・10・11) 剝離面は赤みがかった灰白色～茶色がかった青灰色である。自然面は青灰色で表面は滑らかだが一部に白色不透明の斑晶がみられる。微光沢あり。

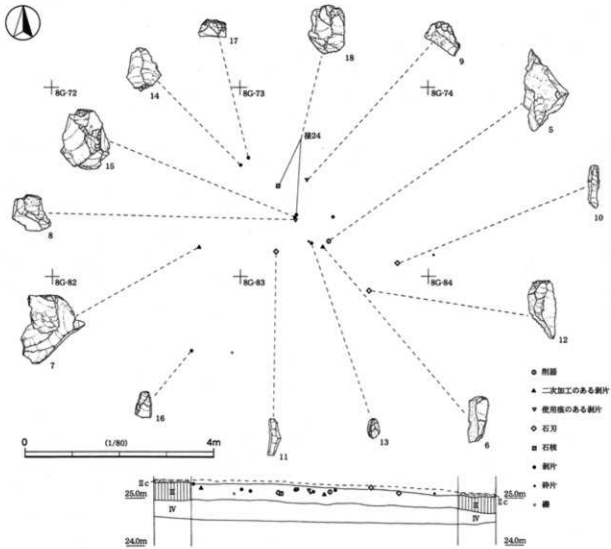
流紋岩2 (12) 剝離面は黄褐色でざらつき感があり、自然面は暗褐色で表面は滑らか、新鮮面は黒褐色である。層状の流水紋の中に微細な銀色の斑晶がある。

砂岩1 (未実測) 褐色がかった黒灰色で、白色の微粒子が少量みられる。

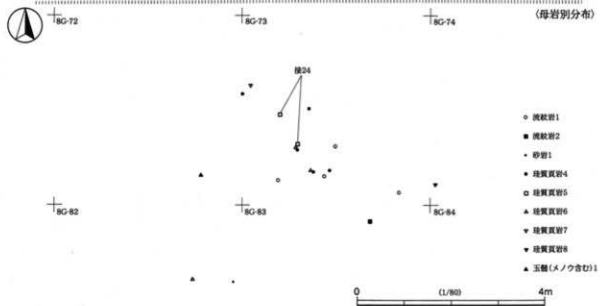
珩質頁岩4 (5・8・9・13・14) 剝離面は赤褐色～黄褐色で、自然面とその付近は青灰色で一部白濁している。表面はざらつき感がある。色・大きさの様々な斑晶が一部に集中している。砂岩のような粗粒部分と珩化して光沢を持つ部分がある。珩質頁岩6と似る。石材は違うが、流紋岩1とも同質の部分を持つ。

珩質頁岩5 (18) 自然面・剝離面とも明灰色で滑らかな光沢がある。節理面は明茶色、ガジリ部分は黒い。極少量の黒色微粒子がみられる。

(器種別分布)



(母岩別分布)



第122図 第24ブロック遺物分布

珪質頁岩 6 (15・16) 褐色・明茶色・灰色と部所によって様々な色合いをみせる。赤色や白色の微粒子が一部帯状に集中している。珪質頁岩 4 と似る。

珪質頁岩 7 (17) 茶色がかった明灰色で、陶器のように滑らかな乳白色である。極微量の黒色斑晶がみられる。

珪質頁岩 8 (未実測) 緑がかった青灰色で一部黄褐色が混ざる。全体的に暗めで、極少量の暗灰色の斑晶がみられる。

玉髓 1 (7) 剝離面は大きく 3 色に分かれ、艶のない粗粒の黄土色、光沢のある明茶色、赤紫色(ぶどう色)がくっきりと分離している。赤紫色部分に少量の青色斑晶、褐色部分には微量の黒色微粒子がみられる。他には同一母岩とされる遺物はない。

流紋岩 1 は 4 点が 8 G-73 の南部、南北 1 m、東西 3 m の範囲に分布する。石器の内訳は刃対 2 点・二次加工のある剝片 1 点・剝片 1 点である。

珪質頁岩 4 は 1 m×2.4 m の範囲に 5 点が分布する。器種の内訳は削器 1 点・使用痕のある剝片 2 点・剝片 2 点である。

珪質頁岩 5 は石核 1 点・剝片 1 点が 0.8 m の距離で接合する。他に同一母岩は出土していないことから、石核からこの剝片を剝がしてはみたが、目的に適うものがこれ以上得られないと判断し、石核とともに置き去ったものと考えられる。

珪質頁岩 6 は珪質頁岩 4 と共通する部分が多く、同一母岩と思われる面もあるが、色合いの違いから分別した。2 点は珪質頁岩 4 と同じ 1 m×2.4 m の範囲から出土するが、1 点は 3 m 以上離れた西南に分布する。

その他、流紋岩 2・砂岩 1・珪質頁岩 7・珪質頁岩 8・玉髓(メノウ含む) 1 は 1 点ずつ出土している。

出土石器

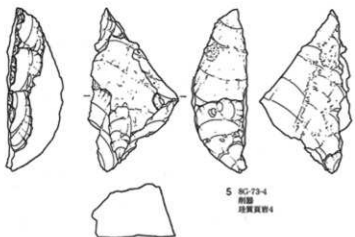
削器(5) 5 は珪質頁岩 4 の削器である。左側面に主要剝離面側から 86°~94° という面的な加工が施されている。

二次加工のある剝片(6・7) 6 は右下端部に主要剝離面からの二次加工痕が入る。7 は黄褐色と暗赤紫色が二層となっている玉髓(メノウ含む) 1 であり、赤紫色部分は碧玉(俗に言う赤玉石)化している。左側縁辺に二次加工痕が看取される。

使用痕のある剝片(8・9) 8 は左下縁辺に、9 は左上縁辺にそれぞれ微細剝離痕がみられる。

石刃(10~12) 10 は背稜が 1 本通り、両側縁がほぼ平行に並ぶ。上部は折れて欠損している。11 の打面に微細な調整痕がみられる。背稜は 2 本通り、下部は折れて欠損している。12 は主要剝離面と同一方向の剝離面が 4 面以上あり、左面には自然面が残っている。また、6・10・11 は規格的な工程において作出され、長さに統一性がある。

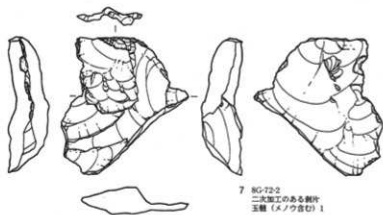
剝片(13~17) 13・14 は末端に下部からのね返りがみられ、下端を台石のようなものに設置して剝離作業が行われたものと推察される。13 は石核器面を整えるための調整剝片であり、背面左部の調整痕は 108°~114° と鈍い角度となっている。15 は打面・作業面を頻りに換えながら剝離作業が行われた痕跡を残す。背面の下部にはボジ面が残されており、素材塊の大きさをうかがわせる。背面右部の連続した剝離痕は右から入った剝離と同一面であり、余分な力が弾けて作った跡である。16 は背みのある灰色の珪質頁岩 6 である。打面はほぼ線状の薄い剝片である。主要剝離面と同一方向の剝離痕によって背面は構成される。17 は



5 SG-73-4
削片
珪質頁岩4



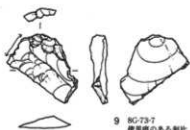
6 SG-73-3
二次加工のある削片
珪質頁岩1



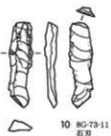
7 SG-73-2
二次加工のある削片
玉髄 (メノウ含む) 1



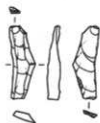
8 SG-73-6
使用痕のある削片
珪質頁岩4



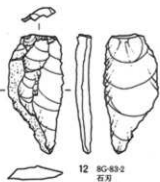
9 SG-73-7
使用痕のある削片
珪質頁岩4



10 SG-73-11
石片
珪質頁岩1



11 SG-73-12
石片
珪質頁岩1



12 SG-83-2
石片
珪質頁岩2



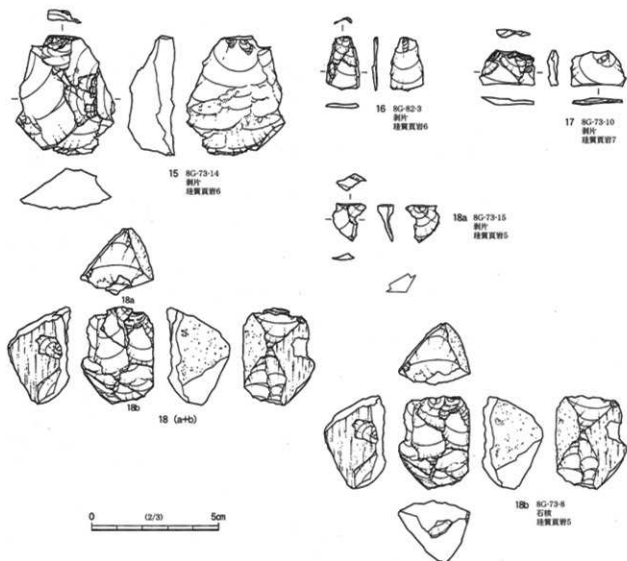
13 SG-73-2
削片
珪質頁岩4



14 SG-73-9
削片
珪質頁岩4



第123図 第24ブロック出土石器(1)



第124図 第24ブロック出土石器(2)

第27表 第24ブロック組成表

母岩名 / 器種	削器	二次加工のある 製片	使用痕のある 製片	石刃	石核	製片	砕片	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
流紋岩 1	0	1	0	2	0	1	0	0	4	21.05%	6.87	4.64%
流紋岩 2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	5.26%	4.68	3.16%
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5.26%	0.36	0.24%
陸質頁岩 4	1	0	2	0	0	2	0	0	5	26.32%	54.47	36.82%
陸質頁岩 5	0	0	0	0	1	1	0	0	2	10.53%	24.76	16.74%
陸質頁岩 6	0	0	0	0	0	2	1	0	3	15.79%	27.48	18.58%
陸質頁岩 7	0	0	0	0	0	1	0	0	1	5.26%	0.93	0.63%
陸質頁岩 8	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5.26%	0.14	0.09%
玉髄(メノウ含む) 1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	5.26%	28.23	19.08%
合計	1	2	2	3	1	7	2	1	19	100.00%	147.92	100.00%

頭部調整された打面から剝離された石刃状剥片の上部である。陶質・アイボリーの珪質頁岩7で、打角は87°である。

接合資料 (18) 18は裏面の上方にみられるように、分割された礫の平坦面から原礫面を剥ぐように剥片を生産した後、その打点を除去するように4回以上剝離作業が行われる。のち、初期作業の際に剝離されていた面を打面に換えて頭部調整を行いながら18aを含めて4枚以上の剥片が作出されている。

3 第25ブロック (第125～127図、第28表、図版6・31・34)

遺物分布状況

調査区北半部の南西寄りに位置し、標高は26.5mを測り、南西から北東に向けて緩く傾斜する。遺物は9 F-17・18、9 F-27・28の4グリッドから22点が出土する。南北6m、東西6mの範囲であるが、分布の形状を狭く囲ったところ、長軸6m、短軸3mの楕円形の中に収まる。またこの中心から北東に27m離れて、同一文化層の第24ブロックが存在する。

石核3点は北側にまとまって分布する。うち1点は約4m南に離れた剥片と接合する。このほかナイフ形石器1点・削器1点・二次加工のある剥片2点・剥片および砕片15点が出土している。

土層柱状図を見ると、II層とIII層の境界線は西から東へ8m進むと20m下がるが、IV層はほぼ水平に推移する。遺物は25.204m～25.549mの約35cm間に分布する。8m離れた柱状図を推定ラインで結んだセクションに遺物を投影したところ、すべてIII層に含まれた。

母岩別資料の分布

27m離れた同一文化層の第24ブロックとの違いは検出された石材に如実に表れる。第24ブロックの主体は珪質頁岩と流紋岩であるが、第25ブロックは70%近くの15点をガラス質黒色安山岩が占める。以下、母岩の特徴を示す。

ガラス質黒色安山岩1 (11点) 黄褐色がかった黒褐色、自然面は細かい溝状の凹みがみられる。

ガラス質黒色安山岩2 (4点) 黄色がかった黒褐色、自然面は細かい溝状の凹みがみられる。ガラス質黒色安山岩1によく似る。同一の可能性あり。

安山岩1 (1点) 灰色と淡黄色のツートーンで、凹凸がある。

黒曜石1 (2点) 夾雑物は僅少。灰色がかり、黒色半透明で良質である。

珪質頁岩9 (1点) 灰と白が大理石状の滑らかな触感である。

珪質頁岩10 (1点) 黄みがかった淡灰白で、チョークのようである。

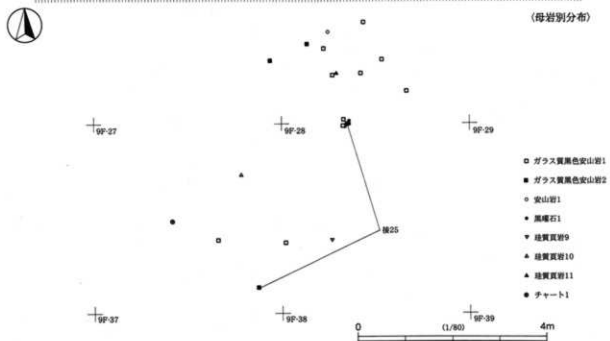
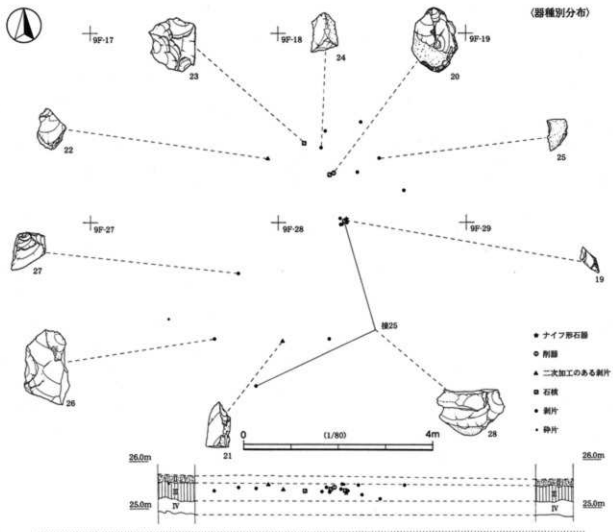
珪質頁岩11 (1点) 黄みがかった淡灰白で、チョークのようである。自然面も同色であるが、針溝状の原面である。

チャート1 (1点) 濃灰色で節理が目立つ。

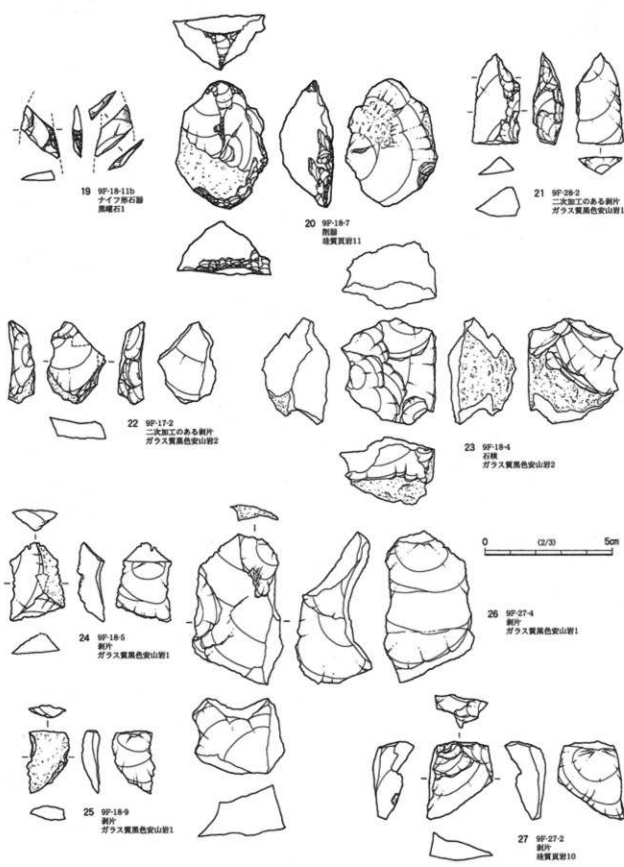
出土石器

ナイフ形石器 (19) 19の下部は作成時の折れによって失われているが、上部は新欠の可能性ある。右縁刃の加工は63°～88°、刃部は鋭く28°である。

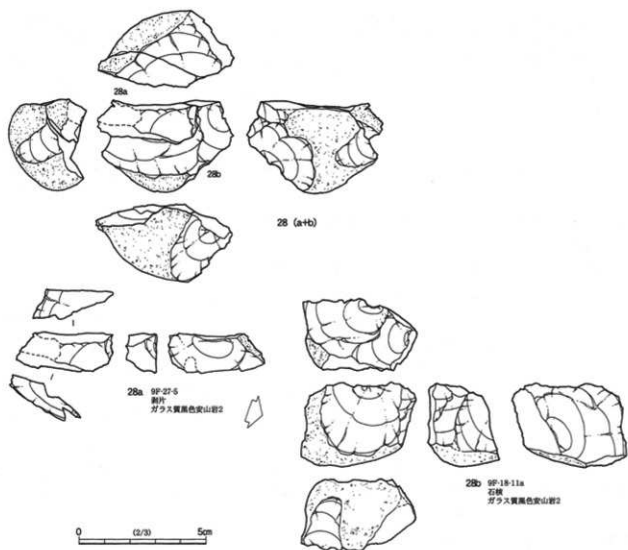
削器 (20) 20は厚みのある横長の剥片素材であり、背面に丸みのある自然面が残ることから、素材礫は鶏卵大かと思われる。下部は61°～73°、小剝離で粗く成形した後にグラインディング加工される。上端にも微細な剝離痕が石取される。



第125図 第25ブロック遺物分布



第126図 第25ブロック出土石器(1)



第127図 第25ブロック出土石器(2)

二次加工のある剥片 (21・22) 21は一個縁のみ70°~90°の剥離がおこなわれており、下部は折れにより遺存していない。22は板状の剥片素材である。平坦な剥離面から78°~80°と急角度の剥離をおこなうことで右下部および左部は面的な形状を呈している。

石核 (23) 23は打点を周回し、求心的な剥離が行われている。

剥片 (24~27) 24・25の腹面は内湾する。26は自然面打面から剥離されている。加わった力は内へ向かい、石核底面を広く残した剥片となる。27は平坦な3枚の剥離痕のある打面から作出される。末端縁辺は直線的である。

接合資料 (28) 28は剥片と石核の2片からなる接合資料である。打面・作業面を頻繁に転移しながら剥片剥離作業が行われている。裏面左上部の剥離面がもっとも古く、この面を打面にして数回の剥離作業が行われた後、打面を換えて28aが剥がされる。こののちも28a剥離後の作業面から左側面の自然面が剥離されている。

第28表 第25ブロック組成表

母岩名 / 器種	ナイフ形石器	削器	二次加工のある 剥片	石核	剥片	碎片	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩1	0	0	1	1	8	1	11	50.00%	103.51	42.93%
ガラス質黒色安山岩2	0	0	1	2	1	0	4	18.18%	99.86	41.41%
安山岩	1	0	0	0	1	0	1	4.55%	0.61	0.25%
黒曜石	1	0	0	0	1	0	2	9.09%	0.89	0.37%
珪質頁岩	9	0	0	0	1	0	1	4.55%	0.50	0.21%
珪質頁岩	10	0	0	0	1	0	1	4.55%	6.37	2.64%
珪質頁岩	11	0	1	0	0	0	1	4.55%	29.12	12.08%
チャート	1	0	0	0	0	1	1	4.55%	0.27	0.11%
合計	1	1	2	3	13	2	22	100.00%	241.13	100.00%

4 第26ブロック (第128~131図、第29表、図版6・33・34)

遺物分布状況

調査区分北半部の南、10F-79・89・99、10G-80・90の標高27mに位置する。南西から北東に向かってわずかに傾斜するが、標高差は0.1m以内である。10G-90グリッドの杭を中心に直径6mの円形内に56点が分布する。石材は黒曜石55点・チャート1点であるが、チャートは調査中に一括で取り上げられた遺物のなかの1点であるため、出土地点・出土レベルは不明確である。またこの1点の他はすべて黒曜石であることから、第26ブロックに帰属しない可能性も否めない。ナイフ形石器・尖頭器は西側1m×3mの範囲に5点がまとまって分布する。使用痕のある剥片6点は分布円外周囲の北西から東南に並ぶように出土している。このうち3点は接合資料である。この他、削器1点・石刃2点・剥片および碎片41点が第26ブロックを構成している。特筆事項としては石核の不在が挙げられる。

南北で確認された土層柱状図は8mの距離を測るが、高低差はほとんどなく、III層~IV層の堆積状態はほぼ水平に推移する。遺物は26.395m~26.762mの36.7cm間に包含され、土層に投影したところ、III層の上方に中心層を持つものと思われる。

母岩別資料の分布

黒曜石2は黒色不透明で艶やかな光沢を持つが、直径1mm~3mm程の夾雑物を多く含む。自然面は黒褐色で艶はない。

黒曜石3は褐色~灰色と黒色の部分が縞になり、直径2mm~4mm程の淡褐~明茶褐色の夾雑物を多く含む。夾雑物が欠け落ちた痕がクレター状となる。28点出土し、総重量は127.3gである。(1点あたり4.5g)

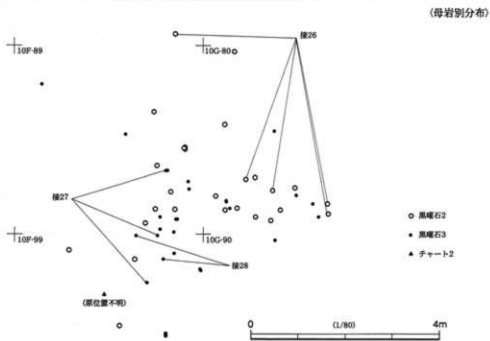
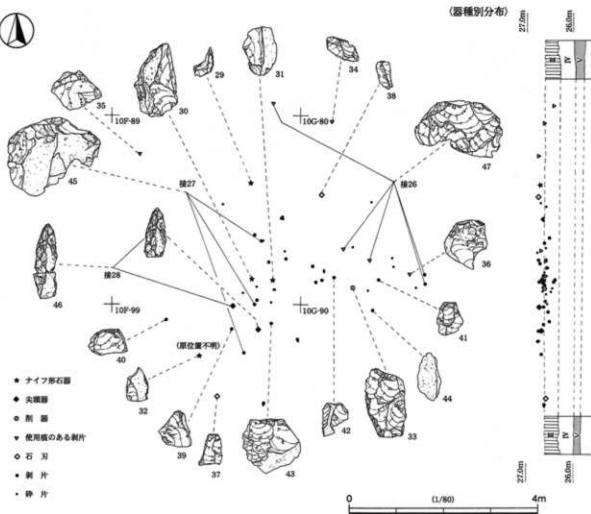
黒曜石は、母岩によって作出される器種が分かれる。黒曜石2はナイフ形石器3点・削器1点・使用痕のある剥片4点・石刃2点・剥片11・碎片6点である。黒曜石3は尖頭器2点・使用痕のある剥片2点・剥片10点・碎片4点が作出されている。

肉眼観察では黒曜石2・3とも北関東の高原山が産地であると推察される。

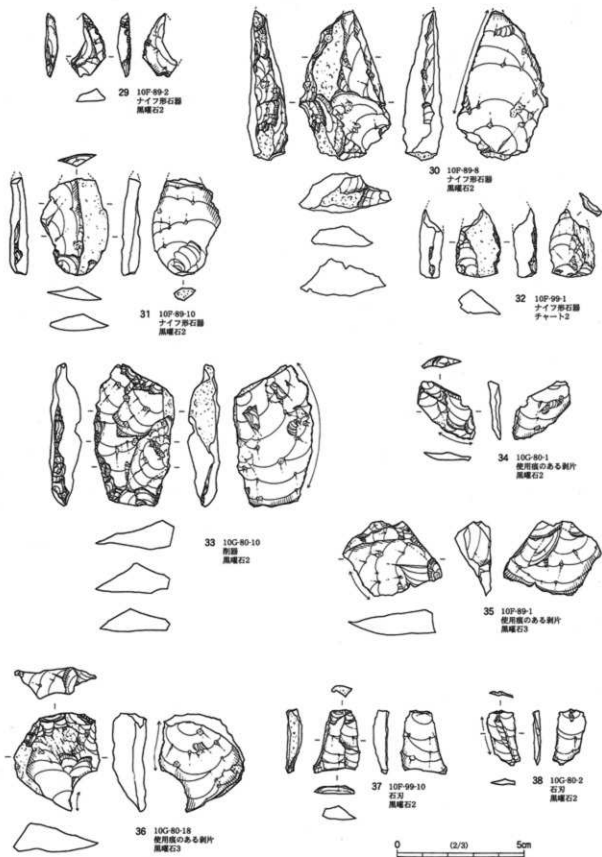
チャート2は黒色で滑らかな風合いを持つ。

出土石器

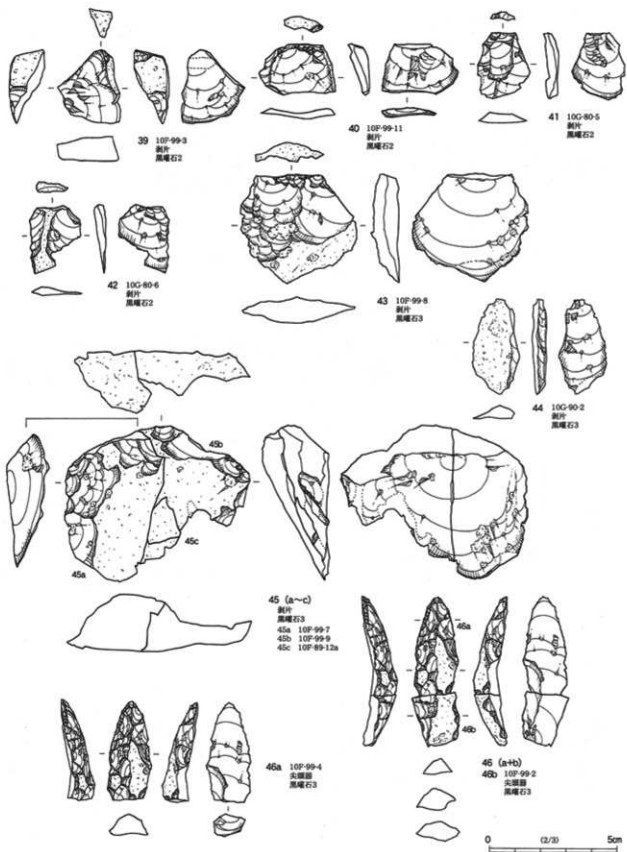
ナイフ形石器 (29~32) 29~31は同一母岩であり夾雑物が多く含まれる黒曜石2を母岩とする。29は剥片素材のナイフ形石器である。右縁辺は52°~54°、左縁辺は折れて欠損している。30は自然面打面から剝離された厚みのある剥片を素材にしている。緩く弧を描く左側縁には56°~78°の調整痕が並ぶ。刃部である対



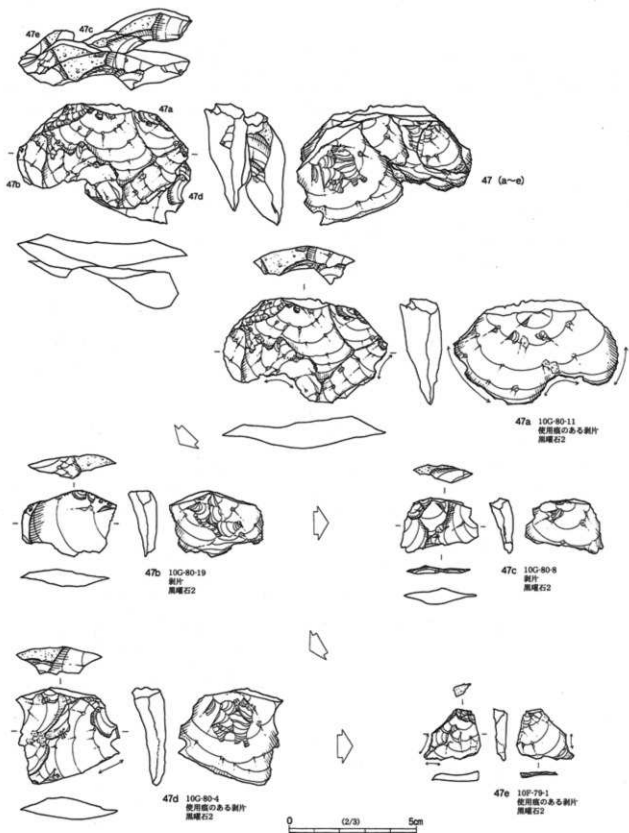
第128図 第26ブロック遺物分布



第129図 第26ブロック出土石器(1)



第130図 第26ブロック出土石器(2)



第131図 第26ブロック出土石器(3)

縁は長さ4cm、60°の角度を測り、裏面からは微細剥離痕がまんべんなく看取される。先端部はガジリによりわずかに欠けている。31・32は素材剥片の打面付近を基部に据え、縁辺を刃部とする。31は左側縁に刃潰し加工を施している。右上縁辺は30°の刃部を成し、上端部は折れて欠損している。32の左下部は68°~76°で基部を作出し、右縁辺は28°~30°の刃部となる。上部は折れにより遺存していない。

削器(33) 33の左縁部は54°~76°に二次加工された後、擦り潰したような使用痕が看取される。打面および右側面は自然面である。頭部に調整痕がみられる。

使用痕のある剥片(34~36) 34は下縁辺に使用によると思われる微細剥離痕が看取される。35は左側縁に刃こぼれ状の使用痕がみられる。打面は剥離時の破碎により欠損している。36は左側縁に自然面が残る。右側縁と右下縁の抉られた部分が使用されている。

石刃(37・38) 37・38はともに背面が主要剥離面と同一方向の剥離痕からなる石刃である。頭部に調整痕が看取される。37の左側縁部には自然面が残っており、下部は折れにより欠損している。38の器厚は薄く、左側縁部に刃こぼれがみられる。

剥片(39~44) 39は打面・両側面に自然面が残る。打面の剥離痕は主要剥離面とは反対方向から加撃されたものである。末端縁(遠縁辺)が扇状に広がる。40は頭部に調整痕がみられ、下縁辺は一部折れて欠損している。40~43の背面は、主要剥離面と同一方向の剥離痕で構成されている。43は頭部に細かく丁寧な調整痕が看取される。44の背面はほぼ自然面である。打点は砕けて欠落している。下端は調査時の折れにより欠ける。

接合資料(45~47)

45は打点直下の折れにより、縦に分割されている。層を成す節理状の面により剥がれた剥片の接合資料である。背面・打面は風化作用により光沢は失われている。

46(a+b)は最大長5.95cm、幅1.88cmの石刃素材の尖頭器であり、素材時の打面は無加工のまま残る。何らかの作用で腹面から背面に向かって折れが生じ、先端部である46aが再加工されている。折れた付近は腹面側から急角度に基部加工され、両側縁も一回り小型(最大長4.0cm、幅1.8cm)に調整加工されているが、素材時の基部には手は加えられていない。

47は5点とも同一打面(双面)からの剥離である。打点は自然面と剥離面の交わったところにあり、横幅のある剥片が作出されている。少なくとも8片以上、同様の手順で剥離されていることが推察されるが、ここでは5点のみ接合した。5点のうち、47a・47d・47eには微細な剥離痕が看取される。

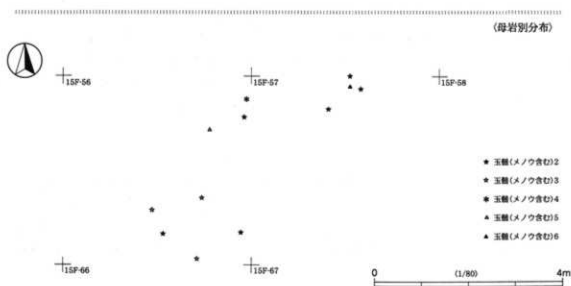
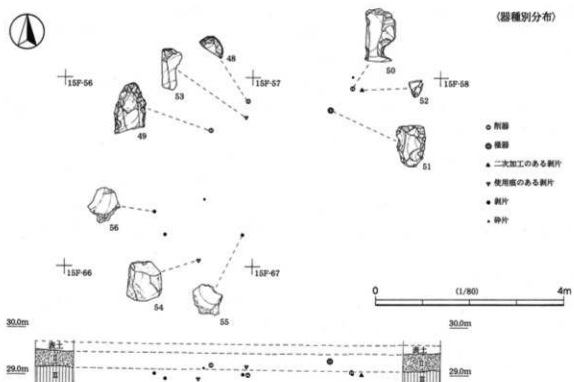
第29表 第26ブロック組成表

母岩名/器種	ナイフ等石類	尖頭器	削器	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石 2	3	0	1	4	2	11	6	27	48.21%	119.89	47.80%
黒曜石 3	0	2	0	2	0	19	14	28	50.00%	127.30	50.76%
チャート 2	1	0	0	0	0	0	0	1	1.79%	3.62	1.44%
合計	4	2	1	6	2	21	20	56	100.00%	250.81	100.00%

5 第27ブロック (第132・133図、第30表、図版33)

遺物分布状況

調査区の南半部の北西に位置し、標高は29.5mを測る。遺物は15F-56・57グリッドの南北に4m、東西に4.4mの範囲から12点が出土した。分布の状況は北東から西南に長軸6m、短軸3mの勾玉のような形でまとまっている。

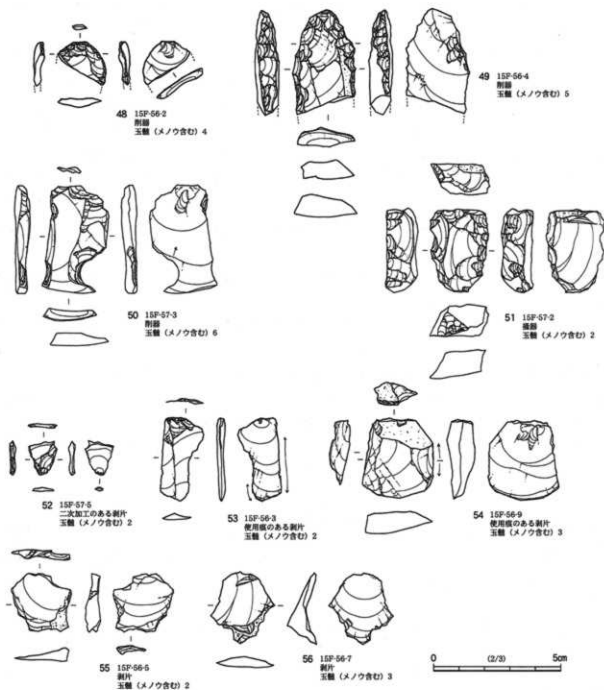


第132図 第27ブロック遺物分布

土層柱状図を推定線で結んだ断面図の中に遺物を投影したところ、II層～III層にかけて包含され、その中心層はIII層上面であった。51の搔器がII層の中程から出土したように投影されているが、51の帰属する母岩である玉髄（メノウ含む）2の分布状況を鑑みて、何らかの自然の力の影響により、上方へ持ち上げられたものと認識した。12点の平均レベルは29.1mである。

母岩別資料の分布

5母岩12点の玉髄（メノウ含む）で構成される。以下石材の特徴を記す。



第133図 第27ブロック出土石器

玉髓（メノウ含む）2（6点） 淡褐・青灰・灰白色が混じり合い、珪質で樹脂状の光沢を持つ。自然面はざらついた黄褐色である。

玉髓（メノウ含む）3（3点） 淡青灰色を基調にして、灰白色と層になる部分があり、白斑が入る。自然面は光沢のない淡褐色である。玉髓（メノウ含む）2と3は似る。

玉髓（メノウ含む）4（1点） 青みがかった濃灰色。玉髓（メノウ含む）2・3・5・6ほど濃色はなく、異質。

玉髓（メノウ含む）5（1点） 青灰白色で、筋っぽい黒もや状の線が入る。

玉髓（メノウ含む）6（1点） 青灰白色で、樹脂状光沢を持つ。所々で明茶色、白筋部分が層状になる。

出土石器

削器（48～50） 48は小打面を有する剥片素材である。右側縁の角度は32°～34°で、微細剥離痕が並ぶが、各々の打点は明確ではない。左側縁は64°で小剥離痕により腹面側から剥離されている。両側縁の加工は下部の折れに切られる。49の右側縁は68°～72°、左側縁は76°～92°であり、左側縁部を急角度の剥離によって面的に加工している。加工時に折れが生じたためか、作業途中で遺棄される。折れの生じる前段階にはこの削器よりも一回り大型の石器であった可能性がある。先端部を斜めに整えた形状や折れ面によって切られた側面の微細剥離痕は再加工の行われる以前の素材石器時のものであると思われる。また尖頭器の未製品である可能性もある。50は頭部調整によって整えられた打面から作出された石刃状の剥片を素材に用いて、右側縁に深い抉りを入れた削器である。抉入部分は連続した小剥離によって調整されている。下部は折れて欠損している。

掻器（51） 51の裏面はネガ面である。右側縁は68°～94°、左側縁は54°～70°、下縁部は86°～90°の急角度剥離によって面的な加工が施されている。

二次加工のある剥片（52） 52は小打面を有する二次加工のある剥片である。背面の打面直下には主要剥離面と直交する方向からの二次加工痕が数枚みられる。

使用痕のある剥片（53・54） 53は調整打面から加撃された石刃状剥片である。両側縁に微細剥離痕が看取される。54は自然面と剥離面の交点を打点に据え、剥離されている。背面上半部および右下縁に古い面が残り、左縁は欠損している。直線的な右側縁には使用痕が看取される。

剥片（55・56） 55・56ともに打撃時の折れにより打面が弾ける。55の右側面には凹凸のある薄茶の自然面が残る。56の末端の力は石核内部に向かいアーチ状となる。

第30表 第27ブロック組成表

母岩名 / 器種	削器	掻器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
玉髓(メノウ含む)2	0	1	1	1	2	1	6	50.00%	16.41	34.07%
玉髓(メノウ含む)3	0	0	0	1	1	1	3	25.00%	13.73	28.50%
玉髓(メノウ含む)4	1	0	0	0	0	0	1	8.33%	0.90	1.87%
玉髓(メノウ含む)5	1	0	0	0	0	0	1	8.33%	10.36	21.51%
玉髓(メノウ含む)6	1	0	0	0	0	0	1	8.33%	6.77	14.05%
合 計	3	1	1	2	3	2	12	100.00%	48.17	100.00%

6 第28ブロック（第134・135図、第31表、図版6・33）

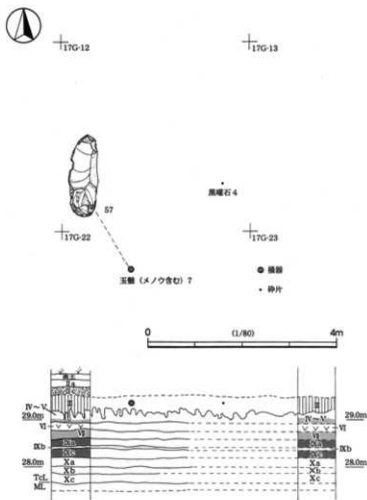
遺物分布状況

調査範囲の南半部中央からやや南西寄りに位置し、出土グリッドは17G-12・22であり、標高は29m～30

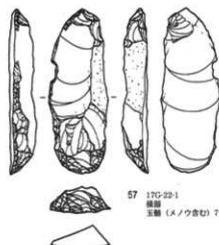
mを測る。第28ブロックの中心から東南に23m離れて第29ブロックが存在する。第28・29ブロックの標高はほぼ同じである。この17G-12グリッド付近は土層の堆積状態が極めて良好で、武蔵野ローム上面まで確認することができた。遺物は約2.6m離れて2点のみの出土であり、III層中部に包含される。遺物は玉髓製搔器と黒曜石の砕片であり、他ブロックに同一母岩は検出されなかった。

出土石器

搔器 (57) 57は青灰・赤茶・黄灰・艶紫色を基調とした豊富な色のバリエーションを持ち、油脂状の光沢を放つ。玉髓（メノウ含む）2・3に似る。両側縁がほぼ平行に走り厚みの均一な石刃を素材にして左縁辺および末端に調整加工を施している。打面部分は裏面側から除去されたのちに調整加工され、下端部は半円弧を描くように60°～84°の面的な調整が施されている。



第134図 第28ブロック遺物分布



第135図 第28ブロック出土石器

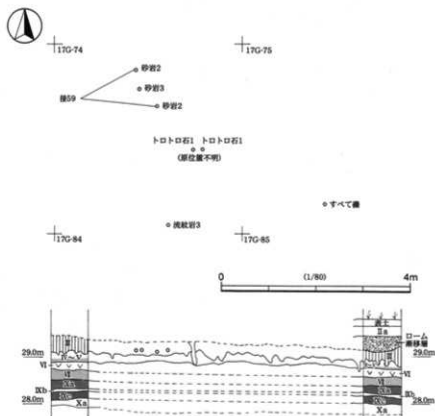
第31表 第28ブロック組成表

母岩名 / 器種	搔器	砕片	点数	点数比	重量(g)	重量比
黒曜石	4	0	1	50.00%	0.18	1.17%
玉髓 (メノウ含む)	7	1	0	50.00%	15.18	98.83%
合計	11	1	1	100.00%	15.36	100.00%

7 第29ブロック (第136図、第32表、図版6)

遺物分布状況

調査範囲南半部の南、17G-74グリッドから6点が出土している。すべて礫・礫片で構成される。標高は第28ブロックと同じく29m~30mである。トロトロ石2点の明確な出土位置は不明である。出土レベルは29.075m~29.196m、高低差は12cmであり、土層図に投影したところ、III層の中程からやや下方に横一直線に並んだ。各々、風化して丸みを帯びた礫・礫片であり、部分的に赤化が認められるが、それは被熱によるものと思われる。



第136図 第29ブロック遺物分布

第32表 第29ブロック組成表

母岩名 / 器種	礫	点数	点数比	重量(g)	重量比
トロトロ石 1	2	2	40.00%	15.65	18.79%
流紋岩 3	1	1	20.00%	17.55	21.07%
砂岩 2	102	102	20.00%	39.05	46.88%
砂岩 3	1	1	20.00%	11.05	13.27%
合計	506	506	100.00%	83.30	100.00%

※ () は出土点数

第8節 単独出土石器（第137～139図、図版33・34）

ここでは、明らかに旧石器時代の遺物であるが6枚の文化層に包含されないもの、および、ブロックを形成していないグリッド単独出土石器について記す。

出土石器

実測した石器に関しては便宜的に、北側から挿図番号をつけた。

1は削器である。灰白褐色で滑らかな油脂状の光沢がある。石核調整剥片の上半部（打面を含む）を用いて削器を作出している。左縁辺の調整角度は57°～63°、使用によると思われる微細剥離痕も看取される。

2は使用痕のある剥片である。打面付近は60°～70°の加工によって弧状に整形され、右側縁に微細な剥離痕がみられる。槓器的に使用したものであろうと思われる（端削器か）。

3は石核である。下面には平坦な自然面が残る。縁辺（角）は潰れて丸みを持つ。打面からは左側面・裏面・正面の3面が剥離されており、打面調整痕が看取される。

4は尖頭器である。墨を薄く流したような半透明の黒曜石で、整美な菱形である。素材面は残っていない。上半部の左右縁辺は鋸歯状に加工されている。先端は欠損している。

5は剥片である。被熱して赤茶・黒・黄褐色になったチャートである。風化が激しい。

6は石核である。3と似る。左面に自然面を残す。剥離作業は平坦な上・下面を打面にして行われ、残核は角柱状に面取りされた状態を呈する。縁辺には所々潰れたような擦痕があり、丸みを持つ。

7は剥片である。頭部調整痕がみられる。平坦打面から薄い剥片を作出している。二次加工・使用痕は看取されない。

8は石刃である。平坦な双面打面である。両側縁はほぼ平行に走り、主要剥離面と同一方向からの剥離痕によって構成される。下端部は新欠によって欠損している。右側縁は47°、左側縁は65°を測る。

9は楔形石器である。明茶色の斑が入る明黄色の正面と、黒みがかかった濃緑色の裏面では全く別色であり、一部碧玉化しているものと思われる。両極から同時に加撃されたため、剥離が複雑に交錯する。両側縁に使用によると思われる微細な剥離痕が看取される。

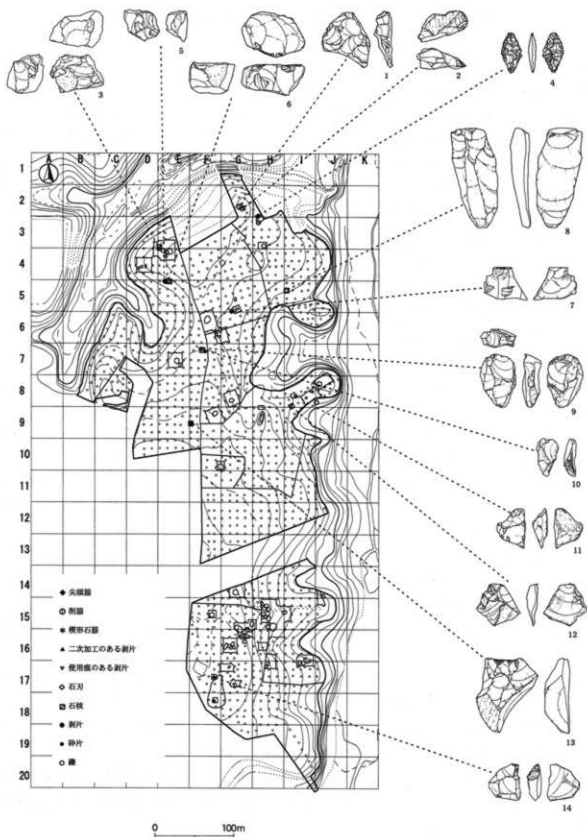
10は二次加工のある剥片である。加工部分を側面に展開するため、打面を水平にせず器形に準じた。灰白色で軽く、非常に脆い。主要剥離面側の下半部は面的なガジリによって崩れている。右側面にはおおまかな成形の後に急角度の調整が加えられて直線上の縁辺が作られている。

11は縁辺に使用痕のある剥片である。青～緑灰色のチャート製。出土地点から類推すると縄文時代遺物の可能性もある。

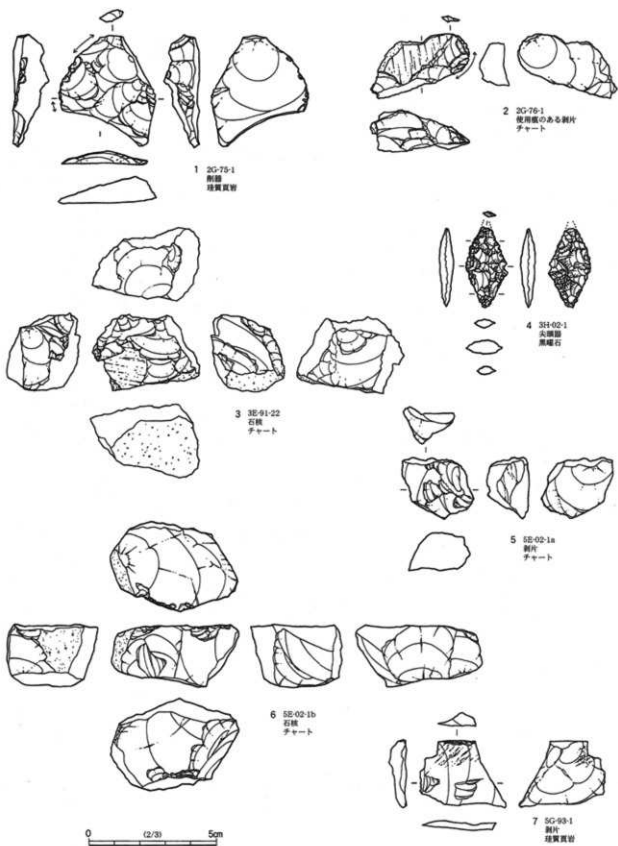
12は使用痕のある剥片である。もや状に黒斑の入る黒色半透明の黒曜石で、夾雑物はみられない。線状打面で、直線的な縁辺には使用痕が巡る。

13は剥片である。打面・頭部調整がみられる。厚みがあり、調整された打面から剥離される。主要剥離面と同一方向の剥離面6面以上で背面が構成される。下端は新欠である。

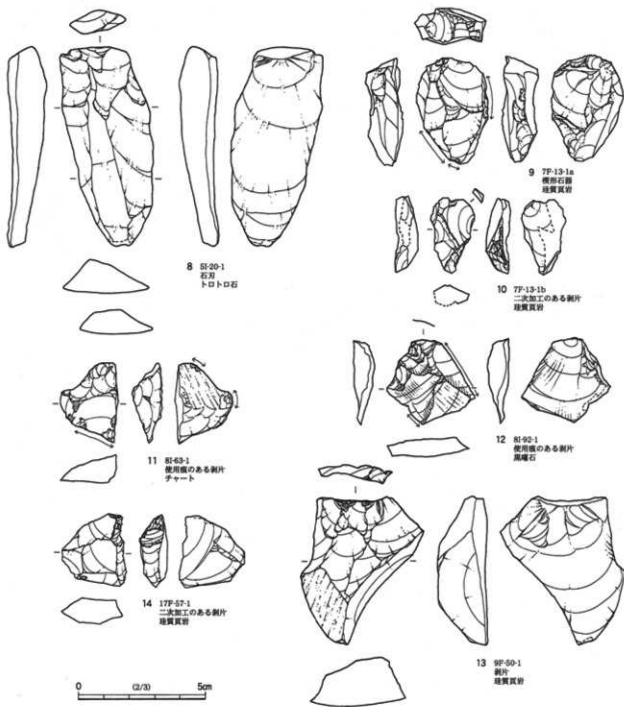
14は二次加工のある剥片である。油脂状光沢のあるチョコレート色の珪質頁岩である。背面には多方向からの剥離痕がみられる。器面調整的な役割を担う剥片の可能性がある。打面部は折れた後に背面側から加工されている。



第137図 ブロック外及び単独出土石器分布状況



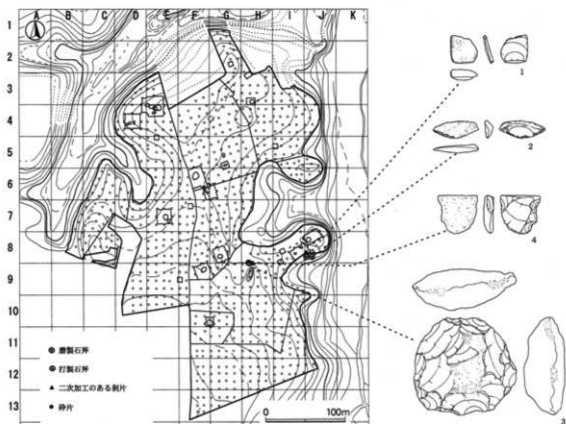
第138図 ブロック外及び単独出土石器(1)



第139図 ブロック外及び単独出土石器(2)

第9節 その他の出土石器 (第140・141図、図版33)

ここでは旧石器時代の遺物に混入していた縄文時代の所産と思われる石器について記す。



第140図 その他の出土石器分布状況

1・2は砂岩を使った磨製石斧の刃部の一部であり、表面は擦られて光沢を持つ。2は粉碎した後の石片端部に、連続した小剥離痕が観察される。

3は9 H-02グリッドから出土した石器である。調査地点の北側は斜面のため調査不能であり、拡張面からクラムシェルにて掘削した際、褐色粘質土中から出土している。このため、出土位置および出土層は不明瞭であったが、石器から判断して縄文時代所産の遺物に分類した。ただし、後期旧石器時代初頭に出現する円盤状石核の可能性も否めない。

粗粒の砂岩を素材に、打製石斧を再加工して製作された粗い両面加工の円盤状の石器である。打点を周回させて求心的な剥離が行われている。正面図に図示された自然面には研磨痕が所々看取される。左側縁は交互剥離によってはっきりとした直線的な縁辺をなすが、右側縁部には自然面が面的に残されている。下縁辺は2か所の凹みができており、刃部としては用をなさないものと思われる。刃部再生加工途中で遺棄されたものであろうか。

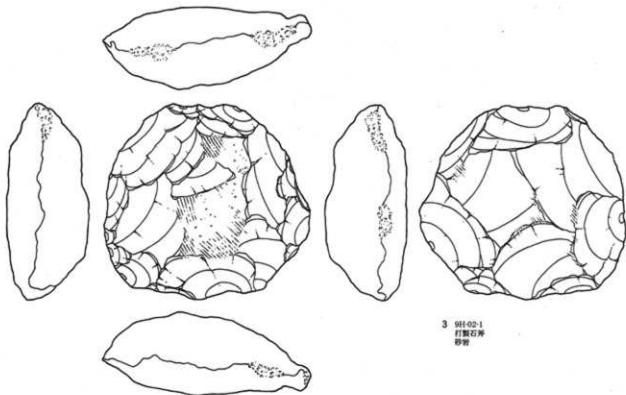
4はガラス質黒色安山岩の二次加工のある剥片である。背面は自然面であるが、腹面は50°~55°の平坦剥離によって器面を削ぐように加工されたヘラ状の石器であり、上部は欠損している。



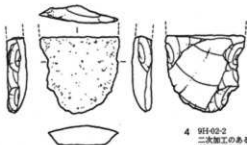
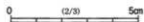
1 8J-70-2
磨製石斧
砂岩



2 8J-71-1
磨製石斧
砂岩



3 9H-02-1
打製石斧
砂岩



4 9H-02-2
二次加工のある割片
ガラス質黒色安山岩

第141図 その他の出土石器

第10節 まとめ

文化層の概要については、第33・34表の文化層別器種組成表・石材組成表、第142・143・146図の文化層別主要石器、第147・148図の文化層別主要石材組成図のとおりである。文化層は6枚に分離できた。29か所のブロックが検出され、ブロック出土の石器総点数は、1,469点である。このほか、ブロック外出土石器の22点を含めると、石器出土総点数は1,491点を数える。第2文化層と第4文化層が質・量ともに充実している。文化層を6枚に分離したが、ブロック間の接合資料が乏しく出土層位が明確でない地点もあり、今回設定した文化層は、厳密な意味では同一時期のものではない。同様に、文化層の前後関係についても、第3文化層と第4文化層、第5文化層と第6文化層とは明確な線引きは困難である。しかしながら、石器群の内容の違いを少しでも明確にするために、本地域周辺の石器群の様相やその段階変遷を参考にして、6枚の文化層に分離した。なお、本文と第142・143・146図の挿図番号は、第2～7節の挿図番号と一致するものであり、本節で不掲載の遺物実測図については、前節を参照されたい。

本節では、各文化層の特徴を記載するとともに、周辺遺跡の石器群との比較を行いながら、石器群の位置づけを行うことにする。

1 第1文化層（第142図）

VII層～IX a層に生活面を持つと考えられる石器群であり、源七山遺跡において石器が出土する最下層である。ブロックは3か所存在し、いずれも30点～36点のまとまりを持つ集中地点である。

石材には他文化層とは異なり、ガラス質黒色安山岩が多用され、頁岩、ホルンフェルス、チャートなどもブロックごとに片寄りはあるが用いられている。なお、第1・第2ブロックに共通して使用される自然面・風化面とも漆黒で光沢のある黒色頁岩であるが、本遺跡より直線距離で約33km北方に位置する柏市中山新出I遺跡下層¹³⁾、3.5km東方の坊山遺跡第4文化層¹⁴⁾にも同様の石材が存在する。おそらく、関東平野周辺の山地の、万田野・長浜層砂礫層から採取されたものが広く用いられていると推定される。

石器組成については、隣接する第1・第2ブロックにおいては剥片・碎片の割合が高く、加工・調整が施されたものは削器1点のみであり、第3ブロックには台形石器・楔形石器各々1点ずつと、二次加工のある剥片が2点出土している。

当期は安山岩・頁岩を主体としており、黒曜石はみられない。これは本遺跡から東に約5km離れた萱田台遺跡群のヲサル山遺跡II期¹⁵⁾・権現後遺跡I・II期¹⁶⁾、北海道遺跡第3文化層¹⁷⁾においても同様であり、同じ石材原産地から搬入されたことが推定される。

2 第2文化層（第142図）

VI層～VII層に生活面を持つと考えられる石器群であり、6ブロックから351点が出土し、第4文化層(VI層～V層)に次いで出土点数が多い。

石器石材をみると、黒曜石259点・珪質頁岩72点であり、94%がこの2石材で占められ、ガラス質黒色安山岩・トロトロ石・安山岩・流紋岩・凝灰岩・砂岩・硬質頁岩・チャート・玉髓（メノウ含む）も出土するが、いずれも4点以下である。主体を成す黒曜石の多くは透明度が高く、夾雑物の少ない良質な信州産であり、第4文化層で出土した黒曜石との差異は明確である。

黒曜石から作出された器種はナイフ形石器15点・削器18（20）点・搔器2点・楔形石器3点・二次加工

のある剥片21点・使用痕のある剥片46(47)点・石刃9点・石核4点・剥片41点・破片97点であり、石核が極端に少なく、剥片類・破片の量が多い。ここに、優れた石材を究極まで加工し、利用しようとする旧石器人の息づかいが感じられる。

珪質頁岩から作出された器種はナイフ形石器6点・二次加工のある剥片3点・使用痕のある剥片13点・石刃8点・石核8点・剥片29(30)点・破片4点であり、72点中20点が接合関係を持つが、完形にまで復原されるにはほど遠く、ブロック内に持ち込まれた石材を加工したのち、一部分は調整・製品化し、大部分は素材として他所に移されたと推定される。

器種別の特徴は以下のことがあげられる。

ナイフ形石器 縦長剥片素材16点・横長剥片素材5点であり、縦長剥片の大部分が石刃であったものと思われ、これを素材として一側縁・二側縁加工の細身のナイフ形石器を生産している。素材の打面部は小さく加工されるか、除去される。これらは権現後遺跡Ⅲ期の第3～5・7・8ブロックと石材、大きさ、加工とも酷似している。

削器 素材としては縦長剥片が主流であり、貝殻状剥片、横長剥片もわずかながら用いられる。形状、調整部位はまちまちだが、すべて黒曜石が素材であり、出土ブロックは第7～9ブロックに限られる。

掻器 縦長剥片の打面部に急角度剝離を施して緩やかな弧状に刃部を仕上げたものと、板状の剥片の周縁を丁寧に加工した楕円形状の2点が出土する。特に63の器形は左右対称で調整痕の深さも均等であり、整った形状である。石材は黒い筋状模様と無色透明でガラスのような部分とが二分する黒曜石であり、装飾品としても通用するような美しさを持つ。この母岩である黒曜石6は17点を数えるが、器種別の内訳はナイフ形石器1点・削器5点・掻器1点・二次加工のある剥片3点・使用痕のある剥片3点・石刃1点・石核1点・剥片1点・破片1点であり、作出された石片のほとんどに人の手の加わった痕が残る。ブロック内で加工されたものとなると、出土した破片の量が極端に少ない。これは、①剥片生産に卓越した者が存在した、②他所で作出された石器類が持ち込まれた、③石くずは他所に廃棄した、などが考えられる。

楔形石器 64は上下2方向の剝離痕を持ち、下端が硬化面に接していたために加撃時にはね返りを伴った、広義の楔形石器である。98・136は素材の上下縁辺に小剝離を施すことによって直線的に仕上げた楔形石器であるが、136は下半部が折れて欠損した後も、折れ面から裏面へ向けて加工が施される。

石刃 石刃を素材にして二次加工・調整が施された石器はそれぞれ加工・使用後の器種で分類した。そのため、加工の施されていない石刃のみを数えたところ、石材は黒曜石9点・珪質頁岩8点・ガラス質黒色安山岩1点であった。石材ごとの並びかえは、ブロックにおける石材の偏在を示すことになったが、黒曜石と珪質頁岩における石刃剝離方法に顕著な相違はなく、必要に応じて打面調整が行われ、同一規格の石刃が組織的に生産されている。

石核 おおまかに3類に分類される。

- a類：石刃、あるいは、剥片を素材にして剥片剝離が行われたもの(83・125・126・128b・170b)
- b類：打面転移を繰り返した多面体石核(24d・27e・46)
- c類：設定打面から加撃され、同一方向の剝離痕を持つもの(24a・25f・44・45)

第2文化層における石核の特徴としては、石刃あるいは剥片素材石核として剝離作業が行われることにある。83・125・170bは剥片(石刃)の折れ面を打面にして素材石核の正裏面を側面、側縁とする小石刃を連続的に剝離しようとした意図がうかがえる。



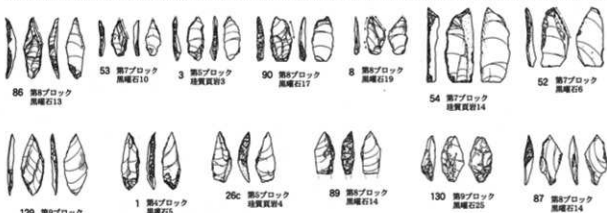
台形様石器

石核

楔形石器

削器

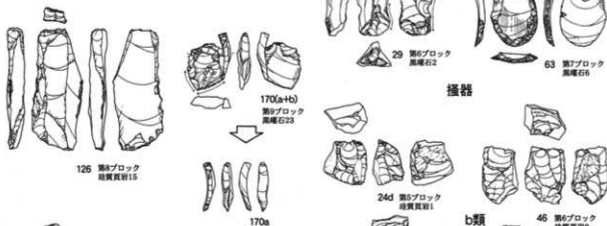
第1文化層



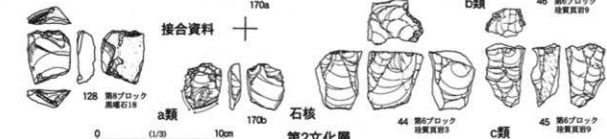
ナイフ形石器



削器



搔器



第2文化層

0 (1/3) 10cm

第142図 文化層別主要石器(1)

128bも折れ面を打面として、幅広の剥片を作出し、作出された剥片には使用痕がみられることから、石材消費の限界まで剥片を生産し、活用されていることがわかる。

126は同一母岩が他にないことから、石刃の段階で搬入されたものと思われる。腹面側から打面部を除去し、現れた面を打面にして両側面を末端に向かって加撃している。この厚みのある大型石刃を素材とした剥片剥離技法は、下総型石刃再生技法として位置づけられており、香山新田中横堀遺跡(空港№7遺跡)⁽⁹⁾における接合資料5に類例をみる。

3 第3文化層(第143図)

第3文化層は立川ロームのV層に生活面を持つものである。当遺跡では、第10ブロックのみが該当し、南半部の北端に位置する。総点数の35点のうち、礫・礫片が18点と過半数を占める。礫はすべて安山岩で構成され、剥片・石器類と平面・垂直とも分布域を一にする。

石材はガラス質黒色安山岩・トトロ石・安山岩・黒曜石・砂岩・珪質頁岩・硬質頁岩・ホルンフェルス・玉髓(メノウ含む)と多彩であるが、安山岩と黒曜石を除けばすべて1母岩1点の出土である。雑多なものを寄せ集めた感のあるブロックだが、器種構成もまた特異であり、礫を除く17点のうち5点がナイフ形石器である。横長大型剥片素材・小型周縁加工・切出し状・湾曲した基部加工・刃部のみなど、5点には石材・器形、おそらくは用途とも統一性は認められず、このブロックだけでV層を考察するのは困難である。よって、V層を産出層とする近在の遺跡と比較することで、源七山遺跡をみていく。

当遺跡から北東に6km離れた、神崎川と新川(平戸川)に挟まれた台地上に位置する間見穴遺跡(2) B19・C19区⁽⁷⁾においては、V層から18点が出土する。礫群は伴わない。器種(括弧内は石材)は次の通りである。ナイフ形石器(珪質頁岩)・彫器(メノウ)・楔形石器(黒色頁岩・メノウ)・剥片(黒色安山岩・ホルンフェルス・チャート・メノウ)である。

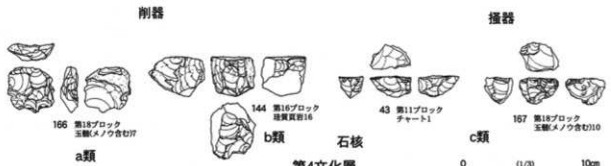
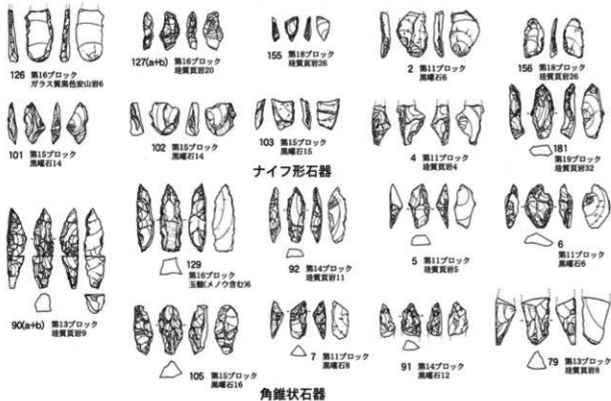
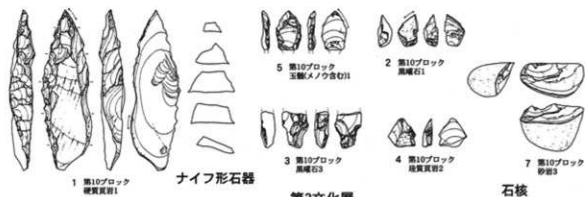
またこの間見穴遺跡(2)の北東に隣接する道地遺跡⁽⁸⁾においては単独出土石器がV層に包含されており、ナイフ形石器(安山岩・メノウ)・搔器(珪質岩)・剥片(安山岩・黒曜石・頁岩・珪質岩・メノウ)が出土している。

当遺跡から東に4.5km離れた向山A遺跡第1地点⁽⁹⁾では、剥片類5点、礫18点の23点が出土する。剥片類にはガラス質黒色安山岩、珪質頁岩が用いられ、貝殻状剥片の外周に連続した小剥離痕が廻る削器、二次加工のある剥片が出土する。

以上の3遺跡と比較したところ、大規模な集中区ではないこと、ガラス質黒色安山岩や玉髓(メノウ含む)が利用されていることには共通性を見出せるが、礫群の有無、石材の多寡、器種の偏在などからは統一性は感じられない。なお、上記の安山岩及び黒色安山岩は当遺跡ではガラス質黒色安山岩に、珪質頁岩は珪質頁岩として分類している。

次に、特に目を引く大型のナイフ形石器(1)について、素材としての剥離技術、用途の可能性を探る。褐色で堅微な硬質頁岩の横長幅広・肉厚剥片を用い、打面部を除去するように整形剥離して木葉形に仕上げられた、最大長12.63cmのナイフ形石器である。この大型のナイフ形石器について、県内の遺跡から類似する石器群をみていくことにする。

源七山遺跡から桑納川、神崎川を越えて10kmほど北東に向かうと一本松南遺跡⁽¹⁰⁾が立地する。この遺跡の第5文化層の遺物出土層はV層であり、第11・12ブロックにおいては珪質頁岩を主体に、黒曜石・メノ



第4文化層

0 (1/3) 10cm

第143図 文化層別主要石器(2)

ウ・チャート・変成岩を用いたナイフ形石器・剥片・石核・礫が出土した。横長剥片を素材としたナイフ形石器は珪質頁岩製3点、チャート製1点を数え、このうち1のチャート製のものは製品として搬入された「国府型ナイフ形石器」として報告されている（第144図）。



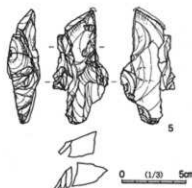
第144図 一本松南遺跡 第5文化層出土石器

このほか、彦八山遺跡⁽¹¹⁾、西長山野遺跡⁽¹²⁾においても類例があり、素材の作出方法、調整加工の方法は類似するが、7 cm以下のものが大多数を占める。

また、このナイフ形石器（1）の用途であるが、先端刃部と、緩く張り出した下半部に使用によると思われる微細剝離痕がみられる。通常、搬入された良質の石材は、石器に加工された後も再生加工や調整が施され、細・碎片に至るまで消費されることが多いが、このナイフ形石器（1）も素材石核としての用途があったものと思われる。

獅子穴IX遺跡第Iユニット⁽¹³⁾の接合資料（第145図）を例にあげると、厚みのある横長剥片の腹面を打面として、順次、剥片を作出するという工程がみられる。

その2例のうち1例を示した。石核は「残核を転用して、ナイフ形石器として機能した可能性もある」との記載があるが、第一次剝離の縁辺は素材時に使用された後、剥片剝離され、残核となってからも使われたものである。



第145図 獅子穴IX遺跡 第Iユニット出土石器

以上のことから、源七山遺跡第3文化層で出土した大型横長剥片素材のナイフ形石器は、磐越高地で採集された原礫が、横剥ぎの技術を持つ地域で成形された後、素材（ブランク）として運び込まれたものと推定される。

4 第4文化層（第143図）

IV層～V層に生活面を持つと考えられる石器群であり、9ブロック812点を数え、源七山遺跡で最も広範囲であり、ブロック数・出土点数も最大である。石器群はソフトロームからハードロームにかけて出土するが、III層下部以下、不安定化する粘性の強い褐色粘質土中においても検出され、層位的な分離は困難である。

まず、安山岩礫・流紋岩礫を除く加工された石器石材であるが、黒曜石が323点で最も多く、以下、珪質頁岩129（131）点・ガラス質黒色安山岩43点・玉髓（メノウ含む）35（36）点・ホルンフェルス18点と続き、安山岩・チャート・トロトロ石・水晶が少量出土する。

黒曜石の多くは、肉眼観察の域を出ないが、漆黒で火雑物を多く含んだ高原山産と推察され、ナイフ形石器5点・角錐状石器4点・削器2点・掻器2点・楔形石器1点・二次加工のある剥片12点に加工され、作出された剥片および破片294点のうち、16点に使用痕が看取された。石核はわずかに1点のみを数え、器種組成のうえで、極端に少ない。これは、黒曜石の利用価値の高さを明示しているものではないだろうか。

次に多い珪質頁岩では、ナイフ形石器6(7)点・角錐状石器5点・削器3点・二次加工のある剥片5点・石核3(4)点・剥片および破片107点のうち、使用痕のある剥片は20点であり、黒曜石の用いられ方と同様、貴重な石材であったことがうかがえる。

なお当遺跡で分類した「珪質頁岩」であるが、細分はせずに、滑らかなチョコレート色をした良質なものと、淡黄灰白をしたチョークのような珪質泥岩塊をも含めた。石器石材研究会(田村隆代表)の提言する、下野一北総回廊説⁽¹⁰⁾を鑑みれば、チョコレート色の珪質頁岩は磐越高地の珪質泥岩、淡黄灰白の珪質頁岩は高原火山北部に産する鹿野沢層(栃木県那須高原市)⁽¹¹⁾からの搬入素材(火砕泥岩か)である可能性が高く、在地の歯間層群の珪質頁岩は検出されなかった。

器種別の特徴は以下のことがあげられる。

ナイフ形石器 ガラス質黒色安山岩4点・黒曜石5点・珪質頁岩6点・ホルンフェルス1点・玉髓(メノウ含む)1点の計17(18)点である。17点のうち9点に欠損部分があり、形状による分類は困難である。石刃を素材としたものは126の1点のみで、その他は、不定形の剥片や横長剥片を用いて調整加工され、周縁加工、基部調整、一・二側縁加工など様々な形状を示す。IV層～V層に多出する切出形ナイフ形石器であるが、当遺跡においては定型的なもの出土はなく、その範疇に含まれるものとしては、第15ブロックの101・102・103が挙げられる。また、横長剥片を素材に用いたものは、3・4・78・101・181で、181は角錐状石器の範疇に含めてもよいかと思われる。

角錐状石器 黒曜石4点・珪質頁岩5点・玉髓(メノウ含む)1点であり、1母岩1点出土のものは4点、複数点のものは6点を数える。珪質頁岩・玉髓製のものは製品として持ち込まれた可能性があるが、6の黒曜石6は55点、7の黒曜石8は10点が同一母岩から作出されており、この6・7は遺跡内で作成されたものである可能性が高い。また90は角錐状石器が折れた後の上部を再加工して一回り小型の角錐状石器に仕上げられたものであり、遺跡内に作成・加工技術を持った者が存在したことがうかがえる。

削器 9点の内訳は黒曜石4点・珪質頁岩3点・玉髓(メノウ含む)2点であり、石材組成は角錐状石器とほぼ同様である。

掻器 4点が出土する。黒曜石2点・ホルンフェルス1点・玉髓(メノウ含む)1点である。72の掻器は盤状で厚みがあり、素材時の大きさはこの2倍はあったものと推定される。また同一母岩も11点を数えることから、遺跡内で作られたものと認識される。

楔形石器 一端を固定した状態で、対端が加撃されてきた楔形石器である。

磨石 風化して脆くなった粗面等粒状の安山岩・流紋岩の磨石で、扁平面にわずかに擦痕がある。

石核 おおまかに3類に分類される。

a類: 打点を周回させて求心的な剝離を行ったもの(42・125d・166・180b)

b類: 打面転移を繰り返した多面体石核(41・45・114・140・141・142・143・144)

c類: 設定打面から複数の剝離痕を持つもの(43・44・167)

43は甲板面から両側縁部に急斜な角度の整形剝離を施して、端部を尖らせた石器であり、尖端を上へ置

いたときに横断面が三角形状となる。これは角錐状石器の範疇に含まれるものであるが、整形・調整が不十分であり、加工途中で遺棄された可能性が高い。

次に礫群の分布状況であるが、第12・17・18ブロックを除く6地点において、礫片の出土がみられ、特に第13ブロックにおいては167点中131点が粗面の安山岩・流紋岩・チャート礫である。

また礫・礫片の類は石器と同一文化層から出土しており、平面的な分布範囲も一致する。しかし、石器と礫群では石材組成が全く異なり、唯一両方にみられる安山岩・流紋岩においても異質なものである。そのため両者がどのように関係したのかは不明であるが、分布および出土層位が一致するため、これらの石器・礫は同一集団の同一時期における作業の所産であると思われる。

5 第5文化層(第146図)

第5文化層はおもにⅢ層のソフトロームとその下層の粘質土、あるいは褐色粘質土中に遺物が含まれている文化層であり、第20～22ブロックがこれに該当する。3ブロックともⅢ層以下、土壌が変成しているために通常の立川ロームは確認されないが、Ⅲ層～Ⅳ層中・上部に分布の中心を持つものと捉えた。石器の出土点数はいずれも40点以下であり、小規模なブロックである。

石器群は、小型で周縁加工のナイフ形石器(1)・削器(2・13)・搔器(3・4)・再生された打面から同一方向の連続した剥離痕がみられる細石刃石核(5)・石核(11j)・二次加工のある剥片・剥片・礫で構成される。このうち細石刃石核は、出土層位が不明なため、本文化層に帰属するかは定かではない。

石材は多い順から、ガラス質黒色安山岩・珩質頁岩・チャート・ホルンフェルス・凝灰岩・流紋岩・黒曜石であり、珩質頁岩12点のうち10点は接合する。

6 第6文化層(第146図)

第6文化層はソフトローム中に生活面を持つ石器群である。第23～29ブロックの7か所を検出し、南北に500m、東西にはわずか40m、標高25m～30mの台地中央部の帯状に7ブロックが取る(第119図参照)。

以下、ブロックによって組成に偏りがみられたため各々の特徴を記す。

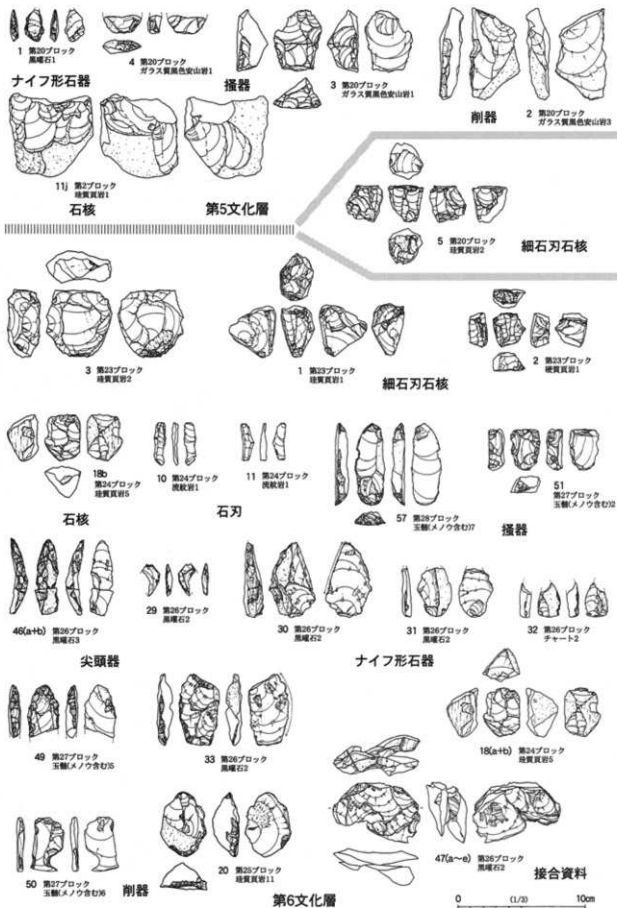
第23ブロック グリッド一括で取り上げられた4点の内訳は、細石刃石核(1・2)、石核(3)、剥片(4)である。石材は、硬質頁岩製細石刃石核1点のほかは珩質頁岩である。Ⅲ層上部に包含されていたと推察される。

第24ブロック 斑品の少ない流紋岩と珩質頁岩が主体である。流紋岩では小型の石刃(10・11・12)、珩質頁岩では頭部調整痕のある剥片が作出されており、剥片と石核の接合例もみられる。

第25ブロック 隣接する第24ブロックとは27mしか離れていないが、石材はガラス質黒色安山岩が主体であり、70%を占める。両端が折れた黒曜石製のナイフ形石器(19)、横長の厚みのある剥片を素材にした削器(20)などが出土する。

第26ブロック 北に位置する第25ブロックから70mの距離にある。チャート1点を除けば55点がすべて黒曜石という、黒曜石の加工場の様相を呈する。尖頭器が再加工されて小型に作り直される例(46)などがある。一側縁にやや粗い調整加工が施されたナイフ形石器が4点(29～32)出土している。

第27ブロック 南半部北側、第26ブロックの200m南に位置する。12点のすべてが玉髄(メノウ含む)である。外縁部が加工された削器(48・49・50)、搔器(51)、二次加工のある剥片(52)など、製品が多く、

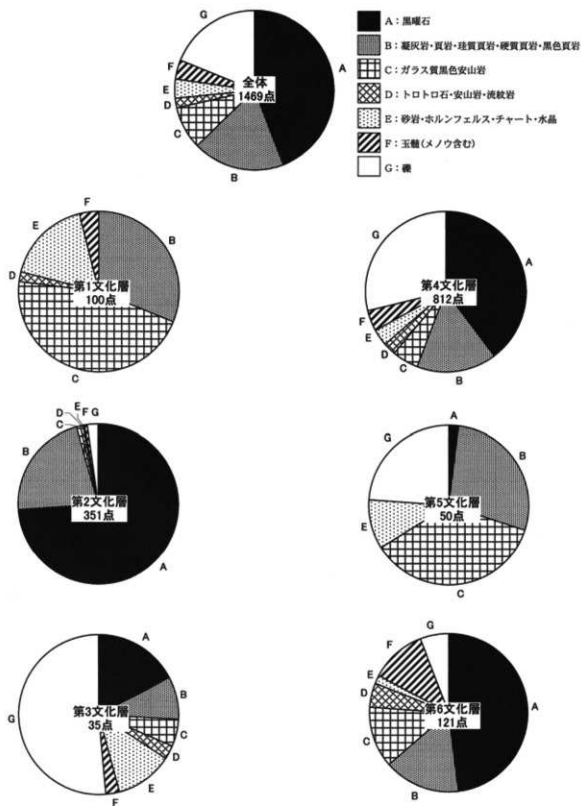


第146図 文化層別主要石器(3)

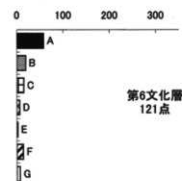
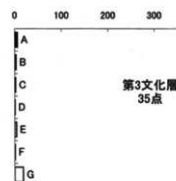
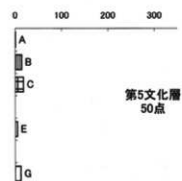
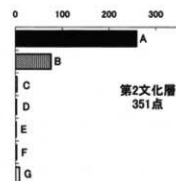
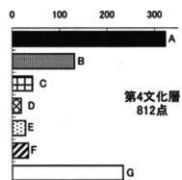
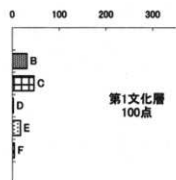
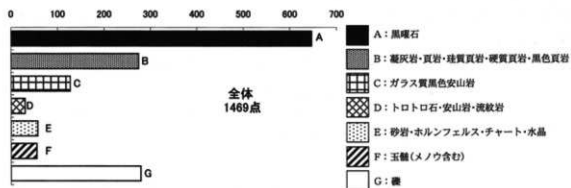
第34表 文化層別石材組成表

文化層	ブロンテ	黒色片岩 片麻岩	トロトロ岩	安山岩	花崗岩	黒閃岩	輝閃岩	砂岩	頁岩	泥岩頁岩	硬質頁岩	軟質頁岩	黒色頁岩	赤レンガ レンガ	チャート (メノウ状含む)	水島	点数	点数比	重量 (kg)	重量比
第1文化層	1	14							1	1	50	12	2				2030	2.5%	179.13	1.1%
	2	8							1900				2				2030	2.0%	223.00	1.4%
	3	24	1		1			1			1		1	1	4		34	2.4%	181.23	1.0%
第1文化層 合計	46	1			1			2002	2	700	13	3	4			9910	7.0%	954.36	3.6%	
第2文化層	4					2											2	0.1%	4.17	0.0%
	5	2			1		1		40								50	3.6%	305.28	2.5%
	6						9	1		2021							3031	2.1%	327.21	2.1%
	7	1	1	2	1	55				2			1				63	4.5%	442.09	2.0%
	8	1			1	4084					2	3					4071	4.9%	371.50	2.4%
9	1	1		1	129											134	5.6%	130.64	1.2%	
第2文化層 合計	3	3	2	4	234299	1	1		7172	3				1	2		347381	25.0%	1720.89	11.2%
第3文化層	10	2	1	1918		6	3			2	1		1				3230	2.3%	796.10	5.0%
第3文化層 合計	2	1	1918		6	3				2	1		1				3230	2.3%	796.10	5.0%
第4文化層	11	10	1	5	8	280		1	4560			12313	4	1	1		380370	28.3%	1419.05	9.1%
	12															10311	10311	0.7%	118.21	0.7%
	13	17	2	1920	5097	10				7				10			114987	8.2%	4947.31	26.2%
	14	1	1	203	1	3											3017	1.0%	181.10	1.1%
	15	4		25	2836	11	102										4193	5.0%	2962.14	13.4%
	16	9		12	6	2				3030							4001	5.7%	1235.60	8.0%
	17																3	0.2%	28.05	0.1%
	18										15			3	1610		2033	2.3%	209.67	1.5%
	19	3	1	1031	8	14					2						3037	2.6%	848.80	5.3%
第4文化層 合計	43	8	7204	94031	323	203			129131			1819	19143	34360	1	746013	53.4%	10260.73	66.5%	
第5文化層	20	17			102	1				12				70			3040	2.7%	1056.47	6.0%
	21	1											1	4			4	0.4%	44.80	0.2%
	22							2									4	0.2%	67.32	0.4%
第5文化層 合計	18				102	1	2		12				3	11122		4050	3.4%	1168.68	7.6%	
第6文化層	23										3	1					4	0.2%	138.30	0.9%
	24					9		1			12						19	1.3%	147.92	0.9%
	25	15		1		2											22	1.0%	241.13	1.5%
	26					55											56	4.6%	230.81	1.6%
	27															12	12	0.8%	48.17	0.3%
	28					1										1	2	0.1%	18.36	0.1%
	29	2			1				203								90	0.3%	83.30	0.5%
第6文化層 合計	15	2	1	8	58	36			18	1				2	14		126121	8.6%	925.87	6.3%
合 計	127	12	91100	113064	644847	3	1812	2021	234237	5	700	2936	2834	5537	1	13891499	100.0%	10335.83	100.0%	

※ () 内は土点数



第147図 文化層別主要石器石材組成図(1)



第148図 文化層別主要石器石材組成図(2)

石核は検出されない。

第28ブロック 黒曜石の碎片と玉髄（メノウ含む）の播器（57）が出土している。縦長で両側縁が平行の石刃末端部を円弧状に加工し、打面部を細くしつらえている。

第29ブロック 砂岩3点・トトロ石2・流紋岩1点の礫のみで構成される。

このように第6文化層においては、石器組成や石材組成に類似点はなく、ブロック間の接合資料もみられない。これらのことから、ソフトローム中から出土した第23～29ブロックの石器群を第6文化層としてとらえたが、同一時期・同一段階の石器群であるかは不明である。

- 注1 田村 隆 1986「聖人塚・中山新田1」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』(財)千葉県文化財センター
- 2 田村 隆 1993「八千代市坊山遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書VI』(財)千葉県文化財センター
- 3 藤岡孝司 1986「八千代市ヲサル山遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書III』(財)千葉県文化財センター
- 4 橋本勝雄 1984「八千代市権現後遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書I』(財)千葉県文化財センター
- 5 橋本勝雄 1985「八千代市北海道遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書II』(財)千葉県文化財センター
- 6 新田浩三 1995「下総型石刃再生技法の提唱」『千葉県文化財センター研究紀要16』(財)千葉県文化財センター
- 7 古内 茂 2005「八千代市問見穴遺跡(2)」『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4』(財)千葉県文化財センター
- 8 古内 茂 2004「八千代市道地遺跡」『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2』(財)千葉県文化財センター
- 9 落合章雄他 1994「八千代市神塚遺跡・上の台遺跡他一向山遺跡A-」『東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 10 落合章雄 1998「白井町一本桜南遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XII』(財)千葉県文化財センター
- 11 田村 隆 1987「松戸市彦八山遺跡」『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書1』(財)千葉県文化財センター
- 12 矢本節朗 1993「横芝町上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡」『横芝工業団地埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 13 新田浩三他 1994「獅子穴IX遺跡」『いなげや富里店店舗造成地内埋蔵文化財調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 14 田村 隆・国武貞克・吉野真如 2003「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第1報)」『千葉県史研究第11号』
田村 隆・国武貞克・吉野真如 2004「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第2報)」『千葉県史研究第12号』千葉県
- 田村 隆 2005「この石はどこからきたか」『考古学III』
- 田村 隆 2005「水河時代の旅」『発掘された日本列島2005—新発見考古速報展 地域展示解説』千葉県立中央博物館
- 15 田村 隆 2004「石器石材収集資料」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』千葉県

第3章 縄文時代

第1節 概要

本遺跡において、縄文時代に属すると考えられた遺構には、竪穴状遺構5基、陥穴4基、土坑4基、礫群8か所などがある。このうち礫群では7か所で土坑が認められており、後述するように礫群2では浅い掘り込みながら土坑が3か所にわたって検出されている。しかも、これらの礫群では多数の被熱破砕礫が確認されているため、その用途をも暗示しているかのようであった。

また遺物では中期の土器群を主体とし、早期・前期・後期に属する土器が若干ながら出土した。他には土製品として土器片錘・土製円盤、石製品では石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・敲石等といった遺物が検出されている。

第2節 遺構と遺物

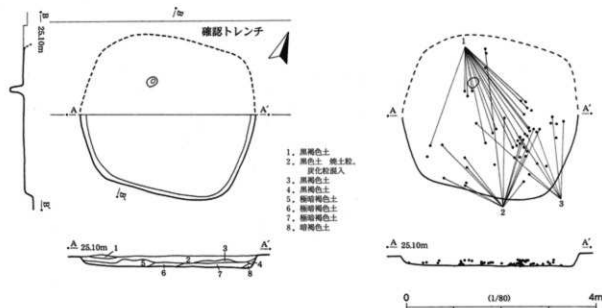
1 竪穴状遺構

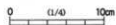
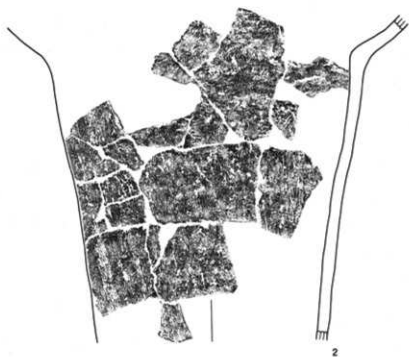
調査区の北側、K区の北東隅に位置する3G・4Gの大グリッドから集中して5基の竪穴状遺構が検出された。しかし、これらの竪穴状遺構では掘り込み内に炉跡あるいは柱穴といった住居跡に伴う明確な施設の痕跡が認められなかったため、本報告では「住居跡」という呼称は控えることにした。

なお、竪穴状遺構は集中して検出されたが遺構間の重複は認められず、出土遺物も後述するように中期の土器群が主体を占めていた。

SI001 (第149図、第150図1～3、図版7・35)

本跡は、他の4基の竪穴状遺構から離れて、4G-34・35グリッドに位置する。ローム層下の掘り込みが浅かったため確認調査時のトレンチによって北半分を消失してしまった。平面プランは楕円あるいは円形





第150图 SI001出土土器

に近かったものと思われる。遺存した部分から推定すると、長軸方向はほぼ東西にあり、長軸3.6m、短軸3.3mほどとなろう。確認面からの掘り込みは最大18cmを測る。底面は平坦であるが、明確な硬化面は検出できなかった。北西側に径20cm、深さ27cmのピットが1口検出されている。

遺物は、土器片が主となり東側に集中していた。しかし、確認トレンチの調査に際しても4G-34・35グリッドから出土しており、遺構全体に土器片が散布していたものと思われる。出土層位についてみると、覆土下層から底面にかけて出土しており、本遺構に伴うものと理解できた。

1は口縁部が遺存したもので、文様は整形後に口唇とその裏面に太い粘土紐の貼付と粘土紐によって区画された中に条線が認められる。器面は、3と同様な手法を用いた篋状工具により上下方向の整形を施すだけで仕上げている。胎土には小石・白色鉱物が多くみられ、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好といえる。形式的には加曾利E式的な要素を含みつつも勝坂・阿玉台的な条線・口縁裏面の特徴を併せもつ土器といえよう。2は大型の深鉢で、しかも口辺部が大きく外反するような形状を示す。図示したように遺構内全面にわたって散布していたようである。口辺部から胴部にかけて約1/3が接合したものであるが、口縁部・底部については検出できなかった。器面は無文で、篋状工具による簡単な整形が認められる。胎土には小石が含まれ、若干の雲母も混入されている。色調は赤褐色で、器厚は大型土器に相応しく13mm前後を測る。また口辺部の作りから形式的には阿玉台式でも古期に属するものと考えられるが、共伴土器から、より後出のものとしたほうがよいのかもしれない。3aの深鉢も阿玉台期に属するものであろうが、太い沈線は異質といえよう。3bの底部片との接合関係は認められなかったものの色調・胎土から明らかに同一個体と考えられた。出土状況は、遺構内で小破片が散布しているような状態で検出され、数点が接合したものの図示した以外にも十数点の未接合の破片が存在する。文様は太い沈線が特徴的で、底部付近にまでは至っていない。胎土には小石・白色鉱物の他に雲母を多く含有する。色調は褐色で、焼成は良好である。

SI002 (第151図、第179図42、第35表、図版7・35・42)

本跡はK区の北側に位置し、後述する遺構SI004～SI006と近接して検出されている。グリッドでいえば3G-85・86・95・96の4グリッドにかかる位置となる。北側には隣接してSI004が存在する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸3.1m、短軸2.4mとなり、長軸方向はN-73°-Wを示す。確認面からの掘り込みは最大25cmを測る。底面は平坦であったが、明確な硬化面は検出できなかった。

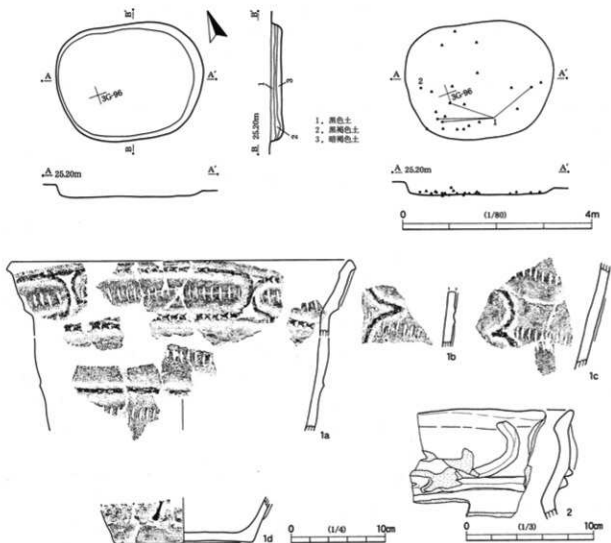
遺物は、覆土下層から底面にかけて土器片数十点及び石器・礫片等が出土している。本跡出土土器は、遺構外周辺から出土した土器との接合が認められたため、接合破片を中心に採択した。礫は被熱破損しているものが多く、礫群から出土した礫と同様なものであった。礫については、第35表のような構成となっていた。出土土器は2個体以上あったことが確認できた。いずれも阿玉台式土器である。

1は深鉢で、口縁部内面に僅かな稜を有する。覆土中からの出土片と、約20m離れた3G-53グリッドから出土した土器片の接合が確認された。同一個体と思われる胴・底部片(b～d)も遺構内から出土している。文様は断面三角の粘土帯の貼付と篋状工具による刺突文によって構成され、粘土紐の貼付は底部にまで及ぶ。形式的には阿玉台式期でも古期に属するものと思われる。胎土には小石・砂粒・雲母を多く含み、裏面での感触はザラザラとしたものとなる。色調は褐色を呈し、焼成は普通といえた。2は、本遺構の隣接グリッドから出土したものが接合した大型口縁部片である。他に接点がみられない破片が十数点

存在する。器形についてみると、内面の稜はより明確に作出されており、口縁部にはやや湾曲をもたせ粘土紐の貼付により文様を描いている。この手法は前出土器と共通するものといえよう。胎土は精選され、雲母も微細なものが若干混入されている程度である。色調は淡褐色を呈し、一部では黒褐色に変色していた。なお、石器では磨石の欠損品(42)が覆土中から出土している。

第35表 SI002雑構成表

資料数	石							材				遺存度		被熱		スス状付着物	
	砂岩	チャート	安山岩	多孔質 安山岩	石英岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	50% 以上	50% 以下	有	無	有	無	
点数	42	33	1		2	5			1	0	2	40	42	0	10	32	
%	100.0	78.7	2.3		4.8	11.9			2.3	0.0	4.8	95.2	100.0	0.0	23.8	76.2	
総重量g	1413.8	1234.7	2.2		45.6	101.2			30.1	—	—	—	—	—	—	—	
平均重量g	33.6	37.4	2.2		22.8	20.2			30.1	—	—	—	—	—	—	—	



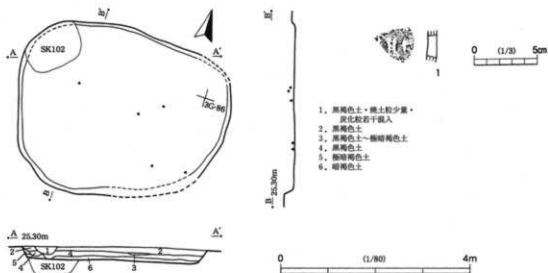
第151図 SI002・出土土器

SI004 (第152図、図版7)

本跡は、竪穴状遺構の中で最も規模が大きいものである。SI002の北に隣接し、3 G-75・76・85・86グリッドに位置する。SK102と北西コーナー付近で重複しており、調査時の観察でSI004によって切られていることが確認できた。このためSK102は、本跡よりも前に構築されたものとなろう。平面形はやや不整な楕円形で、規模は長軸4.5m、短軸3.6mとなり、長軸方向はN-78°-Eを示す。確認面からの掘り込みは23cmを測る。底面は平坦であるが、明確な硬化面は検出できなかった。

遺物は、覆土中より土器片が2点と石器・礫片4点が出土しているのみである。

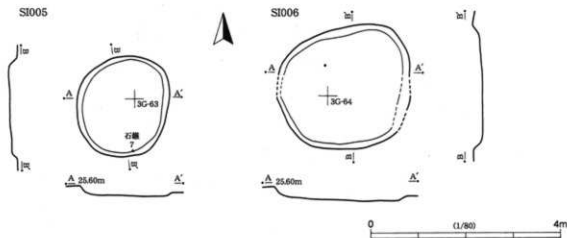
1は阿玉台式で、辛うじて採拓が可能な破片である。器面には、半截竹管か篋によるものと思われる押捺が施されている。胎土には小石・雲母を多く含む。



第152図 SI004・出土土器

SI005 (第153図、第177図7、図版8・41)

本跡は、SI006の西に隣接して検出されたものであり、3 G-52・53・62・63グリッドにかけて位置する。



第153図 SI005・SI006

平面形はほぼ円形を呈しており、規模は長軸2.2m、短軸1.9mを計測する。長軸方向はN-20°-Eを示す。確認面からの掘り込みは14cmを測る。底面は平坦であるが、明確な硬化面は検出できなかった。

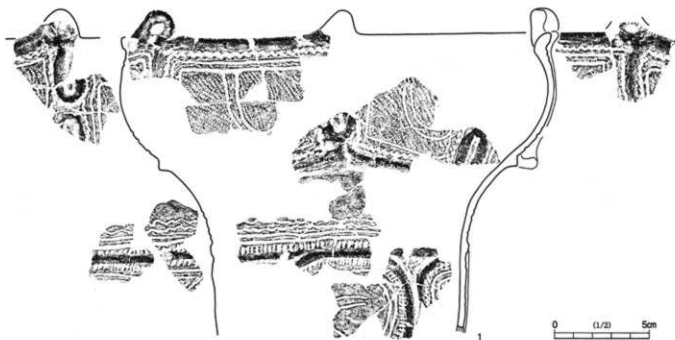
遺物は、南側の壁際の底面から石鏝1点が出土したのみである。しかし、確認トレンチ及び本調査の段階で本遺構の位置する周辺グリッドからは土器片が検出されており、本跡との関連も否定できないものと思われた。なお、本跡で検出された石鏝(7)はチャート製であった。

SI006 (第153・154図、図版8・35)

前述したように本跡は、SI005と隣接し、3G-53・54・63・64グリッドにかけて位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.9m、短軸2.55mとなり、長軸方向はN-75°-Eを示す。確認面からの掘り込みは16cmを測る。底面は平坦であるが、明確な硬化面は検出されなかった。

遺物は、覆土中から土器片が1点出土したのみである。しかし、確認トレンチ及び本調査の段階で本遺構の位置する小グリッドより多数の中期に属する土器片が出土し、遺構内出土の1点と接合したため本遺構に伴う土器として図示した。

一括土器として図示したものは、一辺が数cmほどの土器片を多数接合したものであり、ほぼ器形を推測できるまでになった。おそらく4対の把手を有する深鉢となろう。口辺部は緩やかに湾曲するような作りとなり、裏面の縁は明確さに欠ける。器面での文様は、粘土紐の貼付による隆帯・波状や爪形の押引・沈線・縄文などによって構成されている。施文の順をみると、粘土紐を貼付して隆帯による文様配置の終了後、縄文、沈線の順に施文している。なお、縄文は複節RLの原体を用い、口辺部だけにみられ胴部には施されていない。以上のように本土器は、阿玉台期の特徴である押引文、加曾利E期にみられる把手や縄文施文といった要素を併せもつ土器であるといえよう。胎土には小石・砂粒・雲母を多く含み、色調は淡褐色ないし淡い黒褐色を呈する。焼成は良好なものである。



第154図 SI006出土土器

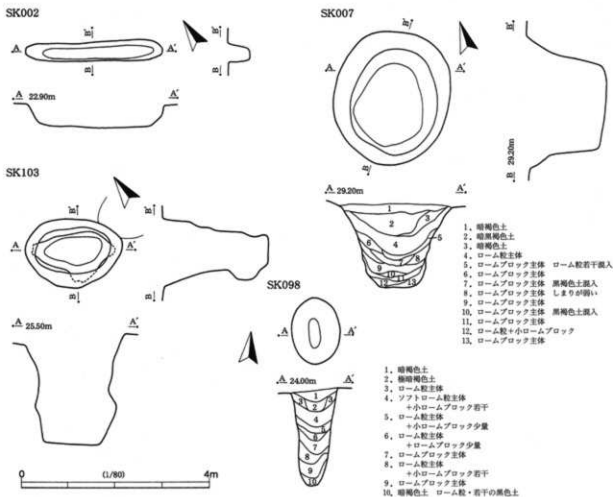
2 土坑

縄文時代と判断した土坑は、礫群中に存在したものを含め22基を検出できた。そのうち陥穴状土坑は、調査区に散在して4基検出された。確認面での平面形は円形に近い楕円形や長楕円形を呈し、掘り込みは概して深い。時期を明確に判断できる遺物は出土していないが、縄文期と考えてよいであろう。他に土器片集中地点（3G区）から検出された土坑が4基あり、形態・覆土・出土遺物等から縄文時代に属するものと判断できた。また、礫群内及び周辺からも円形の浅い土坑（数基がまとまったものと単独なものがある）が14基検出されている。土坑内でも礫が認められ、集石土坑と呼称できるものも存在した。そのため、これらの土坑は礫群を伴う土坑と判断し、礫群関連遺構として「礫群」の項で取り扱うことにした。

(1) 陥穴状土坑

SK002 (第155図、図版8)

調査区の南側、16 I-97グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸2.9m、短軸0.4mとなり、長軸方向はN-58°-Wを示す。確認面からの掘り込みは50cmを測る。底面も長楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸0.25mを測る。本遺構は下層本調査時にIII層を0.3mほど掘り下げた面で検出したもので、本来の掘り込みはさらに深くなる。覆土は黄褐色土が主体である。遺物の出土は皆無であった。



第155図 陥穴

SK007 (第155図、図版 8)

調査区の南側、15G-76・77・86・87グリッドに位置する。円形に近い楕円形で、規模は長軸2.85m、短軸2.45mで、長軸方向はN-36°-Eを示す。掘り込みはX層下部にまで及び、確認面から1.7mと深い。底面はやや不整な楕円形で、長軸1.8m、短軸1.45mを測る。覆土は、底面に黒褐色土が薄く1cmほど一面に堆積しているほかは、下層は壁の崩落と思われるハードロームブロックが多く堆積し、中層・上層は自然堆積と思われる褐色土や黒褐色土が主体となっていた。このことから開口部の平面形は、本来はもう少し小さくなるものと考えられる。遺物の出土は認められなかった。

SK098 (第155図、図版 9)

調査区の北西側、4D-54・64グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.0mとなり、長軸方向はN-10°-Wを示す。掘り込みは武蔵野ローム層にまで及び、確認面から2.0mの深さとなる。底面は長楕円形を呈し、長軸0.6m、短軸0.25mを測る。本遺構は下層本調査時にV層中(III層上面から約50cm)まで掘り下げた面で検出したもので、本来の掘り込みはさらに深くなる。覆土は、最下層にローム土に若干の黒色土が混入した土層で、下層はハードロームブロックが多く堆積し、中層・上層は黄褐色土(ローム土)や暗褐色土が主体の堆積となっていた。遺物の出土は認められなかった。

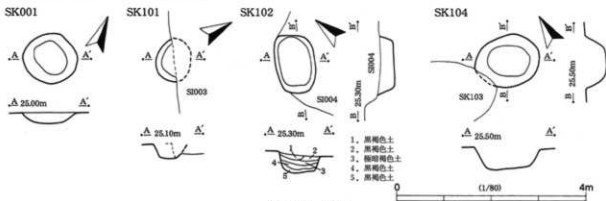
SK103 (第155図、図版 9)

調査区の北側、3G-55グリッドに位置している。東側には一部重複してSK104が検出されている。切り合い関係では判断できず、新旧は確認できなかった。平面形は楕円形で、規模は長軸2.05m、短軸1.45mとなり、長軸方向はN-50°-Wを示す。確認面からの掘り込みは2.2mを測り、掘り込みの中位から下位でオーバーハング状に若干の挟りが認められた。底面も楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸0.6mを測る。遺物は、覆土上層中より土器片が1点出土したのみである。この土器片は無文で小破片のため図示しなかったが、本遺構周辺から出土している中期前半の深鉢の胴部破片と考えられた。

(2) その他の土坑

SK001 (第156図、図版 9)

本跡は、D区とした調査区の南側の17I-67グリッドにおいて検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径1.0m、確認面からの掘り込みは0.2mを測り、浅い皿型を呈している。覆土は黒色土で炭化粒が若干混入していた。遺物の出土は見られなかったが、周辺からは後期の土器片が比較的多く出土しており、本跡もこの時期に属する可能性が高い。



第156図 土坑

SK101 (第156図、図版11)

本跡は、竪穴状遺構が検出された3G-76グリッドに位置する。SI003に北半分が切られている。平面形は楕円形と推定され、検出時の規模は長軸約0.9m、短軸約0.7mを計測する。長軸方向はN-40°-Wを示す。確認面からの掘り込みは0.4mを測る。遺物の出土は認められなかった。

SK102 (第156図、図版9)

本跡は、SI004の調査中に検出されたもので、3G-75・85グリッドにかけて位置する。SI004との重複関係により、本跡のほうが古い時期の土坑と判明した。確認面での平面形は楕円形で、規模は長軸1.2m、短軸0.8mを計測し、長軸方向はN-45°-Eを示す。確認面からの掘り込みは0.5m、SI004の底面からは0.35mを測る。覆土は黒褐色土が主体であった。遺物の出土は認められなかった。

SK104 (第156図、図版9)

本跡も、前者と近接した3G-55グリッドから検出されている。西側ではSK103と一部重複していたが、新旧関係までは確認できなかった。平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は長軸で1.4m、短軸で1.1mを計測する。長軸方向はN-65°-Wとなる。確認面からの掘り込みは0.45mを測る。底面も楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.65mを測る。遺物の出土は認められなかった。

3 礫群

本遺跡では、8か所にわたり焼礫を主体とした礫群が確認されている。検出地点は、K・G区で4か所と集中しており、さらに竪穴状遺構もK・G区で検出されているため、その関連性も考えられるところである。検出された礫群は土坑を伴わないものと、土坑を伴う二者が存在するが、ここでは両者を含めて礫群と呼称することとし、各礫群中にみられる土坑も含合わせて記載する。また各礫群の出土層位は、概ね第II層に属し、縄文中期の土器片も若干ながら出土している。これら礫群に伴う遺物に関しては、次項で一括して述べることにする。

また、礫群については、それぞれの群ごとの礫の属性分類にあたって、数量・重量・石材・遺存度・被熱の有無・付着物(スス)の有無等の分類を試み、一覧表を作成した。

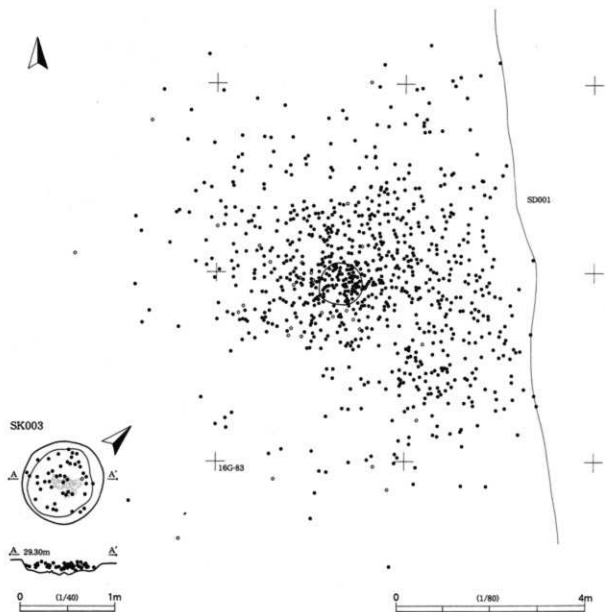
礫群1 (SK003) (第157図、第165図1、第36表、図版9)

調査区の南側、16G-63・64・73・74グリッドに位置する。礫の分布範囲は、集石土坑ともいえるSK003を中心として径8mの範囲に集中していた。とりわけSK003とその周辺では濃密に分布しており、被熱破砕しているものがほとんどであった。出土層位はIIa層からIIc層で、約30cmのレベル差の中で出土して

第36表 礫群1 (SK003) 礫構成表

	資料数	石										遺存度		被熱		スス付着物		
		砂岩	チャート	安山岩	黒川頁岩	石炭層砂	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	50%以上	有	無	有	無		
土坑外	点数	856	444	158	34	20	72	61	30	31	6	0	0	856	856	0	68	788
	%	100.0	51.9	18.5	4.0	2.3	8.4	7.1	3.5	3.6	0.7	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	7.9	92.1
	総重量g	13522.3	7605.5	1739.4	698.1	639.3	858.8	956.1	292.1	543.4	189.6	--	--	--	--	--	--	--
	平均重量g	15.8	17.2	11.0	20.5	32.0	11.9	15.7	9.7	17.5	31.6	--	--	--	--	--	--	--
SK003	点数	126	62	18	14	1	10	8	9	4	0	0	0	126	126	0	7	119
	%	100.0	49.3	14.3	11.1	0.8	7.9	6.3	7.1	3.2	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	5.6	94.4
	総重量g	2411.0	1216.7	294.3	370.5	10.2	132.8	126.4	92.1	168.0	--	--	--	--	--	--	--	--
	平均重量g	19.1	19.6	16.4	26.5	10.2	13.3	15.8	10.2	42.0	--	--	--	--	--	--	--	--
礫群総計	点数	982	506	176	48	21	82	69	39	35	6	0	0	982	982	0	75	907
	%	100.0	51.5	17.9	4.9	2.1	8.4	7.0	4.0	3.6	0.6	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	7.6	92.4
	総重量g	15933.3	8822.2	2203.7	1068.6	649.5	991.6	1082.5	384.2	711.4	189.6	--	--	--	--	--	--	--
	平均重量g	16.2	17.4	11.6	22.3	30.9	12.1	15.7	9.9	20.3	31.6	--	--	--	--	--	--	--

いる。礫の総出土点数は982点を数え、主に砂岩、チャートによって構成されていた。また土器片は、30点ほどが出土しているが小破片が多く、図示できるものとしては第165図1の阿玉台期の深鉢に代表される。SK003 平面形はほぼ円形で、規模は径0.9m、確認面からの掘り込みは15cmと浅い。その形状は皿型を呈しており、底面では凹凸が認められた。覆土は暗褐色土主体の堆積であった。覆土中及び遺構検出面直上から礫片が126点出土しており、集石土坑とも呼べるものであった。また、底面の中央部に焼土塊が検出されたが、炉跡のように火熱を受けて硬化したものではなかった。覆土中からは中期に属する底部片が1点出土した。小破片であったため図示は省略した。



第157図 礫群1 (SK003)

礫群 2 (SK004~006) (第158図、第171・178・180図、第37表、図版 9)

調査区の南側、16F-25・26グリッドを中心として濃密に礫の分布が観察された。分布範囲は、SK004~006の覆土内及びその周辺で径4mの範囲に集中している。一部は北側の16F-05・15・16等のグリッドまで散在していた。また礫は被熱破砕しているものがほとんどであり、出土層位はII a層からII c層となっている。総数は179点におよび、その多くは砂岩で構成されていた。出土遺物には縄文中期前半に属する土器(71・89)・石器(26・51)がみられ、それらは遺構内からの出土が大半を占めた。

SK004 16F-25グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、径は0.4m、確認面からの掘り込みは10cmを測り、浅い皿型を呈している。覆土は暗褐色土主体で、若干炭化粒の混入が確認された。覆土中及び遺構検出面直上から礫・礫片13点が出土している。土器の出土は認められなかった。

SK005 16F-26グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、径は1.0m、確認面からの掘り込みは15cmを測り、3基のうちで最も規模が大きい。覆土は暗褐色土で若干炭化粒が混入していた。覆土中及び遺構検出面直上から礫片40点・土器片9点が出土している。小破片のため採拓は省略した。

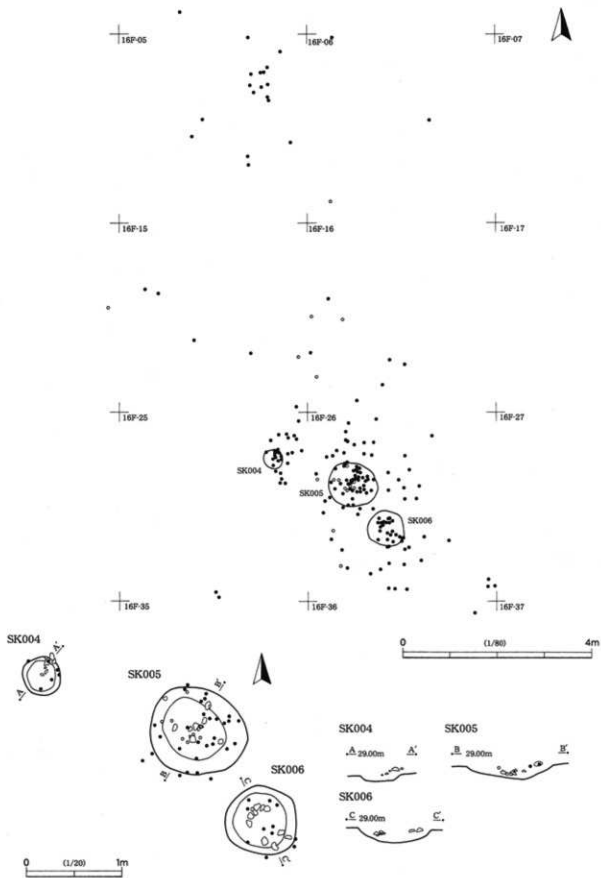
SK006 16F-26グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、径は0.75m、確認面からの掘り込みは15cmを計測し、底面はなだらかに窪む。覆土は暗褐色土で炭化物を若干混入していた。覆土中及び遺構検出面直上から礫片20点が出土したが、土器の出土は認められなかった。

第37表 礫群 2 (SK004~006) 礫構成表

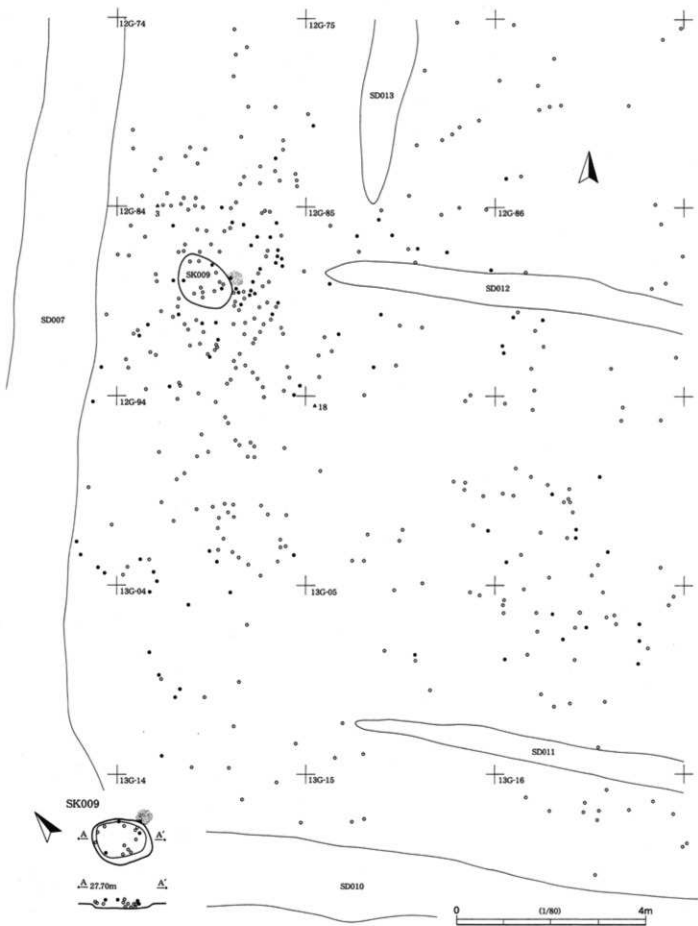
	資料数	石										遺存度		被熱		スズクヤ層			
		砂岩	チャート	安山岩	多文層 安山岩	石英斑岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	80% 以下	有	無	有	無			
土坑外	点数	106	66	4	3	16	11	2	2	2	0	0	106	106	0	11	95		
	%	100.0	62.2	3.8	2.8	15.1	10.4	1.9	1.9	1.9	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	10.4	89.6		
	総重量g	4561.1	2568.3	87.3	124.9	1263.9	272.1	187.0	13.3	44.3	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	43.0	38.9	21.8	41.6	79.0	24.7	93.5	6.7	22.2	—	—	—	—	—	—	—		
SK004	点数	13	0	0	0	2	0	0	0	0	1	12	13	0	1	12			
	%	100.0	46.2	—	—	15.4	15.4	—	—	—	23.0	0.0	7.7	92.3	100.0	0.0	7.7	92.3	
	総重量g	822.8	394.4	—	—	133.6	220.6	—	—	—	74.2	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	63.3	65.7	—	—	66.8	110.3	—	—	—	24.7	—	—	—	—	—	—		
SK005	点数	42	28	3	—	4	1	2	—	—	4	0	2	40	42	0	3	39	
	%	100.0	66.7	7.1	—	9.5	2.4	4.8	—	—	9.5	0.0	4.8	95.2	100.0	0.0	7.1	92.9	
	総重量g	1626.9	1043.2	19.4	—	462.7	32.7	26.8	—	—	42.1	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	38.7	37.3	6.5	—	115.7	32.7	13.4	—	—	10.5	—	—	—	—	—	—		
SK006	点数	18	8	—	—	4	2	1	—	—	3	0	1	17	18	0	6	12	
	%	100.0	44.4	—	—	22.2	11.1	5.6	—	—	16.7	0.0	5.6	94.4	100.0	0.0	33.3	66.7	
	総重量g	1920.4	732.0	—	—	793.3	149.7	90.6	—	—	154.8	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	106.7	91.5	—	—	198.3	74.9	90.6	—	—	51.6	—	—	—	—	—	—		
礫群総計	点数	179	108	7	3	26	16	5	—	—	2	12	0	4	175	176	0	21	154
	%	100.0	60.4	3.9	1.7	14.5	8.9	2.8	—	—	1.1	6.7	0.0	2.2	97.8	100.0	0.0	11.7	88.3
	総重量g	8931.2	4737.9	106.7	124.9	2653.5	615.1	304.4	—	—	13.3	315.4	—	—	—	—	—	—	
	平均重量g	49.9	43.9	15.2	41.6	102.1	42.2	60.9	—	—	6.7	26.3	—	—	—	—	—	—	

礫群 3 (SK009) (第159・165~168・172・173・175・177・178・180図、第38表、図版 9・35~42)

本跡は調査区の中央部、12G・13G区にかけて認められ、分布範囲は、南北20m、東西16mにおよんでいた。特にSK009の位置する12G-84グリッドに集中しており、さらに周辺域にまで散在していた。礫は被熱破砕しているものがほとんどで、礫の出土層位はII a層からII c層で、総数143点が検出されている。用いられた石材についてみると(第38表)、ここでは砂岩よりも安山岩が多用されていることが指摘できる。一方、土器についてみると礫と同一レベルで約500点の縄文中期の阿玉台式・加曾利E式土器が南北28m、東西24mの広範囲で出土している。こうした礫群と土器片の集中的な出土状況を考慮すると、当時の人びとの居住・生活空間がこの中に存在していたことは間違いない。なお、遺物の分布範囲の中ではSK009以外の遺構は検出されなかった。出土遺物としては、土器・石器があり図化できたものも多い。土器につ



第158図 雑群 2 (SK004~006)



第159図 礫群3 (SK009)

いてみると、第165図5～9は、同一個体で接合作業の結果、破片30点以上からなり、SK009出土土器との接合も確かめられた。いわば本礫群を代表する土器といえよう。他に第166図11・12、東北へ約10m離れた地点から17・18などが検出されている。なお、他に礫群内からは11・12・15・81・86・90・94・95・101～105・111～113・117・119・151、礫群の外縁からは17・18・30・91～93・96・106などが出土している。石器としては、第177図3の石鏃、第178図18の磨製石斧、第180図50の石皿などが検出された。

SK009 12G-84グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-55°-Wを示す。規模は長軸1.3m、短軸1.0mを計測し、規模としては大きい。確認面からの掘り込みは10cmを測り、浅い皿型を呈している。覆土は黒褐色土主体（炭化物若干混入）の堆積であった。また北東コーナーに隣接して焼土粒が径0.3mの範囲で散布していた。この焼土粒は、確認面で認められたのみで覆土・底面では認められなかった。また覆土中及び遺構検出上面から礫片4点・土器片11点が出土しており、掲載できるもの（110）も存在した。礫群は、その検出状況から集土坑とまではいえないが、焼礫や土器の出土からみて当時の人びとによって形成されたことは明白である。

第38表 礫群3 (SK009) 礫構成表

	資料数	石										材				遺存率		被熱		スズ状付着物	
		砂岩	チャート	安山岩	多孔質安山岩	石炭層岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	50%以上	50%以下	有	無	有	無				
土坑外	点数	140	31	7	21	25	34	14		7	0	0	140	139	1	15	125				
	%	100.0	22.1	5.0	15.0	18.6	24.3	10.0		5.0	0.0	0.0	100.0	99.3	0.7	10.7	89.3				
	総重量g	8064.6	1128.9	78.3	3468.9	1877.3	728.9	335.9		446.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	57.6	36.4	11.2	165.2	72.2	21.4	24.0		63.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SK009	点数	3	1				2			0	0	3	3	0	2	1					
	%	100.0	33.3				66.7			0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	66.7	33.3					
	総重量g	32.9	7.7				25.2			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	11.0	7.7				12.6			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
礫群総計	点数	143	32	7	21	25	34	16		7	0	143	142	1	17	126					
	%	100.0	22.4	4.9	14.7	18.2	23.7	11.2		4.9	0.0	0.0	100.0	99.3	0.7	11.9	88.1				
	総重量g	8097.5	1136.6	78.3	3468.9	1877.3	728.9	361.1		446.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	56.6	35.5	11.2	165.2	72.2	21.4	22.6		63.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

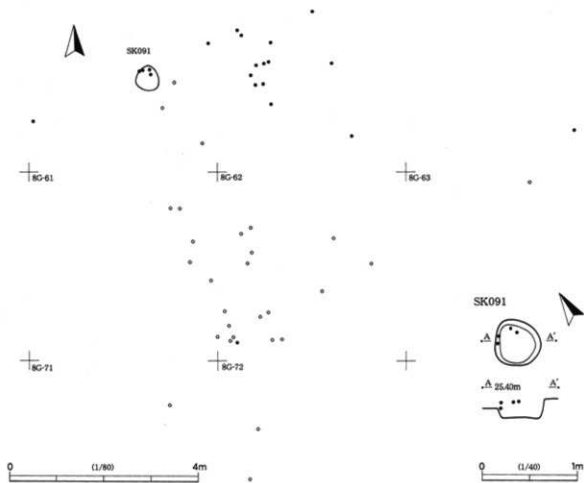
礫群4 (SK091) (第160・168・180図、第39表、図版10・37・42)

本跡は調査区の中央やや北よりの8G-52・62グリッドを中心に礫と土器が検出されたものである。礫は総点数31点と他の礫群と比べて少ないが、径3mの範囲に集中している。また周辺にも数点が散在していた。礫は被熱破砕しているものがほとんどであり、石材は砂岩・凝灰岩・チャート等によって構成され、出土層位はII a層からII c層となる。また礫群の一部にあたる8G-51グリッドではSK091が検出され、4点の礫が出土している。さらに礫群の南、8G-52・62グリッドでは、礫と同一レベルで中期の加曾利E式土器片40点余りが出土している。また、礫群集中地点から2m程度離れた場所(8G-61・62グリッド)から一括土器(23)が出土している(破片9点同一個体)。

第39表 礫群4 (SK091) 礫構成表

	資料数	石										材				遺存率		被熱		スズ状付着物	
		砂岩	チャート	安山岩	多孔質安山岩	石炭層岩	流紋岩	閃緑岩	凝灰岩	その他	完形	50%以上	50%以下	有	無	有	無				
土坑外	点数	27	12	6	1	1		6			0	1	26	27	0	1	26				
	%	100.0	44.5	22.2	3.7			3.7			0.0	3.7	96.3	100.0	0.0	3.7	96.3				
	総重量g	1368.2	734.0	188.2	6.1			18.3	20.4		401.2	—	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	50.7	61.2	31.4	6.1			18.3	20.4		66.9	—	—	—	—	—	—	—	—		
SK091	点数	4	1			1		2			0	0	4	3	1	0	4				
	%	100.0	25.0			25.0		50.0			0.0	0.0	100.0	75.0	25.0	0.0	100.0				
	総重量g	672.6	67.9			267.3		337.4			—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	168.2	67.9			267.3		168.7			—	—	—	—	—	—	—	—	—		
礫群総計	点数	31	13	6	1			8			0	1	30	30	1	1	30				
	%	100.0	42.0	19.3	3.2			25.8			0.0	3.2	96.8	96.8	3.2	3.2	96.8				
	総重量g	2040.8	801.9	188.2	6.1			285.6	20.4		738.6	—	—	—	—	—	—	—	—		
	平均重量g	65.8	61.7	31.4	6.1			142.8	20.4		92.3	—	—	—	—	—	—	—	—		

SK091 平面形は不整な円形で、規模は径0.5mと小規模である。確認面からの掘り込みは20cmを測り、覆土上面から礫片4点が出土した。土器の出土は認められなかったが、石器では石皿（53）の破片が出土した。

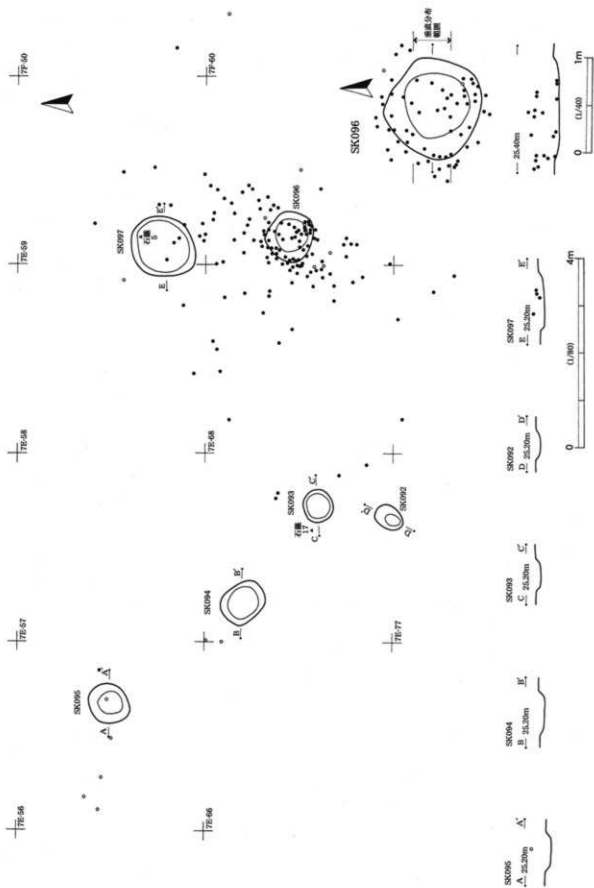


第160図 礫群4 (SK091)

礫群5 (SK092~097) (第161・171・177図、第40表、図版10・38・41)

本跡は、調査区の北西側にあたる7E区において、7基の浅い土坑を伴って検出された。礫の分布範囲は、7E-69グリッドで検出されたSK096を中心に認められ、その周辺の径5mの範囲に散布していた。さらにSK093周辺でも若干の散布が確認できたが、ここでの礫は希薄なものであった。出土礫の総数は148点を数え、石材は砂岩・チャートを主体としたものであった。ここでも礫は被熱破砕しているものがほとんどであり、出土層位もIIa層からIIc層となっている。また土器の出土は少なかったが、SK095付近で中期の阿玉台式土器の胴部片が20点ほど出土した。小片のため図示は省略した。石器は、石鏃（5・17）が2点出土しており、うち1点（5）はSK097から出土した。

SK092 7E-67・77グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-30°-Eである。規模は長軸0.65m、短軸0.5mを計測する。確認面からの掘り込みは13cmを測り、浅い皿型を呈している。覆土は黒褐色土主体であった。遺物の出土は認められなかった。



第161図 雑群5 (SK092~097)

SK093 7 E-67グリッドに位置する。平面形は円形で、径が0.7m、確認面からの掘り込みは10cmを測り、浅い皿型を呈している。覆土は黒褐色土主体となり、遺物の出土はみられなかった。

SK094 7 E-67グリッドに位置する。平面形はやや楕円形を呈し、長軸方向はN-40°-Wを示す。規模は長軸1.0m、短軸0.8mを計測する。確認面からの掘り込みは13cmを測り、前者同様に浅い皿型を呈していた。覆土は黒褐色土主体で、遺物の出土はみられなかった。

SK095 7 E-56グリッドに位置する。平面形はほぼ円形といえよう。径は約0.7mで、確認面からの掘り込みは10cmを測る。覆土は黒褐色土主体で、遺物の出土はみられなかった。

SK096 7 E-69グリッドに位置し、本跡のうちで最大の規模を有していた。平面形はほぼ円形となり、規模は径1.0m、確認面からの掘り込みは10cmと浅い。底面は平坦で浅い皿型を呈している。覆土は黒褐色土主体であり、覆土中及び遺構検出面、及び直上から礫片35点と中期の阿玉台式土器の胴部片が1点出土した。

SK097 7 E-59グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形といえよう。規模は径約1.4mで、確認面からの掘り込みは10cmを測り、浅い皿型を呈していた。覆土は黒褐色土主体で、覆土中及び遺構検出面直上から礫片4点・石鉄1点(5)出土している。

第40表 礫群5 (SK096・097) 礫構成表

	資料数	石										遺存率			被熱		スズ片付着物	
		砂岩	チャート	安山岩	多孔質 雲母岩	石英斑岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	50% 以上	50% 以下	有	無	有	無	
土坑外	点数	114	73	27	4	0	3			1	0	0	114	113	1	6	109	
	%	100.0	64.9	23.7	3.5	5.3	2.6			0.9	0.0	0.0	100.0	99.1	0.9	4.4	95.6	
	総重量	1694.0	1195.7	225.2	51.2	94.6	36.1			1.2								
	平均重量	14.1	16.4	8.3	12.8	15.8	12.0			1.2								
SK096	点数	29	16	8		2			3		0	0	29	29	0	3	26	
	%	100.0	55.2	27.6		6.9			10.3		0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	10.3	89.7	
	総重量	434.0	262.4	91.6		36.4			43.6									
	平均重量	15.0	16.4	11.5		18.2			14.5									
SK097	点数	8	2	2					1		0	0	8	8	0	0	8	
	%	100.0	40.0	40.0					20.0		0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	100.0	
	総重量	76.9	57.5	9.9					10.4									
	平均重量	15.4	28.8	4.5					10.4									
礫群総計	点数	148	91	37	4	8	3		4	1	0	0	148	146	2	8	140	
	%	148.0	61.5	25.0	2.7	5.4	2.0		2.7	0.7	0.0	0.0	100.0	98.6	1.4	5.4	94.6	
	総重量	2114.9	1515.6	325.8	51.2	131.9	36.1		54.0	1.2								
	平均重量	14.3	16.7	8.8	12.8	16.4	12.0		13.5	1.2								

礫群6 (SK099) (第162・171・177・179図、第41表、図版10・38・41・42)

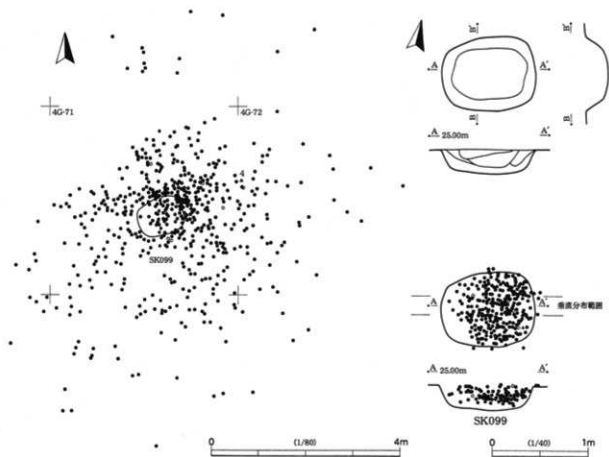
本跡は調査区の北側、SK099を中心として4 G-61・71・72・81・82グリッドにわたり礫が散布していた。とりわけSK099の覆土とその東側においては濃密に認められた。ここでも礫は被熱破砕しているものがほとんどであり、その出土層位はII a層からII c層であり、約20cmのレベル差の中に集中していた。出土礫の総数は909点を数え、ここでの石材構成比率はチャートが約65%と主体を占めていた。その他は砂岩、石英斑岩、流紋岩等で構成されている。また土器は、SK099とその周辺から11点出土しているが、表面の磨耗が著しく採掘できるような状態ではなかった。ただ胎土中には雲母の混入が顕著であったため、中期の阿玉台式土器とみて間違いない。なお、礫群中より石鉄(4)が出土している。

SK099 4 G-71グリッドのほぼ中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸方向はN-83°-Eを示す。規模は長軸1.0m、短軸0.8mを計測する。確認面からの掘り込みは、他と比較しやや深く25cmを測り、覆土は黒褐色土・暗褐色土主体の自然堆積と考えられた。遺物は、覆土中及び遺構検出面直上から阿玉台期の土器

片11点、礫片が約350点出土しているが、図示までには至らなかった。石器については図示（33・38・41・48）のように磨石を兼ねた敲石が4点みられた。

第41表 礫群6（SK099）礫構成表

	資料数	石										遺存度		被験		スズ状付着物		
		砂岩	チャート	安山岩	多孔隙 安山岩	石英質砂岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	95% 以上	95% 以下	有	無	有	無	
土坑外	点数	618	95	413	3		48	25	9	5	20	3	2	613	617	1	22	596
	%	100.0	15.4	66.8	0.5		7.8	4.0	1.5	0.8	3.2	0.5	0.3	99.2	99.8	0.2	3.6	96.4
	総重量g	5717.1	1019.1	3272.5	97.8		532.4	278.6	50.6	47.6	418.5	—	—	—	—	—	—	—
	平均重量g	9.3	10.7	7.9	32.6		11.1	11.1	5.6	9.5	20.9	—	—	—	—	—	—	—
SK099	点数	291	67	183	2	1	21	15		1	1	2	5	284	291	0	8	283
	%	100.0	23.0	63.9	0.7	0.3	7.2	5.2		0.3	0.3	0.7	1.7	97.6	100.0	0.0	2.7	97.3
	総重量g	5109.5	1939.9	1610.9	69.7	17.0	86.3	575.6		35.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—
	平均重量g	17.6	29.0	8.8	34.9	17.0	4.1	38.4		35.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—
礫群総計	点数	909	162	596	5	1	69	40	9	6	21	5	7	897	908	1	30	879
	%	100.0	17.8	65.5	0.6	0.1	7.6	4.4	1.0	0.7	2.3	0.6	0.8	98.6	99.9	0.1	3.3	96.7
	総重量g	10826.6	2958.9	4883.4	167.5	17.0	618.7	854.2		50.6	82.7	419.6	—	—	—	—	—	—
	平均重量g	11.9	18.3	8.2	33.5	17.0	9.0	21.4		5.6	13.8	20.0	—	—	—	—	—	—



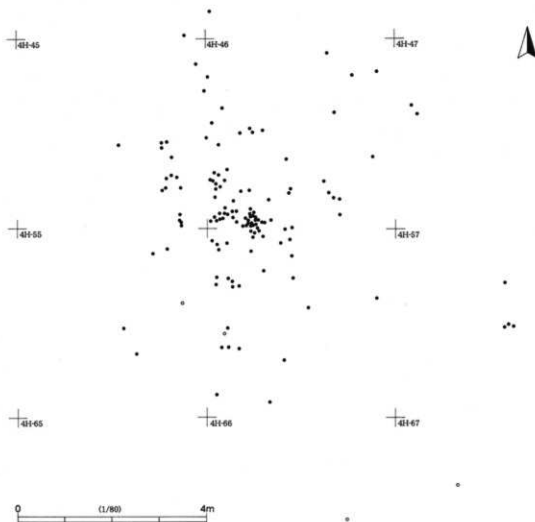
第162図 礫群6（SK099）

礫群 7 (第163図、第42表、図版10)

本跡は調査区の北東側、4 H-45・46・47・55・56・57グリッドにおいて礫の散布が認められたものである。その範囲は、径 8 m ほどの範囲に集中し、礫は被熱破砕しているものがほとんどであった。出土層位は II a 層から II c 層で、本遺構のみ土坑を伴わない礫群である。礫の出土総数は146点を数え、砂岩を主体とし、石英斑岩・チャート等で構成されていた。土器も中期の阿玉台式に属するものが3点出土したが、図示できるような大きさではなかった。

第42表 礫群 7 礫構成表

	石									材					遺存度			被熱		スズ状付着物	
	資料数	砂岩	チャート	安山岩	多孔質 安山岩	石英斑岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	完形	50% 以上	50% 以下	有	無	有	無				
点数	146	96	13	4	8	18	2		5	0	2	144	146	0	15	131					
%	100.0	65.8	8.9	2.7	5.5	12.3	1.4		3.4	0.0	1.4	98.6	100.0	0.0	10.3	89.7					
総重量 g	3525.0	2273.2	81.0	95.3	262.6	594.5	52.6		165.8	—	—	—	—	—	—	—					
平均重量 g	24.1	23.7	6.2	23.8	32.8	33	26.3		33.2	—	—	—	—	—	—	—					



第163図 礫群 7

礫群 8 (SK100) (第164・171・178~180図、第43表、図版10・38・41・42)

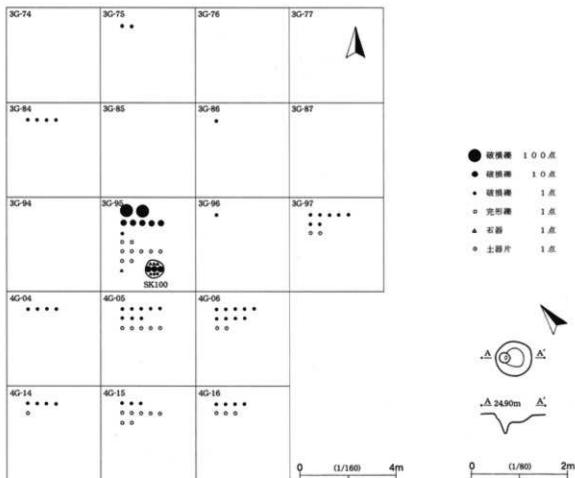
本跡は調査区の北側に位置し、3 G-95グリッドと集石土坑 SK100を中心に、径約10mにわたり礫の散布が認められた。分布範囲については、調査時に各グリッド一括で処理したため図化して掲載したが、とりわけ 3 G-95グリッドでは総数300点余の90%ほどが出土しており注目された。ここでの礫も被熱破砕して

いるものがほとんどであり、礫の出土層位はII a層からII c層となっている。石材は砂岩を主体とし、石英斑岩・流紋岩・チャート等で構成されていた。出土土器は27点を数えたが、小破片が多く、図示は1点(73)のみにとどまった。しかし隣接して検出されたSI002出土土器と接合関係が認められたため、両者は同時期に存在したものと考えられた。また石器では、磨石(34)が出土している。

SK100 3G-95グリッドに位置しており、平面形は円形を呈す。規模は径0.7mとなり、確認面からの掘り込みは20cmを測る。底面には径0.2m、底面からの深さ20cmの小ビットが穿たれていた。覆土は黒褐色土が主体の堆積であったが、焼土粒の混入が若干認められた。遺物は、覆土中から出土した礫片が30点あり、この中には磨石・敲石・石皿(27・29・52)などの石器類も含まれていた。なお、土器の出土は認められなかった。

第43表 礫群8 (SK100) 礫構成表

	資料数	石										重厚度		焼土		ヌメ状付着物		
		砂岩	チャート	安山岩	多良岩	安山岩	石英斑岩	流紋岩	閃緑岩	頁岩	その他	50%以上	50%以下	有	無	有	無	
土坑外	点数	278	157	25	13	7	30	25	4	7	10	1	19	258	278	0	23	255
	%	100.0	56.6	8.9	4.7	2.5	10.8	9.0	1.4	2.5	3.6	0.4	6.8	92.8	100.0	0.0	8.3	91.7
	総重量g	7992.3	4614.7	541.1	610.4	289.4	808.8	612.5	72.3	166.0	217.1	--	--	--	--	--	--	--
平均重量g	28.5	29.4	21.6	47.0	41.3	27.0	24.5	18.1	23.7	21.7	--	--	--	--	--	--	--	
SK100	点数	30	15			7	1	2				2	0	0	30	30	0	1
	%	100.0	60.0			23.3	3.3	6.7				6.7	0.0	0.0	100.0	0.0	3.3	96.7
	総重量g	3130.2	1422.5			1351.3	157.8	11.3				187.3	--	--	--	--	--	--
平均重量g	104.3	79.0			193.0	157.8	5.7				93.7	--	--	--	--	--	--	
礫群総計	点数	308	175	25	20	8	32	25	4	7	12	1	19	288	308	0	24	284
	%	100.0	56.8	8.1	6.5	2.6	10.4	8.1	1.3	2.3	3.9	0.3	6.2	93.5	100.0	0.0	7.8	92.2
	総重量g	11052.5	6037.2	541.1	1961.7	447.2	820.1	612.5	72.3	166.0	404.4	--	--	--	--	--	--	
平均重量g	35.9	34.5	21.6	98.1	55.9	25.6	24.5	18.1	23.7	33.7	--	--	--	--	--	--	--	



第164図 礫群8 (SK100)

4 礫群・グリッド出土遺物

(1) 土器 (第165～175図、図版35～40)

前述したように、礫群出土の遺物は遺構外として取り扱ってきたため、ここではグリッド出土遺物とともに一括して説明を加えることにしたい。なお、土器群の記述にあたっては、これを早期・前期・中期・後期に大別し、分布・特徴等について述べていく。

早期 (第171図44～48・50・51、図版38)

燃糸文期に属する土器群が若干出土している。大グリッドで示すと、15H区に該当する。本地点は、確認調査において、その存在が認められたため拡張区を設定し土器群の分布を追ったが、それほど広範な分布とはならなかった。他には、断片的に出土が確認された程度であった。

44～47は、肥厚した口縁部の特徴から井草式に属するものである。丸味を帯びた口唇直下には縄文が施文される。44では横方向にも認められ、古式に属するタイプとなろう。45・47の器面は剝落を伴い、文様は不鮮明である。46では寛による整形が軽く施されるのみで、頸部はいわゆる無文帯となろう。48は、僅かに肥厚した口縁に数条の燃糸を押捺しており、その直下には浅い沈線状の窪みを形成する。器面にも僅かに燃糸文の痕跡が認められる。50は口辺部に一条の縄文原体を押捺し、以下は粗い燃糸文で器面を装飾している。48を含め、広義の花輪台式に比定できるものであろう。51は胴部片で、器面には燃糸文が施されている。これらの土器群の色調は褐色ないし赤褐色であり、胎土には小石・白色鉱物、若干の蜜母を含んでいるところが共通点といえる。

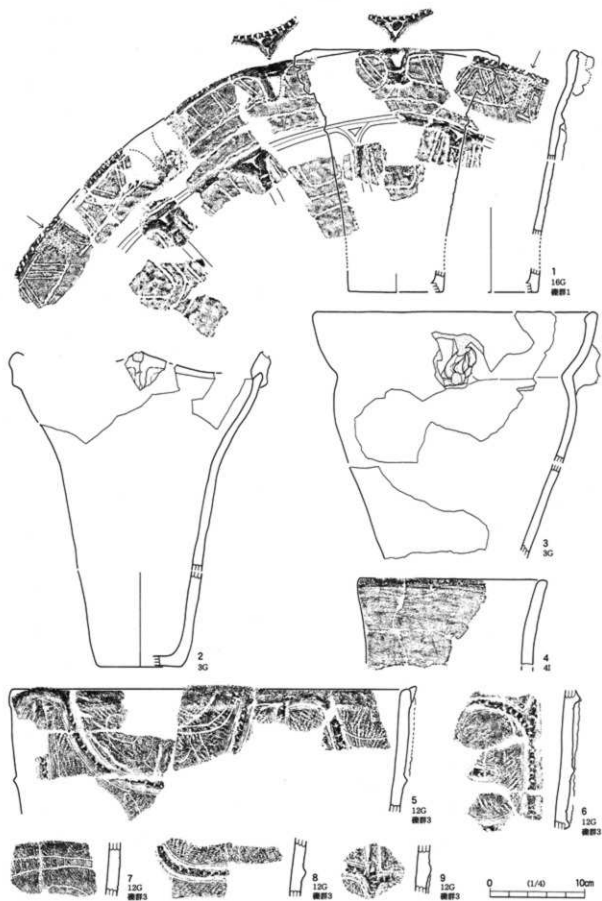
前期 (第171図49・52～67、図版38)

4J・17I・19I区とその周辺で前期の土器群は検出されている。このため出土地点を中心に拡張区を設定し調査を継続したが、本土器群に伴うような遺構は認められなかった。また、これら前期の土器群は少量ながらも数型式にわたっているため、付近には集落を形成するような集団の存在も推測できる。型式的にみれば、古いタイプでは胎土に繊維を含み、後出のものは中期直前に位置付けられる土器群まで出土している。

52～60、65・66は、胎土に繊維を含み破砕面では黒褐色を呈していることが多い。52・53は同一個体の可能性が高い。器面が軟弱であったためか施文時での凹凸が顕著に残る。胎土には小石等の含有が共通点としてあげられる。縄文原体には単節の粗いLRを使用している。54は、逆にRLを用いているが、器面は粗い。56は波状口縁の一部であり、器面では附加状の縄文を施文している。本資料のみ焼成は良好で胎土内部まで赤褐色となっていた。57では口唇直下に円形の刺突文がみられる。58は明らかに異なった原体を使用し、羽状の効果を持たせている。60は、接点は認められないが竹管状工具により器面を飾る。口唇直下には縄文の押捺が認められる。65・66では、器面にハイガイ・サルボウといったような二枚貝の背圧痕がみられる。この2点も時期的には同時期の所産となろうが、地域色が表現されたものといえよう。以上の土器群は、いわゆる黒浜式となろう。

一方、49、61～64、67では、胎土に繊維は含まれず、焼成も概して良好なものが多い。61は半截竹管による連続爪形文を特徴とするもので諸磯B式となる。また62～64は浮島系の土器群であり、房総北部では両者の共伴はしばしばみられるところである。口縁部には竹管状工具を縦方向に押捺し、器面はハマグリ等の二枚貝の背圧痕を主文様としている。

さらに49、67は前期末葉に位置する土器群であり、この種の土器も浮島系の土器群とほぼその分布域が



第165図 グリッド出土縄文土器(1)

重複する。49は胎土と色調という点において、燃糸文系土器群と近似していたが器面に施文された粗い縄文は、むしろ前期に属するものと考えられた。口唇直下にも2条～3条の細い縄文が巡る。67では押捺は4条となり、明確な複節縄文を横方向に押圧している。

中期 (第165～169図37、第171図68～第175図155、図版35～40)

中期の土器群についてみると、本遺跡では主体をなすものであり広範囲にわたる分布が確認できた。特に3G区を中心として検出された竪穴状遺構とその周辺、濼群の所在した7E区、7F区、8G区、12G区、16F区、16G区といった地点で顕著にみられた。この結果、中期の土器群は竪穴状遺構や濼群といった遺構と関連することが明白となり、その居住・生活等について貴重な資料を提供したものと見える。

また、ここでの出土土器群は中期前葉から中葉に位置付けられるもので、形式的にみれば阿玉台式から加曾利E式の前半期に属することとなる。しかも土器群を観察すると、勝坂式や火木式といった隣接文化圏の特徴を有する土器もみられ、複雑な様相を呈する一面も垣間見ることができた。しかし、その一方、本時期の土器群には類々の要素が加わり、型式としての概念では捉えきれない点も認められた。このため以下の土器拓影図等に関しては、濼群出土と一括土器を中心として掲載し、個別に出土地点・近隣の遺構について触れつつ文様等の特徴的な部分を主として説明を加えていくことにする。

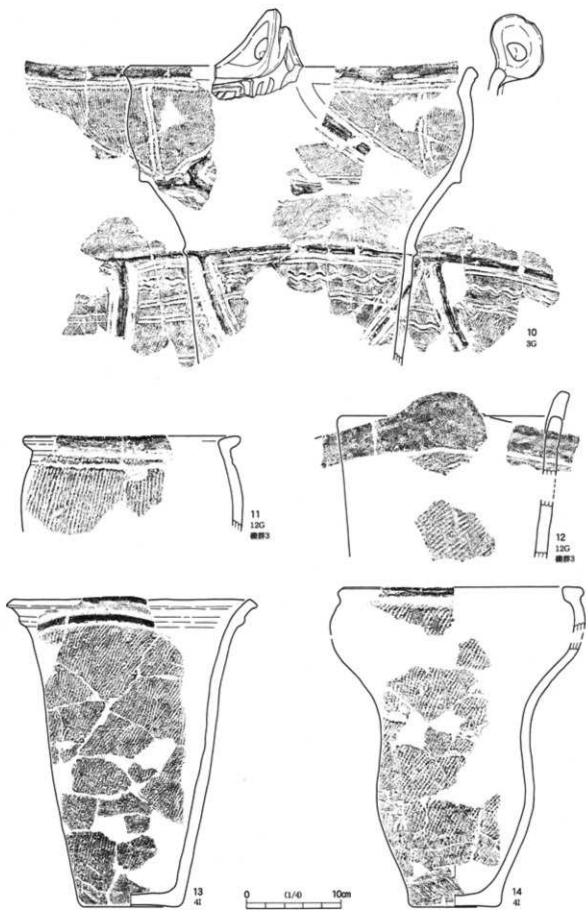
1は16G区から出土したもので濼群1との関連で捉えることができる。小型の深鉢で、胴下部での接点は確認できなかった。文様は粘土紐の貼付により口縁部に突起を作り出し、さらに粘土塊により三角状の空白部を充填している。この粘土紐は胴部以下でも効果的に用いられており、単線の押引文とともに阿玉台式(1b)の特徴がよく表れている。また口唇部には幅広の刻目が施され、裏面では明瞭な稜線が形成される。色調は赤褐色で、胎土には白色の鉱物と少量の雲母を含む。焼成は良好である。

2は、竪穴状遺構が検出されている3G区から出土しており、遺構との関連が示唆される。器形は胴上部から外反する深鉢で、文様は認められず、器面は篋状工具により粗い整形が加えられているのみである。口縁部では粘土塊の貼付による突起がみられ、おそらく4単位の波状をなすものと思われた。口唇部の作りも特徴的で、裏面の稜線を含めると断面三角に近い。色調は淡褐色で、胎土には小石を多く含み、雲母は僅少であった。時期的にも1に近似するものである。

3も2と同様に3G区から出土しており、底部が欠損する。器形は口辺で「く」の字に屈曲し、湾曲した口縁部を形成する。おそらく平縁口縁となろう。裏面での稜は鮮明である。ここでも器面は無文で若干の調整痕を残すのみである。口縁部では大きな粘土塊を貼付し、さらにその上を細い粘土紐で飾っている。色調は褐色で、内面では剝落が認められる。胎土に含まれる雲母は僅かなものであった。時期的にも1・2と同時期となろう。

4は4I区から出土したもので8片の接合からなる。やや小型の深鉢といえよう。器面は無文で、整形は口縁部を横方向、胴部を縦方向に篋状工具で仕上げている。口唇部は丸味をもち、器厚は13mmを測り、頑強に製作されている。色調は赤褐色で、胎土は精選され雲母は認められない。このため時期的には加曾利E式に近いものと考えられる。

5～9は同一個体で12G区から数十点ほど出土したものを接合した。本区では溝状遺構等が検出されており、拡張区を設定して調査をすずめたが、その際、周辺から加曾利E式の土器が若干出土している。そのため、本資料を含めて考えると加曾利E式期初頭の遺構の存在も想定されたが、中世の構築物のため削平された可能性が高い。器形は平縁の深鉢となろうが、口縁部の湾曲度合いから推定口径は40cm強とな



第166図 グリッド出土縄文土器(2)

り、器厚も13mmを計測する。文様は粘土紐を貼付し把手状の隆帯を形作り、隆帯の上には刻目を施す。他には、隆帯に沿うように細い沈線と単節RLの縄文が器面を覆う。口縁部は丸味を持たせた作りとなる。なお口縁部の文様だけを見ると、あたかも阿玉台式土器の把手部を想起させる。この点から加曾利E式への移行期の所産と考えることが妥当となろう。色調は褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。また焼成が甘いためか、表裏面での剥落も認められた。

10は、窪穴状遺構が検出された3G区から出土しており、遺構との関連も含めて考えねばならない土器である。口縁部から胴部にかけて遺存したもので、器面に貼付された隆帯とそれに付随する押し文状の沈線、口縁内面の稜線から器形的には阿玉台期の所産とみることができよう。ただ波状口縁頂部に形成される把手や口辺及び胴部にみられる条線は勝坂期の特徴として捉えられるものである。色調は赤褐色ないし暗褐色を呈し、胎土には小石と雲母を多く含み、焼成は良好である。

11・12は12G区から出土しており、11は口唇部の作りが特徴的である。幅広の平坦な口唇部は、後述する勝坂式(103)に類似する。器面は粗いLの原体による燃糸文を全面に施している。口縁直下には燃糸文施文後に沈線を巡らせる。12は波状口縁の一部が遺存したもので、口辺に巡らせた一条の沈線以下には縄文が施文されるが、磨耗により原体は識別できない。2点とも暗褐色を呈し、器面の磨耗が著しい。胎土には砂粒を多く含む。ともに同時期の所産となろう。

13は4I区から出土しており、周辺では前期に属する土器群も若干出土している。結果的には単独出土となるが、遺構の存在した可能性は否定できない。器形は円筒状に立ち上がり、口縁部で強く外反する。口縁直下には一条の隆帯を巡らし、以下、縦方向にRLの縄文を全面に施文している。色調は赤褐色あるいは黒褐色で、胎土は精選されている。時期的には11・12も含めて加曾利E1式か直前に位置付けられよう。

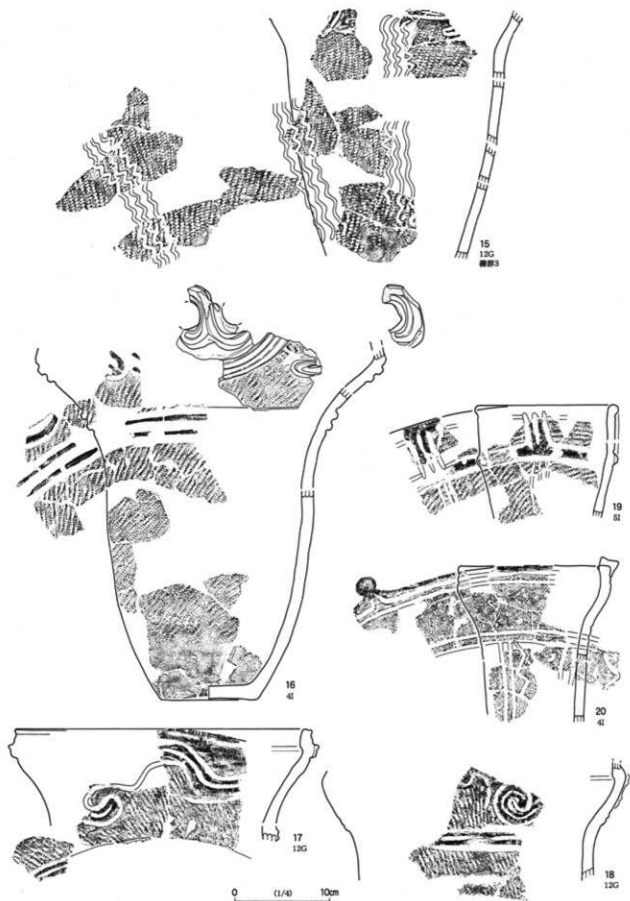
14は4I区から13と数m離れて出土したものであるが、両者の関連について明確に把握することはできなかった。器形についてみると、胴部及び口辺部での湾曲が特徴的といえよう。ただ口辺部での接点は見出せなかった。器面はLRの縄文で覆われ底部付近にまで施文されている。色調等は13とほぼ同様なものとなっていた。時期的には加曾利E1式の中で捉えられよう。

15は12G区から出土したもので口縁部と底部を欠損する。器形は、口辺部が湾曲するキャリアタイプの深鉢と推測できる。胴部では器面をRLの縄文で施文した後、3本一組の太い沈線で飾る。この沈線の特徴から加曾利E1式といえよう。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選されていた。

16は4I区から出土したもので、口縁部は欠損するものの橋状把手の一部が残存しており、ほぼ器形については把握できる。いわゆるキャリアタイプの深鉢となり、胴部は燃りの密なRLで全面を覆う。口辺部には粘土紐を貼付し、その上下を半截竹管状工具で沈線状の整形を加える。色調は褐色であり、焼成は甘く裏面では剥落が生じていた。

17・18は、ともに12G区から出土しており、器形・文様・縄文(LR)の粗い燃りまでもが類似する深鉢である。同一個体とも考えられたが、口辺部の高さが異なるため2個体とした。色調は褐色ないし暗褐色で、裏面では剥落が認められる。

19は5I区から出土し、胴下半部以下を欠損する。円筒形の器形で、口縁部は一部のみのため平縁と限定されるものではない。口辺部には粘土紐を貼付した隆帯を巡らす。隆帯の剥離部では密に燃られた縄文LRがはっきりとした痕跡を残す。このため文様は、縄文施文・粘土紐の貼付→沈線の順に施されていたことが確認できる。色調は褐色ないし暗褐色で、胎土は精選、焼成も良好である。



第167図 グリッド出土縄文土器(3)

20は4 I区から出土したもので、細く密に燃ったLRの縄文と太い沈線により文様が構成される。また平坦な口唇部と小さく円形の把手が特徴的であり、口辺はやや湾曲する。形式的には、前出土器も含めて加曾利E I式としてよいであろう。色調は表面が赤褐色、裏面は黒褐色を呈していた。胎土には砂粒と若干の白色鉱物が含まれ、焼成は普通といえた。

21は4 I区の多数の小グリッドから出土した破片が接合したもので、その一部は5 I区にまで及んでいた。辛うじて口縁部から底部に至るまで復原できたものである。このような出土状況から遺構に伴った可能性を指摘できる。器形はキャリバータイプとなり、胴部はほぼ円筒形に立ち上がる。口縁部には一對の把手が存在し、渦巻文が施されている。口辺部では粘土帯の貼付による隆帯で飾り、胴部はRLの縄文を施文後の沈線を縦方向に加える。加曾利E I式となろう。色調は淡褐色で、胎土には白色鉱物が目立つ。焼成は良好といえる。

22は8 I区から十数片が出土して接合したもので、口縁部を中心に図示した。器形は口縁部が緩やかに湾曲する深鉢で、拓影では表現しきれなかったが、把手を欠損している。口辺部には隆帯による渦巻文を形成する。縄文にはRLを用い、胴部では沈線を施している。このため文様構成は前者と近似する。色調は褐色で、胎土は精選され、焼成も良好であった。

23は8 G区から出土し、隣群4との関連も考えられる。口縁部片が7点ほど出土したもので、直下に巡る太い沈線が特徴的である。また口縁部は、拓影で表現しきれないが波状を呈するものであり、沈線も山形となる。縄文はRLで、一部に空白部分もみられる。胴部以下の文様は不詳であるが、口縁部の文様から加曾利E I式よりは後出のものとなろう。色調は暗褐色で、胎土は精選されており、焼成も良い。

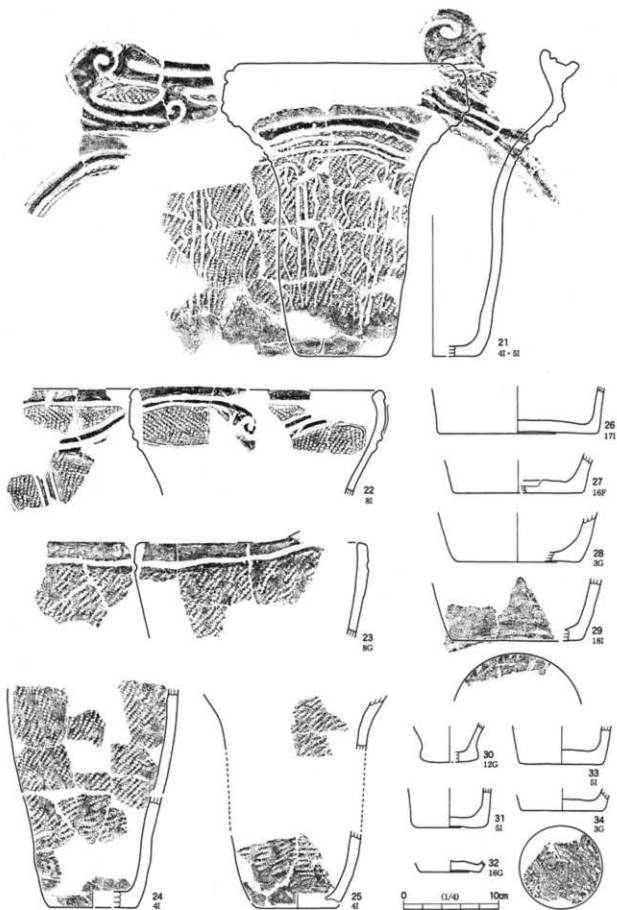
24・25はともに4 I区から発見されたもので、胴部以下の遺存となる。施文されている縄文についてみると、双方RLを使用しているが、25の原体は密に燃られている。色調は24が黒褐色から赤褐色、他方は赤褐色となり、裏面での剥落を伴う。おそらく加曾利E I式となろう。

26～34は各所から出土した底部を一括して掲載した。これらの底部には縄文等の施文はみられないが、胎土についてみると、26は小石を多く含み、27・29は小石とともに雲母の含有が際だっている。また29・34の底面には異物の痕跡が認められる。時期的には阿玉台式期から加曾利E I式期の中に含まれるものと考えられる。

35は16 G区のはほぼ全城から出土したもので隣群1との関連が想定される。遺存は全体の約1/3程度ではあるが、口縁部から底部まで接合し、大型の浅鉢となった。口唇部は丸味を持たせた作りとなっており、口辺から「く」の字状に外反する口縁が特徴的といえる。このため形式的には加曾利E I式よりも後出のタイプとなろう。色調は、赤褐色ないし褐色で数か所に斑状の黒色部分が認められる。胎土は精選され、焼成は良好である。

36は17 I区から15点の破片が出土し接合したものである。胴部以下は欠損するが、器形としては浅鉢とみてよいであろう。口辺部は湾曲し、口唇部では平坦な面を作出している。器内外面は丁寧な調整が加えられ、色調は褐色を呈している。胎土には白色鉱物粒を多量に含み、器厚が薄いためか良好な焼きとなっている。

37は4 I区の46グリッドを中心に15点程の破片が出土し接合したものである。器形は典型的な浅鉢となる。底部は欠損するが、口辺から口唇部にかけての頑強な作りは加曾利E I式でも初期の所産とみなされよう。内外面の色調は暗い赤褐色で、胎土には前者と同様に白色鉱物粒を多量に含むところから時期的にも



第168図 グリッド出土縄文土器(4)

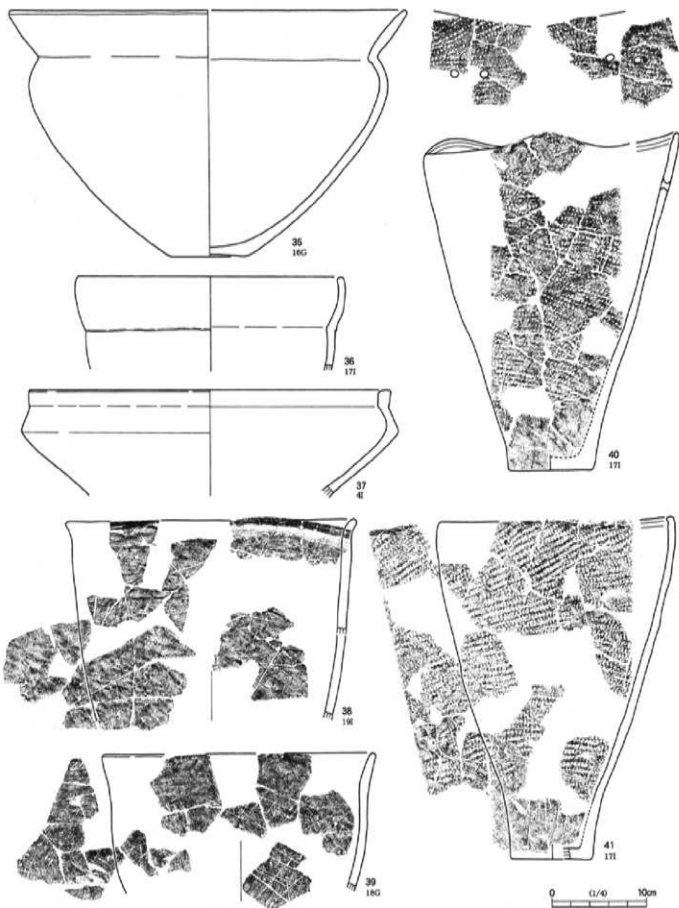
共通するものと考えられた。焼成も良好である。

68～98は12G区周辺、11I区といった地点で出土したもので、口縁部を中心に掲載した。ほぼ阿玉台式の範疇で捉えられる土器群とその影響を多分に受けているものである。68～85は押引文を主体とした文様構成のみられるもので、口縁は山形・扇状といった独特の製作となる。また半截竹管による押圧や押引による杵状文といった古いタイプ(68・69)や複数の押引文を施しているもの(71・75・76・79)はI～II式となろう。さらに幅広の押引文を施しているもの(81～85)などはIII式とすることができよう。最終期にみられる縄文施文(90～98)の出土も少なくない。このようにみえてくると、本遺跡における阿玉台期の土器群は継続的に認められることとなる。本期の胎土に特徴的な雲母を混入するものとしては71・72・76～78・80・82～84・88～91・93・94・96・98等がある。小石を含有するものも多く、71・72・75・76・80・82～85・88～90・93～96・98に顕著にみられた。この結果をみると、胎土に雲母と小石を混入させることが普遍的におこなわれていたようである。また75は小片ではあるが内外面に穿孔を試みた痕跡を残すところから破砕後に別の用途に用いられたものであろう。

99～152は12G区周辺を中心としつつも、発掘区L・E・J・B区といった広範囲から出土した土器群となっている。時期的には勝坂式を包括したところの加曾利E式に含められるもので、加曾利E期の新しいタイプも一括した。形式的にみれば、102～105・111・112等は施文具や文様構成の点から勝坂式としての色彩を強く表現するものである。さらに116では山形に貼付された粘土紐と半截竹管による連続刺突文は阿玉台式と勝坂式双方の色彩を感じさせる文様構成といえよう。また99・100・140～150は加曾利E期の中でも新しいタイプに属するもので、太く鮮明な沈線間の縄文を磨消するところが特徴となろう。109は、その典型で加曾利E III式まで下降するものである。その他は加曾利E I式を主体とした土器群で、一部には加曾利E I式へと変化する過渡的な様相を呈するもの(113～120)もみられる。胎土に関して観察すると、明確に雲母を含むものとして、同一個体である111・112と121があり、僅かにその痕跡が認められるものに113～115・119・120・123等がある。小石の含有では106・108・111～113・117・121・123・146等をあげることができる。つまり時期的に後出の土器では胎土が精選されてくるようである。なお、106では左右に切口が残存し、土錘として再利用されていたことを付記しておく。

さらに、122はやや湾曲した胴部片で、明確な沈線による渦巻文が特徴的である。型式としては大木8式の影響のもとに成立した加曾利E I式と捉えられよう。器面の色調は淡褐色ないし黒褐色で、胎土に変化は認められない。151も比較的細い粘土紐を器面に貼付しており、口縁部の製作にその特徴がよく表れている。接合はしないが、器面の様相から加曾利E式の範疇から逸脱するものである。これを近隣地域の土器群に対比して考えると、長野県を中心として分布する曾利II式に求められよう。器面の色調は褐色で、荒れが日立ち、貼付された隆帯の剥落が著しい。152も縦方向に施した沈線の脇に粘土を貼付した隆帯が認められる。これも曾利系に属するものとなろう。

153～155は、いわゆる連弧文を主文様とする一群の土器で4I・8I区から出土している。量的には僅かである。153は胴部片でRの擦糸文を器面に縦方向に施文後、2本一組の沈線を平行あるいは波状に施している。器内外面は黒褐色で、胎土には小石を含む。154では1点のみ口縁部が含まれていたが、接点は認められなかった。地文の縄文にはRLの原体を用い、その後2本一組の沈線により口縁に沿った平行沈線と胴部には少なくとも2段の連弧文を施している。器内外面は暗褐色で、胎土は精選され、焼成も良好といえる。155は胴部片で、153と同じようにRの擦糸文を密に器面縦方向に施文しており、下端には沈線の一



第169図 グリッド出土縄文土器(5)

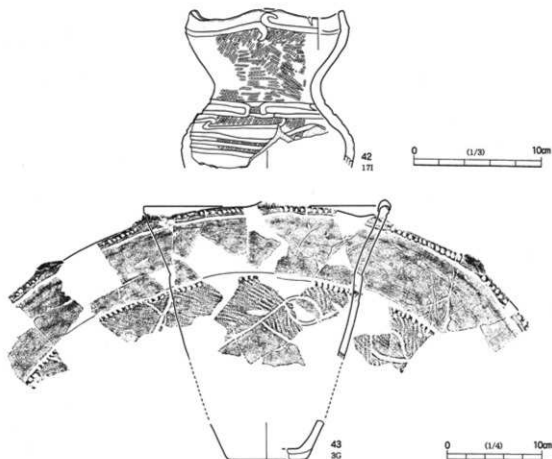
部が確認できる。器面は褐色で、内面は黒褐色を呈する。胎土も精選され、焼成も良好で堅緻な仕上がりとなっている。

後期 (第169図38~41、第170図、第175図156、図版37・40)

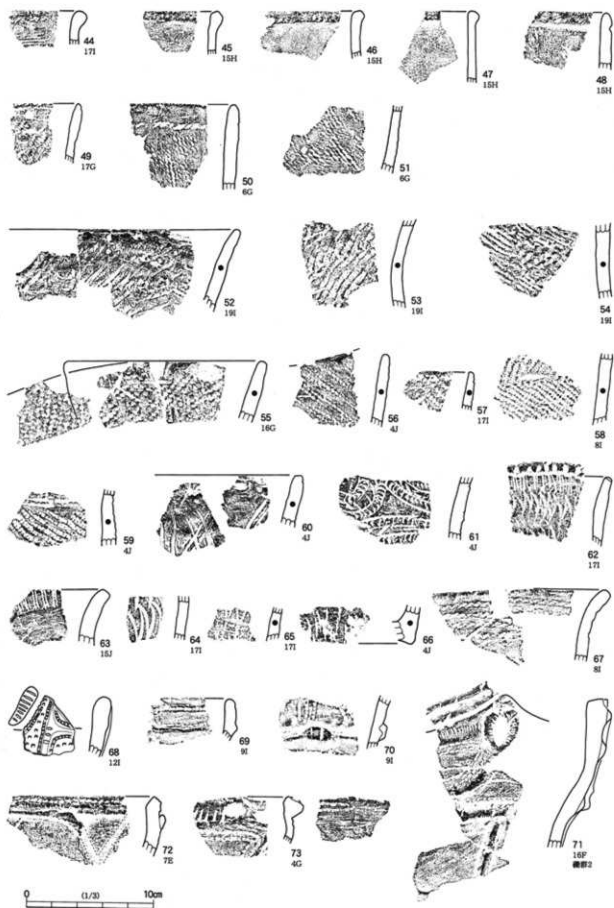
後期の土器群是一群の竪穴状遺構が発見された3G区と、遺跡の南部分にあたるA・D発掘区において検出されている。なお、D発掘区では17I-67グリッドにおいてSK001とした土坑(第156図参照)が注目される。出土した土器群は、後期でも前半期に属する堀之内式から加曾利B式に該当するものであった。このことから本遺跡では、中期に盛期をむかえた縄文人の活動は後期中頃まで継続していたことが明らかにされたといえよう。

38・39は、19I区と18G区でそれぞれ検出されたが、拡張区を設定して精査を試みたが遺構等の存在は確認できなかった。ともに小破片となって散布していた破片が接合したものである。遺存部での復原から口縁部が僅かに外反するような大型の深鉢形となる。文様は篋状工具を用い、器面に不規則な細い沈線を施す。色調は赤褐色ないし暗赤褐色で、胎土には白色鉱物の混入が共通点としてあげられる。形式的には厚手の深鉢、口縁部の作り、細い沈線の使用から堀之内I式土器となろう。

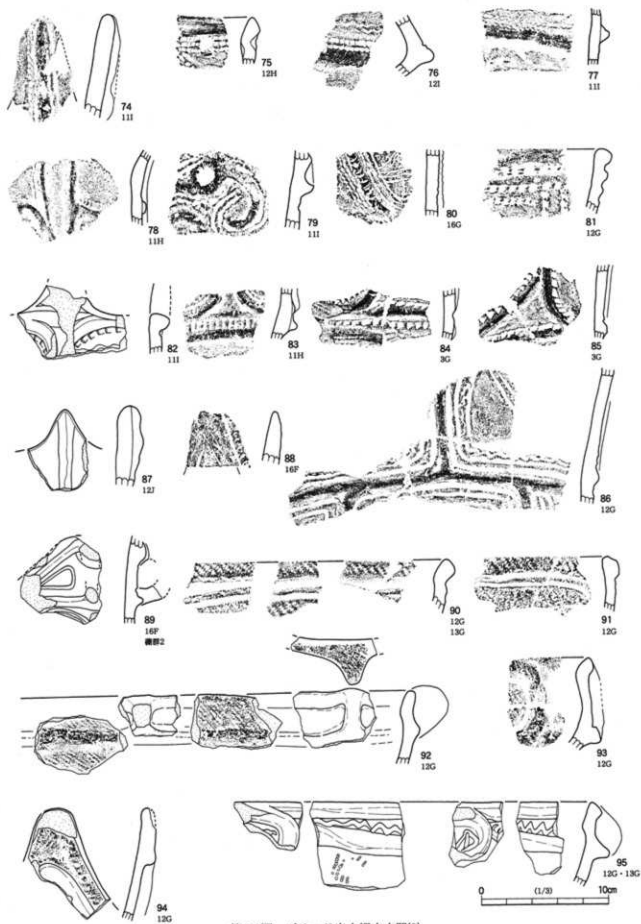
40は17I区から出土しており、欠損部があるもののほぼ復原できた。口縁部は波状で頂部を3か所に有する。また口縁下5.5cmに2穴一組の補修孔が2か所に認められる。器面はやや粗めでLRの縄文が底部付近にまで施されている。口縁裏面では浅い沈線が一条巡るところから加曾利B式の粗製土器となる。色調は淡褐色で、数か所に炭化物の付着が認められる。胎土は精選され、焼成も良好である。



第170図 グリッド出土縄文土器(6)



第171図 グリッド出土縄文土器(7)



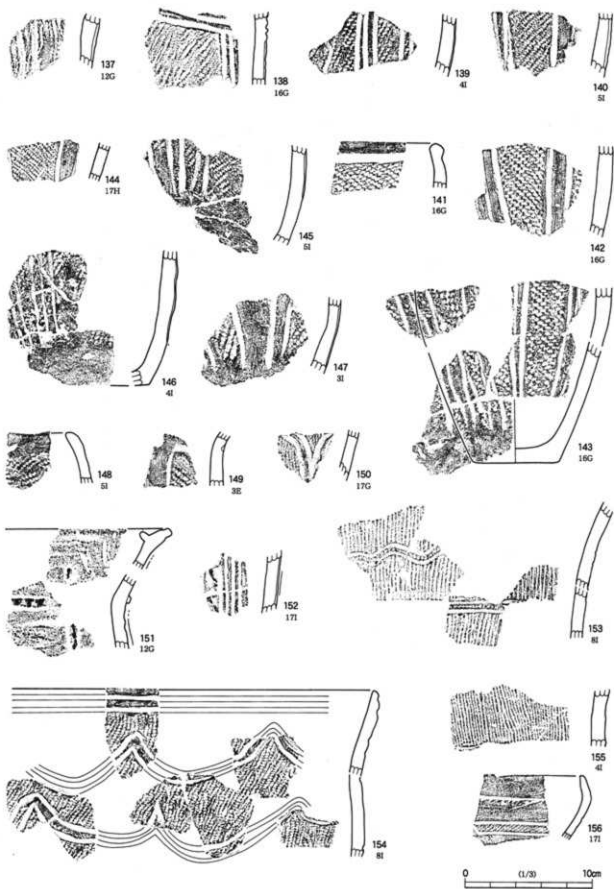
第172図 グリッド出土縄文土器(8)



第173図 グリッド出土縄文土器(9)



第174図 グリッド出土縄文土器00



第175図 グリッド出土縄文土器01

41も17 I区からの出土で、ほぼ復元できた粗製深鉢である。口縁部は平縁で、裏面では浅く幅広の沈線が巡る。器面での縄文施文はLRの原体を用いているが、重複する施文部もあり粗雑感は否定できない。色調は、表面は暗褐色、裏面は赤褐色となっている。胎土には若干の白色鉱物を含み、焼成は良好である。

42も17 I区からの出土で、胴下半部以下を欠損する。器面には細い縄文LRを使用し、口縁内外面に一条、頸部には杵状、胴上部には巴状に沈線を駆使し文様を表現している。加曾利B 2式として捉えられよう。器面の仕上げも良好で精製土器としてよいものである。器面の色調は暗褐色ないし黒褐色を呈している。焼成は良好である。

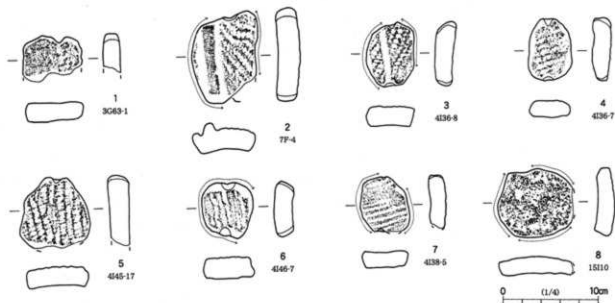
43は、竪穴状遺構が検出された3 G区の55・64グリッドを中心に出土し、20片余の破片が接合したものである。竪穴状遺構とは時期的に明らかに異なるものであった。器形は緩やかに外反する口縁部を形成し、胴部では曲線を用いた沈線によって区画された無文部を作出する。縄文は撚りのしっかりしたRLを使用しており、末端では杵状工具による押圧が施される。この手法は口唇部にも及び瘤状突起部を除き一周するようである。また口辺部の無文帯は篋により丁寧な調整が加えられ、いわゆる半精製土器として分類できるものとなろう。形式的には加曾利B式でも新しいタイプとなろう。色調は淡褐色で、胎土は精選され、焼成も良好である。

156は、後期に属すると思われる土抗が検出された17 I区から出土しており、加曾利B式の鉢形土器の口縁部となろう。文様はLRの縄文と沈線によって構成され、口縁直下には等間隔に刻目を施している。器面は淡褐色で、裏面は黒褐色で沈線は認められない。胎土は精選され、焼成も良好である。

(2) 土製品 (第176図、図版41)

土製品では、土器片鍾と周辺を整形した土製円盤が出土している。いずれも中期の所産で、4 I区から土器片鍾が集中して出土(3~7)した。西に位置する4 H区では、前述したとおり縄群7が所在しているところから、これに関連する可能性も存在する。

1は欠損品であり、表面での文様は認められない。雲母の含有から阿玉台式土器片を利用したものである。2は上部に切込痕が認められ、周囲は使用による磨耗が著しい。3・4は小型品で表面には縄文と沈



第176図 縄文時代土製品

線が認められる。上下端に切込痕が存在しており、土鏃としてはほぼ完形品といえよう。5・6・7は欠損品で、上部に切込痕が残る。8は周縁部を明確に加工しており、切込が認められないため土製円盤として扱った。期的には加曾利E式に属するものと思われるが、比較的古いタイプのものとなろう。

(3) 石器 (第177~180図、図版41・42)

本遺跡において出土した石器には、石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・オ皿といった種類の石器があり、それらについては一覧表に示した。ここでは形状・加工等について簡単な説明を加えておきたい。

石鏃 (1~17) 合計で17点が出土した。その多くはグリッドから出土したもので、確実に遺構に伴うものは少ない。ただ、5はSK097、7はSI005の覆土内からの検出であり、遺構に伴う可能性がある。これらの石鏃の大半は、検出遺構及び出土土器の傾向から中期前半に属するものと考えられる。石材にはチャートが多用されており、次いで黒曜石となる。図化は基部の形状を基準にして分類した。1~3は二等辺三角形に近い。3は表面の一部に自然面を残す。いずれも完形品で、周囲は丁寧に調整されている。4~9は、基部が緩やかに湾曲していることが特徴であり、ほぼ完形品となる。5・6などはやや分厚い剥片を素材としたものである。細部の加工は入念で、8は側縁に僅かな挟りが認められる。五角形鏃に近い。10~15は、基部の挟りが大きく脚部を作出するような作りである。10・12は分厚い剥片を素材としており、側縁の加工も十分とはいえない。また13~15も、小型品でありながら粗雑な加工で石鏃として仕上げている。16は完形品で、表裏両面で入念な仕上げを施しており、側縁にやや挟りをもたせた特徴的な石鏃である。17は基部周辺が欠損し、形状は把握できない。

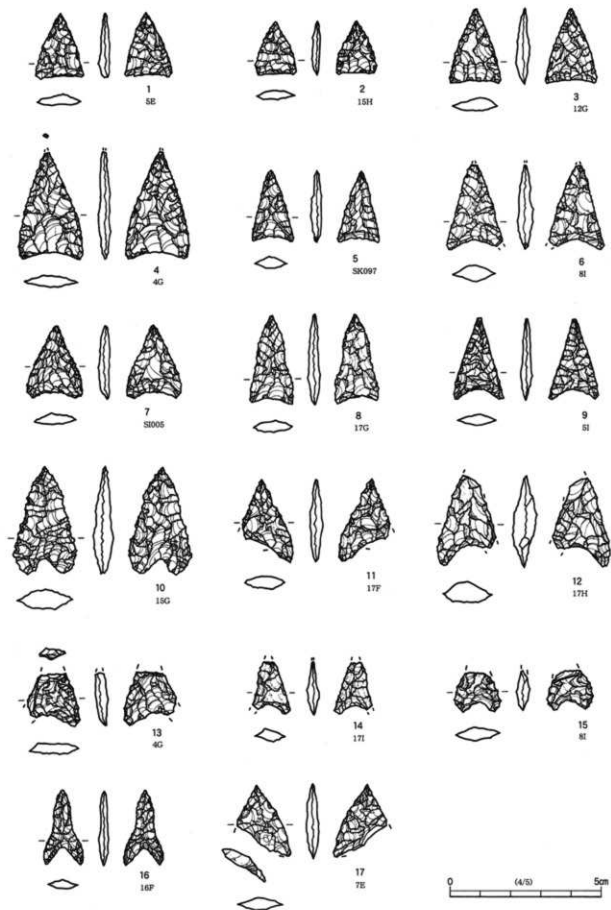
磨製石斧 (18~22) 5点の出土をみた。いずれもグリッド出土である。18は、刃部の一部が欠損しており、後に研磨して使用している。19は頭部が欠失する。裏面の窪みから石斧としての機能を失ったため敲打具として利用されていたことが理解できる資料である。20は側面部が残存したものであり、刃部の一部は鋭く研磨されている。21は打製石斧として製作されたものと思われるが、硬質な石質を有しているところから刃部を作出したものであろう。22も同様な作りを示す。裏面では大きな剝離痕を残しつつも、刃部では鋭いエッジを作り出している。

打製石斧 (23・24) 打製石斧と呼称できるものは2点の出土にとどまった。23は背高のある石斧で断面は三角形を呈している。裏面では主剝離面を多く残す。ただ表面では数回の剝離による整形で刃部を作出しているため、石斧としての形状は整ったものとはいえない。24の頭部は欠損しているが、形状は前者と類似する。表面には自然面を残し、周囲での整形剝離は粗雑で形を整えただけともいえよう。

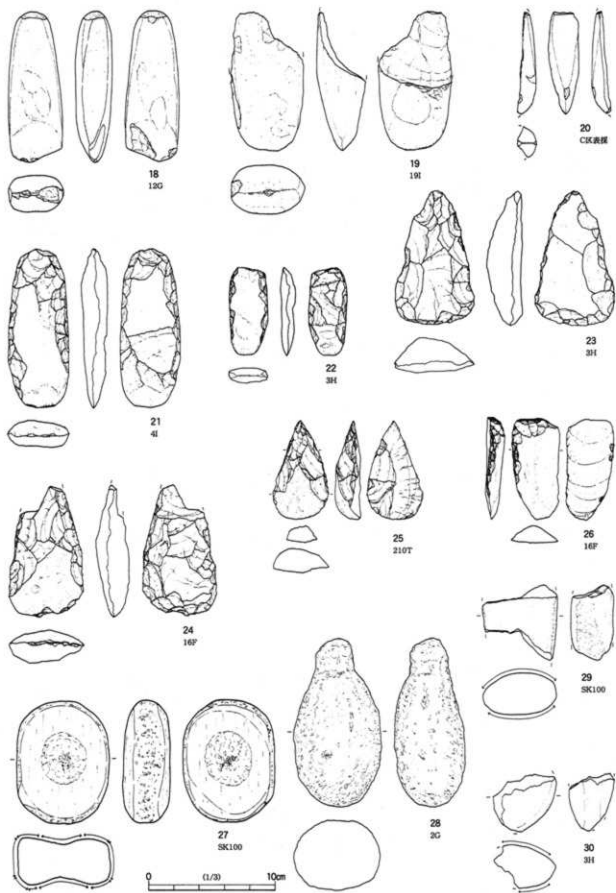
尖頭器 (25) 表皮を残す大型剥片の両側縁を加工し、先端部を鋭利に整形したものである。主剝離面での加工は特に認められず、打点部を簡単に整形したのみで製品に仕上げた頑強な作りである。形状は前述した打製石斧 (23) と同様な点も認められるが刃部の位置が異なり、下端での加工痕も存在しない。

搔器 (26) 本資料も大きく自然面を残す。加工は刃部にも限られ、打点部となった分厚い部分を剝離し搔器に仕上げている。主剝離面での加工は皆無であり、平坦な面をうまく利用し石器としている。石材には尖頭器と同様、黒色安山岩を用いているが表皮の観察から異なる母岩から製作されている。

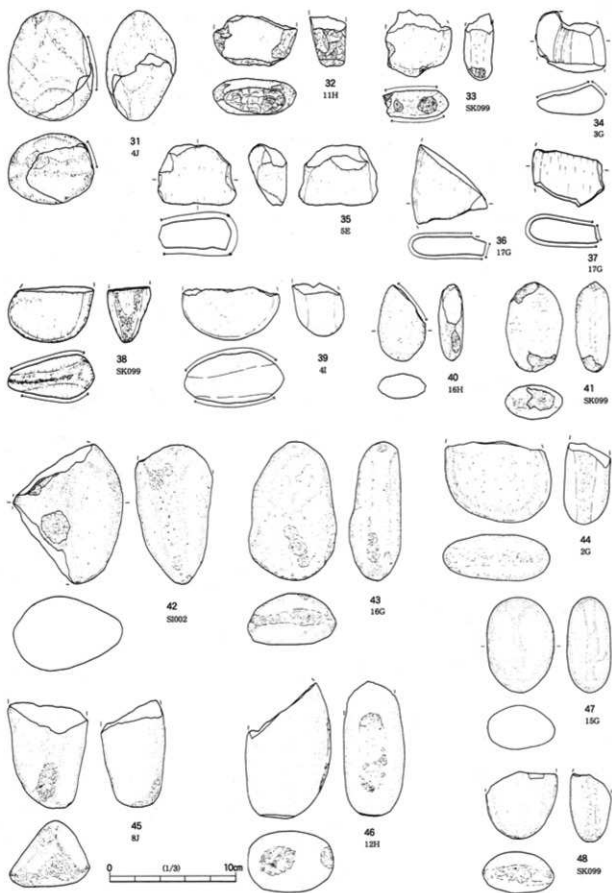
磨石・敲石 (27~49) ここでは兼用品が多いため一括した。図示できた資料は23点であるが、被熱して砕片化したものを想定するとかなりの量が存在したのと考えられた。27は完形品で、側面の磨耗は著しく中央部に窪みが認められるところから長期間にわたって使用されてきたものである。28は、軽石を思



第177图 縄文時代石器(1)



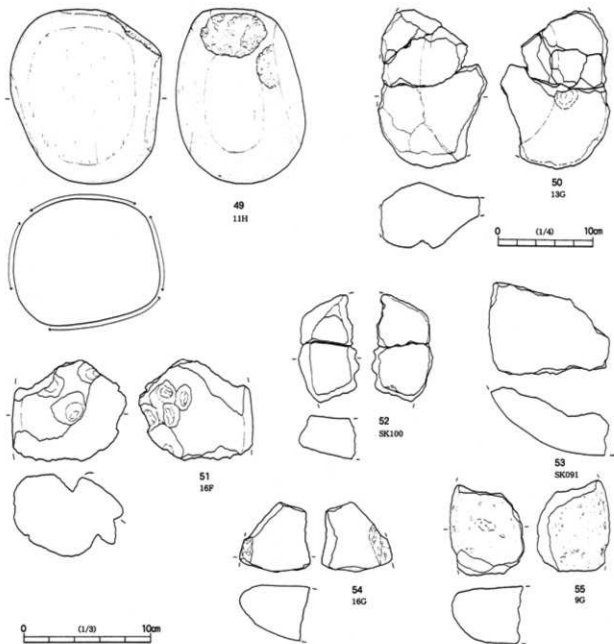
第178圖 縄文時代石器(2)



第179圖 縄文時代石器(3)

わせるような表面を呈しており、黒色味を帯びた多孔質の石材を利用している。頂部は持ちやすいように細く加工されたものと考えてよいであろう。その他は欠損品も多く、磨石と敲石の区別をつけにくい。ただ明らかに磨石として顕著な使用痕を有するものには30・33・39・44などがあり、使用されている石材では安山岩が主体となっている。なお、34～37では使用面の磨耗が顕著で、緩やかに窪む部分もあるため砥石として使用された可能性がある。とりわけ35の断面はV字状に遺存しており研磨面と考えられた。

石皿 (50～55) 石皿の破片を6点図示した。最大の遺存を保っていたものは50で凹部の厚さは約15mmと薄く、長期の使用を物語るものであった。出土地点である13G区は、中期の土器群が検出されており、この時期に使用されたものであろう。遺構出土品として52 (SK100)・53 (SK091) があるものの小礫化しており、石皿としての機能は既に失っていたものと思われた。



第180図 縄文時代石器(4)

第44表 縄文石器属性表

図	No.	器種	分類	石材	遺物番号	遺構	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
							cm	cm	cm		
177	1	石鏃	平基	黒曜石	5E-1		2.17	1.60	0.38	1.04	
177	2	石鏃	平基	チャート	15H-37		1.76	1.39	0.30	0.61	
177	3	石鏃	平基	黄玉石	12G-470		2.49	1.73	0.48	1.41	
177	4	石鏃	凹基	チャート	4G72-9		3.54	2.15	0.40	2.67	先端わずかに欠
177	5	石鏃	凹基	チャート	7E-88	SK097	2.35	1.43	0.38	0.91	
177	6	石鏃	凹基	チャート	8 I-5		2.82	1.87	0.50	1.91	基部・先端わずかに欠
177	7	石鏃	凹基	チャート	SI005-1	SI005	2.39	1.87	0.40	1.35	
177	8	石鏃	凹基	流紋岩	17G-6		2.98	1.44	0.41	1.21	
177	9	石鏃	凹基	チャート	5 I 24-1		2.69	1.74	0.40	1.13	
177	10	石鏃	凹基	黒曜石	15G-11		3.56	2.17	0.69	3.35	
177	11	石鏃	凹基	黒曜石	17F-6		2.71	1.73	0.41	1.23	基部一部欠
177	12	石鏃	凹基	ガラス質黒色安山岩	17H-2		2.94	1.96	0.84	3.15	基部・先端わずかに欠
177	13	石鏃	凹基	黒曜石	4G40-1		1.76	1.86	0.40	1.19	
177	14	石鏃	凹基	ガラス質黒色安山岩	17 I-186		1.71	1.27	0.41	0.55	基部・先端わずかに欠
177	15	石鏃	凹基	チャート	8 I-9		1.34	1.56	0.48	0.88	先端欠
177	16	石鏃	凹基	チャート	16F-42		2.45	1.31	0.30	0.58	
177	17	石鏃	—	黒曜石	7E-100		2.39	1.73	0.45	1.22	基部欠損
178	18	磨製石斧	定角式	緑色岩	12G-374		12.9	4.3	2.9	250.2	刃部一部欠
178	19	磨製石斧	定角式	緑色凝灰岩	19 I-21		10.9	5.8	3.9	224.1	基部欠
178	20	磨製石斧	定角式	輝緑岩	G区表採		7.1	1.5	2.4	30.8	基部～刃部2/3欠
178	21	局部磨製石斧	短冊形	片状砂岩	4 I 45-59		12.6	4.8	2.1	163.6	被熱 刃部両面から研磨
178	22	局部磨製石斧	短冊形	ホルンフェルス	3H52-1		6.9	3.1	1.2	34.5	小型 刃部両面から研磨
178	23	打製石斧	楕形	緑色凝灰岩	3H53-1		10.6	6.2	2.8	196.8	
178	24	打製石斧	短冊形	砂岩	16F-30		10.4	5.9	2.6	159.4	基部欠
178	25	穴開磨製小		ガラス質黒色安山岩	2107-1		7.8	4.4	2.0	66.3	K区確認トレンチ中(5F・5G)
178	26	槌器		安山岩	16F-51		8.0	3.8	1.4	47.1	
178	27	磨石・磨石類	磨十蔵	安山岩	SK100-1	SK100	9.8	7.3	3.8	424.6	両面即有 被熱 *注記 K-SK007-1
178	28	磨石・磨石類	磨十蔵	多孔質安山岩	2G35-1		13.3	7.0	5.6	304.5	被熱
178	29	磨石・磨石類	磨十蔵	砂岩	SK100-1	SK100	5.9	5.9	3.4	116.8	被熱 *注記 K-SK007-1
178	30	磨石・磨石類	磨十蔵	安山岩	3H12-1		4.4	5.0	3.6	59.0	
179	31	磨石・磨石類	磨十蔵	安山岩	4 J 40-2・4		8.7	6.7	5.6	419.0	
179	32	磨石・磨石類	磨十蔵	砂岩	11H-120		4.1	6.6	2.9	97.7	被熱
179	33	磨石・磨石類	磨十蔵	石英斑岩	SK099-204	SK099	5.3	5.2	2.3	68.8	被熱 *注記 K-SK002-204
179	34	磨石・磨石類	磨十蔵	ホルンフェルス	3G95-2		4.9	5.5	2.4	57.5	被熱
179	35	磨石・磨石類	磨	安山岩	5E-2		4.8	6.2	3.0	98.2	
179	36	磨石・磨石類	磨	安山岩	17G-20		6.3	6.0	1.7	69.1	
179	37	磨石・磨石類	磨	安山岩	17G-17		4.4	5.2	2.1	63.5	
179	38	磨石・磨石類	磨十蔵	石英斑岩	SK099-135	SK099	4.4	6.8	3.5	113.3	被熱 *注記 K-SK002-135
179	39	磨石・磨石類	磨	安山岩	4 I 55-39		4.2	7.8	4.0	153.7	被熱
179	40	磨石・磨石類	磨十蔵	石英斑岩	16H-2		6.0	3.7	2.0	57.4	被熱
179	41	磨石・磨石類	磨	流紋岩	SK099-60	SK099	7.1	4.5	2.7	111.0	被熱 *注記 K-SK002-60
179	42	磨石・磨石類	蔵	安山岩	SI002-23	SI002	11.2	8.6	6.2	574.0	被熱
179	43	磨石・磨石類	蔵	石英斑岩	16G-59		10.9	7.0	4.1	429.0	被熱
179	44	磨石・磨石類	磨十蔵	石英斑岩	2G26-1		6.4	8.5	3.6	301.6	被熱
179	45	磨石・磨石類	蔵	砂岩	8 J-3		8.4	6.3	5.2	309.6	被熱
179	46	磨石・磨石類	蔵	砂岩	12H-59		10.6	6.8	4.8	493.1	被熱
179	47	磨石・磨石類	蔵	流紋岩	15G-9		7.6	5.3	3.5	199.6	被熱
179	48	磨石・磨石類	蔵	砂岩	SK099-55	SK099	5.3	5.6	3.3	98.6	被熱
180	49	磨石・磨石類	磨十蔵	安山岩	11H-102		12.3	10.7	8.9	1799	被熱
180	50	石皿	+凹	安山岩	13G-132		15.6	11.0	6.8	1380	被熱
180	51	石皿	+凹	多孔質安山岩	16F-93		8.0	9.1	6.5	324.7	被熱 表裏面に複数の凹
180	52	石皿		多孔質安山岩	SK100-1	SK100	8.5	4.9	3.7	157.8	被熱 *注記 K-SK007-1
180	53	石皿		石英斑岩	SK091-2	SK091	9.5	7.3	5.3	267.2	被熱
180	54	石皿		安山岩	16G-85		5.6	5.6	4.4	182.3	被熱
180	55	石皿		多孔質安山岩	9G28-1		7.1	5.8	4.5	231.7	被熱

第3節 竪穴状遺構と礎群

以上が縄文時代に属する遺構・遺物であり、ここで出土した土器群から本遺跡は、断片的といえども縄文早期の燃糸文期から後期の加曾利B式期に至る間、人びとの活動の場として利用されてきた。そのうち最も活動が活発であった時期は、中期の阿玉台式期の後半から加曾利E式期の前半ということが出土した土器群によって確認された。この時期には土器群とともに明確な遺構が検出されており、小規模ながらも一定期間集落が形成されていたようである。そこで、この時期の遺構・遺物について周辺で報告されている著名な遺跡を参考としつつ、本遺跡の所見を提示して結びとしたい。

まず遺構についてみると、本遺跡では住居跡として確実に認定できる遺構は皆無で、居住の可能性を示唆する遺構として竪穴状遺構をあげることができる。合計で5基が、3・4G区とした調査区北側（K発掘区）から集中的に検出されており、当時の人びとの痕跡を色濃くとどめたものといえる。次に、これら5基の床面積を比較してみると、最大のものはSI004であり、約13.2㎡となる。次いでSI001-11、3㎡（推定）、SI002-6.2㎡、SI006-5.3㎡、最小のSI005は3.5㎡となる。この結果、これらの遺構は概ね10㎡前後の床面積とみることができる。この面積は当時の人びとにとっても到底家族で寝食を共にするには狭すぎよう。このような小規模な竪穴状遺構を周辺の遺跡で求めると若干ながら共通する遺構を検出している遺跡も散見できる。

次に出土した中期の土器群についてみると、主体を占める時期は阿玉台式期後半から加曾利E I式期にかけてであり、勝坂式や同時期の異型式である大木8式・曾利II式といった隣接文化圏から影響を受けた土器も少量認められており、加曾利E式土器の成立期と相まって興味深い土器群を構成していた。こうした異文化圏との接触の痕跡は、周辺で確認されている高根木戸貝塚⁽¹⁾、高根木戸北貝塚⁽²⁾、海老ヶ作貝塚⁽³⁾といった拠点的な集落との関連を示唆するものと考えられる。いわば本遺跡は、拠点的集落の関連遺跡として位置付けられるような存在とみることができる。

以上のような点に留意し、集落を形成していた大規模遺跡でみられる同時期の遺構・遺物と本遺跡で検出された事例について若干触れておきたい。

周辺遺跡との比較 本遺跡の所在する船橋市内では、高根木戸貝塚⁽¹⁾、海老ヶ作貝塚⁽²⁾といった著名な遺跡が存在しており、この二遺跡は時期的にも近似している。ただ集落の規模という点では本遺跡と大きく異なり、比較という点では適切さに欠けるところもあろう。だが若干の類似遺構が見出せるため少々検討を加えてみたい。

前述したように本遺跡で検出されている、いわゆる竪穴状遺構は住居跡として付帯設備（炉跡・柱穴）を保持することなく単に竪穴として掘り窪めただけで積極的に居住空間と断定できる材料は存在しない。

そこで、大規模集落（環状集落）を形成している二遺跡の各種遺構についてみると、同規模の竪穴状遺構は量的には少ないものの類似施設を認めることができる。高根木戸貝塚では、第42・55・66・72号の各住居跡等は小規模なもので床面積も10㎡を超えることはない。海老ヶ作貝塚でも「特殊遺構」として二基の報告があり、そのうちの一例は7㎡～8㎡の床面積を有していた。また、これらの遺構に伴う土器群についてみると、高根木戸貝塚第42・72号住居跡では明らかに阿玉台式と認識できる土器群が出土しており、海老ヶ作貝塚出土土器も「胎土に多量の雲母」が含まれているとの報告であり、出土土器からみても本遺跡とほぼ同時期と考えてよいものと思われる。しかし、上記二遺跡における遺構の構造では柱穴と考えられるピットが必ず存在しており、特に高根木戸貝塚例では確実な住居跡を想定させる。

さらに同様な類例を近隣遺跡に求めると、松戸市子和清水貝塚⁴⁾でも同様な類例の存在を知ることができる。床面積10㎡前後の遺構としては、A2号住居跡をはじめとして33号・96号・107号・111号・117号・153号・255号・256号・264号の小規模住居跡などがこれに該当する。ここでも炉跡は存在せず、柱穴らしきピットのみ検出される。ただし264号では炉跡、ピットともに検出されていない。次に出土遺物についてみると、子和清水貝塚例でも阿玉台式の色彩の強い土器群を伴っており前述した二遺跡と共通している点を指摘できる。

以上のような類例から推測すれば、本遺跡において検出された竪穴状遺構は住居としての機能を保持していたと考えてもあながち間違いではあるまい。

礫群との関連 次に礫群との関連についても少し触れておきたい。本遺跡で礫群と認定し、遺構に準じた取り扱いをしたものは8地点を数えることができた。前節でも述べてきたが、多量に出土した礫の大半は被熱破砕したものであった。これは礫が長時間高温で加熱された結果、脆くなり破砕したことは疑い得ない。しかも、これらの中には磨石・石皿といったような石製品として使用された石器の一部も含まれており、破損した石器の再利用ともいえる礫片もみられた。元来、房総半島北部は石材には恵まれず、廃棄製品の再利用は当然のことともいえよう。

そこで被熱破砕礫に関する近隣地域での事例について、縄文時代中期に関連する報告を紐解いてみても被熱した礫群の検出例はほぼ皆無といってよい。このため本遺跡例だけで多くを語ることはできないが、前述したごとく本遺跡で検出されている竪穴状遺構を居住施設として考えるならば、付帯施設としてあるべき炉跡との関連を考慮しなければなるまい。これを参考遺跡とした子和清水遺跡等をはじめとする阿玉台式土器を出土する遺跡と比較すると、各遺跡ではしばしば小型の住居跡が検出され、これらの住居跡では炉跡を有していないタイプもしばしば見受けられる。しかも炉跡らしき掘り込みも認められない。こうした事例の存在から考えると、少なくとも下総台地西部域に所在する阿玉台期の集落では小規模でかつ炉跡を付帯しない住居跡が普遍的に存在していたものと考えられる。そして、本遺跡の場合も検出された竪穴状遺構から推測すると、集落として拡大発展することなく短期間の居住域として当時の人びとに利用されたものと解釈できよう。また礫群は、竪穴状遺構に居住していた人びとによって使用された調理場の一部であったものと考えたい。

注1 八幡一郎ほか 1971『高根木戸』船橋市教育委員会

2 西野 元ほか 1971『高根木戸北』船橋市教育委員会

3 八幡一郎・岡崎文喜 1972『海老ヶ作貝塚』船橋市教育委員会

4 八幡一郎ほか 1976『子和清水貝塚』遺構図版編 松戸市教育委員会

八幡一郎ほか 1978『子和清水貝塚』遺物図版編 松戸市教育委員会

第45表 遺構一覧表

遺構番号	類別	時期	位置	備考
SA001	馬土手	近世	15F~21F	牧遺構
SA002	土手状遺構	中近世	5H~6F	穴付礎
SA003	土壁状遺構	中世	10I~11I	第1地点IV区
SB001	竪立柱建物	中世	11F~08	
SB002	竪立柱建物	中近世	10G~9D	
SB003	竪立柱建物	中近世	5H~45	
S1001	竪穴状遺構	中世	4G~34	
S1002	竪穴状遺構	竊文	3G~86	
S1003	竪穴住居跡	平安	3G~76	
S1004	竪穴状遺構	竊文	3G~85	
S1005	竪穴状遺構	竊文	3G~82	
S1006	竪穴状遺構	竊文	3G~84	
SD001	溝	近世	15F~18G	
SD002	溝	近世	18G~18H	
SD003	溝	近世	15F~15G	
SD004	溝	近世	14G~15G	土坑付礎
SD005	溝	中近世	15G	
SD006	溝	中近世	15I~16I	
SD007	溝	中近世	12G~13G	
SD008	道路・溝	中近世	12F	
SD009	溝	中世	12G~13G	第2地点
SD010	溝	中世	12G~13G	第2地点
SD011	溝	中世	12G~13G	第2地点
SD012	溝	中世	12G~13G	第2地点
SD013	溝	中世	12G~13G	第2地点
SD014	溝	中世	12H	第1地点Ic区
SD015	溝	中世	12H	第1地点Ic区
SD016	溝	中世	11H~12H	第1地点Ib区
SD017	溝	中世	11H~12I	第1地点Ib区
SD018	溝	中近世	11I~12I	
SD019	溝	中近世	12I~12J	
SD020	溝	中近世	11F~11G	
SD021	溝	中近世	11G	
SD022	溝	中近世	10G	
SD023	溝	中近世	11H	
SD024	溝	中近世	9G~10G	
SD025	溝	中近世	9G	
SD026	溝	中世	10H	第1地点IIc区
SD027A	溝	中世	8H~11H	第1地点IV区
SD027B	溝	中近世	9H~9J	
SD028	溝	中世	8H~9J	
SD029	溝	中近世	8H	
SD030	溝	中近世	9G~9H	
SD031	溝	中近世	7F~8F	
SD032	溝	中近世	8G~8G	
SD033	溝	中近世	6D~7D	
SD034	溝	中近世	5I~6I	
SD035	溝	中近世	3I~3J	
SS001	門前垣遺構	室・平	4	
SK001	土坑	竊文	11~67	
SK002	竊穴	竊文	16I~97	
SK003	集石土坑	竊文	16G~73	雑群1内
SK004	土坑	竊文	16F~25	雑群2内
SK005	土坑	竊文	16F~26	雑群2内
SK006	土坑	竊文	16F~26	雑群2内
SK007	竊穴	竊文	16G~86	
SK008	土坑	古墳	13G~08	
SK009	土坑	竊文	12G~84	雑群3内
SK010	土坑	中世	12G~77	
SK011	土坑	中世	12G~69	
SK012	地下式坑	中世	12G~84	
SK013	土坑	中世	12H~66	第1地点Ic区
SK014	土坑	中世	12H~67	第1地点Ic区
SK015	土坑	中世	12H~67	第1地点Ic区
SK016	土坑	中世	12H~67	第1地点Ic区
SK017	土坑	中世	12H~68	第1地点Ic区
SK018	土坑	中世	12H~58	第1地点Ic区
SK019	土坑	中世	12H~58	第1地点Ic区
SK020	土坑	中世	12H~58	第1地点Ic区
SK021	土坑	中世	12H~57	第1地点Ic区
SK022	土坑	中世	12H~56	第1地点Ic区
SK023	土坑	中世	12H~56	第1地点Ic区
SK024	竊土遺構	中世	12H~55	第1地点Ic区
SK025	土坑	中世	12H~55	第1地点Ic区
SK026	土坑	中世	12H~18	第1地点Ib区
SK027	土坑	中世	12H~18	第1地点Ib区
SK028	土坑	中世	12H~19	第1地点Ib区
SK029	土坑	中世	12H~19	第1地点Ib区
SK030	土坑	中世	12H~09	第1地点Ib区
SK031	土坑	中世	12H~08	第1地点Ib区
SK032A	土坑	中世	11H~99	第1地点Ib区
SK032B	土坑	中世	11H~99	第1地点Ib区
SK033	土坑	中世	11H~86	第1地点Ib区
SK034	土坑	中世	12H~38	第1地点Ia区
SK035	土坑?	中世?	12I~30	第1地点Ia区
SK036	土坑	中世	12I~21	第1地点Ia区
SK037	土坑	中世	12I~33	第1地点Ia区
SK038	土坑	中世	12I~33	第1地点Ia区

遺構番号	類別	時期	位置	備考
SK039	土坑	中世	12I~02	第1地点Ia区
SK040	土坑	中世	12I~02	第1地点Ia区
SK041A	土坑	中世	11I~92	第1地点Ia区
SK041B	土坑	中世	11I~92	第1地点Ia区
SK041C	土坑	中世	11I~92	第1地点Ia区
SK042	土坑	中世	11I~91	第1地点Ia区
SK043	土坑	中世	11I~90	第1地点Ia区
SK044	土坑	中世	11H~78	第1地点II区
SK045	土坑	中世	11H~69	第1地点II区
SK046	土坑	中世	11H~59	第1地点II区
SK047	土坑	中世	11H~59	第1地点II区
SK048	土坑	中世	11I~50	第1地点II区
SK049	土坑	中世	11I~52	第1地点II区
SK050	土坑	中世	11H~52	第1地点IIc区
SK051	土坑	中世	11H~51	第1地点IIc区
SK052	土坑	中世	11H~50	第1地点IIc区
SK053	土坑	中世	11H~10	第1地点IIc区
SK054	土坑	中世	11H~10	第1地点IIc区
SK055	土坑	中世	11I~19	第1地点IIc区
SK056	土坑	中世	10H~73	第1地点IIc区
SK057	土坑	中世	10H~73	第1地点IIc区
SK058	土坑	中世	10H~73	第1地点IIc区
SK059	土坑	中世	10H~73	第1地点IIc区
SK060	土坑	中世	10H~73	第1地点IIc区
SK061	土坑	中世	10H~63	第1地点IIc区
SK062	土坑	中世	10H~74	第1地点IIa区
SK063	土坑	中世	10H~83	第1地点IIa区
SK064	土坑	中世	10H~83	第1地点IIa区
SK065	土坑	中世	11H~14	第1地点IIa区
SK066	土坑	中世	11I~12	第1地点IIa区
SK067	土坑	中世	10H~96	第1地点IIa区
SK068	土坑	中世	11H~23	第1地点IIa区
SK069	土坑	中世	10H~48	第1地点IV区
SK070	土坑	中世	10H~48	第1地点IV区
SK071	土坑	中世	11I~12	第1地点IV区
SK072	竊土遺構	中世	11I~11	第1地点IV区
SK073	土坑	中世	10I~90	第1地点IV区
SK074	土坑	中世	10I~90	第1地点IV区
SK075	土坑	中世	10I~80	第1地点IV区
SK076	土坑	中世	10I~80	第1地点IV区
SK077	竊土遺構	中世	10I~41	第1地点IV区
SK078	土坑	中世	10I~41	第1地点IV区
SK079	地下式坑	中世	10I~30	第1地点IV区
SK080	土坑	中世	10G~47	
SK081	土坑	中世	10H~03	
SK082	土坑	中世	9I~33	
SK083	土坑	中世	9I~33	
SK084	T字型大形施設	中世	11F~29	第3地点
SK085	土坑	中近世	11H~16	第3地点
SK086	土坑	中世	10F~87	第3地点
SK087	土坑	中世	10E~06	
SK088	土坑	中世	10E~06	
SK089	土坑	中世	10E~06	
SK090	地下式坑	中世	9G~47	
SK091	土坑	竊文	8G~51	雑群4内
SK092	土坑	竊文	7E~47	雑群5周辺
SK093	土坑	竊文	7E~47	雑群5周辺
SK094	土坑	竊文	7E~47	雑群5周辺
SK095	土坑	竊文	7E~47	雑群5周辺
SK096	土坑	竊文	7E~49	雑群5内
SK097	土坑	竊文	7E~59	雑群5内
SK098	竊穴	竊文	4D~64	雑群5内
SK099	集石土坑	竊文	4G~71	雑群6内
SK100	集石土坑	竊文	3G~95	注記 k-80002~1~ 注記 k-80007~1~
SK101	土坑	竊文	3G~76	
SK102	土坑	竊文	3G~85	
SK103	竊穴	竊文	3G~85	
SK104	土坑	竊文	3G~55	
SK105	土坑	中近世	1I~15	
SK106	土坑	中近世	5I~05	
SK107	土坑	室・平	4J~11	SS001の竊坑か
SX001	台地整形区画	中世	12H~12I	
SX002	台地整形区画	中世	11H~11I	
SX003	台地整形区画	中世	11H	
SX004	台地整形区画	中世	10H~11H	
雑群1	竊文	16G		
雑群2	竊文	16F		
雑群3	竊文	12G		
雑群4	竊文	8G		
雑群5	竊文	7E		
雑群6	竊文	4G		
雑群7	竊文	4H		
雑群8	竊文	4I		
雑群9	竊文	4J		
雑群10	中近世	10F~10G~11F~11G		第3地点

第4章 弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代

第1節 概要

本遺跡において、弥生時代以降から奈良・平安時代に至るまでの間に属する遺構・遺物については僅かな発見があったのみである。弥生時代末期～古墳時代初頭にかけては、グリッドから若干の土器片が検出され、古墳時代の遺構としては、土坑が1基検出されたにとどまる。さらに奈良・平安時代では、1軒の竪穴住居跡と円形周溝遺構が検出され、円形周溝内では埋葬施設と想定できる土坑が中央部から発見されている。出土遺物が皆無であったため、時期については明確にできなかった。ただ形態・覆土等から判断して奈良・平安時代の所産と考えて大過あるまい。

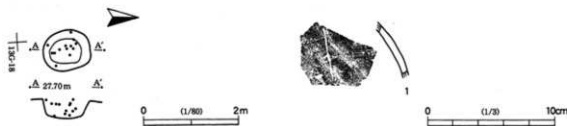
第2節 弥生時代、古墳時代

1 遺構と遺物

SK008 (第181・182図、図版10・42)

本跡は、調査区の中央部13G-08グリッド内に位置する。平面形は円形に近い楕円形で、長軸方向はほぼ南北を示す。規模は長軸が約1.0m、短軸で約0.8mを計測する。確認面からの掘り込みは0.4mを測る。その覆土は黒色土であった。遺物は、古墳時代前半の土器片が13点出土している。土器片はすべて同一個体と思われた。器面では磨滅が著しく小破片であったため、図示できたものは1点となった。また、本土坑周辺からも同一個体と思われる土器片が14点出土している。そのうち2点をグリッド出土土器として図示した(3・4)。

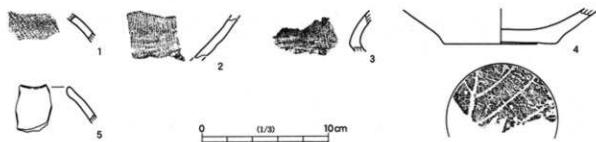
図示した土器は胴上半部の破片で、湾曲する胴部、あるいは後述する周辺出土の同一個体から壺形土器の一部となろう。器面には僅かに刷毛目痕と篋ミガキが認められる。



第181図 SK008・出土土器

2 グリッド出土の土器 (第182図、図版42)

1は、弥生後期の胴部片で、器面には縄文が施文されている。北関東系土器として捉えられよう。2～5は、いわゆる五領期に属する土器群で、いずれも壺形土器の一部であろう。2・3の器面には刷毛目、5の表面では赤彩が認められる。4は底部片で、木葉痕を残す。なお、器面の色調は淡褐色であり、胎土に含有される小石などから遺構出土の土器と同一個体と考えられた。



第182図 グリッド出土土器

第3節 奈良・平安時代

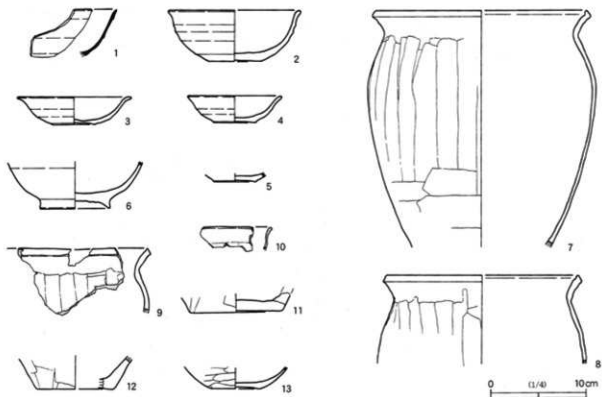
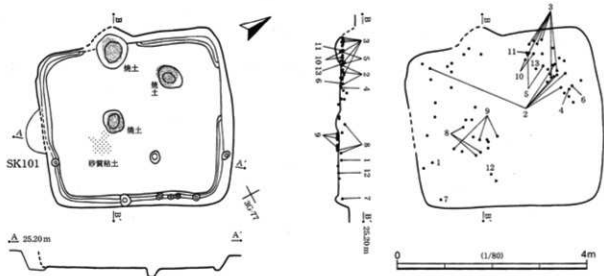
1 遺構と遺物

SI003 (第183図、図版11・42・43)

調査区の北側、3 G-66・76グリッドに位置する。南西壁の中央部で縄文時代の所産とした SK101と重複する。平面形はやや横長の隅丸長方形で、規模は3.7m×4.1m、検出面からの深さは20cm～35cmである。全体に遺存は悪く、西隅付近は、確認調査時の掘削のため、壁溝のみの遺存である。主軸方位はN-66°-Wである。主柱穴は検出されなかった。カマド対面の壁中央やや内側に出入口ピットが検出された。径0.23m、深さ0.2mである。床面は平坦であるが、全体にやや軟弱で、硬化面は検出されなかった。壁溝が検出され、北東壁中央を除いて全周する。深さは0.05m前後である。北東壁の東部分から南東壁及び南西壁の東部分の壁溝内に壁柱穴と考えられるピットが7基検出された。径0.1m～0.3mで、壁溝底面からの深さは0.04m～0.12mである。深さが浅いので、壁補強材の支柱と考えられる。カマドは北西壁中央南寄りに検出された。削平のため煙道、袖は遺存しない。火床部の焼土が遺存している。焼土面は0.6m×0.45mの楕円形で、壁に掘り込まれている。床面ほぼ中央および、北隅寄りの2か所に炉跡と思われる焼土が検出された。平面形は楕円形で、規模は中央が0.5m×0.4m、深さ0.08m、北隅が0.58m×0.45m、深さ0.12mである。また、床面中央やや南隅寄りに、カマドの構築材と思われる砂質粘土が検出された。床面の炉跡から鍛冶跡の可能性も考えられるが、鉄滓等の鍛冶関係の遺物は検出されなかった。出土遺物は、覆土下層から底面にかけて土器片65点及び礫1点出土している。

1は灰軸陶器の碗である。高台を持つと考えられ、半球形に近い体部で、口縁は小さく外反する。灰軸は内面の口縁から体部中央に施され、刷毛塗りと思われる。外面は無軸である。2～5はロクロ土器器環である。2～4は底径が口径の1/2以下である。2は底部は平底で、体部が外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾して口縁部に至る。口縁部はほぼ真上を向き、口縁は小さく外反して、やや厚くなり、丸味がある。3は器高が低く、皿に近い形である。底部は回転糸切り無調整で、わずかに上げ底状である。体部は大きく開いて立ち上がり、緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁は大きく外反し、ほぼ水平である。4は器高がやや低く、3に近い形状である。底部は回転糸切り無調整で、わずかに上げ底状で、突出気味である。体部は大きく開いて立ち上がり、緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁部は大きく開き、口縁はわずかに外反する。5は底部である。回転糸切り無調整で、わずかに上げ底状で、突出気味である。底径から4に類似すると考えられる。6は土器器高台付環である。口縁部を欠損する。高台は外傾して開き、わずかに外反する。貼付け高台で、断面は三角形である。底部に回転糸切り痕がある。体部は大きく開いて立

ち上がり、緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁部はほぼ真上を向くと考えられる。7～13は土師器甕である。7は口縁部から胴部下部である。胴部は鶏卵形で、最大径は上半部にある。口縁部は外反して開き、口縁が内傾して立ち上がり、受け口状で、丸味がある。外面の口縁から胴部上半部にススが附着しているので、炊事等に使用された可能性がある。8は口縁部から胴部上部である。胴部は遺存部分から、やや丸味の無い、鶏卵形と思われる。口縁部は外反し、口縁がわずかに立ち上がり、受け口状になる。また、口



第183図 S1003・出土土器

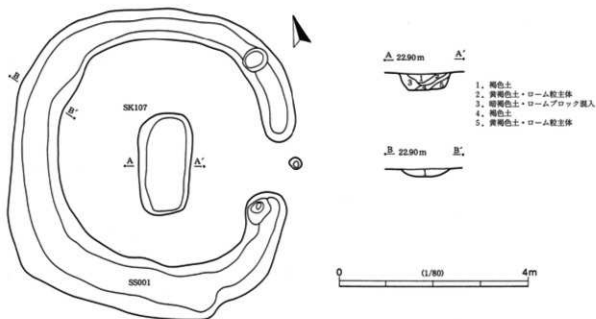
縁はやや厚くなり、玉縁状である。9は口縁部から胴部上端部片である。口縁を除いて、8に類似すると考えられる。口縁は丸味が無く、面取り状で、断面は三角形である。10は小型で、口縁部から胴部上端部片であり、鉢の可能性もある。胴部は半球形と思われる。口縁部はほぼ直立し、口縁は小さく外反して、丸味がある。11は底部である。平底で、胎土・色調および調整から7と同一個体の可能性がある。ただし、出土位置は、北隅(11)と南隅(7)で、離れている。12は底部である。平底で、中央が欠損している。胎土・色調および調整から8と同一個体の可能性がある。出土位置は、住居跡南部分で、近接している。13は小型甕の底部である。わずかに上げ底で、中央が欠損している。胎土および器壁の薄さから、10と同一個体の可能性がある。出土位置は、住居跡北隅付近で、近接している。

1の灰軸陶器は器形および施軸方法から黒笹90号窯式に属すると考えられる。また、2・3の土師器坏は口縁部が大きく開く形状および器高が低いこと、底部径が小さく、回転糸切り無調整であることなどから10世紀代中頃と考えられる。土師器甕では、7が口縁部の特徴から10世紀代前半と考えられ、2の土師器坏および6の土師器高台付坏は、特徴から10世紀代前半と考えられる。

以上、主要な出土遺物から、灰軸陶器がやや古い様相(9世紀後半代)を示すと考えられるが、住居の時期としては10世紀前葉～中葉と考えられる。なお、灰軸陶器については、遺構外からも同様な破片が出土しているので、住居との帰属関係は他の遺物に比べて弱いと考えられる。

SS001・SK107 (第184図、図版11)

調査区北東部、4 J グリッドに位置する。SS001は円形周溝遺構である。SK107はSS001の周溝内側中央から検出された。SS001の埋葬施設の可能性が高い。遺物の出土が認められなかったため土坑として掲載した。SS001は、外径6m～6.5m、内径4.5m、溝幅1m～1.5mを測る。溝は、東側で1mほど途切れ、全周していない。途切れている部分からピットが検出されたが、覆土から判断して本遺構に伴うものでないとした。確認面からの溝の深さは0.2m前後である。断面は浅い丸底を呈する。溝内に径0.5m、深さ0.2m



第184図 SS001・SK107

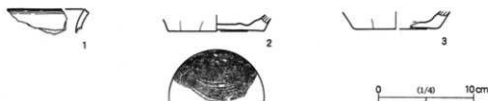
ほどのビットが2本検出された。遺物としては、鉄滓が1点、溝の底面から出土したのみである。

SK107は、隅丸な長方形を呈し、長軸方向はN-15°-Eである。規模は長軸2.15m、短軸1.1mで、確認面からの掘り込みは0.35mを測る。覆土は、黄褐色土と暗褐色土（ロームブロック混入）主体で、人為的な埋土と思われた。遺物の出土は皆無であった。

2 グリッド出土の土器（第185図、図版43）

遺構外出土の奈良・平安時代の土器は若干である。竪穴住居跡を検出した3Gグリッド以外は、ほとんど皆無といってよいほどの遺物量である。図示し得たのは3点で、いずれもSI003の周辺から出土したものである。

1～3は土師器である。1は口縁部片である。胴部から外反し、口縁上端が小さく突出して丸くなり、沈線状にくぼんで見える。2は底部である。平底で、外周にヘラケズリが施されるが、中央に回転糸切り痕が残り、ロクロ成形である。3は底部である。平底で中央が欠損している。欠損の状況から焼成後に穿孔された可能性があるが、破片のため不明確である。



第185図 グリッド出土土器

第46表 平安時代遺構・遺構外出土遺物観察表

遺構番号	器種	口径	底径	胴高	遺存度	色調	胎土	地成	（ ）は検出数、〔 〕は残存数を示す	
									物量	遺物番号
SI003	1 灰釉陶器片				IS (口縁～胴部片)	内 灰黄色 外 灰黄色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ロクロナデ、口縁から胴部上平段反軸 外 ロクロナデ、一箇スチ付着	42-5102-11- 2, 3086-1
	2 土師鉢片	(13.0)	5.5	1.4	50%	内 におい褐色 外 におい褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ 底部 回転糸切り+回転ヘラケズリ (内裏)	11-21-21-50- 19, 3076-1
	3 土師鉢片	11.8	4.4	2.9	90%	内 におい褐色 外 におい褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ 底部 回転糸切り	1-2-3-1-18-22-49
	4 土師鉢片	9.5	4.4	2.9	60%	内 褐色～赤褐色 外 褐色～暗褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ	24
	5 土師鉢片	4.5	(6.9)		IS (底面片)	内 褐色 外 灰褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ 底部 回転糸切り	29
	6 土師器 集合付片	(7.3)	(1.0)		20%	内 褐色～赤褐色 外 におい褐色～赤 褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・重砂片・ スコリア	高野	内 ロクロナデ 外 ロクロナデ、付着部 底部 回転糸切り	3-14-30-3076-1
	7 土師鉢	(22.2)		(24.0)	20%	内 におい褐色 外 灰褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒多・スコリア	高野	内 口縁部ココナデ、胴部ナデ 外 口縁部ココナ デ、胴部ヘラケズリ、口縁から胴上部全面スチ付着	45
	8 土師鉢	(20.0)		(9.3)	15%	内 褐色 外 褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 口縁部ココナデ、胴部ナデ 外 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	28-44-47
	9 土師鉢				IS (口縁部片)	内 におい黄褐色 外 におい黄褐色～ 黄褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 口縁部ココナデ、胴部ナデ 外 口縁部ココナデ、胴部ヘラケズリ	40-48-53
	10 土師鉢				IS (口縁部片)	内 褐色 外 褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ココナデ 外 ココナデ	4-8
	11 土師鉢		9.8	(1.9)	15%	内 におい褐色 外 褐色～赤褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 縦方向ナデ 外 縦方向ヘラケズリ 底 一定方向ヘラケズリ	3-50
	12 土師鉢				IS (底面片)	内 褐色 外 褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 縦方向ナデ 外 縦方向ヘラケズリ 底 一定方向ヘラケズリ	46
	13 土師鉢	(6.0)	(2.3)		IS (底面片)	内 暗赤褐色 外 暗赤褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 縦方向ナデ (ゴボ) 外 縦方向ヘラケズリ 底 ヘラケズリ	18
遺構外	1 土師鉢				IS (口縁部片)	内 灰褐色 外 灰褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ココナデ 外 ココナデ	3086-1
	2 土師鉢	(10.0)	(1.7)		IS (底面片)	内 黄褐色 外 明褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ナデ 外 縦方向ヘラケズリ 底部 回転糸切り+半持ちヘラケズリ (内裏)	31904-4
	3 土師鉢	(9.0)	(1.8)		IS (底面片)	内 褐色 外 明褐色	黒石・赤黄・砂粒・ 炭粉粒・スコリア	高野	内 ナデ 外 縦方向ヘラケズリ 底部 半持ちヘラケズリ (内裏)	3076-1

第5章 中・近世

第1節 概要

本遺跡では、中世から近世にかけての遺構・遺物を多数検出した。本章では、中世の墓域に関する遺構と比定できるものについては第2節に、それ以外の中・近世の遺構については第3節に、中・近世の出土遺物については第4節に、源七山遺跡所在の野馬土手（SA001）については第5節にそれぞれ記した。

1 中世の遺構と遺物

中世の遺構・遺物は、遺跡中央部に集中している。遺構は、墓域を形成する遺構が主である。墓坑と認められる土坑や地下式坑は、溝・台地整形・土塁状遺構による区画の影響を受けたものとそうでないものとに分かれる。とりわけ区画の影響を受けた遺構が集中する地点を3地点検出した。第1地点は、坪井川に面した台地緩斜面部で、溝・台地整形・土塁状遺構による区画が連続して認められ、大規模な墓域を形成していたことが判明した。遺物は常滑系の甕や捏鉢、古瀬戸の深皿、青磁碗等が出土している。第2地点は、第1地点の南西側の台地上の平坦面で、溝による区画と土坑・地下式坑が検出されている。また、第1地点の西側・第2地点の北側に遺構（掘立柱建物・土坑・ピット群）の集中する地点が認められ、これを第3地点とした。地点外として、区画を伴わないで単独あるいは数基まとまって検出した土坑等を報告する。

2 中世の土坑の分類

中世の所産と認識した土坑については、下記のとおりに分類した。

I類—地下式坑である。3基検出している。

II類—円形・楕円形・長方形を呈し土坑墓と認定もしくは推定されるもの。

II a類—人骨片・粉（火葬骨）が出土した土坑墓。2基検出している。

II b類—人骨片は出土しなかったが、中世の遺物（陶磁器や石塔などの破片等）を出土した土坑。遺物は副葬品と考えられ、土坑墓と認定してよいと判断している。

II c類—人骨片は出土しなかったが、火葬（茶毘）に付したと思われる際の焼土粒・炭化粒・灰などの混入が多く認められる土坑。土坑墓（火葬墓）と認定してよいと判断している。

II d類—人骨片・遺物・焼土等は認められなかったが、平面形・覆土が上記の土坑に類似する土坑。土坑墓と規定するには漠然としているが、当遺跡では土坑墓であろうと推定している。

III類—火葬施設と認定できる土坑や焼土遺構。

IV類—その他（土坑墓以外）。掘り込みがあり、覆土からみて遺構と判断できるもの。

3 近世の遺構

近世の遺構は、小金牧南部の下野牧の遺構である野馬土手が所在する。調査区南部（東葉高速鉄道の南側）の日本大学理工学部の敷地との境界沿いに野馬土手が長さ330mにわたって所在している。本土手は牧と村の境界にある土手で、調査区側が坪井村、日大側が下野牧であったことが判明している（第5節）。

第2節 中世の遺構

1 第1地点(第186図、図版12)

遺跡中央部の10H・10I・11H・11I・12H・12Iグリッドに位置する。坪井川に面する台地緩斜面部で、溝・台地整形区画(SX001~SX004)・土塁状遺構(SA003)等による区画が連続して認められた。区画をそれぞれⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区とした(第186図)。

なお、本地点は、通常の立川ローム層が遺存せず、Ⅲ層相当層として粘質がかかる褐色土が若干認められる程度で、それ以下は非常に粘質が強く強く締まった褐色土・暗褐色土となっている。

(1) Ⅰ区(第187図、図版12)

連続する区画の最南部で、溝4条、台地整形区画、土坑、焼土遺構等を検出した。そのうち台地整形区画(SX001)内の部分をⅠa区、SD016・SD017と台地整形区画に挟まれた間をⅠb区、SD016の以南をⅠc区とした。

Ⅰa区(SX001)(第188・214図、図版13)

台地整形区画で、長軸18m、短軸15mの方形に掘り込まれた区画である。南東側は、現代の地境の溝による掘削を受けているため消失している。掘り込みは、南西コーナー付近で約0.8m、北西コーナー付近で約0.5mほどで、底面はほぼ水平になっている。区画内からは、土坑が12基検出された。そのうちSK043からは人骨片と遺物が出土し土坑墓と認定することができる。遺物は、土坑内のほか土坑周辺や掘り込みの斜面部や底面からも出土している。12基検出された土坑の類型の内訳は、Ⅱa類がSK043、Ⅱb類がSK034・037・039・041A~C・042、Ⅱd類がSK036・038・040、Ⅲ類がSK035である。Ⅱb類が最も多い。SK042・043、およびこれらの周辺から、焼けた人骨片・炭化材・小さな焼土ブロックや1個体に復原できた常滑の甕(第214図11)が出土しており、これらの土坑は、骨蔵器の埋納土坑と考えられる。

Ⅰb区(第189図、図版13・14)

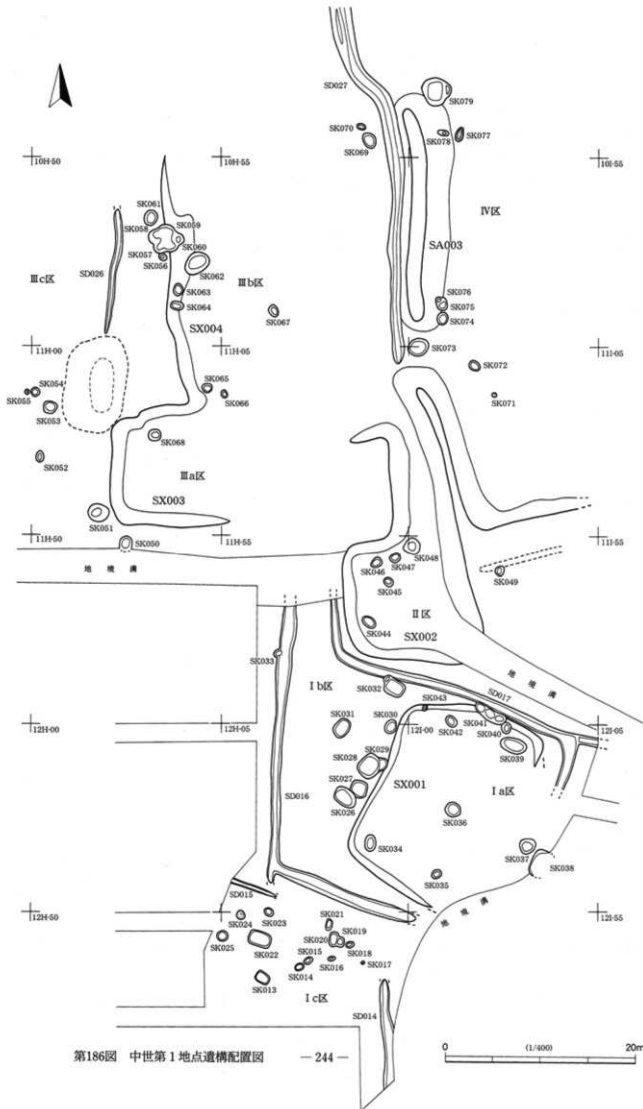
台地整形区画(SX001)と南側から西側にあるSD016と北側から東側にあるSD017に挟まれた地区である。SD016から古瀬戸縁折口縁の深皿(3)が出土している。SD017から貝ブロックが2か所から検出された。海生の二枚貝で、ハマグリ、アサリ、シオフキ、サルボウである。土坑は9基検出し、すべてⅡd類である。

Ⅰc区(第190図、図版14)

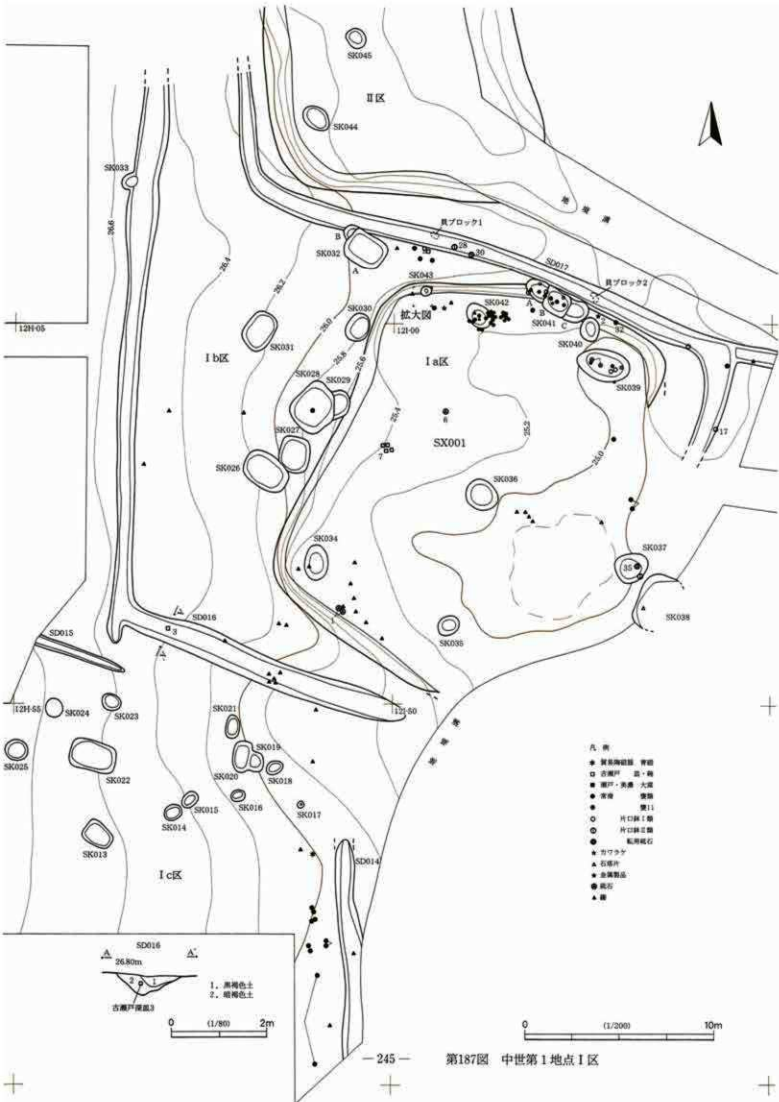
SD015・SD016以南の地区である。西から東に向かって緩斜面となる地域である。溝2条と土坑12基、焼土遺構1基検出された。12基検出された土坑の類型の内訳は、Ⅱc類がSK019・020、Ⅱd類がSK013~016・018・021~023、Ⅲ類がSK024、Ⅳ類がSK017である。

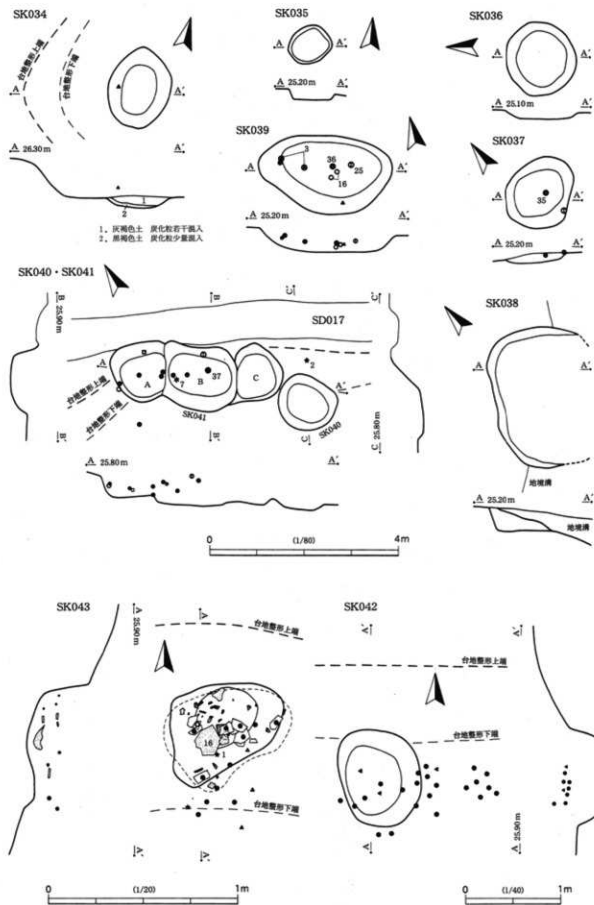
(2) Ⅱ区(SX002)(第191・192図、図版15)

台地整形区画(SX002)で、長軸14m、短軸13mの方形に掘り込まれている。南・西側の台地整形上段にはSD017があり、Ⅰ区と区画されている。北東側は、土塁状遺構(SA003)とつながり、幅5m、長さ10mほど張り出したように掘り込まれている。この張り出し部は区画内への入り口部にあたると思われる。底面は、通常のロームでなくSX001のように粘質が強く強く締まった暗褐色土である。区画内からは土坑が6基検出された。遺物は、区画内の土坑および周辺から出土している。土坑の類型の内訳は、Ⅱb類がSK046、Ⅱc類がSK048、Ⅱd類がSK044・045・047・049であり、すべてⅡ類である。



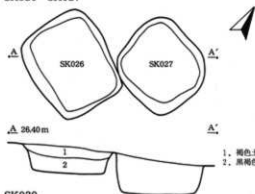
第186図 中世第1地点遺構配置図



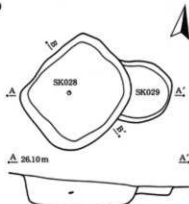


第188图 中世第1地点I a区

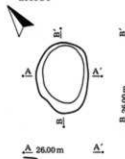
SK026 · SK027



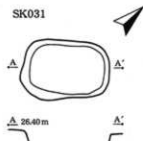
SK028 · SK029



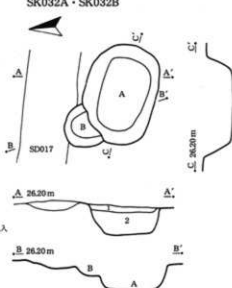
SK030



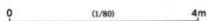
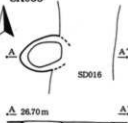
SK031



SK032A · SK032B

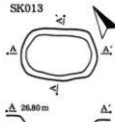


SK033

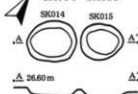


第189图 中世第1地点1 b区

SK013



SK014 · SK015



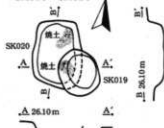
SK016



SK017



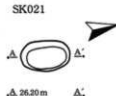
SK019 · SK020



SK018



SK021



SK023



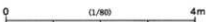
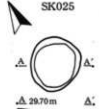
SK022



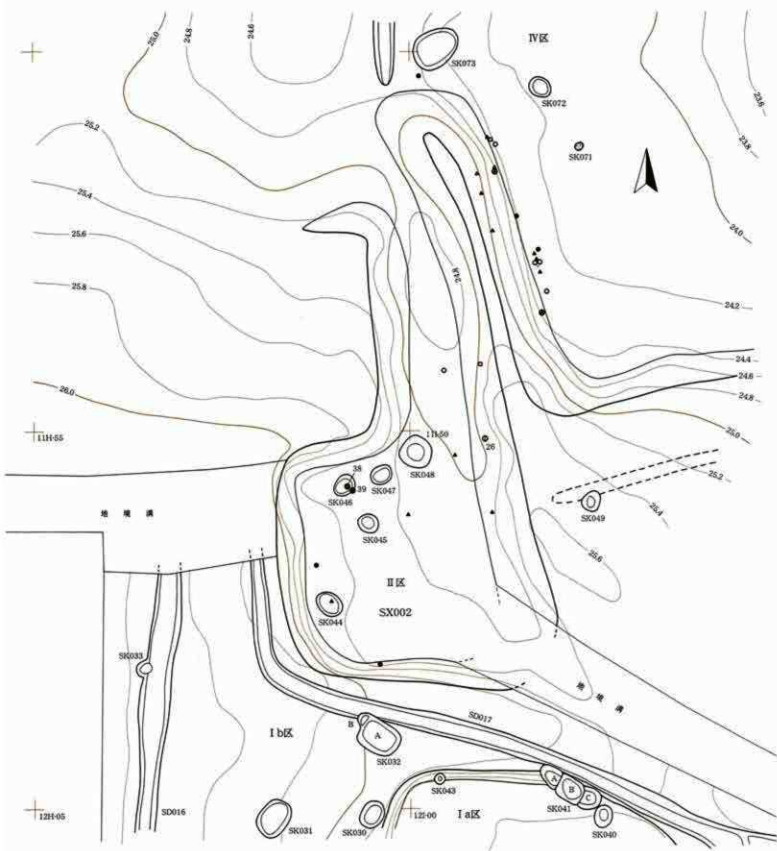
SK024



SK025

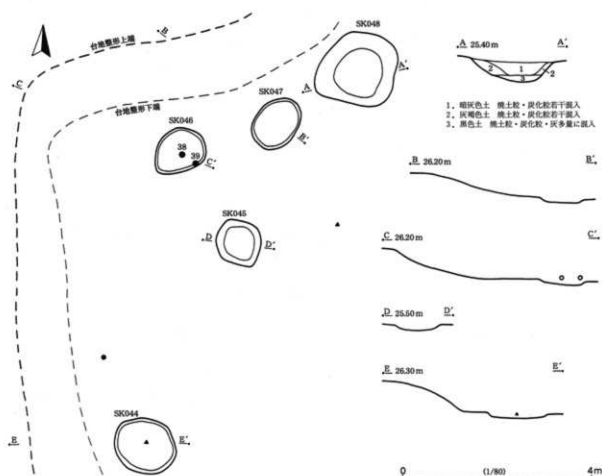


第190图 中世第1地点1 c区



- | | | | |
|------------|------------|------|--------|
| ● 壁輪陶磁器 青磁 | □ 古堀戸 瓦・檼 | ● 穴溝 | ● 石塔片 |
| ● カワツク | ● 瀬戸・尾張 瓦葺 | ● 土層 | ● 奈良瓦葺 |
| | | ○ 表土 | ● 灰白 |
| | | ○ 中土 | ● 腐 |
| | | ○ 下土 | ● 私用瓦葺 |

第191園 中世第1地点II区(I)



第192図 中世第1地点II区(2)

(3) III区 (第193~195図、図版15)

連続する区画の北西部で、台地整形区画2基、溝1条、土坑等を検出した。そのうち台地整形区画 SX003内をIII a区、台地整形区画 SX004内をIII b区、台地整形区画の上段をIII c区とした。

III a区 (SX003) (第193~195図、図版15)

SX003の台地整形区画は、斜面下方である東側が開く「匚」状に掘り込みが行われている。規模は南壁13m、西壁11m、北壁10mである。北壁の東端はSX004と繋がっている。区画内からは、II c類に分類されるSK068の土坑が1基検出されている。遺物は、区画内の土坑および周辺から出土している。

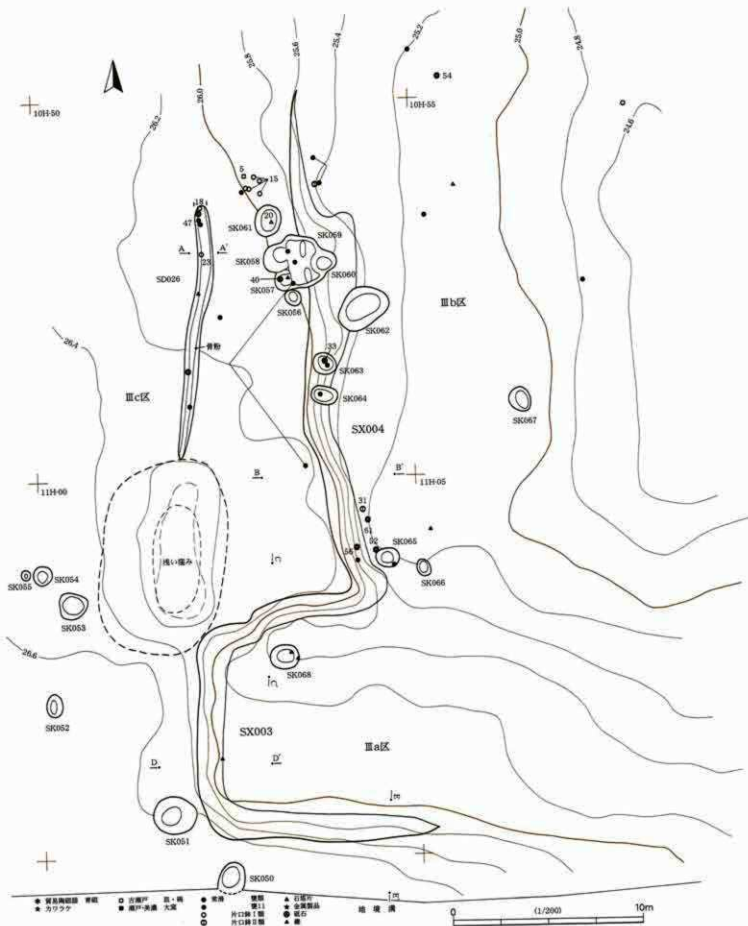
III b区 (SX004) (第193~195図、図版15・16)

SX004の台地整形区画は、SX003の北東端から北方向に直線に25mにわたって掘り込みが行われテラス状に削り出されている。区画内からは土坑が6基検出されている。遺物は、区画内の土坑および周辺の覆土中から若干出土している。土坑の類型の内訳は、II a類がSK064、II b類がSK063、II c類がSK067、II d類がSK062・065・066である。すべてII類であるが、a～d類のすべての形態の土坑が検出されている。

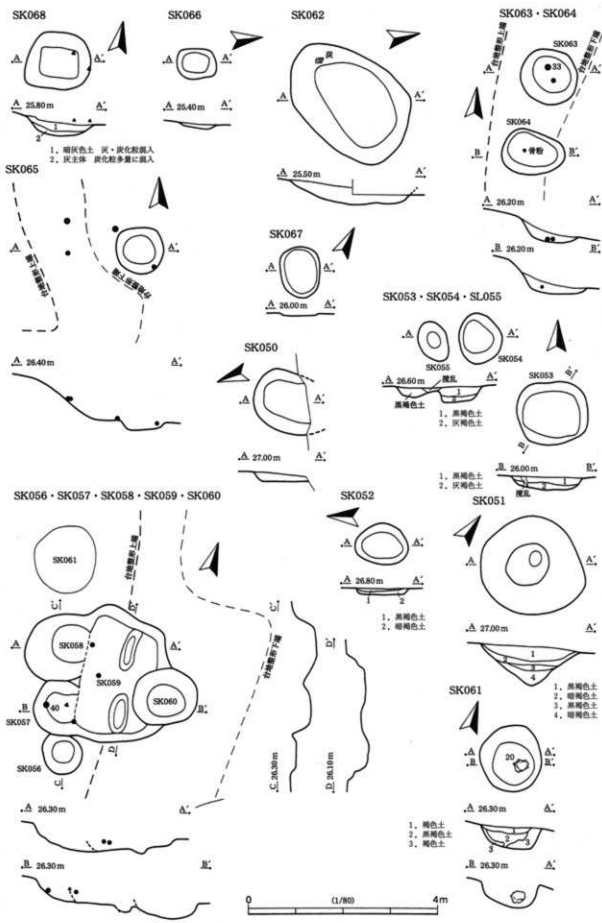
III c区 (第193~195・214・220図、図版16)

台地整形区画 (SX003・SX004) の西側上段の地区である。溝1条と土坑12基が検出された。SD026の南側に、長軸10m、短軸7m、深さ最大0.3mの浅い大きな窪みも検出されている。

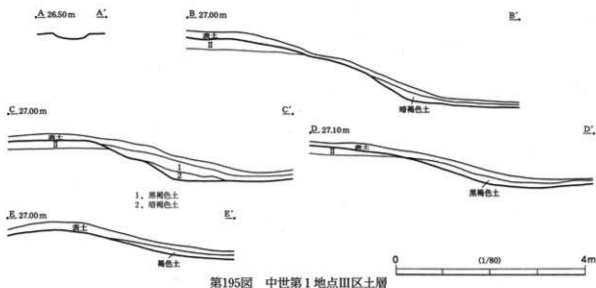
遺物は、溝や土坑および周辺の覆土中から少量出土している(第214図5)。土坑は、SK061がII b類で、その他はII d類である。SK061からは、覆土中より墓石と思われる石(第220図20)が出土している。



第193図 中世第1地点Ⅲ区(1)

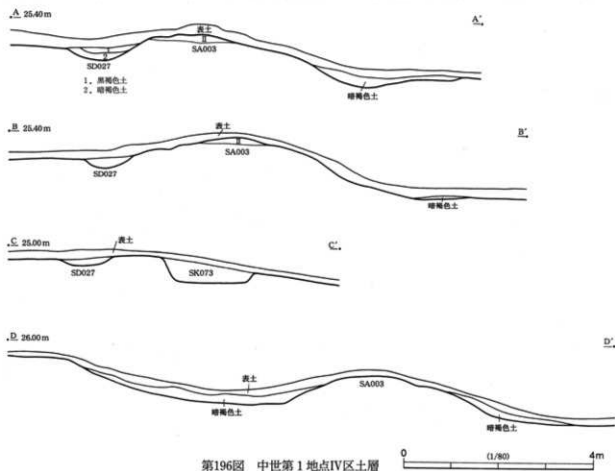


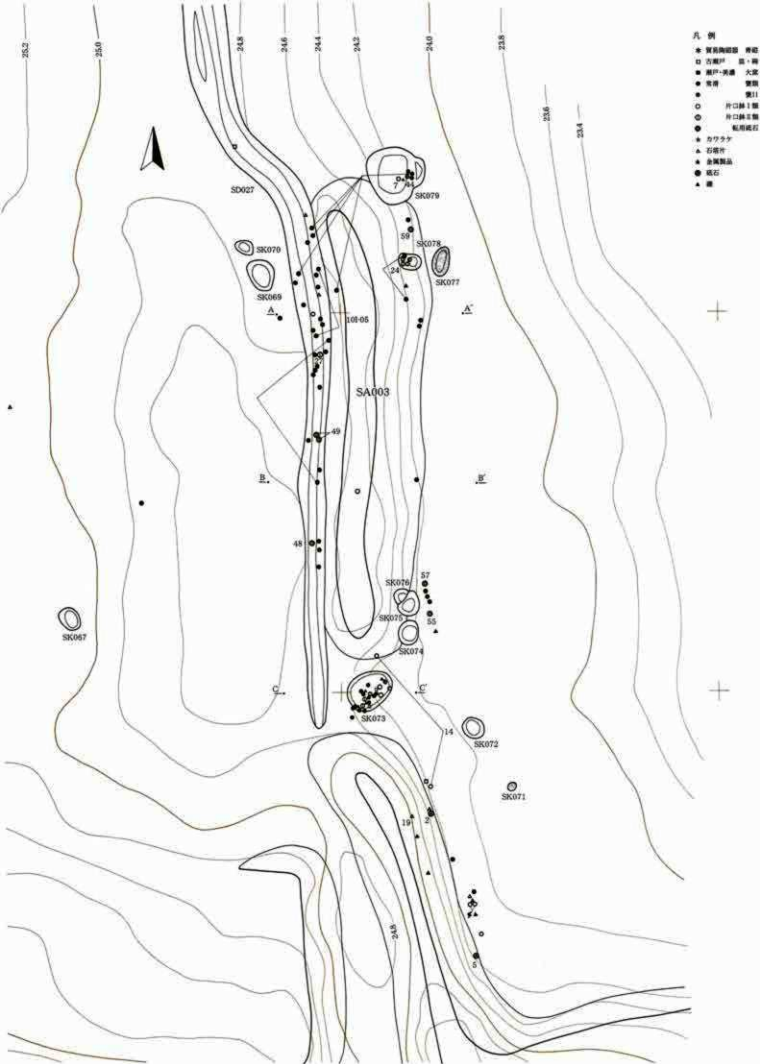
第194图 中世第1地点III区(2)



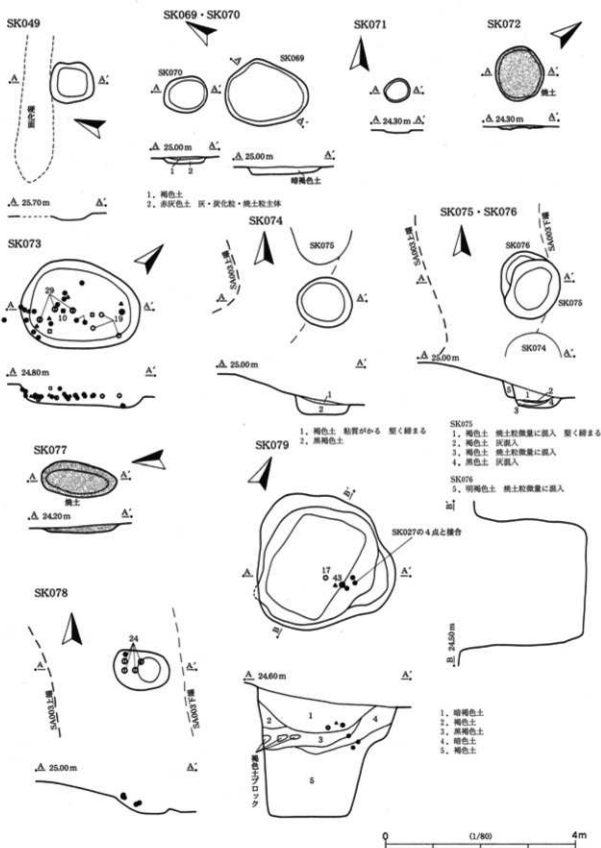
(4) IV区 (第196~199図、図版16・17)

第1地点の北東部に位置し、土塁状遺構(SA003)と溝(SD027)及び土塁状遺構周辺の土坑群からなる。SA003は、Ⅱ区のSX002(台地整形区画)の北東コーナーから連続しており、南北方向に長さ45mほど検出した。西側にはSD027の溝が土塁状遺構に沿って検出されている。第196図の土層の観察の堆積状況から、地山を削り出して土塁状に構築しているので、ここでは土塁状遺構の名称とした。11 I -00付近では、土塁状遺構が3.5mほど切れて入り口状に開口している。この部分から中世の土坑(SK073)が検出されていることから、構築当初からこの部分は開口していたものと判断した。そのほかの土坑も、土塁状遺構の下端部近辺から検出されている。また、遺物(常滑片)も土塁状遺構の下端部近くに散在している。

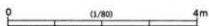
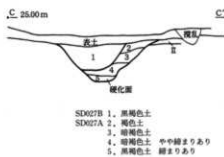
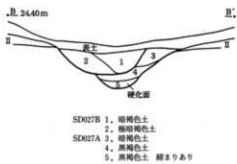
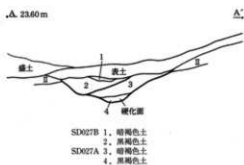
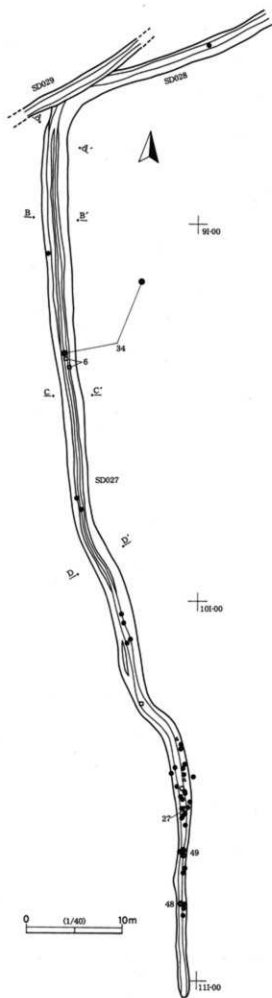




第197図 中世第1地点IV区(1)



第198図 中世第1地点IV区(2)

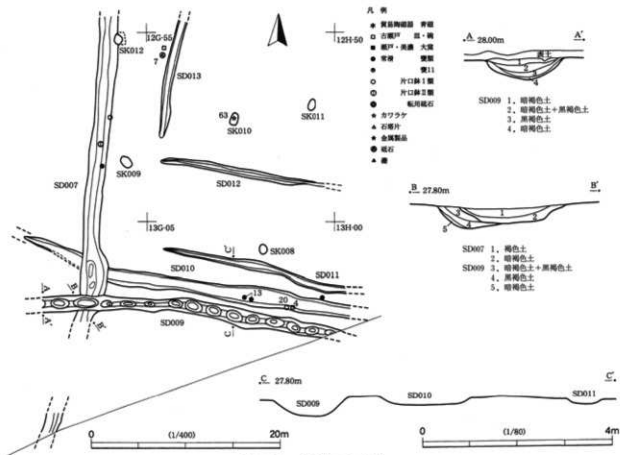


第199図 中世第1地点IV区 (SD027)

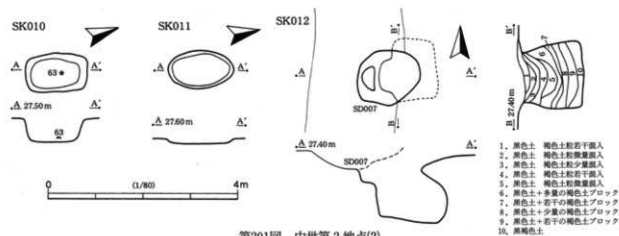
2 第2地点(第200・201図、図版12・18)

遺跡中央部の12G・13Gに位置する。台地平坦部で、確認面の標高は27.5m前後である。東西方向と南北方向に走る数条の溝による区画が行われ、土坑や地下式坑が検出された。第200図中のSD007・008・SK008・009については当該期外なので第3章、第4章、第5章第3節3に触れる。

本地点は、台地平坦部にもかかわらず、第1地点同様に通常の立川ローム層が遺存せず、Ⅲ層相当層として粘質がかる褐色土が若干認められる程度で、それ以下は非常に粘質が強く堅く締まった褐色土・暗褐色土となっている。遺物は主にSK010内、SD010内及び周辺から少量出土しているのみである。遺構外では、常滑甍片、古瀬戸片が出土している。



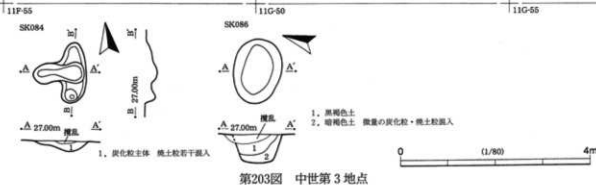
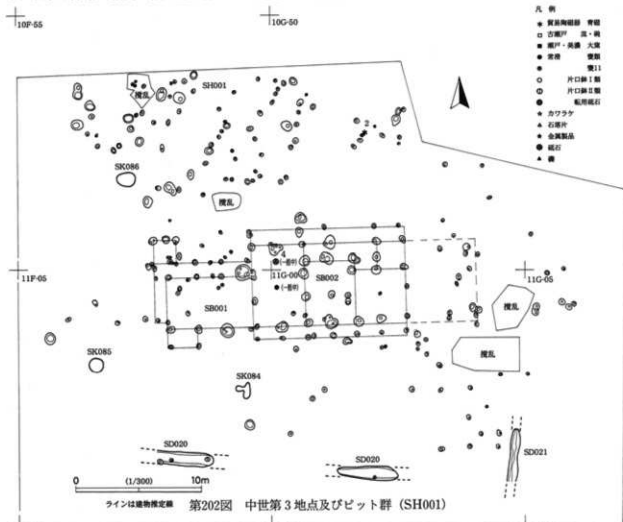
第200図 中世第2地点(1)



第201図 中世第2地点(2)

3 第3地点 (第202・203図、図版12・18・19)

遺跡中央部の10F・10G・11F・11Gに位置する。第1地点の西側・第2地点の北側の台地平坦部で、確認面の標高は27m前後である。本地点は、調査以前は駐車場として造成されていた所でII層の遺存状態が悪く、III層まで攪乱が及んでいる箇所もあった。本地点からは、掘立柱建物、溝、土坑、ピット群が検出された。そのうち中世の遺構と判断したのは、SK084・SK086・ピット群の一部(SH001)である。土坑の類型は、SK084がⅢ類、SK086がⅡd類である。溝、掘立柱建物等については、本時期の所産とする確証に欠けているため第3節のその他の遺構で取り扱う。本地点も、台地平坦部にもかかわらず、第1地点・第2地点同様に通常の立川ローム層が遺存せず、III層相当層として粘質がる褐色土が認められる程度で、それ以下は非常に粘質が強く堅く締まった褐色土・暗褐色土となっている。

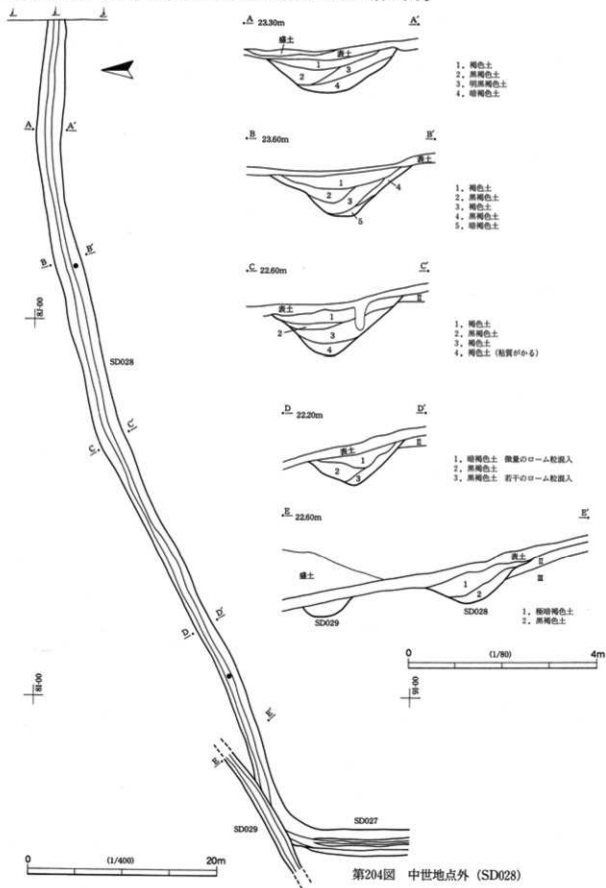


4 地点外 (第204・205図、図版18・19)

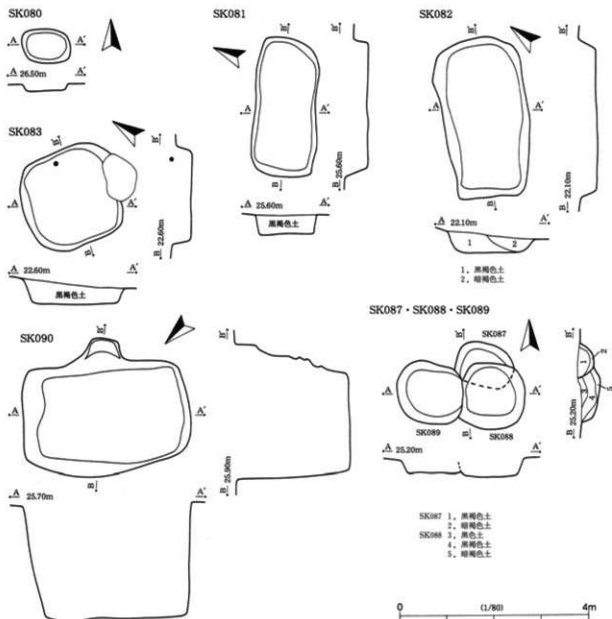
第1～3地点以外の区域から検出された遺構を地点外として取り扱うことにする。

SD028は、SD027の北端部から繋がって東西方向に延びる溝である。SD027は新しい溝が確認されている。旧溝としたSD027Aの中世の溝がSD028に繋がっている。常滑片が若干出土している。

土坑の種類は、SK080～083・087～089がII d類、SK090がI類である。



第204図 中世地点外 (SD028)

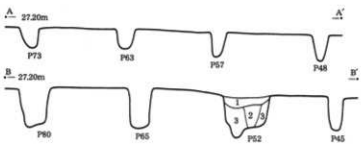
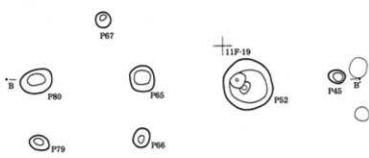
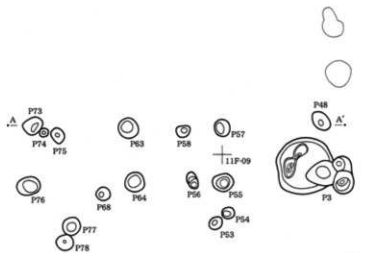


第205図 中世地点外(土坑)

第3節 その他の中・近世の遺構

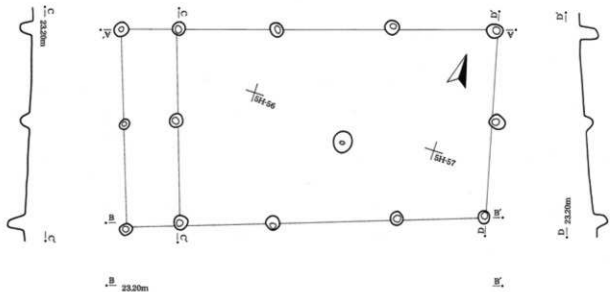
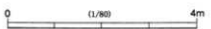
1 掘立柱建物跡 (第206~208図、図版19)

第1節で扱った遺構のほかに掘立柱建物跡・土手状遺構・溝・土坑等を検出している。覆土や堆積の状況から中・近世の所産としたものである。掘立柱建物跡は、3棟検出されている。SB001・002は、調査区中央部11Fグリッドに位置する。第3地点のピット群中より検出された。SB001は、北辺と南辺に庇(縁)を持つと思われる掘立柱建物跡である。桁行3間(6.3m)×梁行3間(6.5m)で、桁行方位はほぼ東西である。SB002は、北辺と南辺に庇(縁)を持つと思われる大型の掘立柱建物跡である。桁行6間(12.0m)×梁行5間(8.3m)で、桁行方位はN-85°-Eである。SB001と一体とも考えられ、中世の屋敷跡と思われる。SB003は、調査区北東部、5Hグリッドに位置する。西辺に庇(縁)を持つと思われる掘立柱建物跡である。桁行4間(7.5m)×梁行2間(4.1m)で、桁行方位はN-72°-Eである。

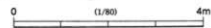


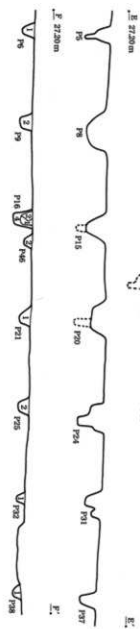
- 縦立柱跡土層
 1. 黒褐色土
 □-ム粒多
 2. 黒褐色土
 □-ム粒多
 3. 褐色土
 □-ム粒少

第206図 SB001



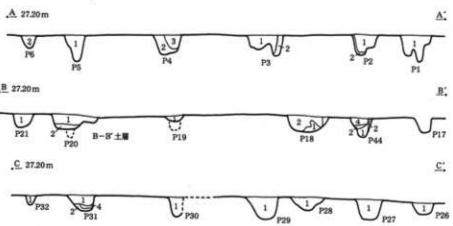
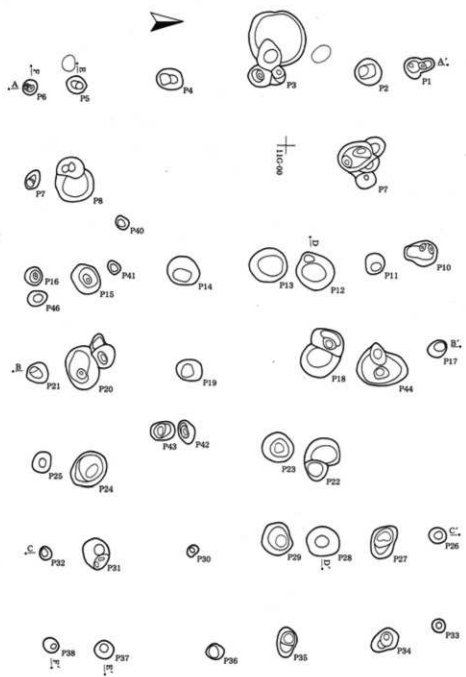
第207図 SB003





D. 27.20m

E.

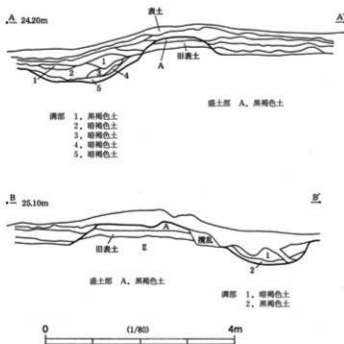


- 獨立柱狀土層
- 1. 黑褐色土 □—A 紋面
 - 2. 暗褐色土 □—A 紋面
 - 3. 黑褐色土 □—A 紋、雜土粒、炭化稻稈
 - 4. 褐色土 炭化稻稈

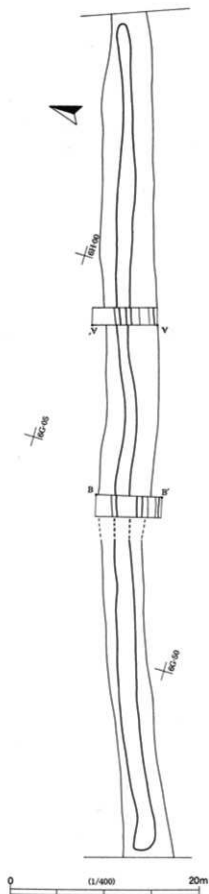
第208圖 SB002

2 土手状遺構 (SA002) (第209図、図版19)

調査区北部、6 F・6 G・6 Hグリッドに位置している。土手状遺構は東西方向に90mほど検出された。トレンチ1は東端から30m地点(6 G-18グリッド)に設定した。台地平坦面の標高24m上に位置する。土手の盛土部分は、幅1.2m、層厚0.1m~0.2mほどの黒褐色土が残存しているのみである。土手の南側で溝が検出された。溝は、約2.2m幅で、旧表土上面と溝底面との比高差は0.9mを測る。トレンチ2は東端から50m地点(6 G-23グリッド)に設定した。台地平坦面の標高24.5m上に位置する。土手の盛土部分は、幅2m、層厚0.2mほどの暗褐色土が残存しているのみである。土手の南側で溝が検出された。溝は、約1.7m幅で、旧表土上面と溝底面との比高差は0.9mを測る。本土手は、現況ではわずかの盛土しか認められなかった。しかし、本土手の北側と溝の南側は、旧表土以下のⅢ層上面近くまで削平されていることから、溝部の掘削土(ハードローム面まで)とあわせて周辺の削平による掘削土を盛土とした高い土手が築かれていたものと考えられる。遺物は縄文土器片1点と寛永通宝が1点(第222図3)出土した。



第209図 SA002



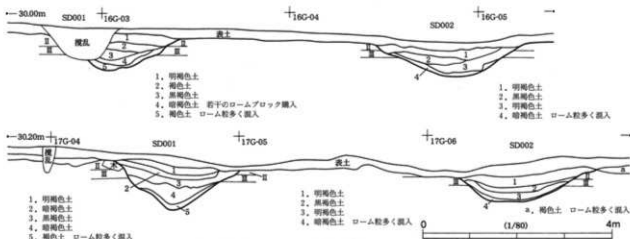
3 溝 (第6・7・200・210~213図、図版17・19)

数条検出されたが、主要な溝についてのみ記載する。SD001は、調査区南部、15 F・15 G・16 G・17 G・

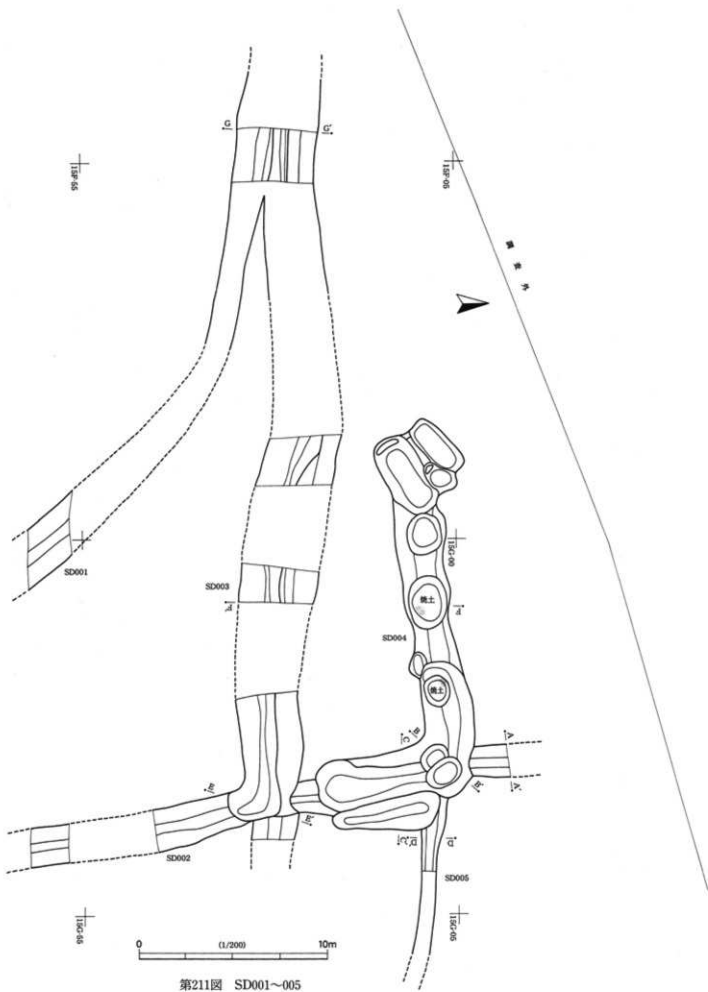
18Gグリッドに位置している。溝は140mほど検出した。SD002は、調査区南部、15G・16G・17G・18H・19Hグリッドに位置している。SD003は、15Gグリッドに位置している。SD004は、15F・15Gグリッドに位置している。底面にピットが多数付随している。溝内の覆土下層には、黒色スコリア（宝永火灰戻）も認められたことから、江戸時代18世紀前半に埋没していったものであろう。SD001～SD004は牧遺構と関連するものと考えられる。SD005は、調査区南部、15Gグリッドに位置している。SD006は、調査区の南東部、15I・16Iグリッドに位置している。SD007は、12G・13Gグリッドに位置している。SD007・SD021・SD022は調査区南部で検出したSD002から繋がる溝とも考えられ、中世とした遺構よりは新しい。SD008は、調査区中央部の西側道路際、13Fグリッドに位置している。南北に延びる溝と硬化面を検出した。明治期の迅速測図中の道路と現代の道路（市道）とがほぼ一致しており、本遺構は明治以前の古道と思われる。SD018は、調査区中央部の12I・12Jグリッドに位置している。SD019は、調査区中央部の12I・12Jグリッドに位置している。SD020は、遺跡中央部の11F・11Gグリッドに位置する。SD021は、遺跡中央部の11Gグリッドに位置する。SD022は、遺跡中央部の10Gグリッドに位置する。SD023は、遺跡中央部の10G・49グリッドに位置する。SD024は、9G・9H・10Gグリッドに位置する。SD025は、9Gグリッドに位置する。東西方向に延びる溝である。SD027Bは、中世の第1地点のSD027A（以下A溝）と重複した溝をSD027B（以下B溝）とした。B溝は、中世としたA溝がある程度埋没後に、再掘削された溝であると判断した。時期的には、B溝の中世の墓域とした時期以降の中・近世とする。SD029は、SD027Bの北端からT状に繋がっている溝である。SD030は、遺跡中央部、9Hグリッドに位置する。SD031は、遺跡中央部よりやや北寄り、7F・8Fグリッドに位置する。SD032は、遺跡中央部よりやや北寄り、6G・7G・8Gグリッドに位置する。SD033は、遺跡北西部、6D・7Dグリッドに位置する。SD034は、遺跡北東部、5I・6Iグリッドに位置する。SD035は、遺跡北東部、3I・3Jグリッドに位置する。北西端近くでSD036と繋がる。SD036は、3Iグリッドに位置する。

4 土坑（第213図）

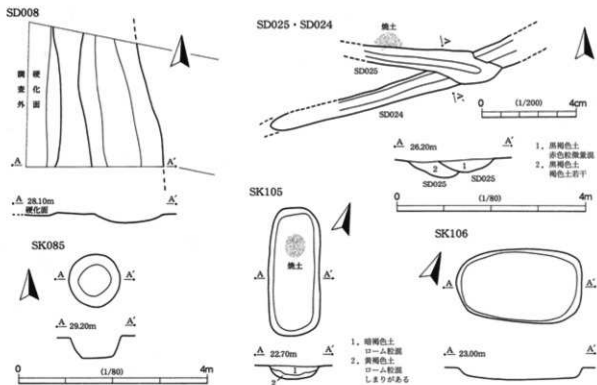
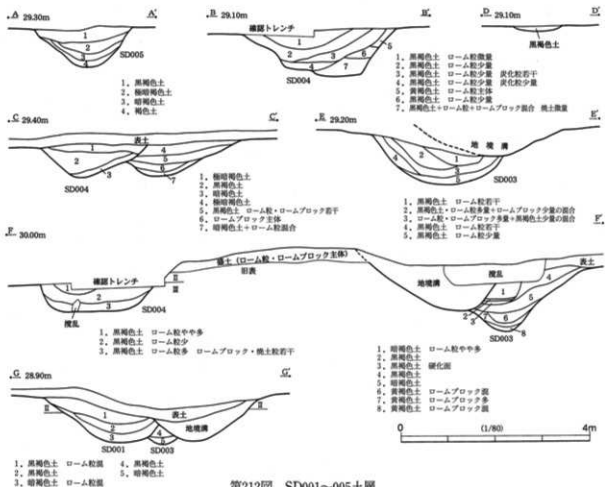
SK085は、遺跡中央部、11F・16Gグリッドに位置する。中世の第3地点内のピット群中に所在する。平面形は円形である。SK105は、遺跡北東部、5I・16・27グリッドに位置する。平面形は隅丸な長方形で、主軸方向はN-23°-Wである。SK106は、遺跡北東部、5I・05・06グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、主軸方向はN-61°-Eである。



第210図 SD001・002土層（確認トレンチ土層）



第211图 SD001~005



第213図 その他 中・近世遺構

第4節 出土遺物

中・近世の遺物は、輸入磁器、陶器、カワラケ、金属製品、石製品、土製品および銭貨が出土している。出土遺物は、挿図の遺物番号下に記載した。

1. 輸入磁器（第214図、第47表、図版43）

1・2は、青磁である。中国（宋代）の龍泉窯産の蓮弁文碗である。体部外面に蓮弁文が彫刻されている。1は胎土が灰色で、緑灰色釉が施される。2は、胎土が灰白色で、明緑灰色釉が施される。

2. 陶器・カワラケ（第214～217図、第47・48表、図版43～45）

陶器は国産品で、瀬戸、常滑、および渥美産である。

3～6は、古瀬戸の折縁深皿である。口縁部がほぼ水平に開き、端部が折り返される。3・4は折返し部に丸味があり、形状、釉薬の状態から、同一個体と考えられる。底部は平底で、体部はやや深く、盤状である。口縁部から体部中位の内外面に胎土と同色の灰黄色釉が施され、焼成の関係と思われるが、全体的に濁り、剝離が激しい。5は口縁の折返しが明瞭で、口縁部内面に段がみられる。釉も透明感がある。6は底部である。回転糸切り痕があり、内面全体に灰オリブ色の灰釉が施される。底径は3に比べてやや小さい。

7は古瀬戸灰釉平碗である。体部は下部はゆるやかに内湾して開くが、上部は直線的で、口縁はやや尖っている。内面全体および外面上半部に灰黄色灰釉が施される。器面全体が荒れているので、二次的焼成の可能性はある。

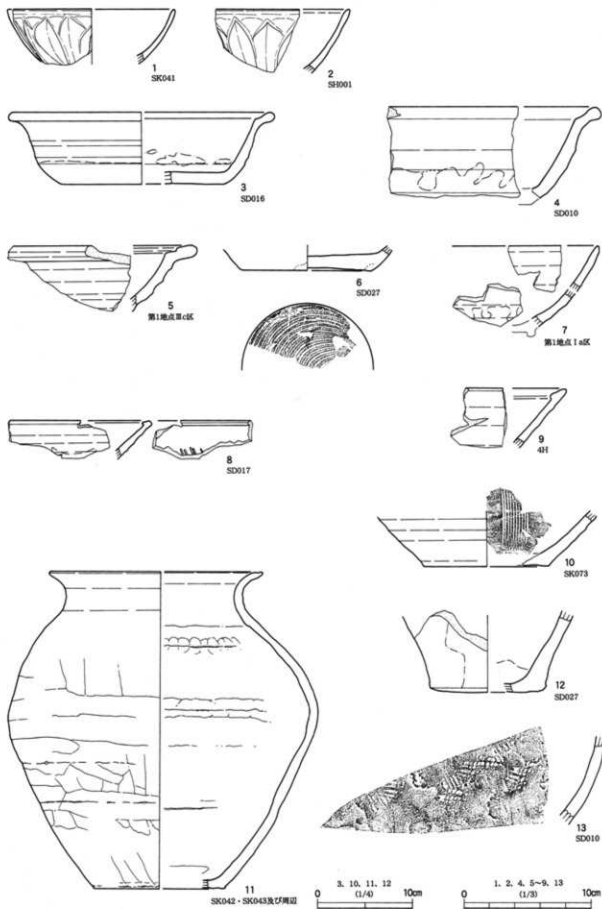
8は古瀬戸灰釉卮皿である。口縁が折り返され、内外面にオリブ灰色の灰釉が施される。体部内面中位以下におろし目が施される。

9・10は瀬戸・美濃の擗鉢である。9は口縁部が折り返され、内外面にぶい赤褐色錆釉が施される。10は櫛歯状工具で擗り目が施され、内外面に暗赤褐色錆釉が施される。底部に回転糸切り痕がある。

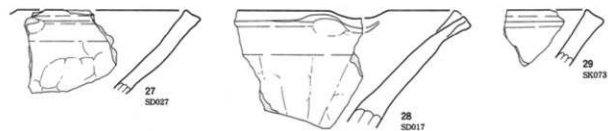
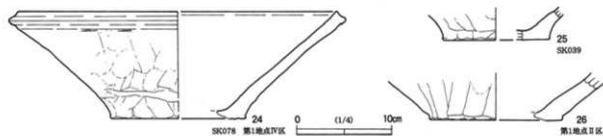
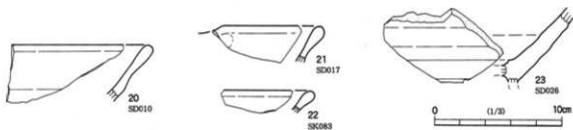
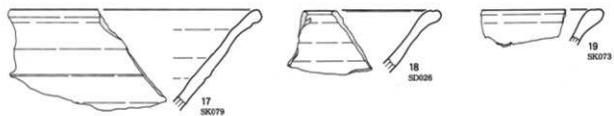
11～13は常滑の甕である。11はやや小型である。底部は径が頸部とほぼ同じで安定感がある。胴部は中位やや上部が強く張り出し、肩部を形成する。肩部から上に自然灰釉がみられる。頸部は短く直立し、口縁部が短く、また、強く外反する。口縁はつまみ出されたように小さく突出し、内側に窪み状の段を持つ。また、肩部以下の胴部に磨耗がみられ、長期間の使用が推定される。粘土紐の接合痕が明瞭で、粘土紐巻き上げの成形が確認できる。表面全体にナデ調整が施される。色調は黄褐色である。接合個体で、土坑SK042・043などから焼けた人骨片、炭化物とともに出土しているので、火葬骨の骨蔵器である。12は底部で、やや小型である。暗オリブ色の自然灰釉がみられる。13は胴部片である。格子状の押印帯が施される。

14～31は常滑の捏鉢である。14は全体の形がわかるものである。断面逆三角形の高台を持ち、体部は外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾する。口縁は鋭く外反し、丸味がある。口を有する片口鉢と考えられるが、口部は出土していない。色調は灰色で、内面底部付近が、使用で磨耗している。15～23は14と同型の捏鉢で、片口鉢と考えられる。

24は全体の形がわかるものである。底部は無高台で、底部から体部は、甕胴下部と同じ成形である。体部は外反して立ち上がり、直線的に口縁に至る。口縁は押しナデされたような平坦面を持つ。24は口縁の外側端部がつまみ出されたように突出し、平坦面に窪み状の段を持つ。口を有する片口鉢と考えられるが、



第214図 中世陶磁器(1)



第215图 中世陶磁器(2)

口部は出土していない。色調は暗褐色で、内面底部付近が、使用で磨耗している。25～31は24と同型の捏鉢で、片口鉢と考えられる。特に、28は片口部であり、口縁を指で外側に押し下げたような口部の形状が明瞭である。また、この型には、3か所に口部を設けたものがあるが、遺跡では確認できなかった。

32～59は常滑の壺片である。口唇部および破断面部分に人為的な磨耗があり、砥石的な用途に転用されたと考えられる。

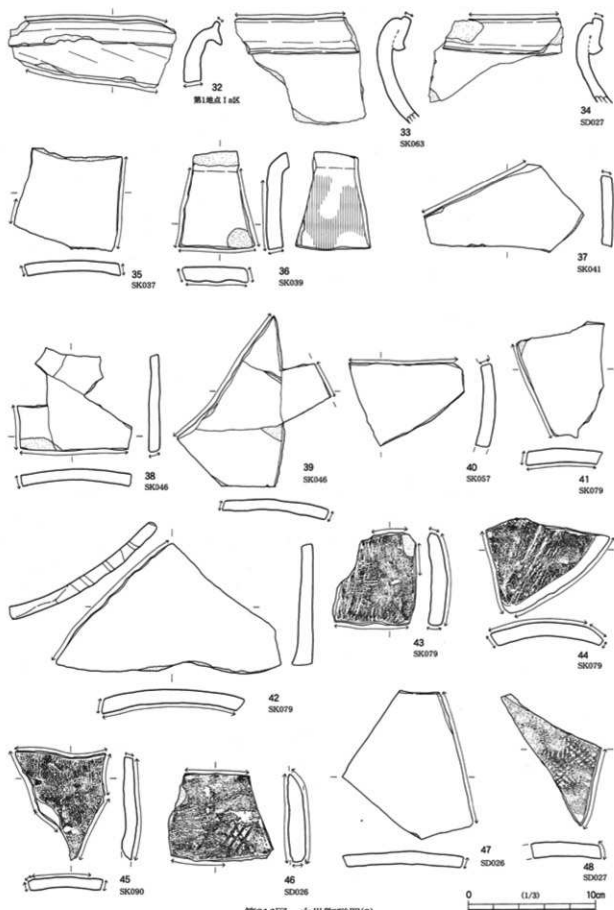
32～34は口縁部片である。32は縁帯が発達し、断面が「—」形である。口唇部および対面の破断面が磨耗している。33・34はさらに縁帯の幅が広くなり、口縁部上端に密着している。両者とも口唇部が磨耗している。

35は胴部片である。ほぼ正方形で、縦方向二辺の破断面に磨耗がある。36は肩部片である。台形状で、縦方向二辺および横方向下辺の3か所の破断面に磨耗があり、内側器面全体も磨耗している。

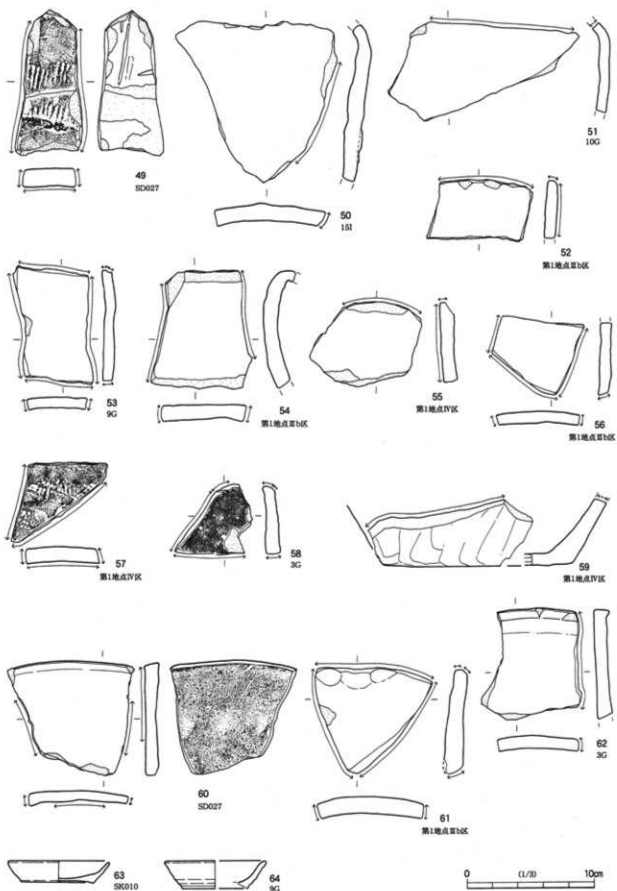
37～39は胴部片である。37は変形五角形で、最も長い破断面が磨耗している。38・39は接合破片である。38は四角形と考えられ、縦方向右辺および横方向下辺の破断面が磨耗している。39は三角形と考えられ、左右両辺の破断面が磨耗している。40は肩部片である。逆三角形で、上辺の破断面が磨耗している。外面に格子状押印帯がある。41・42は底部付近である。逆三角形で左辺の破断面および内面上半部が磨耗している。42は三角形で、左辺の破断面および内面過半部が磨耗している。43は胴部中位で、台形状である。上辺、下辺および右辺上半部の破断面が磨耗している。44は底部付近である。逆三角形で、左辺、右辺の破断面および内面が磨耗し、外面に擦痕がある。45は胴部中位で、逆三角形である。三辺の破断面および外面が磨耗している。46は肩部である。台形で、上下辺の破断面および内外面が磨耗している。特に、上辺は外面部まで幅広く磨耗する。外面に斜格子状の押印帯がある。47は肩部で、自然灰軸が付着する。変形五角形で、右辺の破断面が磨耗している。48は肩部である。逆三角形で、右辺の破断面が磨耗している。外面に格子状押印帯がある。49は肩部である。縦長台形で、左辺、右辺の破断面、外面上部および内面下部が磨耗している。外面に押印がある。50は肩部で、外面に自然灰軸が付着する。逆三角形で、右辺の破断面が磨耗している。51は肩部で、外面上半部に自然灰軸が付着する。逆三角形で、上辺の破断面が磨耗している。53は胴部中位である。縦長四角形で、四辺の破断面が磨耗している。54は頸部である。縦長四角形で、左辺、右辺の破断面が磨耗している。55は底部付近である。変形五角形で、上辺の破断面および内面全体が磨耗している。59は底部片である。上辺の破断面が磨耗している。

60～62は常滑捏鉢の口縁部片である。口唇部および破断面部分に人為的な磨耗があり、砥石的な用途に転用されたと考えられる。60は逆台形で、左辺、右辺の破断面が磨耗し、内外面に擦痕がある。61は注口部がある。逆三角形で、三辺の破断面が磨耗している。62は縦長四角形で、右辺の破断面が磨耗している。

63・64はカワラケである。63は小型皿で、ロクロ成形、無高台である。体部の広がり小さい。器面全体が磨耗している。64は環形である。ロクロ成形で、断面逆三角形の小さな高台を持つ。63に比べて、丁寧な成形で、胎土が精選されている。



第216图 中世陶磁器(3)



第217图 中世陶磁器(4)

第47表 中世陶磁器観察表(1)

() 焼成度 [] 残存数

図	番号	器種 用途	出土位置	遺物番号	遺物 形状 (%)	計測値 (cm)	調整	色調	粘土	編年	時期	備考
214	1	青磁 輪郭盆	SK041	111-21	口縁部 20 底径 [4.41]	口径 11.31 底径 17.6 体高 [4.41]	底面 内面 外面 底面 内面 外面	遺赤文 輪一緑灰色	赤・灰白色	輪郭盆 1-5号型	13世紀中葉	
214	2	青磁 輪郭盆	SK001	51001-1	口縁部 20 底径 [4.41]	口径 11.31 底径 17.6 体高 [4.41]	底面 内面 外面 底面 内面 外面	遺赤文 輪一緑灰色	赤・灰白色	輪郭盆 1-5号型	13世紀中葉	
214	3	青磁 古瀬戸 盆	SD018	12H-95	25 口縁部 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰緑(新緑染し い) 灰黄色	古瀬戸中1期	13世紀末～ 14世紀初	3・4期一貫性(注 文はしない) 約50 %覆れている地点
214	4	青磁 古瀬戸 盆	SD010	13G-150	18 口縁部 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色～黄褐色	古瀬戸中1期	13世紀末～ 14世紀初	
214	5	青磁 古瀬戸 盆	第1地点 第1区	10H-25	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色	古瀬戸後1期	14世紀後半	10H26グリップ
214	6	青磁 古瀬戸 盆	SD027	9H-23・24	底面片 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色 オレンジ	古瀬戸	14世紀後半	底面の刺繍模
214	7	平瀬 古瀬戸 盆	第1地点 1区	12H-48・51	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色 灰褐色	古瀬戸後1期か	14世紀後半	二次焼成が認められ る
214	8	瀬戸 古瀬戸 盆	SD017	111-98・101	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色 オレンジ	古瀬戸 後継一存品か	15世紀前半	内面におし目
214	9	瀬戸 古瀬戸 盆	4Hグリップ	4H-02	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	緑褐色 赤褐色	大塚塚跡日輪 5号型	16世紀中葉	
214	10	瀬戸 古瀬戸 盆	SK073	111-252・25 7	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	緑褐色 赤褐色	大塚塚跡 16世紀	遺品(16世紀) 底面外周土刺繍模	
214	11	赤 家漆	SK042 SK043 矢野町	111-117・21- 22・27・31-33-43- 45 54-55-58-60-63- 65-68-70-71-72- 77-110-112-114- 116-117-118	70 口縁部 底径 [13.3]	口径 122.3 底径 113.0 体高 133.3	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	自然釉(口縁部～ 縁部) 緑褐色(裏し い) 黄褐色	石瓦・長石 2型式～3型式	12世紀後半	
214	12	赤 家漆	SD027	9H-27	底面片 20 底径 [7.5]	口径 12.0 底径 11.8 体高 [13.3]	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	自然釉(オレンジ 色)	石瓦・長石		
214	13	赤 家漆	SD010	13G-144・14 5	底面片 20 底径 [7.5]	口径 12.0 底径 11.8 体高 [13.3]	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	自然釉(オレンジ 色)	石瓦・長石		
214	14	青磁 家漆	第1地点 第1区	10I-24 111-229	25 口縁部 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	黄灰色	片口鉢1期 5型式	13世紀前半 ～中葉	
214	15	青磁 家漆	第1地点 第1区	10H-23・24・ 26・27	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色	片口鉢1期 4型式か	12世紀末～ 13世紀初め	
214	16	青磁 家漆	SK039	12I-47・48	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰色	片口鉢1期		
214	17	青磁 家漆	SK079	12I-33	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色	石瓦・長石 片口鉢1期 5型式	13世紀前半 ～中葉	
214	18	青磁 家漆	SD026	10H-45	底面片 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰白色	石瓦・長石 片口鉢1期		
214	19	青磁 家漆	SK073	10I-35・38 111-225	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	黄灰色	石瓦・長石 片口鉢1期 5型式	13世紀前半 ～中葉	
214	20	青磁 家漆	SD010	13G-90	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	片口鉢1期 5型式 5型式-6号 式	13世紀中葉	
214	21	青磁 家漆	SD017	12I-31	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	自然釉(口縁部) 灰色	石瓦・長石 片口鉢1期 5型式	13世紀前半 ～中葉	
214	22	青磁 家漆	SK083	9I-10	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	黄灰色	石瓦・長石 片口鉢1期 5型式-6号 式	13世紀中葉	
214	23	青磁 家漆	SD026	10H-45	底面片 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰白色	石瓦・長石 片口鉢1期		内面に黄褐色の自然 釉
214	24	青磁 家漆	SK078 第1地点第1区	10H-6・7・8・ 9-19	30 口縁部 底径 [11.8]	口径 133.0 底径 14.0 体高 11.7	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪 7型式-8号 式	14世紀初	SK078内と10H 6からとが結合
214	25	青磁 家漆	SK039	12I-49	底面片 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪		
214	26	青磁 家漆	第1地点 第1区	11I-206	底面片 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪		
214	27	青磁 家漆	SD027	10H-78	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	灰黄色	片口鉢日輪 7型式-8号 式	14世紀代	
214	28	青磁 家漆	SD017	11I-96	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪 9型式	15世紀前半	
214	29	青磁 家漆	SK073	11I-258	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪 7型式-8号 式	14世紀代	
214	30	青磁 家漆	SD017 SK058	11I-95 10H-37	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪		
214	31	青磁 家漆	第1地点 第1区	11H-104	底面片 20 底径 [7.5]	口径 26.8 底径 17.6 体高 7.5	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	暗褐色	石瓦・長石 片口鉢日輪		
214	32	赤 家漆	第1地点 1区	11I-71	口縁部 20 底径 [7.5]	口径 142.9 底径 14.0 体高 [7.5]	底面 内面 外面 底面 内面 外面	底面 内面 外面 底面 内面 外面	自然釉(口縁内 部) 暗褐色	石瓦・長石 6号型式	13世紀後半	輪郭盆(注 文参照)

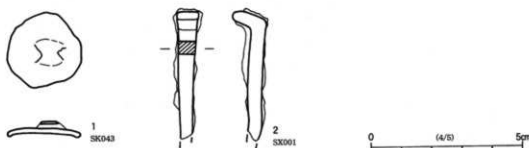
第48表 中世陶磁器観察表(2)

() 検定値 [] 検存数

図番号	発掘 産地	出土位置	遺物番号	検定率 (%)	計測値 (mm)	調整	色調	胎土	編年	時期	備考	
216	23	塚 東溝	SK093	10H-38	口縁部 片 (g)	163.2	底面 体部 ナブ 折り返し口縁 内面 ナブ 磨擦圧痕	にぶい赤褐色	石灰・長石	B型式	14世紀後半	胎用磁石(口縁部研 磨) 34と同一体物
216	34	塚 東溝	SD027	9H-3・24	口縁部 片 (g)	111.8	底面 体部 ナブ 折り返し口縁 内面 ナブ 磨擦圧痕	にぶい赤褐色 口縁部褐色	石灰・長石	B型式	14世紀後半	胎用磁石(口縁部研 磨) 33と同一体物
216	35	塚 東溝	SK037	12I-37	胴部片 片 (g)	94.9	底面 体部 ナブ 磨擦圧痕	灰青褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	36	塚 東溝	SK039	12I-46	胴部片 片 (g)	86.4	底面 体部 ナブ 磨擦圧痕	暗灰黄褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨・内面研削)
216	37	塚 東溝	SK041	11I-79	胴部片 片 (g)	85.3	底面 体部 ナブ 内面 ナブ 磨擦圧痕	にぶい黄褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	38	塚 東溝	SK048	11H-128	胴部片 片 (g)	70.1	底面 体部 ナブ 内面 ナブ 磨擦圧痕	褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	39	塚 東溝	SK048	11H-127	胴部片 片 (g)	128.7	底面 体部 ナブ 内面 ナブ 磨擦圧痕	暗赤褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	40	塚 東溝	SK057	10H-36	胴部片 片 (g)	85.8	底面 体部 格子状押印 内面 ナブ	褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨・外面研削)
216	41	塚 東溝	SK079	10I-27 (一組)	胴部片 片 (g)	75.6	底面 体部 ナブ 内面 ナブ 磨擦圧痕	黄褐色	長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	42	塚 東溝	SK079	10I-27 (一組)	胴部片 片 (g)	242.8	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	黄褐色				胎用磁石(胴部研 磨・内面研削)
216	43	塚 東溝	SK079	10I-30	胴部片 片 (g)	87.7	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	暗褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨・外面研削)
216	44	塚 東溝	SK079	10I-27 (一組)	胴部片 片 (g)	87.8	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	黄褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨・内面研削)
216	45	塚 東溝	SK090	SK090-1	胴部片 片 (g)	56.3	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	暗赤褐色	長石			胎用磁石(胴部研 磨・外面研削)
216	46	塚 東溝	SD028	10H-47	胴部片 片 (g)	88.4	底面 体部 格子状押印 内面 ナブ 磨擦圧痕	褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	47	塚 東溝	SD026	10H-42	胴部片 片 (g)	139.3	底面 体部 ナブ 内面 ナブ 磨擦圧痕	自然釉(内面) 灰オリーブ色	長石			胎用磁石(胴部研 磨)
216	48	塚 東溝	SD027	10H-82	胴部片 片 (g)	60.9	底面 体部 格子状押印 内面 ナブ 磨擦圧痕	灰色	長石			胎用磁石(胴部研 磨・外面研削)
216	49	塚 東溝	SD027	10H-78・79	胴部片 片 (g)	107.1	底面 体部 押印 内面 ナブ 磨擦圧痕	灰色	長石			胎用磁石(胴部研 磨・内面研削)
217	50	塚 東溝	18Iグリップ	15I-14	胴部片 片 (g)	254.5	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	自然釉(内面) 暗オリーブ色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	51	塚 東溝	10Gグリップ	10G-2	胴部片 片 (g)	118.4	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	褐色、暗灰色	長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	52	塚 東溝	第1地点 掘り区	11H-113	胴部片 片 (g)	75.4	底面 体部 ナブ 内面 ナブ ヘラナブ 磨擦圧痕	褐色	長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	53	塚 東溝	9Gグリップ	9G32-2	胴部片 片 (g)	136.7	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	灰オリーブ色	長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	54	塚 東溝	第1地点 掘り区	10H-13	胴部片 片 (g)	88.6	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	黄褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	55	塚 東溝	第1地点 掘り区	10I-21	胴部片 片 (g)	54.3	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	灰色	長石			胎用磁石(胴部研 磨・外面研削)
217	56	塚 東溝	第1地点 掘り区	11H-111	胴部片 片 (g)	54.1	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	灰色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	57	塚 東溝	第1地点 掘り区	10I-11	胴部片 片 (g)	58.1	底面 体部 格子状押印 内面 ナブ	灰色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨・内面研削)
217	58	塚 東溝	3Gグリップ	3G78-1	胴部片 片 (g)	40.4	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	灰オリーブ色				胎用磁石(胴部研 磨・外面研削)
217	59	塚 東溝	第1地点 掘り区	10I-11	胴部片 片 (g)	185.7	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	自然釉(内面) にぶい赤褐色	石灰・長石			胎用磁石(胴部研 磨)
217	60	塚 東溝	SD027	10H-51	口縁部 片 (g)	127.4	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	暗赤褐色	石灰・長石	片口縁部 B型式	14世紀後半	胎用磁石(胴部研 磨)
217	61	塚 東溝	第1地点 掘り区	11H-110	口縁部 片 (g)	118.4	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	褐色	石灰・長石	片口縁部 B型式		胎用磁石(胴部研 磨・内面研削)
217	62	塚 東溝	3Gグリップ	3G97-1 S1002-1	口縁部 片 (g)	118.9	底面 体部 ナブ 内面 ナブ	暗褐色	石灰・長石	片口縁部 B型式	15世紀前半	胎用磁石(胴部研 磨)
217	63	カワラケ	SK010	12G-523	口縁部 片 (g)	7.8 5.7 1.7	底面 体部 凹凸点部ナ ボコリ成削 内面 ナブ	黄褐色	石灰・長石			磨面は磨き合い、 少し
217	64	カワラケ	9Gグリップ	9G-5	口縁部 片 (g)	3.0 2.2	底面 体部 ボコリ成削 内面 ナブ	にぶい黄褐色	石灰・長石・ 雲母			

3 金属製品 (第218図、図版46)

1は円板状の銅製品である。全体に緑青が顕著である。中央に環状金具を通したと思われる、鋸状の孔を持つ。2は鉄釘である。断面四角形で、太い方の端部が曲がり、頭部になる。



第218図 金属製品

4 石製品 (第219・220図、第49表、図版45・46)

1～14は砥石である。原形は方柱形および厚みのある短冊形である。使用により、断面が「凸」字形および「凹」字形になる。

1・2・7・8は「凸」字形で、10・12は小片であるが、「凸」字形と考えられる。7・8には側面および下面に櫛歯状工具痕があるが、砥石成型時の切断痕と思われる。

以上のほかの砥石(3～6、9、11、13・14)は「凹」字形である。12・13には側面に櫛歯状工具痕がある。

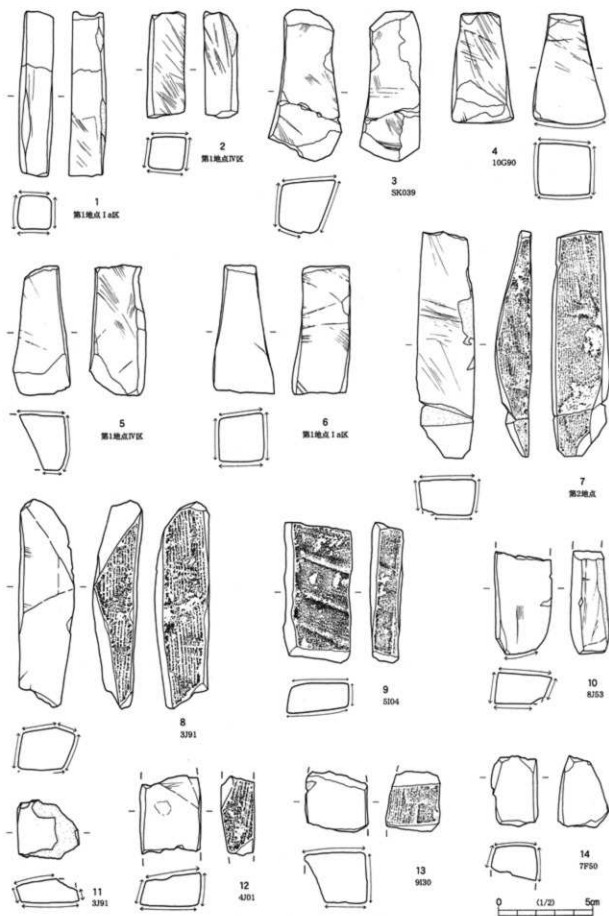
石材はすべて流紋岩質凝灰岩と考えられる。

15～20は石塔片と思われる。15～19は曲面がある破片が多く、細かい細工が観察されないので、すべて五輪塔と考えられる。石材は安山岩と考えられる。

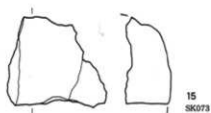
20は大形の石塔片である。平面状の加工が観察され、石塔の基部と考えられる。裏面にハチの巣状の自然面が残る。石材は、砂岩質で非常に柔らかいので、いわゆる房州石と思われる。

第49表 中・近世石製品

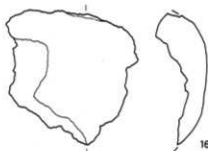
図	No.	製品名	遺構・グリフ	遺物番号	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
219	1	砥石	第1地点1a区	12H-90-93	流紋岩質凝灰岩	8.7	1.8	1.9	48.7	SX001
219	2	砥石	第1地点IV区	111-2226	流紋岩質凝灰岩	5.6	1.9	1.8	31.5	SA003の櫛歯
219	3	砥石	SK039	121-43-44	流紋岩質凝灰岩	8.0	3.9	3.2	101.6	第1地点1a区内
219	4	砥石		10G90	流紋岩質凝灰岩	5.8	3.8	3.8	96.6	
219	5	砥石	第1地点IV区	111-236	流紋岩質凝灰岩	6.9	3.0	3.2	61.9	SA003の櫛歯 被蝕
219	6	砥石	第1地点1a区	121-26	流紋岩質凝灰岩	6.8	3.3	2.9	96.5	被蝕
219	7	砥石	第2地点	12G-445	流紋岩質凝灰岩	12.0	3.0	1.9	83.7	側面山形 櫛歯状工具痕
219	8	砥石	3J91	3J91-3	流紋岩質凝灰岩	10.0	2.9	2.3	84.7	側面山形 櫛歯状工具痕
219	9	砥石	5104	5104-1	流紋岩質凝灰岩	7.3	3.6	1.6	70.9	外面褐色に着色 櫛歯状工具痕
219	10	砥石	8G53	8G53-1	流紋岩質凝灰岩	5.4	3.0	1.8	43.9	
219	11	砥石	3J91	3J91-2	流紋岩質凝灰岩	2.9	3.2	1.3	14.1	
219	12	砥石	4J01	4J01-2	流紋岩質凝灰岩	4.2	3.2	1.8	33.5	櫛歯状工具痕
219	13	砥石	9130	91-2	流紋岩質凝灰岩	3.2	3.3	2.8	38.2	外面褐色に着色 櫛歯状工具痕
219	14	砥石	7F50	7F-3	流紋岩質凝灰岩	3.6	2.4	2.5	27.5	
220	15	石塔片か	SK073	101-35	安山岩				590.4	球状に加工 五輪塔片か
220	16	石塔片か	SK043	111-105	安山岩				800.0	球状に加工 五輪塔片か 被蝕 スス付着
220	17	石塔片か	SK079	101-29	安山岩				543.9	球状に加工 五輪塔片か
220	18	石塔片か	第1地点IIIb区	10H-14	安山岩				480.0	球状に加工 五輪塔片か 被蝕
220	19	石塔片か	第1地点IV区	111-233	安山岩				220.7	角柱状に加工 五輪塔片か 被蝕
220	20	石塔片か	SK061	10H-89	房州石				17,206.0	一部角柱状に加工 自然面残す



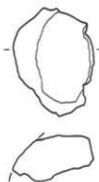
第219图 中·近世石製品(1)



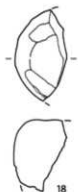
15
SK073



16
SK043



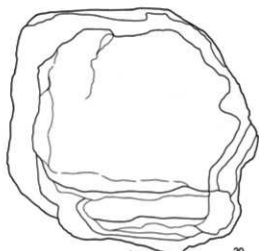
17
SK079



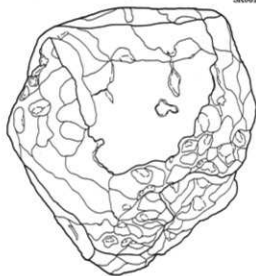
18
第1地点第1区



19
第1地点IV区



20
SK061

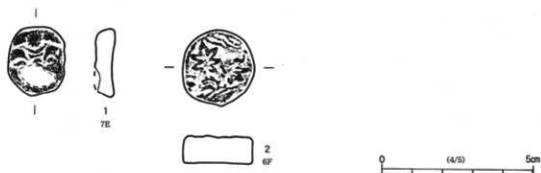


第220図 中・近世石製品(2)

0 1/40 10cm

5 土製品 (第221図、図版46)

1・2は泥面子である。1は人面である。2にはカエド文様が施される。



第221図 土製品

6 銭貨 (第222図、第50表、図版46)

1～3は寛永通寶である。すべて新寛永で、1・2は裏面に波文様(11波)が施される。



第222図 銭貨

第50表 銭貨計測表

図	番号	銭貨名	遺構 クラット	遺物番号	計測値							書体	出土状況	備考
					W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)			
222	1	寛永通寶	4G24	0003a	4.02	28.5	21.4	8.0	6.5	1.18	0.74	楷書	グリッド一括	11波
222	2	寛永通寶	4G24	0003b	3.97	28.1	21.3	7.9	6.3	1.21	0.88	楷書	グリッド一括	11波
222	3	寛永通寶	SA002	0001	2.45	22.9	17.7	7.3	5.9	1.12	0.69	楷書	盛土中	背元

*計測値 W=重量, G=外縁外径, N=外縁内径, g=内郭外径, n=内郭内径, T=外縁厚, t=文字面厚

7 まとめ

以上が主な出土遺物である。陶磁器は、基地に付随するものと、生活に密着するものに分類される。特に、第214図11の常滑甕は火葬骨の骨蔵器として明らかである。また、青磁碗は副葬品として埋納されることが多く、基地に付属すると考えられる。ほかの陶磁器は第51表のとおりであるが、古瀬戸の深皿、平碗、卸皿および播鉢は、副葬品の可能性も考えられるが、生活用品として使用後に、廃棄された可能性が大きいと考えられる。常滑の甕、片口鉢も古瀬戸と同様である。特に、おもに甕片を使用した転用砥石については、生活用品として使用後の廃棄と考えられる。カワラケについては副葬品の可能性が大きい。

時期としては、12世紀後半の火葬骨蔵器の常滑甕から、16世紀代の瀬戸・美濃大窯期の播鉢までの、中世全体にわたっている。また、出土位置については、第52表から10H・10I、11H・11I、12H・12Iの大グリッドに集中していることが明瞭である。これら的大グリッド西側には中世掘立柱建物跡SB001・002が所在するので、生活用品としての陶器の由来も明らかである。

以上のことから、源七山遺跡の中世遺構は、基地を含めた、中世の生活景観の一例を提示するものと考えられる。

第51表 陶磁器分類表 (遺構)

遺構	中 世								中近世			
	貿易陶磁	瀬戸・美濃				常滑			土器	石製品		金属製品
	青磁碗	灰釉深皿	灰釉平碗	灰釉卸皿	鉄釉播鉢	片口鉢I類	片口鉢II類	甕	カワラケ	砥石	石塔片?	
SD007						1		2				
SD010		1				1		2				
SD016		1										
SD017				2		1	2	2				
SD026						2		4(2)				
SD027		2						3(1) 8(4)			2	
SD028								2				
SK010									1			
SK037							1	1(1)				
SK039						2	3	2(1)		2		
SK041A		1				1		4				
SK041B	1						1	3(1)				
SK042								7				
SK043								12			8	銅製品1
SK046								2(2)				
SK057~SK060								1 4(1)				
SK061											1	
SK063								2(1)				
SK065								1				
SK073		2			1	3	3	15(1)			2	
SK078								4 1				
SK079						2		8(3)			1	
SK083						1						
SK088								1				
SK090								1(1)				
SH001	1											

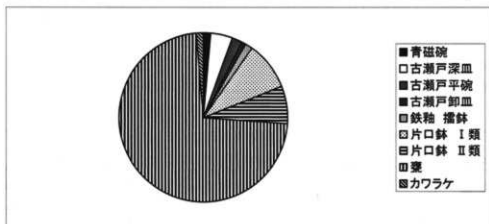
* ()内の数字は、砥石に転用されている個数。

第52表 陶磁器分類表（グリッド）

グリッド	中世										中近世			近世
	貿易陶磁	瀬戸・美濃			鉄軸 擂鉢	片口鉢 Ⅰ類	常滑 片口鉢 Ⅱ類	大甕	カワラケ	石製品	金銀製品			
	青磁碗	古瀬戸 深皿	古瀬戸 平碗	古瀬戸 卸皿						砥石	石塔 片?			
3G							2(1)	1(1)			1			
3J											2			
4G													寛永通宝2	
4H	1	1			2				1					
4I									1					
4J											1			
5I											1			
6F													泥面子1	
6G													寛永通宝1	
7D														
7E													泥面子1	
7F											1			
8G				1										
8I									1					
8J									1					
9F									2(1)					
9G									1(1)					
9H			2						5(1)					
9I							1				1			
10F									1				陶磁器1	
10G	1								1(1)		1			
10H		1	1			9	5(1)	63(5)				4		
10I		1				4	5	27(7)				5		
11G									1					
11H							3(1)	17(7)						
11I	1	4		2	2	10	5	65(2)	2	2	12	鉄釘1 銅製品1		
12G		2				1	1	1	1	1				
12H	1	1	4					12			1			
12I						2	1	13(2)		3	3		陶磁器1	
13G		1				1			3					
15G									1					
15I									1(1)					
計	4	13	6	2	4	28	22(3)	219(29)	4	15	24	2	7	

* ()内の数字は、砥石に転用されている個数。

青磁碗	古瀬戸 深皿	古瀬戸 平碗	古瀬戸 卸皿	鉄軸 擂鉢	片口鉢 Ⅰ類	片口鉢 Ⅱ類	甕	カワラケ	計
4	13	6	2	4	28	22	219	4	302
2.0%	6.6%	2.9%	1.1%	1.7%	15.4%	6.3%	63.1%	0.9%	100.0%



第5節 坪井・習志野台境野馬土手 (SA001)

1 現況と調査方法 (第223図、図版20)

調査区の南部(東葉高速鉄道の南側)、日本大学理工学部(以下日大とする)の敷地との境界沿いに馬土手が所在している。源七山遺跡側の字名が坪井、日大側の字名が習志野台となることから本土手の名称となっている⁽¹⁾。

馬土手は、比高差約0.5m～1m、裾幅約2.5m～3m、長さ330mである。馬土手は北端から南端までをS字状に屈曲しながら延びている。南端は、斜面下の低地(水田面)の際まで認められた。台地平坦面と低地との比高差は14mを測る。土手の頂部には、改変や工作物は見られず、樹木・篠竹・雑草が茂っていた。土手の東側は、近年「船橋日大前駅」までのアクセスのための暫定的な歩道(無舗装)が整備され、裾近くまで盛土や削平による整地が見られる箇所もあるが、比較的良好に当時の地形が残されていた。土手の西側には裾に沿って溝状の窪みが見られた。この窪みの中央部が敷地の境界(調査区と日大)となっており、フェンスが張られていた。フェンスより西側の日大側は削平や盛土が行われて地形が大きく改変され、ほとんど当時の地形が残されていない。

馬土手の形態は、現状で見る限り「一重土手」で、西側に溝(堀)を伴うものとして捉えられた。しかし、南端斜面部の日大側にも一部土手が認められる(トレンチ1参照)ことから、「二重土手」の可能性も指摘されていた⁽²⁾。

調査は、まず調査前の現況写真を撮影した(図版20)。地形測量は、業者に委託して土手を中心に両側約15mの範囲で0.2mコンタで実施した(第223図)。発掘区は、土手に直交するトレンチをおよそ20m～25m間隔で任意に14か所設定し、南側からトレンチ1(T1)とした(第223図)。発掘調査は、トレンチ内を重機により約2m幅で掘削した。その後人力により精査を行い、土手の土層断面の記録と観察、馬土手の構築法の解明と土手に伴う溝(堀)の確認、土手下の遺構の確認を行った。

今回の調査ではどのトレンチからも遺物の出土は見られなかった。

なお、第223図の地形測量図は、整理時に調査の成果をもとに修正を加え旧地形(歩道整備以前)に復元した地形測量図である。このため、土手東側の歩道は図示されていない。

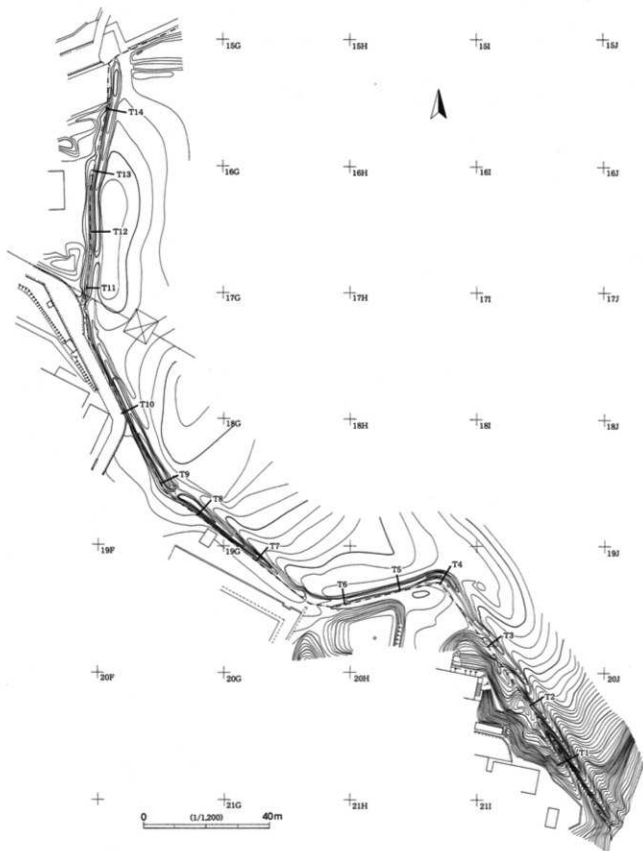
2 調査結果 (第223～227図、図版21・22)

今回の馬土手の測量及び発掘調査から考察される事項は次のとおりである。

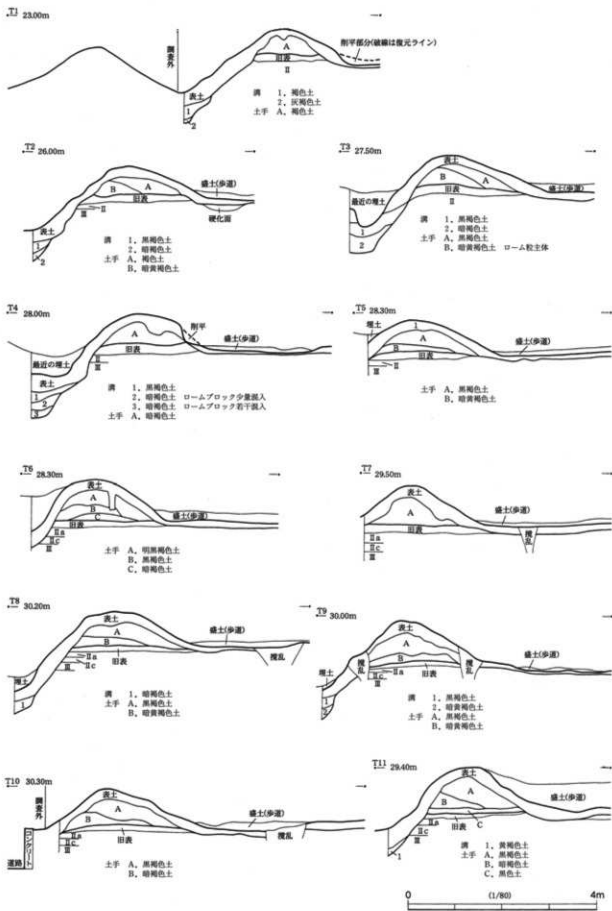
(1) 馬土手の構造と基本的工法

本土手の構造は、中心に溝(堀)を掘り、両側に土手を築くタイプの「二重土手」である。日大側が小土手、中心に溝(堀)、源七山遺跡側が大土手となり、両土手の端から端までの幅は7m～8mほどの馬土手になる。小土手と大土手の比高差は、斜面部のトレンチ1で0.3mを測る。しかし、日大側の小土手の大部分は消失しているため他の部分では不明である。青木更吉氏によると、本土手について「土手はどちらも同じくらいの高さであった。」と地元在住の人の話を紹介している。このことから、本土手は、小土手・大土手とも規模がほとんど同じくらいの土手であった可能性が高い⁽³⁾。

溝の中央部分に境界のフェンスが張られているため溝部は完掘出来なかったが、溝の深さは旧表土上面から約1.5m前後、幅は約2.5m前後と推定される。土手の頂部と溝の最深部との比高差は2.5mはあったと思われる。

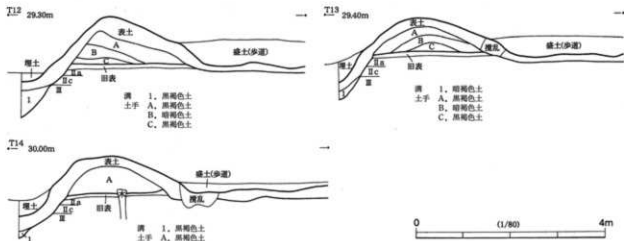


第223図 坪井・習志野台境野馬土手 (SA001)



第224図 坪井・習志野台境界野馬土手 (SA001) 土層(1)

土手は、溝を掘り上げた土で築かれている。源七山遺跡側の大土手は、2.5m前後の幅で、主としてII層の黒褐色土・暗褐色土やIII層のソフトローム土で盛土している。溝の掘削がハードロームのIX層中まで及んでいるが、大土手側の盛土にはロームブロックがあまり見られないことが特徴である。このことから、溝を掘削した土はまず大土手側に盛土をして土手を築き、その後溝をハードローム中まで掘り下げて日大側の小土手に積み上げていったものと考えられる。



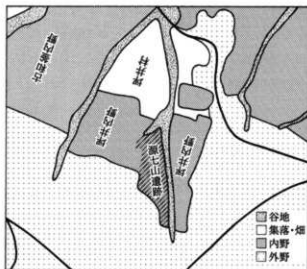
第225図 坪井・習志野台境野馬土手 (SA001) 土層(2)

(2) 土手の性格と時期

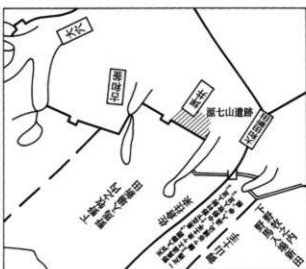
馬土手には、機能面から①村と牧の境に築かれる土手として、馬が牧から越えて村に侵入しないようにするための野馬除土手、②牧内に築かれる土手として、捕込の土手や捕込に追い込むための勢子土手、馬を保護するためのお囲い土手があげられる。構造面からは一重土手、二重土手や三重土手の複数土手に分けられる。①の野馬除土手は、牧から村への越馬を防ぐために堅固に作る必要があり、牧側に溝(堀)を有する一重土手や二重土手が一般的である。二重土手は、溝(堀)を挟んで牧側が小土手、村側が大土手となる。中には三重土手や四重土手も見られる箇所がある。②の牧内の土手は溝を有しない一重土手で充分であるとされている⁽⁴⁾。坪井・習志野台境野馬土手は二重土手で、牧と村との境に設けられた土手である。日大側が小土手、源七山遺跡側が大土手にあたる。

今回発掘調査した馬土手は、「小金牧の下野牧」の一部である。小金牧は、北は柏市から南は千葉市花見川区にまで南北に細長く延びている。そのうちの下野牧は、小金牧南部の牧で、北は現在の新京成線「鎌ヶ谷大仏」駅近くの下野谷と船橋市の市境から八千代市・習志野市・千葉市花見川区にかけて広がっている。

小金牧は残された記録から、徳川幕府によって慶長年間(1596年～1615年)に始まったとされている。小金牧は元来一つの牧が、上野牧・中野牧・下野牧の三牧に分かれたものである。その後小金三牧(上野牧・中野牧・下野牧)に加え、庄内牧(野田市)・高田台牧(柏市)・一本門牧(鎌ヶ谷市・白井市)・印西牧(印西市・白井市)を加え、小金七牧になった。江戸中期頃に一本門牧は中野牧に吸収され、庄内牧は新田開発によって消滅し、牧が廃止される明治2年まで小金五牧が存続していた⁽⁵⁾。このように小金牧の経営は江戸幕府によって約250年ほど行われていたが、牧の範囲は開始期と廃止期とでは大きく異にしているといえる。



第226図 小金牧周辺野絵図の一部（読み取り図）



第227図 小金牧絵図の一部（読み取り図）

坪井・習志野台境野馬土手の位置は、寛文12年（1672年）作成の「小金牧周辺野絵図」⁽⁶⁾（第226図）の外野（そとの）と内野（うちの）との境界に符合する。現在の日大側が外野、源七山遺跡側が内野にあたる。外野とは不特定の村の入会地である。これに対して内野は特定の村の入会地である。つまり、源七山遺跡側は、坪井村の占有の入会地となる。絵図には、外野に「野馬立場之原地」や「運上野」の記載がないことから寛文12年には日大側は不特定の村の入会地で、まだ牧ではなかったといわれている⁽⁷⁾。このことからこの時期には本土手がまだ構築されていないことになる。

江戸幕府は、延宝7年（1679年）に船橋市・八千代市・千葉市域に広がる外野を馬牧として利用し、はじめ、ここに下野牧が成立したといわれている。牧以外の外野は新田開発が行われ、各地に「〇〇新田」という名のつく開墾地が誕生しはじめてきた。ここで野馬が牧から逃げ出し内野や新田に入り込まないように野馬土手や野馬堀が構築されるようになってきた。本土手もこうした時期に作られたものであろう。特に本土手は内野との境界にあり、内野へ野馬が入り込まないように（野馬不入）にするために二重土手が築かれていったものといえる。享保7年（1722年）に野馬方代官小宮山左進によって作成された小金牧の実測図⁽⁸⁾や小金牧絵図⁽⁹⁾（第227図）からも本土手の位置を読み取ることができる。このようにして、本土手は牧が廃止されるまで普請を繰り返し維持されてきたものと思われる。

注1 船橋市史編さん委員会事務局 1989「船橋市域の近世牧遺構について」船橋市史研究4

2 注1と同じ

3 青木更吉 2001『小金牧 野馬土手は泣いている』審書房

4 注2と同じ

5 青木更吉 2003『小金牧を歩く』審書房

6 元奉行綿貫家旧蔵 千葉県文書館蔵（収蔵名「小金佐倉両牧大絵図」）

7 天下井 恵 1999「船橋市内の中世の牧」『馬と船橋』船橋市郷土資料館

8 松下邦夫氏は、享保期の小金牧図をもとに享保期小金牧復元図を作成している。

松下邦夫 1984『房総の牧』第2号 付図

9 小金牧土三橋家旧蔵 鎌ヶ谷市郷土資料館蔵 制作年代不詳

参照文献 松戸市立博物館 1994『馬と牧』

第6章 結語

源七山遺跡からは、旧石器時代から近世に至るまでの遺構と遺物が出土した。

本章においては、各時代の発掘成果の概要を記載して結語とする。各時代のまとめについては、各章の最後にそれぞれ、項目を設定し記載したので参照していただきたい。

旧石器時代 29か所のブロックが検出され、ブロック出土の石器総点数は、1,469点である。文化層は6枚に分離できた。第2文化層と第4文化層が質量ともに充実している。

第1文化層は、Ⅷ層～Ⅸa層に生活面を持つと考えられる石器群で、3か所のブロックが検出された。ガラス質黒色安山岩が多用され、台形楕石器・削器・楔形石器が作成されているが、製品の点数が少ない。

第2文化層は、Ⅵ層～Ⅶ層に生活面を持つと考えられる石器群で、6か所のブロックが検出された。石材は、信州産と思われる黒曜石と珪質頁岩でほぼ占められる。石刃を素材としたナイフ形石器が主体を占め、石刃を素材とした削器や掻器が組成に加わる。また、大型の石刃を素材として、刃部再生および小型石刃を剝離する下総型石刃再生技法による石器群があることが、本文化層の特徴といえよう。

第3文化層は、Ⅴ層に生活面を持つと思われる石器群で、1か所のブロックが検出された。第4文化層の石器群の内容と類似する点があるが、出土層位がやや下位にあることから分離した。多量の石材が用いられている。チョコレート色の良質の珪質頁岩を用いた大型横長削片素材のナイフ形石器が1点出土しており、原石産地近辺で製作されたナイフ形石器が素材として持ち込まれたものと推定される。

第4文化層は、Ⅳ層～Ⅴ層に生活面を持つと考えられる石器群で、9か所のブロックが検出された。高原山産と思われる黒曜石が最も多く用いられている。ナイフ形石器18点・角錐状石器10点・削器9点・掻器4点が主要器種である。なかでも、黒曜石製の角錐状石器は、破損した後に再加工された痕跡もみられ、遺跡内で製作された可能性が高い。また、6か所のブロックに伴って礫群が検出されている。

第5文化層は、Ⅲ層のソフトロームとその下層の粘質土層（水つきローム）から検出された石器群で、3か所のブロックが検出された。小型のナイフ形石器1点・削器2点・掻器2点が主要器種である。1点出土している細石刃石核は、第20ブロックの集中地点の外縁部から出土していたため本文化層に帰属させたが、出土層位が不明であり、母岩も単独出土であることから、本文化層に帰属するか定かたではない。

第6文化層は、ソフトローム中に生活面を持つと思われる石器群で、7か所のブロックが検出された。ナイフ形石器5点・細石刃石核2点・尖頭器2点・削器6点・掻器2点が主要器種である。細石刃石核が出土している第23ブロックからは、ナイフ形石器や尖頭器が出土していないことから、これらの伴同関係については不明である。6か所のブロックを第6文化層としてとらえたが、各ブロック間の接合関係がみられないことから、厳密な意味では同一時期・同一段階の石器群であるかは不明である。

縄文時代 遺構は、竪穴状遺構5基、陥穴4基、土坑4基、礫群8か所等がある。遺物は中期の土器群を主体とし、早期・前期・後期に属する土器が少量出土した。他には、土製品として土器片錘・土製円盤、石製品では石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・敲石等が出土している。

遺構については、本遺跡では住居跡として確実に認定できる遺構は皆無で、居住の可能性を示唆する遺構として5基の竪穴状遺構が検出された。3・4G区とした調査区北側から集中的に検出されている。

中期の土器群については、主体を占める時期は阿玉台式期後半から加曾利EⅠ式期にかけてであり、勝坂式や同時期の異型式である大木8式・曾利Ⅱ式といった隣接文化圏から影響を受けた土器も少量認められており、加曾利EⅠ式土器の成立期と相まって興味深い土器群を構成していた。

礫群については、上記の主体を占める阿玉台式期後半から加曾利EⅠ式期の所産のものと思われる礫群が8か所認められた。7か所で土坑が認められており、礫群2では浅い掘り込みながら土坑が3か所にわたって検出されている。多量に出土した礫の大半は被熱破砕したものであった。これらの中には磨石・石皿といったような石製品として使用された石器の一部も含まれており、破損した石器の再利用ともいえる礫片もみられた。

竪穴状遺構の性格や礫群との関連については、周辺遺跡の子和清水遺跡等をはじめとする阿玉台式土器を出土する遺跡と比較すると、各遺跡では、しばしば小形の住居跡が検出され、これらの住居跡では炉跡を有していないタイプも少なからず見受けられる。こうした事例の存在から考えると、少なくとも下総台地西部域に所在する阿玉台期の集落では、小規模でかつ炉跡を付帯しない住居跡が普遍的に存在していたものと考えられる。本遺跡で検出された竪穴状遺構から推測すると、集落として拡大発展することはなく、短期間に居住域として当時の人びとに利用されたものと解釈できよう。また礫群は、竪穴状遺構に居住していた人びとによって使用された調理場の一部であったものと考えられる。

弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代 本遺跡において該当する時期の遺構・遺物については僅かな発見があったのみである。弥生時代末期～古墳時代初頭にかけては、グリッドから若干の土器片が出土し、古墳時代の遺構としては、土坑が1基検出されたにとどまる。奈良・平安時代では、1軒の竪穴住居跡と円形周溝遺構が検出され、円形周溝内では埋葬施設と想定できる土坑が中央部から発見されている。

中・近世 中世の遺構・遺物は、遺跡中央部に集中している。基城を形成する遺構が主体を占める。墓坑と認められる土坑や地下式坑は、溝・台地整形・土塁状遺構による区画の影響を受けたものとそうでないものとに別れ、区画の影響を受けた遺構が集中する地点が3地点検出された。中世の遺物は、陶磁器が多数出土した。陶磁器は、墓地に付属するものと、生活に密着するものに分類された。墓地に付属する遺物としては、常滑甕の火葬骨の骨蔵器と副葬品として埋納されることが多い青磁碗が出土している。遺物の時期は、12世紀後半の火葬骨蔵器の常滑甕から、16世紀代の瀬戸・美濃大空期の播鉢までの、中世全体にわたっている。これらの中世の遺構や遺物は、墓地を含めた、中世の生活景観の一例を提示するものと考えられる。

近世の遺構は、小金牧南部の下野牧の遺構である坪井・習志野台境野馬土手が検出された。調査区南部（東葉高速鉄道の南側）と日本大学理工学部の敷地との境界沿いに野馬土手が検出された。比高差約0.5m～1m、裾幅約2.5m～3m、長さ330mの規模を呈する。野馬上手の構造は、中心に溝（堀）を掘り、両側に土手を築くタイプの二重土手である。延宝7年（1679年）に船橋市・八千代市・千葉市域に広がる外野を馬牧として利用し、はじめて、下野牧が成立したといわれており、本野馬土手もこうした時期に作られたものであろう。

写 真 图 版





遺跡全景（坪井川上流より）



遺跡全景（中央部より北北東方向へ）







第8・16ブロック 南から



第9ブロック 南東から



第13ブロック 西から



第14ブロック 東から



第15ブロック 西から



第12ブロック 北から



第17ブロック 西から



第18ブロック 南東から



第19ブロック 西から



第20ブロック 南東から



第22ブロック 西から



第23ブロック 東から



第25ブロック 南から



第26ブロック 北から



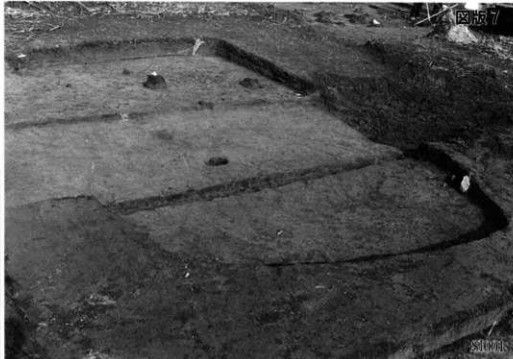
第28ブロック 南から



第29ブロック 東から



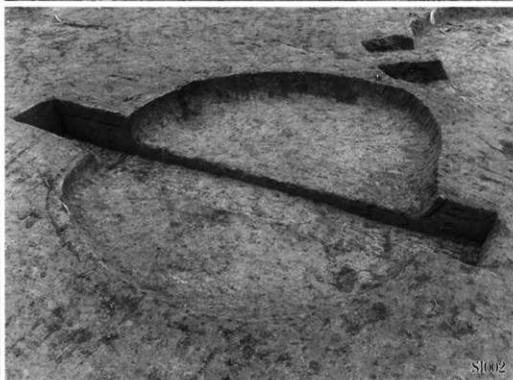
遺物出土状況



S1011



遺物出土状況



S1012



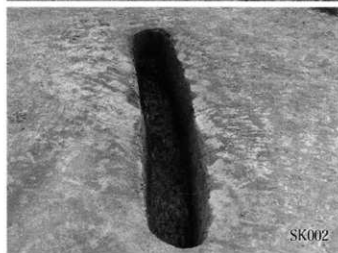
S1013



SI005



SI006



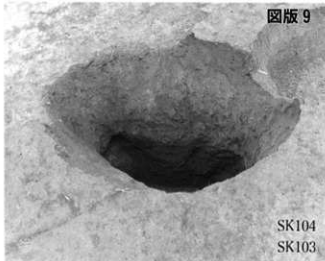
SK002



SK007



SK008



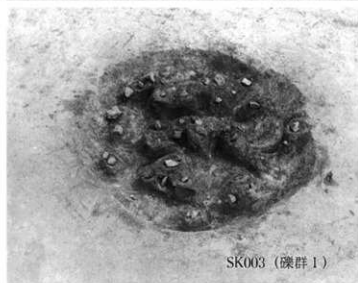
SK104
SK103



SK001



SK102



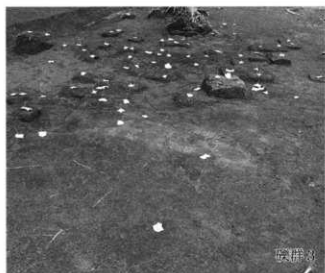
SK003 (破群 1)



破群 2



SK004・005・006 (破群 2)



破群 3



SK001 (塚群4)



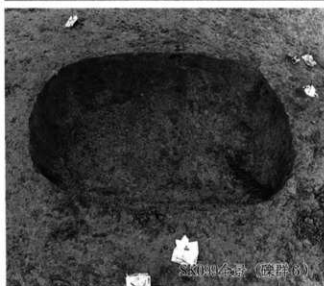
塚群5



塚群6



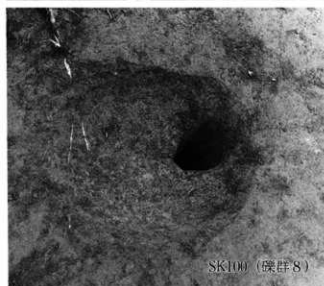
SK099 (塚群6)



SK099全部 (塚群6)



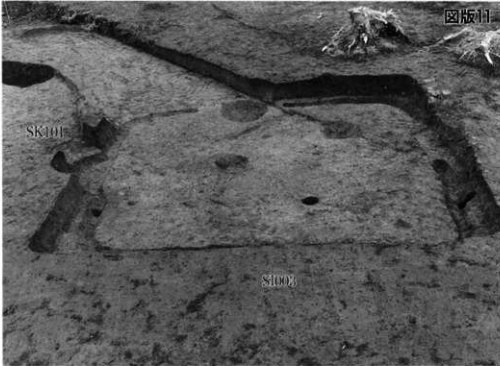
塚群7



SK100 (塚群8)



SK008

SI003全景
SK101全景

遺物出土状況



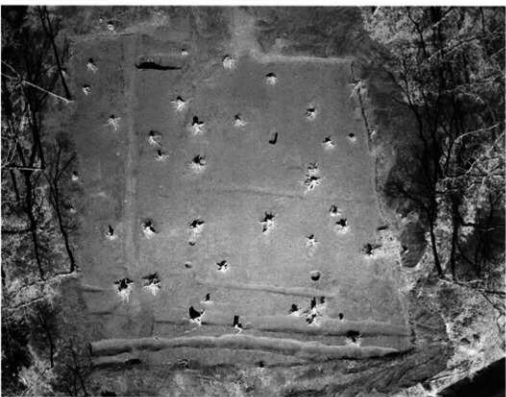
SS001・SK107全景

第1地点Ⅲ区・Ⅳ区全景





第1地点Ⅲ区全景（東より）



第2地点全景（南より）



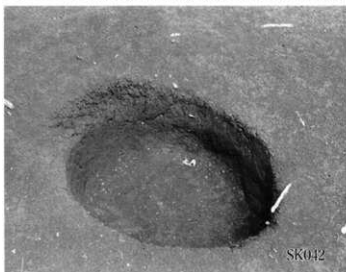
第3地点全景

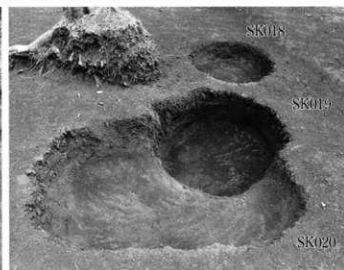
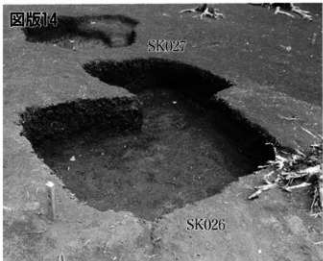


SX001南西隅



SX001北西隅







SK044



第1地点II区全景 (SX002内)



SX003主層 (C-C')



SX003主層 (C-C')



SK068



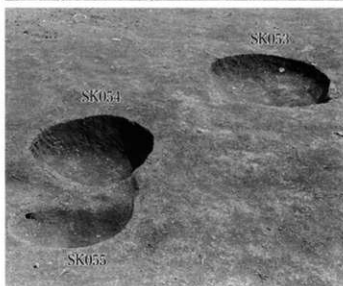
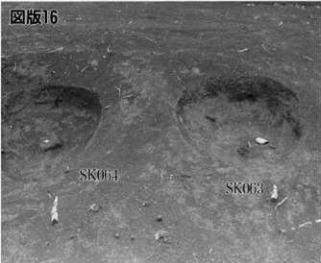
SX004主層 (D-D')



第1地点III区全景 (南東より)



SK062



第1地点IV区全景(北より)

第1地点IV区全景(東より)



第1地溝の全貌



SA003土溝 (A-A)



SA003土溝 (C-C')



SA003土溝 (D-D')



SD027 (南)

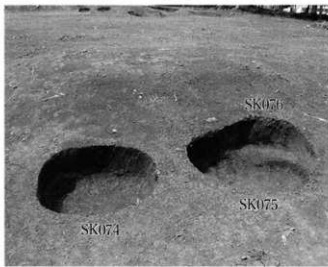


SD025 (北端より南)



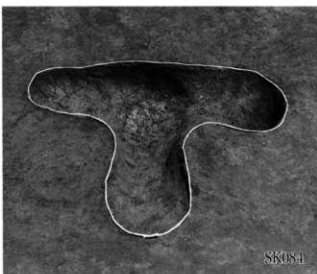
SK069

SK070



SK074

SK075







SA001調査前
(最南端斜面部)



SA001調査前
(T4付近より南へ)



SA001調査前
(T6付近より北西へ)





第1文化層 第1ブロック (1~9)



第2ブロック (10~22)

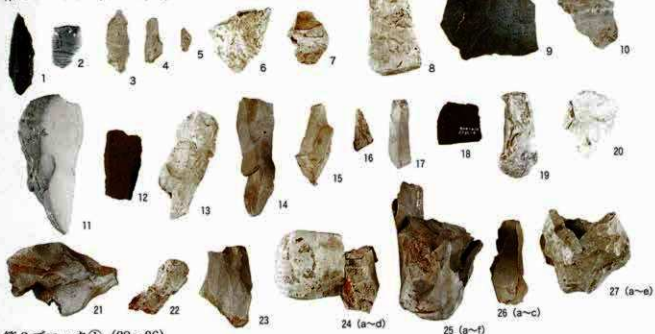


第3ブロック (23~33)



第2文化層

第4ブロック (1・2) 第5ブロック (3~27)



第6ブロック① (28~36)

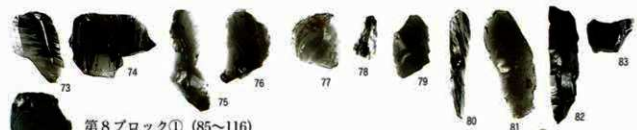


0 5cm

第2文化層 第6ブロック② (37~51)



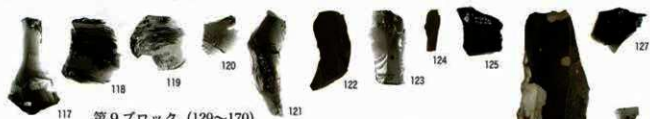
第7ブロック (52~84)



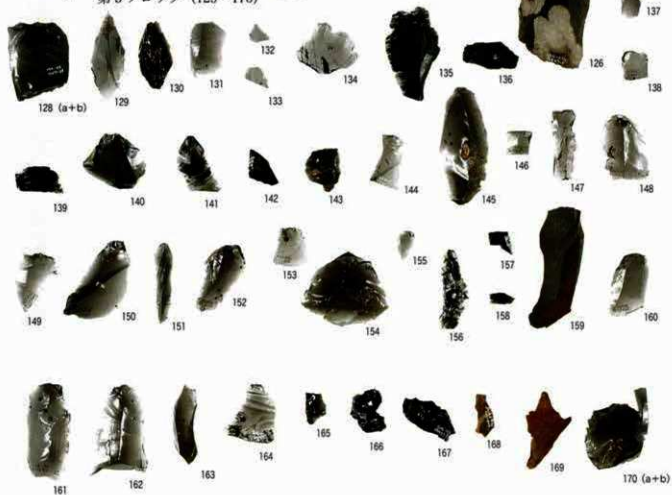
第8ブロック① (85~116)



第2文化層 第8ブロック② (117~128)



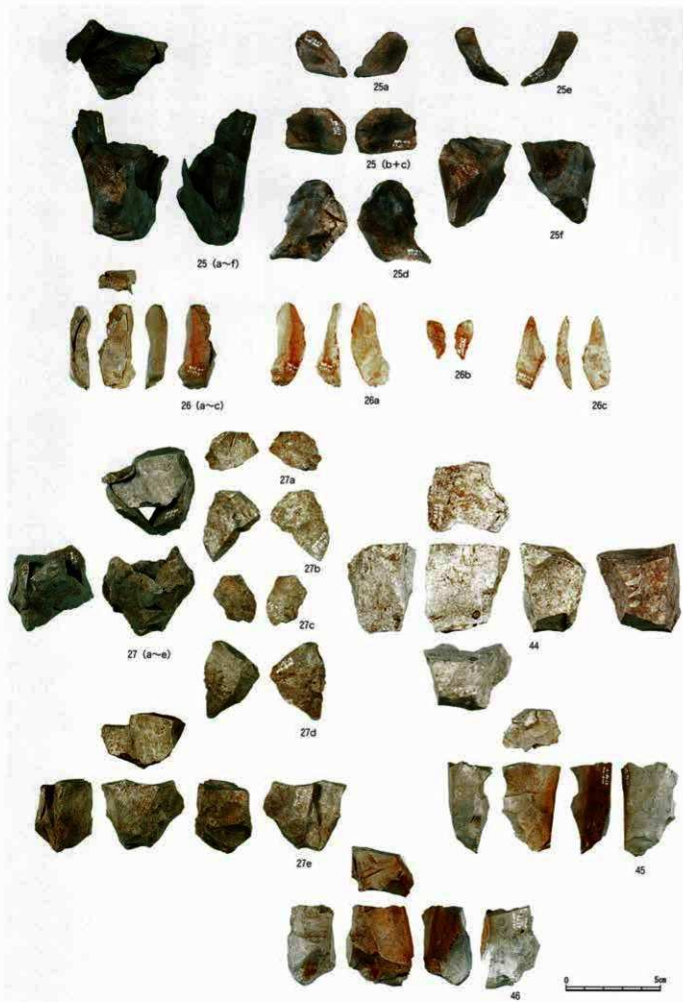
第9ブロック (129~170)



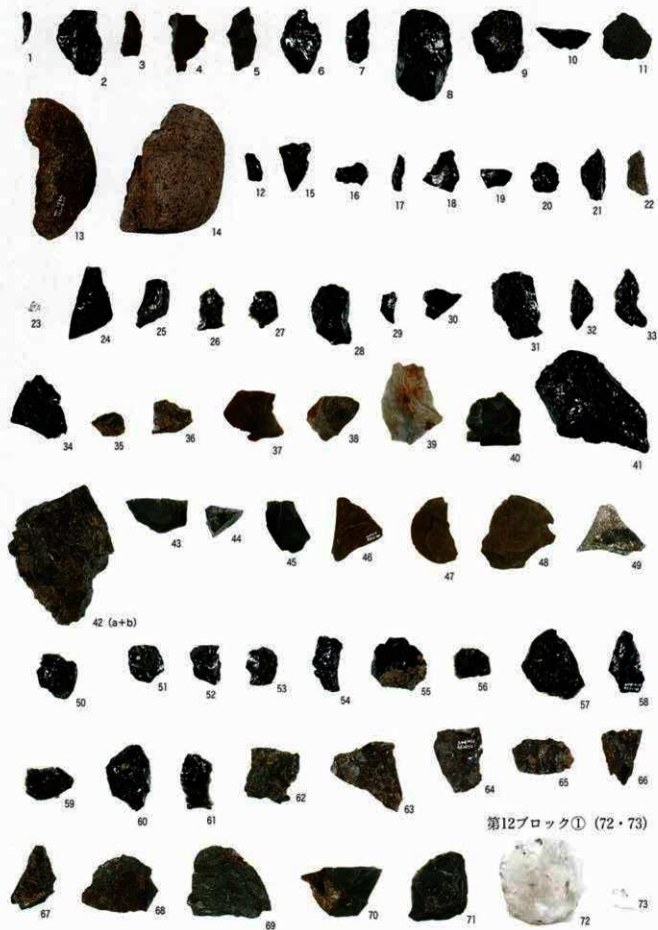
第3文化層 第10ブロック (1~14)



0 5cm



第4文化層 第11ブロック (1~71)



第12ブロック① (72・73)

第4文化層 第12ブロック② (74~77)



第13ブロック (78~90)



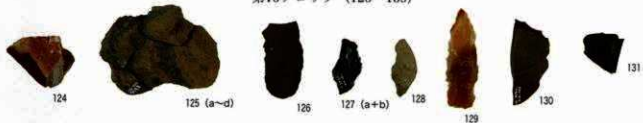
第14ブロック (91~98)



第15ブロック (99~125)



第16ブロック (126~139)



第4文化層 第16ブロック② (140~151)



第17ブロック (152~154)



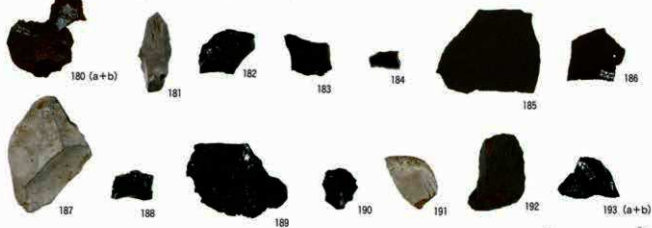
第18ブロック (155~180)



151 (a~c)



第19ブロック (181~193)





安山岩 8
13ブロック 撮34



流紋岩 7
13ブロック 撮35



流紋岩 8
13ブロック 撮36



流紋岩 11
13ブロック 撮41



流紋岩 20
15ブロック 撮50



流紋岩 21
15ブロック 撮51



流紋岩 22
15ブロック 撮54



砂岩 2
15ブロック 撮55



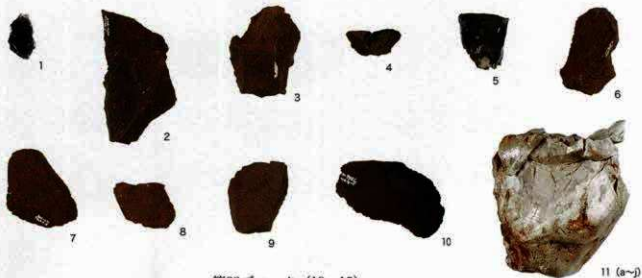
安山岩 21
16ブロック



安山岩 22
16ブロック



第5文化層 第20ブロック (1~11)



第21ブロック (12)



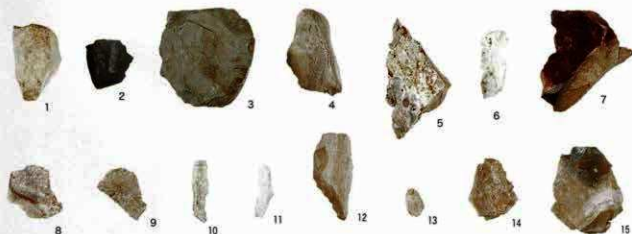
第22ブロック (13~15)



第6文化層 第23ブロック (1~4)

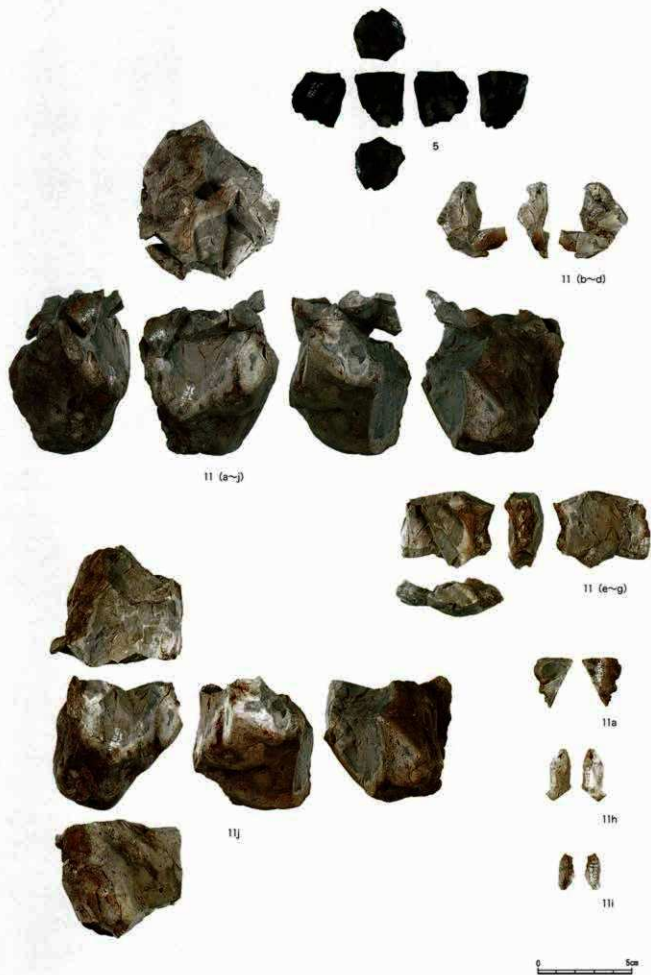


第24ブロック (5~18)

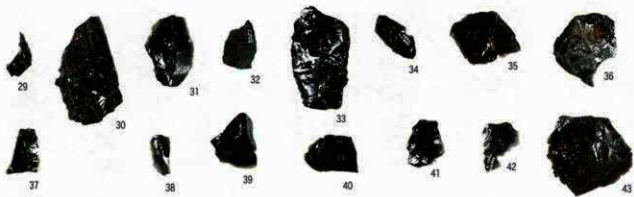


第25ブロック (19~28)





第6文化層 第26ブロック (29~47)



第27ブロック (48~56)



第28ブロック (57)



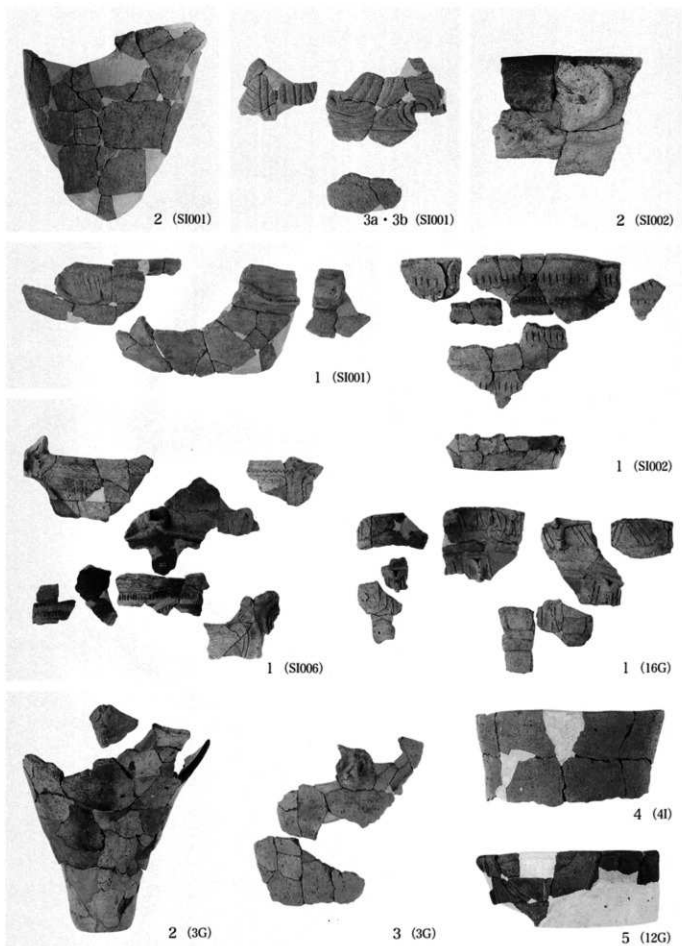
単独出土遺物

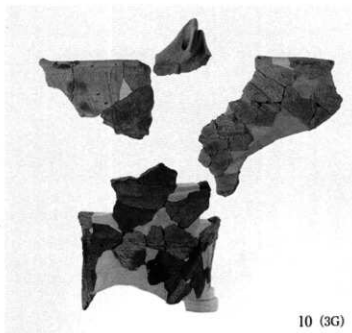


その他の出土遺物





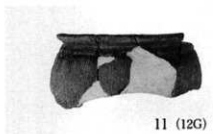




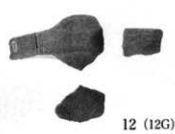
10 (3G)



15 (12G)



11 (12G)



12 (12G)



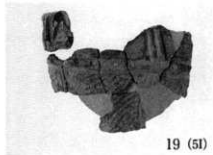
16 (4I)



13 (4I)



14 (4I)



19 (5I)



17 (12G)



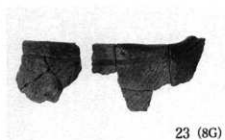
20 (4I)



21 (4I・5I)



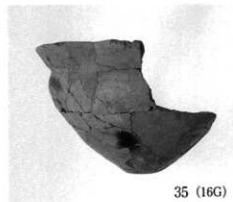
18 (12G)



23 (8G)



22 (8I)



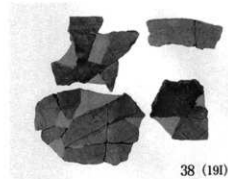
35 (16G)



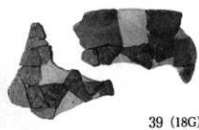
36 (17I)



37 (4I)



38 (19I)



39 (18G)



42 (17I)



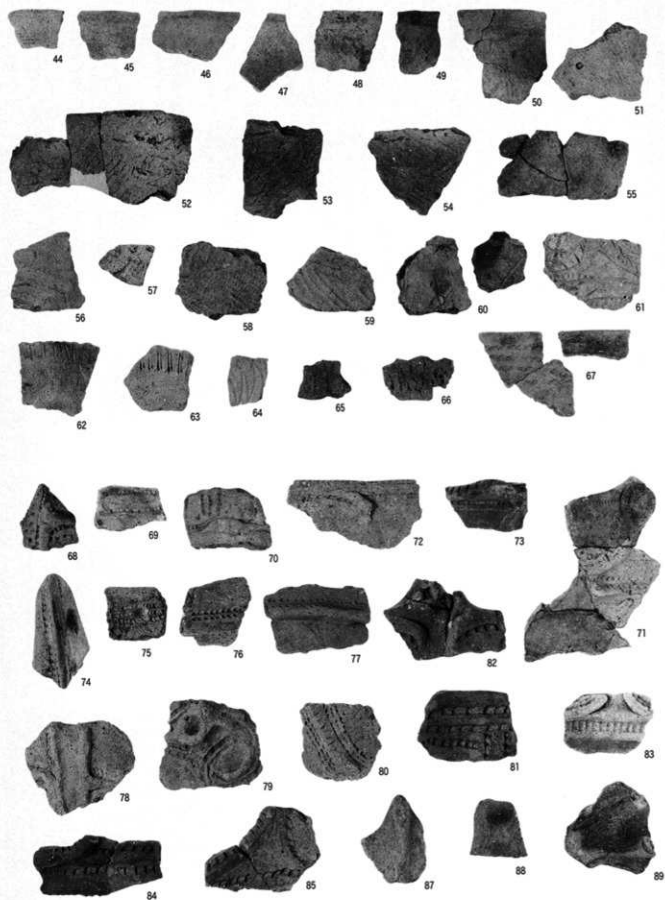
40 (17I)



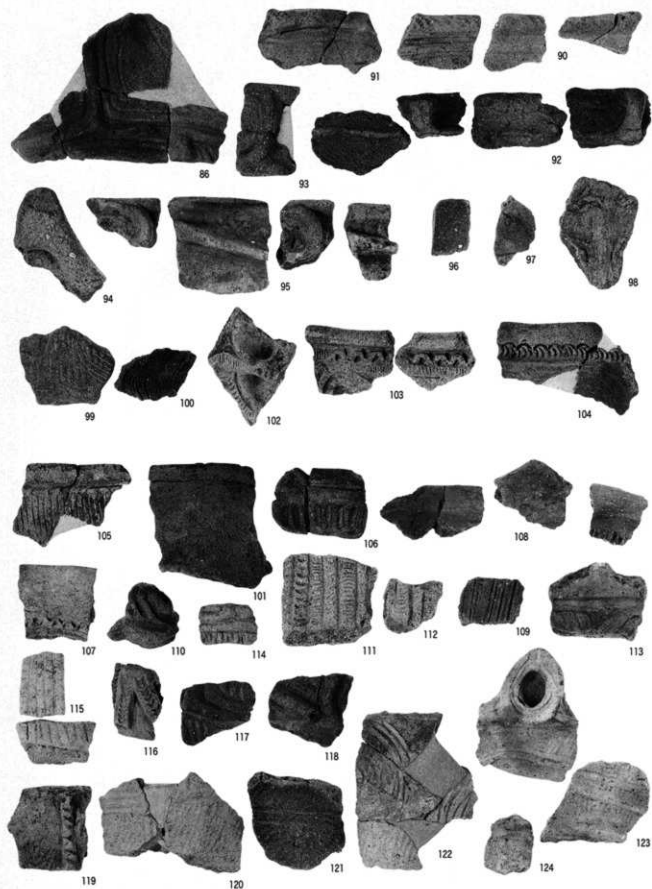
41 (17I)



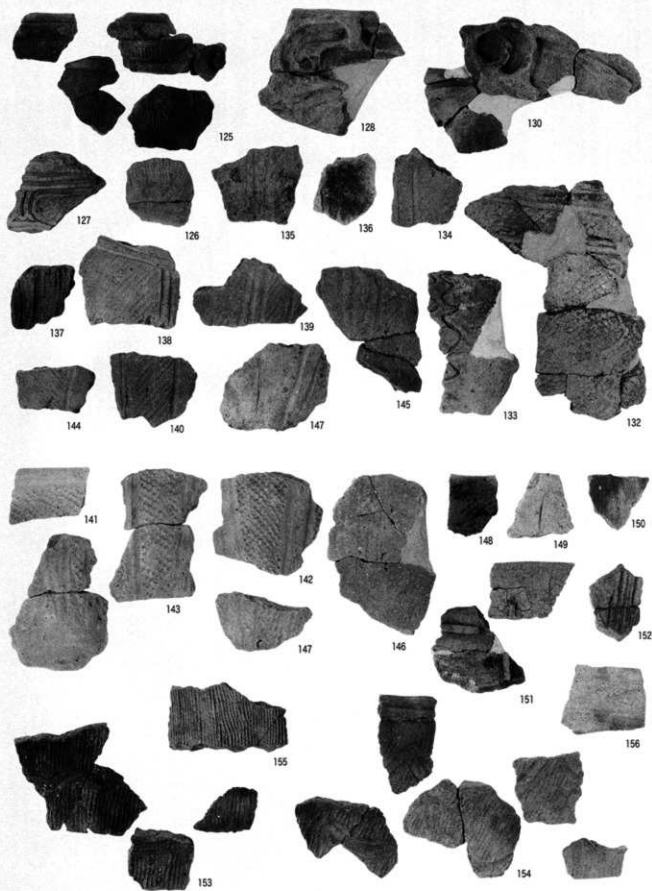
43 (3G)



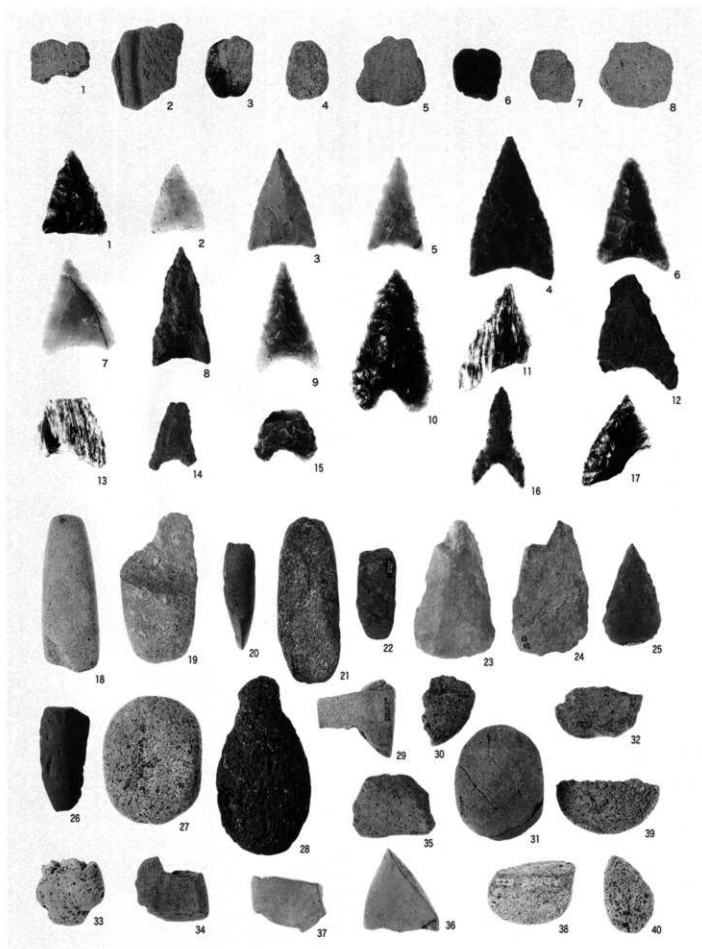
グリッド出土土器(3)



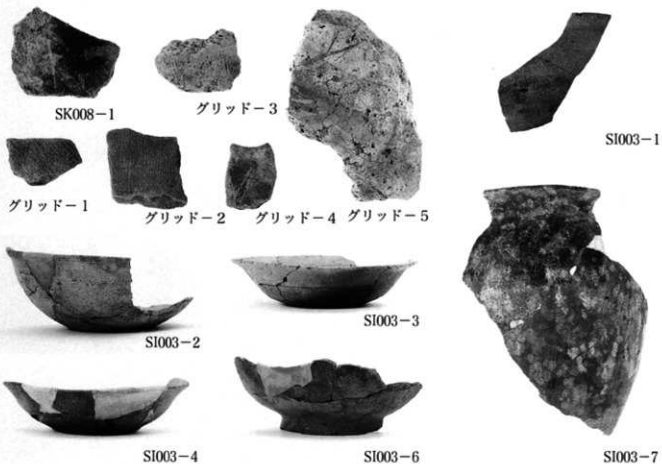
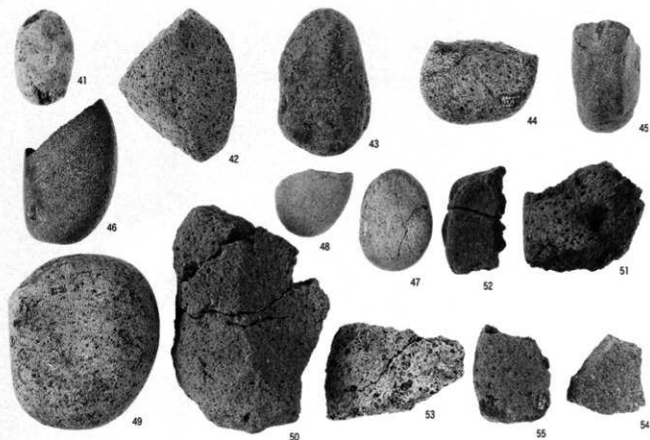
グリッド出土土器(4)



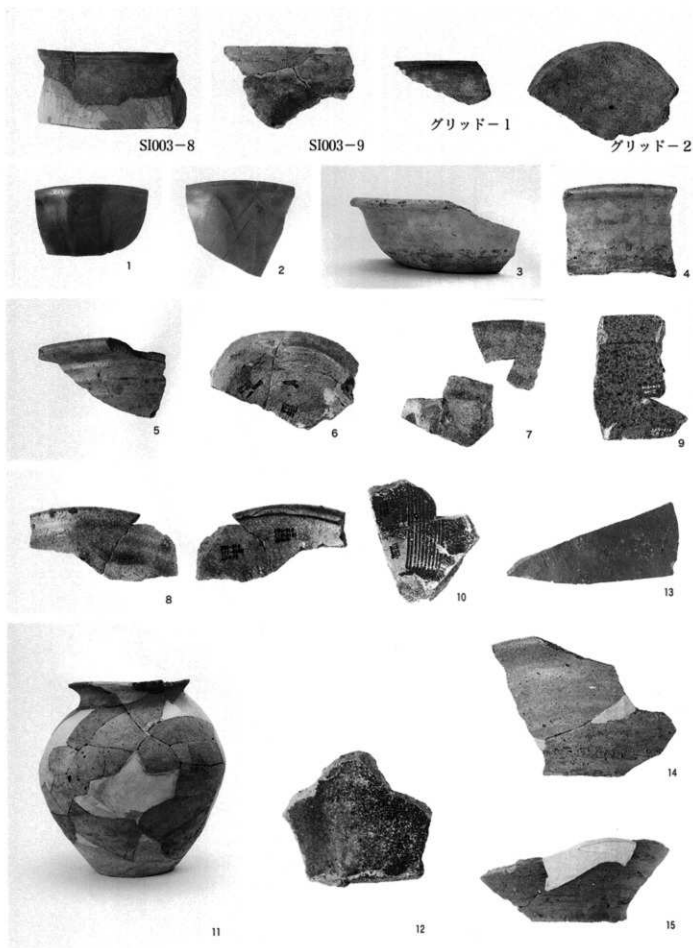
グリッド出土土器(5)



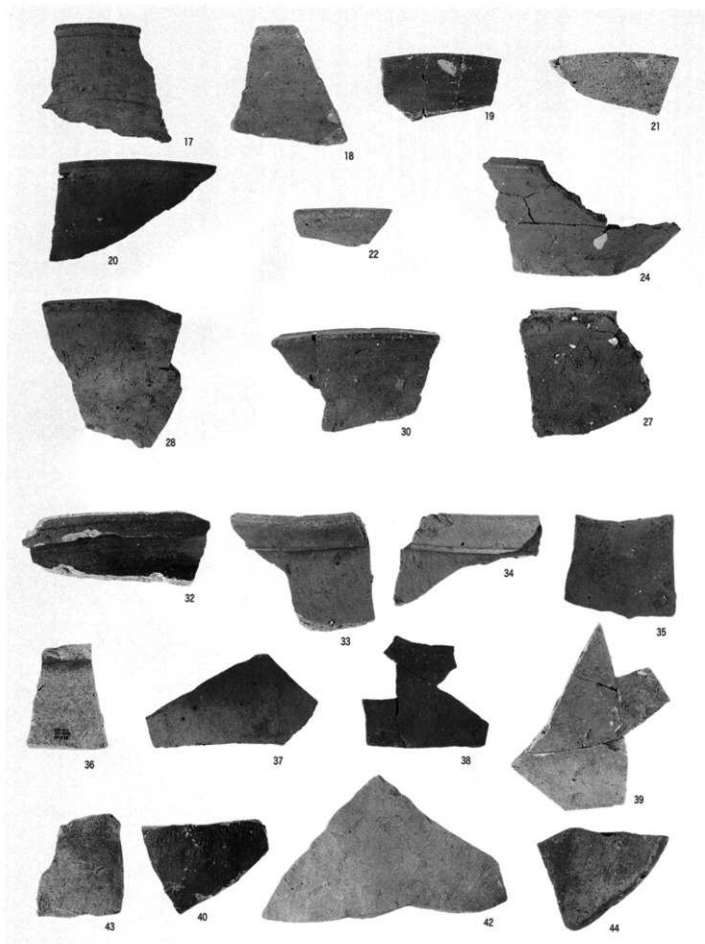
縄文時代土製品、縄文時代石器(1)



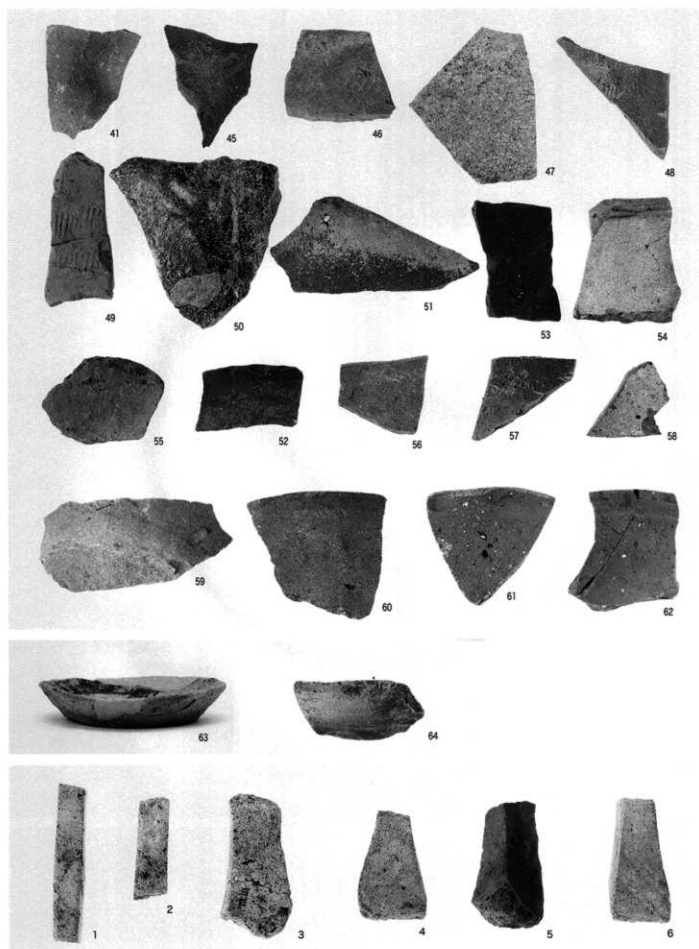
縄文時代石器(2)、遺構・グリッド出土土器(1)



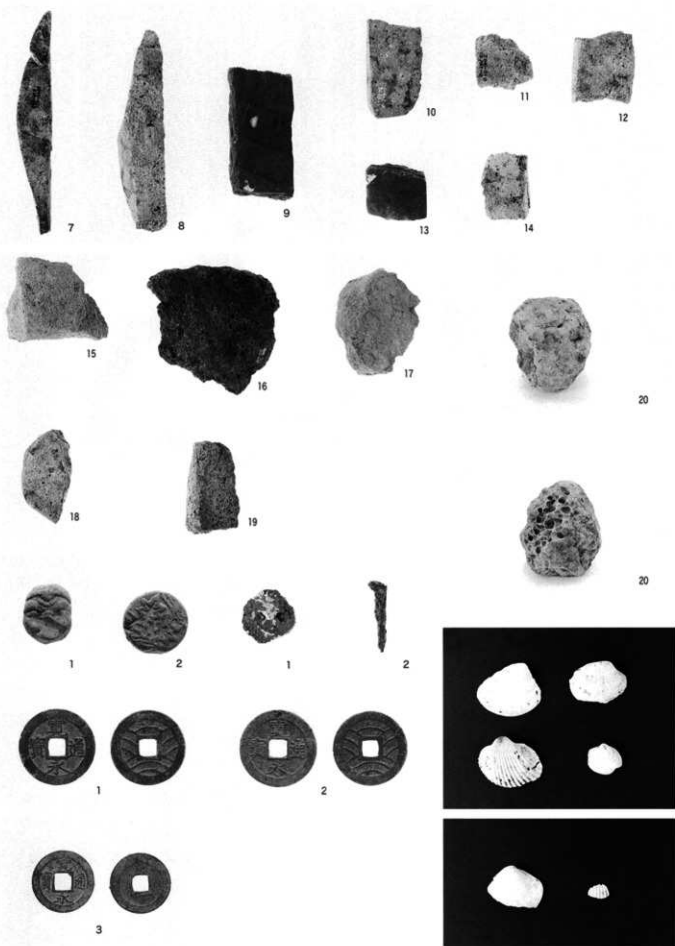
遺構・グリッド出土土器(2)、中世陶磁器(1)



中世陶磁器(2)



中世陶磁器(3)、中・近世石製品(1)



SD017貝サンプル
(上段ブロック1、下段ブロック2)

報告書抄録

ふりがな	ふなばしげんしちやまいせき							
書名	船橋市源七山遺跡							
副書名	坪井地区埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第556集							
編著者名	香取正彦、榑原弘二、新田浩三							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団文化財センター TEL 043-424-4848							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2							
発行年月日	西暦2006年9月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
源七山遺跡	千葉県船橋市坪井町684番地ほか	12204	010	35度 43分 34秒	140度 3分 3秒	19971002～ 19980327 19980401～ 19980529 19980601～ 19990326 19990601～ 19991029 20020603～ 20020830 20021001～ 20021227 20040705～ 20040721	113,600	坪井地区特定区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
源七山遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点29か所、礫群8か所	石器総数1,491点、ナイフ形石器・角錐状石器・尖頭器・削器・搔器・石刃・細石刃石核等		旧石器時代では、Ⅲ層～Ⅸ層にかけて、6枚の文化層が検出された。Ⅵ層～Ⅶ層に生活面を持つ第2文化層とⅣ層～Ⅴ層に生活面を持つ第4文化層が質・量ともに充実している。		
	集落跡	縄文時代	竪穴状遺構5基、陥穴4基、土坑12基、礫群8か所	縄文土器（早・前・中・後期）、石鏃、磨製石斧、打製石斧、石皿		縄文時代では、阿玉台期の竪穴状遺構5基と8か所の礫群が検出された。		
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡1軒、土坑1基、方形周溝状遺構1基	土師器、須恵器、灰釉陶器				
	墓跡 野馬土手	中・近世	台地整形区画4基、土坑86基、地下式坑3基、土手状遺構2条、溝状遺構35条、掘立柱建物跡3棟、坪井・習志野台境野馬土手（330m）	貿易陶磁器（青磁）、瀬戸・美濃、常滑、カワラケ、銅製品、鉄釘、銭貨、磁石、石塔片		中世の台地整形区画や溝が検出された。地下式坑・土坑などが集中している墓域となる。 近世の野馬土手は小金牧の下野牧に伴う土手である。		

千葉県教育振興財団調査報告第556集

船橋市源七山遺跡

—坪井地区埋蔵文化財調査報告書—

平成18年9月29日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構
千葉地域支社
千葉県美浜区中瀬1-3

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67
